



2025年度版

東洋大学 ボランティア支援室年報

TOYO University Volunteer Support Office 2025 Annual Report



東洋大学

とびこめ！ボランティアの森～ボランティア 団体合同新歓 2025 in 白山～（4 月）



——ボランティア支援室サポートスタッフの主導により、登録 16 団体による合同新歓企画「とびこめ！ボランティアの森」を開催し、二日間ともに一般来場者は約 100 人にのぼりました。



サポスタとしても東洋大学に関わる多くの団体と交流できたことで、今後の活動の弾みとなりました。また、コーディネートの方でも自信を持つことができ、有意義な機会でした。



出展者からは「自分の団体の強みを伝える方法が分かった」「普段関わることのない団体の人と話せてよかった」といった声も多く寄せられ、運営側としても手応えを感じられました。

「エコプロ 2025 (SDGs WEEK EXPO 2025)」 における、SDGs アンバサダーブース出展



——「日本最大級の環境見本市」として、毎年 12 月に東京ビッグサイトにて開催されている「エコプロ」に、今年度も SDGs アンバサダーが同見本市の「大学・教育機関コーナー」へ出展を行いました。



マイクロプラスチック問題への関心の高まりを背景に、説明時に興味を示して話を聞いてくれる来場者が多く、「自分の身近な海でも実施してほしい」といった意見を聞くことができた。



来場者への説明を重ねる中で、どのような伝え方が分かりやすいか、次の話題へどのようにつなげると理解してもらいやすいかを徐々に掴むことができ、活動を説明する力の向上につながったと感じた。



「大学・教育機関コーナー」には、6 月に参加をした「環境マネジメント学生全国大会」の参加校も集まり、学生による環境活動を行う大学・学生間の交流の場としても機能し、互いの出展内容から学び合うことのできる機会ともなりました。

< 2025 > 夏季能登半島ボランティア



——2025 年の夏季能登半島ボランティアは、8 月 6 日から 9 月 14 日の 30 日間で行われ、72 人の学生および教職員が参加しました。



能登の自然は美しく、食べ物も美味しく、みなさんの人柄も親しみやすく適度にさっぱりしていて、方言も心地よかった。人々がこの土地で暮らし続けたい、留まりたいと思うのは至って自然なことであると思った。



“復興”は、その地域の伝統や暮らしや人々の想いを大切にすることや想いを繋げること、前に進もうとする人々のサポートをすることの積み重ねであることを知った。



特に地域に根付いた祭りに関われたことは、本当に貴重な経験になった。丸 2 日間の祭り準備、交流、実施の中に、能登の人々の生き方が凝縮されていたように思う。祭りを通じて能登の人達の考え方と今の気持ちを共有できたのではないかと思います。充実した 3 日間を送ることが出来ました。

ゴールボール体験会 2026



—— 6月に行ったパラスポーツ体験会に引き続きゴールボール体験会を行いました。今回は東洋大学の学生だけでなく、桐ヶ丘団地の朝活から一般の方にも参加していただきました。



視覚以外の感覚や情報を活用して体を動かすことの怖さを実感したが、それと同時に、周囲の誘導をはじめとした温かい声かけが頼りになり、とてもありがたかった。



音が頼りになる中で、初めは戸惑う人が多かったが、徐々に声を掛け合い積極的に取り組む姿が見られ、スポーツを通じた交流の大切さが実感できた。



目が見えない状態では、音が大切となります。初めは戸惑っている人が多かったのですが、次第に声出しをしたり手を叩いたり積極的に音を出し、コミュニケーションを取ることができました。

東洋大学ボランティア支援室開設9年目の活動について

社会貢献センター長

ボランティア支援室長 高山 直樹

平素より東洋大学ボランティア支援室の活動に対し、格別のご理解とご支援を賜っておりますことに、深く御礼申し上げます。

2025年度は、国内外における社会的課題が一層複雑化・深刻化する中で、ボランティア活動の意義と役割が改めて問い直される一年となりました。とりわけ、2024年1月1日に発生した能登半島地震は、日本社会における災害対応の課題とともに、地域コミュニティの脆弱性および復興過程における持続的支援の必要性を浮き彫りにしました。本センターにおいても、被災地支援に関する情報集約と発信、学生ボランティアの組織化、支援活動の調整等を通じて、大学として果たし得る社会的役割について実践的に検討してまいりました。今年度は、輪島市、珠洲市、七尾市、志賀町等への支援活動として、学生110名、教職員35名、合計145名、延べ日数132日にわたり、支援活動を行いました。現地での活動に参加した学生の記録や振り返りからは、支援の即時性と中長期的視点の双方を統合する重要性、ならびに被災者主体の「想像的復興」支援のあり方に対する認識の深化が確認されました。

他方、国際社会に目を向けると、気候変動の進行、経済的格差の拡大、紛争の長期化といった構造的課題が顕在化しており、その影響は地域社会の枠を超えて相互に関連しています。中でもイラン・中東をめぐる政治的・社会的緊張の高まりは、エネルギー問題や国際安全保障のみならず、市民生活や人権状況にも大きな影響を及ぼしており、グローバルな視点からの課題認識の重要性を示しています。これらの問題は一見すると地理的・文化的に遠隔にあるように見えますが、資源供給、経済活動、国際秩序といった側面を通じて、私たちの生活とも密接に結びついています。

東洋大学の創始者井上円了は、「諸学の基礎は学問にあり」として、各分野の学問が、人間にとって社会にとってどのような意味を持つのか。なぜ学ぶのかという学問の本質的な原理原則を探究する哲学こそが、学問の基礎をなすと考え、1887（明治20）年に東洋大学の前身である「哲学館」を創立しました。その直後より「余資なく、優暇なき者」のために『哲学館講義録』を刊行し、館外員制度を設けて「社会教育」を行い、現在の通信教育や第二部（イブニングコース）へと継承してきました。さらに「主体的に社会の課題に取り組む」ことを基盤とし、『東洋大学の心』として「他者のために自己を磨く」と「活動の中で奮闘する」という教育理念を具現化するために社会貢献を柱の一つとし、人材育成をしてきました。

それは、今、混迷のなかにある国内外の問題を自分ごととし、社会の幸せの在り方を発信していくことが東洋大学の使命といえます。そのためには、積極的な社会貢献を進めることになります。東洋大学は、3万人超の学生を擁し、17大学院研究科、14学部を擁する総合大学です。大学に蓄積された人的・知的資源を必要としている人たちや地域に届ける方法の一つが、

ボランティア活動であります。

本センターでは、このような国内外の課題を踏まえ、ボランティア活動を単なる実践の場としてではなく、社会的事象を多角的に理解し、批判的に検討するための教育的・研究的基盤として位置づけてきました。具体的には、災害支援、地域福祉、環境保全、国際協力といった多様な領域における活動を展開するとともに、それらの実践を通じた学習成果の可視化および体系化に取り組んでいます。また、活動後の振り返りや記録の蓄積を重視することで、経験知の共有と知見の深化を図ってきました。

さらに、本年度の特徴として、多主体協働の深化が挙げられます。自治体、地域団体、NPO・NGO、企業等との連携を通じて、学生は多様な価値観や専門性に触れながら、自らの立ち位置を相対化し、社会的課題への関与の在り方を再考する機会を得ました。この過程において、ボランティア活動は一方的な支援ではなく、相互作用的な学習の場として機能していることが改めて確認されました。また、オンラインツールの活用により、地理的制約を超えた参加形態が拡充され、国際的な課題に対する関心と関与の機会も広がっています。

これらの取り組みは、大学における教育・研究の枠組みを拡張し、理論と実践の往還を促進するものと位置づけられます。すなわち、ボランティア活動は、知識の応用にとどまらず、新たな問いの生成とその検証を可能とする場であり、学生にとっては主体的学習の契機となると同時に、社会に対しては知的資源の還元という側面を有しています。本センターは、このような観点から、ボランティア活動の教育的・社会的意義を再定義し、その体系化に向けた取り組みを継続していきます。

本報告書では、2025年度に実施した各種事業および活動実績を整理するとともに、学生の参与観察的記録や振り返りを通じて得られた知見を収録しています。これらは、今後の活動の改善および発展に資する基礎資料としてのみならず、ボランティア活動に関する実践的研究の一端を担うものと考えています。

今後も社会環境の変化が続く中で、大学に求められる役割は一層多様化していくことが予想されます。そのような状況において、本センターは、学生の主体的関与を基盤としつつ、多様な主体との協働を通じて、包摂的かつ持続可能な社会の実現に寄与する実践と研究の両立を目指してまいります。

結びに、本センターの活動を支えてくださっている関係各位に対し、改めて深甚なる謝意を表するとともに、今後とも一層のご指導とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

目 次

■ 東洋大学ボランティア支援室開設 9 年目の活動について	5
■ 目次	7
■ 2025年度 ボランティア支援室 活動内容・利用状況	9
■ 活動内容・各企画概要	
① 「とびこめ!ボランティアの森 ～ボランティア団体合同新歓2025 in 白山～(4月)」	24
② フェアトレードの普及促進を目的としたラオス産オリジナルコーヒーの販売会①	26
③ TOYO 1Day ボランティアプログラム「カンボジアフェスティバル2025」運営ボランティア活動	28
④ 「とびこめ!ボランティアの森～ボランティア団体合同新歓2025 in 白山&赤羽台～(5月)」	31
⑤ b-lab 見学ツアー	34
⑥ ゴールボール体験会2025	36
⑦ 食糧配布会	38
⑧ 白山神社 あじさい祭り ボランティア	42
⑨ 「赤羽台のヒト・モノ・コトさがしのまちあるき～あるいてみつける、赤羽台の地域資源～」	44
⑩ 「第19回環境マネジメント全国学生大会」への参加	48
⑪ Let's 紙すき体験	52
⑫ 「ボランティア入門講座2025 in 赤羽台」	54
⑬ 「そなエリア東京」フィールドワーク(「防災クイズ&ゲーム Day2025」実施に合わせて)	56
⑭ フェアトレードの普及促進を目的としたラオス産オリジナルコーヒーの販売会②	59
⑮ 「ボランティア入門講座2025 in 白山」	61
⑯ わらしべ長者プロジェクト～Reuse～	63
⑰ Toyo 1day ボランティアプログラム「『蓬萊町会盆踊り』ボランティア活動」	65
⑱ 「ののの」に参加して本場の農業を体験しよう!～農業ボランティア活動体験～	68
⑲ SDGs Students Dialogue Expo 2025	71
⑳ 第一生命(株)CSRスタディーツアー	73
㉑ 災害救援ボランティア講座2025	76
㉒ フェアトレードの普及促進を目的としたラオス産オリジナルコーヒーの販売会③	78
㉓ Toyo 1day ボランティアプログラム 「ビーチクリーンアップ in YUIGAHAMA Beach～SDGs14『海の豊かさを守ろう』～」	80
㉔ 八丈島支援募金活動	82
㉕ 第4回文京区内大学サステナビリティ関連取組紹介のための交流・意見交換会	83
㉖ 東洋大学第61回白山祭SDGsアンバサダー出展企画「TOYO HAKUSAN SDGs EXPO 2025」	85
㉗ 東洋大学川越キャンパス「こもれび祭」におけるSDGsアンバサダーの出展	87
㉘ 東洋大学赤羽台キャンパス赤羽台祭「SDGs天国～ミラクルサステナブル～」	89
㉙ 2025年第2回東洋大学朝霞キャンパス学園祭『霞祭』SDGsアンバサダー出展 「見て・描いて・味わって、SDGsを身近に感じてみよう!」	93
㉚ 青いヒブス防災講座	96
㉛ 東洋生の知らない世界～完全攻略脱炭素化社会～	98
㉜ わらしべ長者プロジェクト	102
㉝ セブ研修 支援物資配布	103

34 「ボランティアコレクション～うきうき地域生活～」	105
35 フェアトレードの普及促進を目的としたラオス産オリジナルコーヒーの販売会④	107
36 「ESD推進ネットワーク全国フォーラム2025」への参加	109
37 「エコプロ2025(SDGs WEEK EXPO 2025)」への出展	111
38 学ボラ設立20周年記念シンポジウム「山古志から能登へー20年の想いを、未来へつなぐ。」	114
39 「生きるー大川小学校 津波裁判を闘った人たちー」上映会	115
40 ゴールボール体験会2026	117
41 「アースデイ川越in昭和の街 2026」への出展	120
42 IKEA 横浜 CSR スタディーツアー	122
43 みらいのたねプロジェクト	124
44 東洋大生がワークショップで考えるSDGs「身近なものから持続可能な開発について考えてみよう」	126
45 盲ろう者理解ワークショップ	129
46 富士樹海清掃ボランティア(春)	131
47 スポGOMI 東洋大学 in 朝霞キャンパス	133
48 富士樹海清掃ボランティア(夏)	135
49 NICE 日本国際ワークキャンプセンタープログラム(2025夏休み)	137
50 「里親子デイキャンプ」	140
51 「首都直下型地震に備える!東洋大学宿泊サバイバル体験～もし大地震が発生したとき、白山キャンパスにいたら?～」	143
52 スポGOMI 東洋大学 in 赤羽台キャンパス	146
53 「2時間の対話で『ことば』にする、あなたのボランティア体験!」	148
54 被災地のまちづくりを考え、発信するスタディーツアー(春)	151
55 NICE 日本国際ワークキャンプセンタープログラム(2025春休み)	152
56 2025 × 「里親月間」特別企画	154
57 教育学科の学生と考える“自分らしさ”とは“しょうがい”って他人事? ちがいはマイナス? 同じも苦しい!? 助け合いこそが“自立”の鍵になる!?	155
58 福祉でまちづくりから 福祉はまちづくりへ～能登半島地震での取り組みの今とこれから～	157
59 CSR論公開講義「企業と人権」	159
■ 能登半島ボランティア活動記録	160
■ 2025年度 ボランティア支援室 各企画資料	171
■ 2025年度 社会貢献活動助成 表彰式・報告会	186
■ 2025年度 ボランティア支援室 資料・記録	192
ボランティア支援室 ガイダンスの実施	192
東洋大学ボランティア支援室要項	193
ボランティア支援室運営委員会委員名簿	195
2025年度 ボランティア支援室運営委員会・専門部会活動記録	197
2025年度東洋大学ボランティア支援室に対する外部評価結果	200

2025年度 ボランティア支援室 活動内容・利用状況

ボランティア支援室における活動を振り返って

開設9年目を迎えた東洋大学ボランティア支援室（以下、支援室）は、年間を通じて以下の取り組みを重点的に進めました。

【主な取り組み】

1. 川越キャンパス、朝霞キャンパス分室機能の運用開始

本年度より、新たに川越キャンパス、朝霞キャンパスにおける、ボランティア支援室分室機能の運用を開始しました。現時点では、まだ常設型の分室を有するには至っておらず、ボランティアコーディネーター1名と社会貢献センター事務室職員1名が、学期中隔週で両キャンパスに出張する際、都度施設を間借りし運用する形を採りました。

主に両キャンパスに在籍しているSDGsアンバサダーの活動のバックアップを担ったほか、ボランティアサークルの活動支援や、一般学生のボランティア活動相談にも直接対応しました。分室の常設化には至っていないため、ボランティア活動情報提供の設備面での課題は残るものの、白山・赤羽台キャンパスに集中しがちだったボランティア活動支援のための施策を、一定レベルで川越・朝霞キャンパスにおいても展開できるようになりました。

2. 能登半島ボランティア活動

2024年1月1日に発生した「令和6年能登半島地震」ならびに、9月に発生した豪雨災害で被災した石川県能登半島の各地域に、今年度も引き続きのべ27クール、138人の学生ボランティアの送り出しを行い、被災した地域の復興を支援する取り組みに注力しました。

長期休暇中の能登半島ボランティア活動は、被災地の状況やニーズの変化に寄り添いながら、継続的に実施しました。発災直後の2024年度は、瓦礫撤去や家屋整理などの作業を中心とした支援が主でしたが、2025年度は、災害ボランティアセンターの段階的な閉所や地域ごとの復旧・復興フェーズの違いを踏まえ、活動のあり方も少しずつ変化してきました。仮設住宅での交流や、こどもの居場所づくり活動など、被災者の声に耳を傾ける「傾聴」を大切にしながら、昨年度発足した学生団体「NOTO×TOYO 青いビブス」を中心に、地域との長期的な関わりを意識した活動を行いました。こうした取り組みを通して、学生が主体的に地域と向き合い、継続的なつながりと学びを深める機会となりました。

3. ボランティア等情報の全学生への発信

東洋大学ボランティア支援室学内情報サイトを通じて、学外から寄せられたボランティア募集情報や、ボランティア支援室主催事業等の情報を全キャンパスの学生に配信しました。情報の周知にあたっては、まず学内ボランティアサークル、さらに外部団体や自治体から幅広く情報を収集し、その上で各キャンパスの「学科の専門性」と「所在地の地域特性」を掛け合わせた効果的な広報に注力しました。具体的には、全学共通の情報に加え、各キャンパス周辺の地域課題に即した活動を重点的に紹介することで、学生が活動を身近に捉え、参加しやすい環境を整備しました。このように、地域のニーズと学生のアクセスの利便性を結びつけた情報提供を継続した結果、キャンパスの立地と学科の特徴を最大限に活かした、主体的な社会貢献活動を促進することができました。

今年度も、ボランティア支援室学生サポートスタッフ（以下、学生サポートスタッフ）や、SDGsアンバサダーの公式Instagramを活用し、学生目線からボランティア関連情報を発信しました。

その他、東洋大学アプリ内の機能の一つ「Discover」への情報発信を行い、学生がスマートフォンから手軽に活動参加へのきっかけを提供できるように注力しました。

4. ボランティア活動相談等への対応

4月に新たなボランティアコーディネーターを迎え、2名のボランティア・コーディネーターによるボランティア活動相談体制を確保し、学生からのボランティア相談対応や、地域団体からの学生ボランティア受け入れの相談対応を行いました。

また、今年度はボランティア支援室学生サポートスタッフが、白山・赤羽台の両キャンパスの支援室に滞在する時間帯を設け、学生がより気軽に来室しやすく、ボランティア活動ニーズを聴き取りやすくするための試みも行いました。

5. ボランティア活動促進のための講座、イベント等の実施

ボランティアに関心がありながら一歩を踏み出せずにいる学生の参加促進を目的として、白山・赤羽台の両キャンパスでボランティア入門講座を実施しました。講座では、ボランティアコーディネーターと学生2名が登壇し、それぞれの立場から実際のボランティア経験や活動の魅力を共有しました。

昨年度に引き続き、公認ボランティアサークル「学ボラ」との連携により、文京区蓬莱町会の受け入れによる「蓬莱町会盆踊りボランティアプログラム」を実施しました。2日間で延べ32名の学生が参加し、学ボラメンバーのみならず一般学生も加わって地域住民の方々と交流を深めました。会場運営の補助等を通じて、地域の伝統行事を支えるとともに、学生にとっても地域コミュニティへの理解を深める貴重な機会となりました。これは、担い手不足という課題を「自分ごと」として捉え、地域課題解決の視座を養う「実践的な教育機会」でもあります。こうした実体験は、地域の実情を学ぶ重要な一歩であり、大学と地域社会の持続的な連携を象徴する取り組みとなりました。

6. 授業におけるボランティアセミナー等の実施

ボランティア支援室のボランティア・コーディネーターが授業に登壇し、ボランティア活動に関する入門的な講義・ワークショップやコメントーションなどを計10回実施しました。

また、コーディネーターの登壇時に学生サポートスタッフが一緒に登壇するケースが何コマあったほか、学生サポートスタッフに直接登壇依頼があった授業が1コマありました。前者は、講義において学生サポートスタッフの話を聴講した学生が、新たに学生サポートスタッフとして活動するきっかけとなるなど、今年度もボランティア支援室と一般学生との接点づくりの機会として機能しました。

7. 支援室学生スタッフ（サポートスタッフ）の育成

学生のボランティア活動や社会貢献活動に関する理解を深めリーダーシップの涵養を図ることと、ボランティア支援室の活動の学生へのアプローチ力を高めるための試みとして、サポートスタッフによる活動展開が継続されています。今年度は計15名で活動を行いました。

今年度の大きな取り組みとして、サポートスタッフの自主事業として実施した「ボランティアコレクション うきうき地域生活」が挙げられます。この取り組みは、北区社会福祉協議会から、地域住民の方に本学学生によるボランティア活動を紹介する機会を要望されたことにはじまり、北区社会福祉協議会が運営する介護予防拠点施設「ぷらっとほーむ桐ヶ丘」を会場として、北区の地域ささえあい活動団体の皆様や、コミュニティソーシャルワーカー、福祉施設の方と本学学生とが50名以上集い、相互に交流を深めました。

この取り組みを通じて、サポートスタッフが自ら会場となる施設やコミュニティソーシャルワーカーと

の意思疎通や、学生ボランティア団体の呼びかけなどを一手に担うことで、ボランティアコーディネーションの実践機会となったことに、大きな意義があったと総括することができます。

8. SDGsに関する取り組み

「東洋大学SDGsアンバサダー」(以下、SDGsアンバサダー)を中心とした学生主体的なSDGs活動の展開と、それに対するサポートが5年目となりました。今年度は、昨年度からの継続者40名と新規登録者69名を含め、今年度に全学計109名の学生がSDGsアンバサダーとして活動しました。

昨年度までの活動を振り返り、活動分野をより明確にするため、「環境」「防災・まちづくり」「ダイバーシティ」という3つの新たな名称を冠したチームを編成し、白山・赤羽台・朝霞・川越の4キャンパスでより具体的な活動に取り組みました。

9. 他機関・地域・他大学等との連携

文京区内の地域交流活動に関する大学間連携の一環として、学生支援担当者連絡会(通称「地域ニーズの会」)の会合に引き続き出席しました。2ヶ月に一度のペースで会合が開かれ、各大学における地域交流活動の取り組みの共有から連携・協力の可能性を模索しました。

3月には、年1回実施している文京区内大学に在学する学生による地域交流活動報告会が、今年は拓殖大学文京キャンパスを会場として行われました。主催となった文京区社会福祉協議会より、報告会当日に活動発表を行う学生ボランティア団体の推薦についての依頼があり、学生サポートスタッフとの協議を経て、ボランティア支援室から2団体を推薦しました。

また、今年度新たに関東地区大学ボランティアセンターネットワーク*(通称「ほんわかねっと」)に加盟しました。同ネットワークには13の大学のボランティアセンターが加盟しており、定期的に行なわれた研究会ではボランティアコーディネーターが参加し運営にも取り組むとともに、大学ボランティアセンターのあり方について考え、コーディネーターの専門性向上に寄与する機会となりました。さらに、3月に、高山センター長がボランティアセンター長会議に参加し、他大学と情報交換を行われました。

10. その他

各事業の実施については、ボランティア支援室だけではなく、学生部等学内の関係部署・団体との連携・協働を図り、さまざまな活動や事業のスムーズな実施を心がけました。

例年実施している、大規模災害対策のためのプログラム「東洋大学宿泊サバイバル体験」において、今年度は管財課で防災訓練などを担当する職員にも同席いただき、本学における大規模災害への備えと、災害時の学生ボランティアリーダー育成のため実践機会の創出などといった点で、更なる発展が見込まれる足掛かりとなりました。

ボランティア・コーディネーター

日比野 勲

李 艶舒

2025年度

東洋大学ボランティア支援室学生サポートスタッフの取り組み

東洋大学ボランティア支援室のような大学ボランティアセンターは、1995年の阪神・淡路大震災を皮切りに全国の大学に設置されるようになり、2022年度時点でおおよそ170*¹のセンターが各キャンパスに設置されるに至っています。このうち、先進的な実践を積み重ねている大学ボランティアセンターでは、学生スタッフ（または学生コーディネーター）を設置する動きが見られ、学生目線によるボランティア活動推進のための取り組みが進められています。

本学においては、「ボランティア支援室学生サポートスタッフ（以下、サポートスタッフと表記）」が、2019年度の結成後活動を継続しています。

本稿では、サポートスタッフの2025年度の取り組みについてまとめます。

【概括】

2025年度は4年生4名、3年生5名、2年生5名、1年生2名の計16名で活動を行いました。

今年度の活動を通して、昨年度と比較してサポートスタッフの人数が大幅に減少したことや、新メンバーの加入に伴い、「ボランティアとは何か」という原点に立ち返り、全員で話し合う機会が増えました。

普段何気なく行っているボランティア活動についても、その目的や意義、大学におけるボランティアの在り方について改めて考えることができ、またその実現に向けて、サポートスタッフとしてどのような活動を展開すべきかを検討する機会も多く得られました。さらに、サポートスタッフの3軸の一つである「学ぶ」の要素を深めるため、後期には研修や勉強会を実施し、知識のインプットに重点を置いた期間となりました。

その一方で、ボランティアと自分自身の関わり方については、メンバー間で価値観の違いが見られ、議論が白熱する場面もありました。これらの経験を通して、今後はサポートスタッフとして、より多くの学生が社会貢献活動に参加しやすい環境を整えるために、まずは自分自身のボランティア観を見つめ直し、意見を共有しながら、多様な価値観を多角的に理解していく必要があると感じました。

【2025年度のサポートスタッフの取り組み】

サポートスタッフは、2025年度現在以下の3つの軸に沿って活動を行っています。

1 「学ぶ」：ボランティアを学ぶ活動、ボランティアから学ぶ活動

- (1) ボランティア勉強会、サポートスタッフ研修
- (2) その他、学内外のボランティア研修等への参加・参画

2 「伝える」：ボランティアの魅力を発信する活動

- (1) 「東洋大学ボランティアカフェ」の企画運営
- (2) 授業等における登壇
- (3) 大学近隣の地域交流活動への参画

3 「つくる」：学生が社会問題に関わるきっかけをつくる

- (1) 学内外の団体と、ボランティアプログラムの共同企画運営
- (2) その他の、ボランティア支援室主催事業への参画

以下、3つの軸に対応した具体的な取り組みについて述べていきます。

1 「学ぶ」：ボランティアを学ぶ活動、ボランティアから学ぶ活動

- (1) サポートスタッフ研修

- ・日程：2025年8月6日（土）10:00～17:00
- ・会場：赤羽台キャンパス ボランティア支援室分室

研修は2部構成で進め、前半は「大学ボランティアセンターと学生スタッフ」に関する基礎知識を学ぶことについて、後半は「東洋大学ボランティア支援室をよく知るためのセミナー」と題して実施しました。

両セッションともに、以下のディスカッションテーマを設定し、設問ごとに進行役をサポートスタッフの中から選出する形で進めました。

【第1部：「大学ボランティアセンターと学生スタッフ」】

- 1:そもそも「ボランティアセンター」とは何をすることか？
- 2:日本の大学ボランティアセンターの設置数は？～設置形態の違い～
- 3:大学生がボランティア活動をする動機とは？
- 4:大学はなぜ、ボランティア活動を「推す」のか？
- 5:ボランティア活動4原則の1つ「自発性」を深掘りしてみる

【第2部：「東洋大学ボランティア支援室をよく知るためのセミナー」】

- 1:東洋大学ボランティア支援室設立のきっかけ～どのような社会的できごとが背景となったか～
含:「学生運営型ボランティアセンター」としての「東洋大学学生ボランティアセンター（現「学ボラ」について）
- 2:東洋大学ボランティア支援室の行っている取り組みについて
- 3:授業におけるサポートスタッフ登壇依頼の、背景にあるニーズとは
- 4:サポートスタッフの組織的特色～「制度化」との関係～
- 5:私が目指す「サポスタ像」って？

【第3部】

第1部、第2部での議論を踏まえ、これまで実施してきている各種事業（主にボランティアサークル合同新歓行事「とびこめ!ボランティアの森」）を軸に、自分たちが現在関わっていることは、サポートスタッフの活動としてどう位置付けられるのか?ということ、サポートスタッフ学生間で意見交換を行いました。

(2) サポートスタッフ春合宿における、模擬コーディネーター研修

詳細は、「4 その他の取り組み」の「サポートスタッフ春合宿」の項目に記載。

2 「伝える」：ボランティアの魅力を発信する活動

(1) 授業等における登壇

ボランティア支援室では、ボランティアコーディネーターを授業に派遣し講義等を行う取り組みを行っていますが、そのうち一部授業において、サポートスタッフも登壇し、ボランティア支援室の活用方法を学生の視点で解説し、自身のボランティア活動体験談を受講生に伝えています。

●2025年度実績

- ・5月20日（火）5限「社会福祉学基礎演習」（福祉社会デザイン学部 高山 直樹教授ほか）
- ・6月5日（木）4限、6限「社会貢献活動入門/ボランティア活動入門」（社会学部 榎原圭子教授担当科目）
※支援室日比野コーディネーター ゲスト講義回に登壇
- ・11月12日（水）5限「非営利組織の経営」（原口 佳典講師担当科目）

以下、「非営利組織の経営」に登壇した学生からのコメントです。

今回の授業登壇は、学生のボランティアへのハードルを下げる事が目的でした。私は、ボランティアを始めたきっかけや実体験を基に、学生に向けて講義を行いました。登壇にあたり、ボランティアに対してハードルの高さを感じている学生の視点を意識しました。

私は友人の話から、多くの学生にとってボランティアが「自分とは遠い存在」になっていることが原因だと考えています。そこで講義では、「ボランティアを始めた理由」「参加方法」「自分にとってのメリット」を中心に、高尚な動機がなくても気軽に始められることを伝えることを目的としました。

講義中は学生の反応が少なく不安もありましたが、終了後には「イメージが変わった」「興味がわいた」といった声が多く寄せられました。また、自身の学ぶ分野と結びつけて質問してくれる学生もあり、ボランティアを身近に感じてもらうという目的を達成できたと感じています。今回の経験を通して、今後もボランティアへの固定観念を少しずつ変えていきたいと考えています。

(2) 自主事業「ボ。-ボランティアを始めたあの日について-」

- ・日程：2026年3月19日(木) 14:00～15:30
- ・会場：東洋大学白山キャンパス 雨水会館301号室
- ・参加者数：8名

「ボ。-ボランティアを始めたあの日について-」のタイトルは、オマージュさせていただいた作品があり、その作品のように「止まっていたものが動き出す」ような企画にしようという思いが込められています。本企画の目的は、3つです。

- ①様々な切り口からボランティア支援室を知ってもらう
- ②新歓前という機会に新入生がボランティアに求めるものについて意見交換をする
- ③ボランティアについて、経験年数関係なく面白く話し合う場をつくる

当初の案は「Volunteer bar」といった、ボランティアとは敢えて馴染みのないBarを組み合わせたら面白くなるのではないかとというところから形にしていきました。対象者に関しては、幅広く募集する一方で、開催時期の3月に合わせ、ターゲットはボランティアサークルで活動する方をメインにしました。その方へ、新入生歓迎会が始めるタイミングで、新入生目線でボランティアに求めているものが理解できたり、自分自身が感じているボランティアの魅力を言語化できたりする場を提供できるよう考えました。

内容は、アイスブレイク(接続詞自己紹介)から始まり、ボランティア大喜利、まとめのワークに書道を行いました。

ボランティア大喜利は、ボランティアに関するお題で大喜利をするワークです。参加者はグループに分かれ、お題に対して「面白い回答」と「共感する回答」を考えます。その中で、グループ内一つ渾身の回答を選び、他グループに共有をします。机には、参加者それぞれに「面白いde賞」「共感de賞」と書かれた札が用意され、他グループの回答に札を使ってリアクションをします。数回お題を繰り返した後、各札が上がった数を集計し、総合獲得枚数で勝敗を決める、というルールです。

当日では、「ボランティアで『絶対にやってはいけないこと』とは?」というお題に対し、「単独行動」という共感できる回答から、「ボランティアを日本語で表してください」というお題に対し、「自発人(じはんちゅ)」というボランティアのイメージを振り返る回答もありました。

まとめのワークでの書道は、書初めから発想を膨らませ「新年度に対して新たな気持ちで迎えよう」という意味を含めて行いました。「あなたにとってボランティアとは?」ということを企画名になぞらえて、「カタカナ文字。-副題-」の形で言語化してもらいました。実際には、「ガ。-新たな「我」の発見-」といった自己を振り返る機会になった方や、「エ。-エガオにする、関係者を-」といったボランティアの魅力を振り返る機会になった方がいました。

3 「つくる」：学生が社会問題にかかわるきっかけをつくる

○ボランティア支援室主催事業への参画

以下のボランティア支援室主催事業にサポートスタッフが参画することで、ボランティアプログラムの目指す社会課題の背景を学ぶとともに、サポートスタッフ以外の学生が社会課題に関わる機会を創出しました。

- ・「ボランティア入門講座」

赤羽台キャンパス、白山キャンパスでそれぞれ開催。詳細は本書54ページからの報告を参照。

- ・「2時間の対話で『ことば』にする、あなたのボランティア体験!」

例年、サポートスタッフが単独で運営に携わっていましたが、今年度はサポートスタッフが他にボランティアサークル2団体を巻き込む形で運営を担いました。

詳細は本書148ページからの報告を参照。

○自主事業「ボランティアコレクション うきうき地域生活」

詳細は、本書105ページからの報告を参照。

4 その他の取り組み

① ボランティアサークル 新幹部交流会

- ・日程：2026年3月16日（月）、17日（火）いずれも21:00～22:30
- ・実施方法：google meetによるオンライン開催
- ・登壇者

【16日】SDGs アンバサダー、バリアフリーサークル「歩み」、ベジプロジェクト東洋、NOTO×TOYO 青いビブス、NPO 法人チャリティーサンタ文京支部

【17日】バリアフリーサークル「歩み」、学生団体TIPS、学ボラ、Toyo-MeW プロジェクト^{*2}

本企画では、新たに2026年度からボランティアサークルの新代表になる学生を対象に、先輩代表の実体験をもとにした交流会を実施した。企画に至った動機としては、企画者自身が次年度にサークル代表を務める立場となった当事者の視点から、「自分に代表が務まるのだろうか」という不安を抱えたまま新学期を迎えるのではなく、経験豊富な先輩方が卒業される前に多くの学びを得たいという思いがあった。また、同様の不安を抱えた学生が他にもいることを知り、団体同士の交流のきっかけを創出したいという思いから本企画を立案した。

本企画では、新代表を対象に先輩代表の実体験をもとにした交流会を実施した。

①アイスブレイク、②先輩代表からの発表、③質疑応答

先輩代表からの発表では、「団体の概要紹介」「代表として意識していたこと」「団体運営での成果や課題」の3点についてお話しいただいた。お一人5分という限られた時間の中で、非常に充実した内容の濃い発表を行っていただいた。特に、代表として意識していたこととして、「些細なことでもメンバーに仕事を割り振る」「代表がひとりでやるのではなくみんなでやる」「参加しやすい雰囲気づくり」といった具体的な工夫は、今後の実践に活かせる学びとなった。

参加者からは、「不安や疑問を身近な先輩の声で聞くことができた」「他団体の運営を知る貴重な機会となった」といった声が寄せられ、団体運営に対する不安軽減につながる場となった。また、先輩代表からも「自分が代表になる前に参加したかった」「自分の活動の振り返りになった」と好評をいただくことができ、全体として、参加者・ゲスト双方にとって有意義な交流の機会となった。さらに、Canvaを用いて要点をリアルタイムで可視化したことにより、情報整理と理解促進につながった点も有効であった。一方で、ゲスト人数に対して時間が不足し、全員に十分な発言機会を確保できない場面もあったため、

今後は人数調整や進行の工夫が求められる。

本企画は小規模なオンラインでの実施ではあったが、参加者同士が不安や課題を共有し、学び合う機会を創出できた点において意義があった。また、自身の問題意識をもとに企画として実現できたことは、サポスタとしての活動においても大きな経験となった。

② サポートスタッフ春合宿

- ・ 日程：2026年3月26日（木）～3月27日（金）
- ・ 会場：東洋大学 河口湖セミナーハウス

サポートスタッフ合宿では、東洋大学の河口湖セミナーハウスにおいてボランティアコーディネート研修を行った。第一部では、活動者としてのボランティアとコーディネーターとしてのボランティアの違いについて学習した。活動者は目の前の活動を「点」として捉え、自分の役割に集中する一方で、コーディネーターは活動全体を俯瞰的に捉え、ボランティア・活動先・目的の関係性を意識しながら調整を行う存在であることを理解した。また、私たちサポートスタッフはボランティアの活動者であると同時にコーディネーターでもあることから、その両方の視点を持ちながら関わることの重要性について考えた。さらに、活動を単発で終わらせるのではなく、振り返りを通して活動を「線」として捉え、次につなげていくことの大切さについても学んだ。これまで自分自身は目の前の活動に集中するあまり、俯瞰的に考える機会が少なかったと感じており、意識的に振り返りを行う必要があると気づいた。第二部では、合同新入生歓迎会を想定したロールプレイングを実施した。事例をもとに、どのような提案を行えばよいのかを検討し、ボランティアの思いや活動先のニーズを踏まえた関わり方について考えた。また、お互いのロールプレイの良かった点を共有することで、新たな視点や工夫に気づくことができた。実際に体験することで、当日の状況を具体的にイメージしながら取り組むことができ、コーディネーターとしての役割をより現実的に理解することができた。今回の研修を通して、ボランティアを単なる活動として捉えるのではなく、人と人、活動と目的をつなぐ視点を持つことの重要性を学んだ。今後は、活動後の振り返りを習慣化し、俯瞰的な視点を意識しながら関わることで、より良いコーディネートにつなげていきたい。

執筆：

成瀬 響之（社会学部社会福祉学科4年）、横山 芽生（社会学部メディアコミュニケーション学科3年）、佐々木 瑚乃実（福祉社会デザイン学部社会福祉学科2年）、細井 瑞希（福祉社会デザイン学部社会福祉学科2年）、土屋 晴路（福祉社会デザイン学部社会福祉学科1年）、日比野 勲（ボランティア支援室 ボランティアコーディネーター）

*1：特定非営利活動法人ユースビジョン「大学ボランティアセンター情報ウェブ」（<https://www.daigaku-vc.info>）をもとに、編者の持つデータを加え算出。

*2：2025年度当時の団体名。2026年度から「Toyo-Mew」と、団体名を改称し活動している。





2025年度 ボランティア支援室活動記録

月	日	種別	業務内容
4月	7～8日	★ イベント	「とびこめ!ボランティアの森～ボランティア団体合同新歓2025 in 白山～」(主催:ボランティア支援室サポートスタッフ)
	19日	★ イベント	「東洋大生がワークショップで学ぶSDGs」(認定NPO 法人開発教育協会)
	22日	★ イベント	Smile F LAOS フェアトレードオリジナルコーヒー販売会①
	26日	★ イベント	「エシカルキャンパス2025」への、SDGsアンバサダーの参加(主催:株式会社ミラサス)
	26日	★ イベント	2024年度春季能登半島ボランティア報告会(主催:NOTO×TOYO 青いビブス)
	28日	● 会議 (書面会議)	第1回 ボランティア支援室運営委員会
	28～5月2日	★ イベント	2025年度 「GW 能登半島ボランティア」
5月	3～4日	★ イベント	Toyo 1day ボランティアプログラム「カンボジアフェスティバル2025」運営ボランティア活動
	8～9日	★ イベント	「とびこめ!ボランティアの森～ボランティア団体合同新歓2025 in 白山」(主催:ボランティア支援室サポートスタッフ)
	13日、15日	★ イベント	「とびこめ!ボランティアの森～ボランティア団体合同新歓2025 in 赤羽台」(主催:ボランティア支援室サポートスタッフ)
	13日	◆ ガイダンス (授業協力)	福祉社会デザイン学部社会福祉学科授業「社会福祉学基礎演習」[実施コース:C-1コース](加山先生)
	13日	◆ ガイダンス (授業協力)	福祉社会デザイン学部社会福祉学科授業「社会福祉学基礎演習」[実施コース:C-1コース](高野先生)
	18日	☆ イベント	富士樹海清掃ボランティア(春)
	25日	★ イベント	大人の社会科見学:東京スインミル(主催:SDGsアンバサダー)
	26日	★ イベント	～スペシャルオリンピックスの現場から学ぶ支援と自己表現のコツ～『伝える力』を共に学ぶ①
	27日	◆ ガイダンス (授業協力)	福祉社会デザイン学部社会福祉学科授業「社会福祉学基礎演習」[実施コース:C-1コース](吉田先生)
	27日	◆ ガイダンス (授業協力)	福祉社会デザイン学部社会福祉学科授業「社会福祉学基礎演習」[実施コース:C-1コース](古川先生)
6月	1日	★ イベント	東洋大学SDGsアンバサダー 就任(遡及)
	1日	☆ イベント	「スポGOMI in 朝霞キャンパス」
	3日	◆ ガイダンス (授業協力)	文学部教育学科授業「大学生として学ぶ」[実施コース:Aコース](猪股先生)
	3日	◆ ガイダンス (授業協力)	福祉社会デザイン学部社会福祉学科授業「社会福祉学基礎演習」[実施コース:C-1コース](高山先生)
	3日	◆ ガイダンス (授業協力)	福祉社会デザイン学部社会福祉学科授業「社会福祉学基礎演習」[実施コース:C-1コース](古川先生)
	7日	★ イベント	ゴールボール体験会2025(白山)
	7日	★ イベント	中高生の居場所「b-lab」見学ツアー
	8・9日 14・15日	★ イベント	「文京区あじさい祭り」への、運営ボランティアとしての参加
	10日	◆ ガイダンス (授業協力)	文学部教育学科授業「大学生として学ぶ」[実施コース:Aコース](桂先生)
	10日	◆ ガイダンス (授業協力)	文学部教育学科授業「大学生として学ぶ」[実施コース:Aコース](長沼先生)
	10日	◆ ガイダンス (授業協力)	福祉社会デザイン学部社会福祉学科授業「社会福祉学基礎演習」[実施コース:C-1コース](戸井先生)
	10日	◆ ガイダンス (授業協力)	福祉社会デザイン学部社会福祉学科授業「社会福祉学基礎演習」[実施コース:C-1コース](荻野先生)
	11日	★ イベント	防災備蓄食料品配布会(朝霞)
	12日	◆ ガイダンス (授業協力)	授業「ボランティア活動入門(社会貢献活動入門)」(榊原先生、4限・6限の2コマ)

月	日		種別	業務内容
	14日	★	イベント	SDGs アンバサダー認定式・顔合わせ式
	16～27日	★	イベント	ウォーターサーバーぐるぐるスタンプラリー（主催：ウォーターサーバープロジェクト「SPRING」）
	17日	★	イベント	防災備蓄食料品配布会（赤羽台）
	19日	★	イベント	防災備蓄食料品配布会（川越）
	21日	★	イベント	盲ろう者理解ワークショップ
	21日	●	会議 （書面会議）	第2回 ボランティア支援室専門部会
	24日	★	イベント	CLASS TO CAREER（ECZ×アンバサダーコラボ企画）
	24日	★	イベント	赤羽台の「ヒト・モノ・コトさがし」のまちあるき
	28～29日	★	イベント	「第19回環境マネジメント全国学生大会」への、SDGs アンバサダーの参加 （主催：琉球大学エコロジカル・キャンパス学生委員会）
	30日	★	イベント	ウォーターサーバー3台新規設置（ウォーターサーバープロジェクト「SPRING」）
	30日	★	イベント	～スペシャルオリンピックスの現場から学ぶ支援と自己表現のコツ～『伝える力』を共に学ぶ②
	7月	1日	★	イベント
3日		★	イベント	ボランティア入門講座 in 赤羽台
5日		★	イベント	「東京メガシティ祭り」への、学生ボランティア参加
6日		★	イベント	「そなエリア東京フィールドワーク on『防災クイズ&ゲーム Day2025』」
11日		★	イベント	Smile F LAOS フェアトレードオリジナルコーヒー販売会②
16日		★	イベント	ボランティア入門講座 in 白山
26・27日		★	イベント	「ニューヴェル赤羽台団地まつり」への、学生ボランティア参加
8月	2日	★	イベント	「文京区クールアースフェア2025」へのブース出展（主催：文京区資源環境部環境政策課）
	4日	★	イベント	～スペシャルオリンピックスの現場から学ぶ支援と自己表現のコツ～アスリートの研修を体験して『伝え方』について学びましょう
	6～9月14日	★	イベント	夏季能登半島ボランティア活動（珠洲市、輪島市、七尾市、志賀町、富来町）
	7～25日	★	イベント	群馬県甘楽町地域おこし協力隊インターン（夏）
	21日	★	イベント	ボランティア支援室サポートスタッフ研修
	22～23日	★	イベント	Toyo 1day ボランティアプログラム「蓬莱町会盆踊りボランティア」
	26～28日	★	イベント	援農マッチングサービス「ののの」を通じた、援農ボランティア活動（静岡県熱海市 西島農園）への参加（SDGs アンバサダー朝霞キャンパス）①
9月	4日	★	イベント	大阪・関西万博「SDGs Students Dialogue Expo 2025」への登壇（主催：環境省）
	4日	★	イベント	CSRスタディーツアー「第一生命保険株式会社」
	8日	★	イベント	「KAGAVOCO ボランティア EXPO2025」への、ボランティア支援室サポートスタッフの参加（主催：関西学生ボランティアコーディネーターネットワーク）
	9日	★	イベント	富士樹海清掃ボランティア（夏）
	11～14日	★	イベント	援農マッチングサービス「ののの」を通じた、援農ボランティア活動（静岡県熱海市 西島農園）への参加（SDGs アンバサダー朝霞キャンパス）②
	12～14日	☆	イベント	NICE 日本国際ワークキャンプセンター グループワークキャンププログラム（福島県いわき市田人町）
	13日	★	イベント	「桐ヶ丘盆踊り」への、学生ボランティアの参加
	17～18日	★	イベント	災害救援ボランティア講座

月	日		種別	業務内容
10月	27日	★	イベント	北区花火会への、SDGsアンバサダーの参加
	2～6日	★	イベント	Smile F LAOS フェアトレードオリジナルコーヒー販売会③
	11日	★	イベント	第3回 ボランティア支援室専門部会（書面会議）
	12日	★	イベント	Toyo 1dayボランティアプログラム「ビーチクリーンアップ in YUIGAHAMA Beach～SDGs14『海の豊かさを守ろう』～」
	15日	★	イベント	東洋大学SDGsWEEKs 公開授業「授業を通して知る、里親制度や子どもたちのこと」（小野先生）
	18日	★	イベント	夏季能登半島ボランティア報告会
	18～11月7日	★	イベント	能登半島ボランティアパネル展（川越）
	20～31日	★	イベント	能登半島ボランティアパネル展（白山）
	20～11月8日	★	イベント	ウォーターサーバー利用状況調査（SDGsアンバサダー川越チーム）
	21日	●	会議 （書面会議）	第3回 ボランティア支援室専門部会
	23日	★	イベント	新潟県旧山古志村における、新潟中越地震追悼式への参加（学ボラ）
	25日	★	イベント	八丈島台風災害 募金活動への協力（主催：文京区社会福祉協議会）
	25日	☆	イベント	里親子デイキャンプ
	28日	★	イベント	東洋大学SDGsWEEKs 公開授業「ちがいても同じも真ん中に」（永作先生）
	29日	★	イベント	東洋大学SDGsWEEKs 公開授業「“ごちゃまぜ”福祉と能登半島地震からの創造的復興に向けて」（川原先生）
	31日	★	イベント	文京区サステナ交流会
11月	2～3日	★	イベント	SDGsアンバサダー大学祭出展（白山、赤羽台、朝霞、川越）
	2～3日	★	イベント	「NOTO×TOYO 青いビブス」大学祭出展（白山）
	6日	★	イベント	「NOTO×TOYO 青いビブス」による防災講座（主催：北区社会福祉協議会）
	10～24日	★	イベント	能登半島ボランティアパネル展（朝霞）
	12日	◆	ガイダンス （授業協力）	授業「非営利組織の経営」（原口先生）への、ボランティア支援室サポートスタッフ登壇
	14～15日	★	イベント	「文京博覧会（ぶんぱく）」への、Smile F LAOSの出展（主催：文京博覧会2025実行委員会、文京区）
	14～15日	☆	イベント	東洋大学宿泊サバイバル体験
	16日	★	イベント	「bon×bon festa AKABANEDAI」への、学生ボランティア参加
	21日	★	イベント	東洋生の知らない世界～完全攻略脱炭素化社会～①
	25、27日	★	イベント	わらしべ長者プロジェクト頒布会（赤羽台）
	25日	★	イベント	「NOTO×TOYO 青いビブス」能登ボランティア報告（丸紅本社）
	30日	★	イベント	「ボランティアコレクション うきうき地域生活」（主催：ボランティア支援室サポートスタッフ）
12月	3日	★	イベント	Smile F LAOS フェアトレードオリジナルコーヒー販売会④
	6日	☆	イベント	スポGOMI in 赤羽台
	7日	★	イベント	「ESD推進ネットワーク全国フォーラム2025（立教大学）」への出展（主催：ESD活動支援センター、文部科学省、環境省）
	9日	★	イベント	東洋大学SDGsWEEKs 公開授業「CSR論公開講義「企業と人権」（小瀬先生）
	10～12日	★	イベント	「エコプロ2025」への、SDGsアンバサダーの出展（主催：日本経済新聞社）
	10～1月14日	★	イベント	「ペットボトルキャップを回収し、リサイクルしよう!」プロジェクト第1回（SDGsアンバサダー川越キャンパス）

月	日		種別	業務内容
	13日	★	イベント	北区学びステップアップフェスタへの出展
	20日	★	イベント	東洋生の知らない世界～完全攻略脱炭素化社会～②
	22日	●	会議 (書面会議)	第4回 ボランティア支援室専門部会
1月	19～30日	★	イベント	「ペットボトルキャップを回収し、リサイクルしよう!」プロジェクト第2回 (SDGs アンバサダー川越キャンパス)
	31日	★	イベント	学ボラ「山古志20周年シンポジウム」
2月	5日	★	イベント	SDGs アンバサダー Canva 講座
	13～3月16日	★	イベント	春季能登半島地震ボランティア
	14日	☆	イベント	被災地のまちづくりを考え、発信するスタディーツアー
	17日	●	会議 (書面会議)	第5回 ボランティア支援室専門部会
	23～25日	☆	イベント	NICE 日本国際ワークキャンプセンター グループワークキャンププログラム (栃木県益子町)
	28日	★	イベント	文京区 地域連携ステーションフミコム「文京区にふみこむフェスタ」への、ボランティアサークル出展
	28日	★	イベント	東日本大震災から15年 映画「生きる」上映会
3月	1日	★	イベント	ゴールボール体験会
	4～25日	☆	イベント	群馬県甘楽町地域おこし協力隊インターン (春)
	7日	◇	その他	第27回アースデイ川越in昭和の街2026 (SDGs アンバサダー川越キャンパス)
	9日	★	イベント	IKEA 横浜 CSR スタディーツアー
	10日	★	イベント	「文京区学生による、地域活動報告会」(開催校: 拓殖大学) への、学生ボランティアサークルの登壇ならびに報告会運営補助 (主催: 社会福祉法人文京区社会福祉協議会)
	17日	★	イベント	学生 社会貢献活動表彰式・奨励プロジェクト助成報告会
	17日	●	会議	第6回 ボランティア支援室専門部会
	19日	★	イベント	ボ。ーボランティアを始めたあの日について-
	24日	★	イベント	みらいのタネプロジェクト (SDGs アンバサダー川越キャンパス)

【種別】 ● 会議 ★ イベント (ボランティア支援室企画) ☆ イベント (旧課外活動育成会企画)
◆ ガイダンス (授業協力) ◇ その他

その他ボランティアコーディネーター、 担当職員の外部視察および外部研修等参加

月	日		種別	業務内容
5月	21日	▲	参加	2025年度支援力アップ塾スタートアップ編（第1回）
5月	26日	▲	参加	学生支援担当者連絡会：（第1回）
6月	20日	▲	参加	2025年度支援力アップ塾スタートアップ編（第2回）
7月	12日	▲	参加	2025年度支援力アップ塾スタートアップ編（第3回）
7月	14日	▲	参加	学生支援担当者連絡会：（第2回）
7月	28日	▲	参加	第1回企業地域連携推進ネットワーク会議
9月	29日	▲	参加	学生支援担当者連絡会：（第3回）
11月	25日	▲	参加	学生支援担当者連絡会：（第4回）
2月	26日	▲	参加	関東地区大学ボランティアセンター研究会（第3回）
3月	10日	▲	参加	関東地区大学ボランティアセンター長会議

【種別】 △ 視察 ▲ 参加

ボランティア支援室 2025年度 利用状況報告

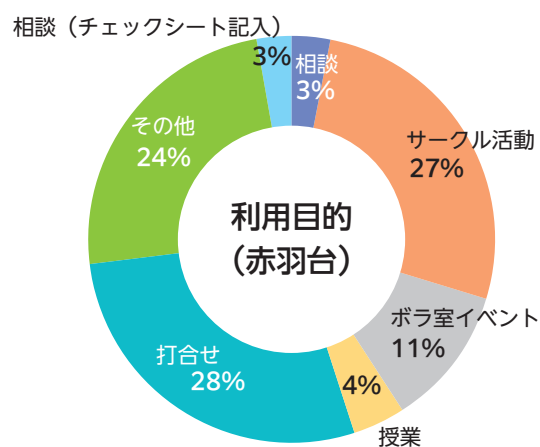
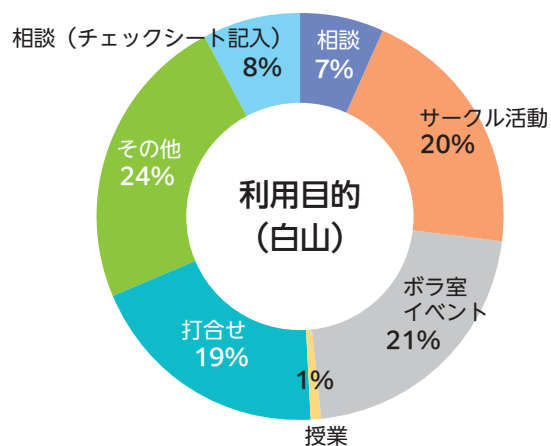
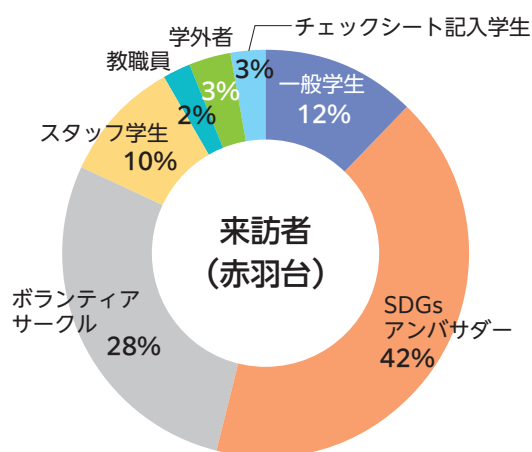
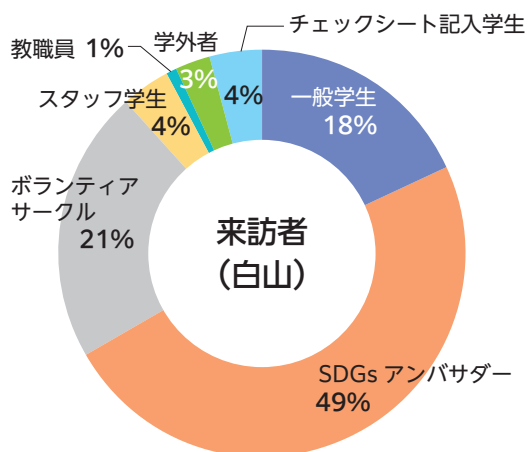
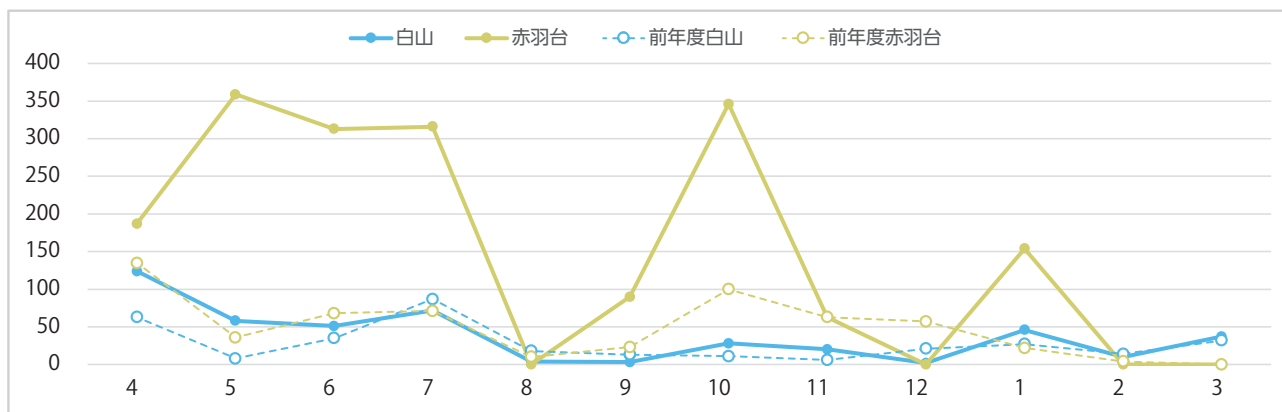
ボランティア支援室来訪者数 (白山)

キャンパス	学部	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	累計
白山	文	3	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	5
	経済	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
	経営	0	0	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	3
	法	0	5	2	0	0	2	0	0	0	0	0	0	9
	社会	0	3	1	1	0	0	0	1	0	0	1	0	7
	国際	3	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
	国際観光	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	2
赤羽台	情報連携	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	福祉社会デザイン	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	健康スポーツ科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
板倉	生命科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	食環境科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
川越	理工	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	総合情報	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他	通信教育部	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	大学院	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
チェックシート未記入者		118	49	46	70	4	0	27	18	0	46	9	37	424
月計		124	58	51	72	4	3	28	20	2	46	10	37	455
前年度		27	92	119	81	14	0	80	21	50	18	0	0	502

ボランティア支援室来訪者数 (赤羽台)

キャンパス	学部	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	累計
白山	文	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	経済	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	経営	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	法	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	社会	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	国際	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	国際観光	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
赤羽台	情報連携	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	福祉社会デザイン	15	8	2	13	0	0	0	0	0	0	0	0	38
	健康スポーツ科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
板倉	生命科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	食環境科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
川越	理工	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	総合情報	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他	通信教育部	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	大学院	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
チェックシート未記入者		172	350	311	303	0	90	346	63	0	154	0	0	1789
月計		187	359	313	316	0	90	346	63	0	154	0	0	1828
前年度		95	170	180	210	0	66	210	199	144	153	0	0	1427

ボランティア支援室来訪者数



①「とびこめ！ボランティアの森 ～ボランティア団体合同新歓2025 in 白山～(4月)」

開催期間・日時	2025年4月7日(月)、8日(火) 10:00～17:00
会 場	東洋大学 白山キャンパス 雨水会館301教室
目 的	ボランティア活動に興味のある新入生を主たる対象とし、東洋大学ボランティア支援室に登録しているボランティア団体の説明や活動紹介の場を設けることにより、ボランティアサークルを通じたボランティア活動参加・参画のきっかけを提供すること。
参 加 者 数	- 東洋大学SDGsアンバサダー - NOTO×TOYO 青いビブス - 学ボラ - 東洋大学IVUSA - 国際ボランティアサークルSalamat - 手話サークル「つみき」 - バリアフリーサークル歩み - Smile F LAOS - Toyo-MeWプロジェクト - きりがく - 学生団体TIPS - ベジプロジェクト東洋 - 地域交流団体「紡ぎ」 - 学生団体おりがみ - まなキキプロジェクト - NPO法人チャリティーサンタ文京支部 - 東洋大学ボランティア支援室サポートスタッフ(以上17団体)
企画・運営	東洋大学ボランティア支援室学生サポートスタッフ

■ 活動内容 (概要)

今年度の、ボランティア支援室登録団体の合同新歓企画は、そのすべてを「とびこめ！ボランティアの森」とタイトルを冠して、ボランティア支援室学生サポートスタッフが出展団体の調整や会場設営、広報など全面的に企画づくりを進めました。

4月に実施した本企画は、東洋大学公認サークル・届出団体の新入生歓迎行事が同日に行われる中、ボランティア支援室登録団体がブースを出展し、新入生を主な対象に「ボランティアサークルで過ごす大学生活」を提案することに主眼を置く形で実施しました。

以下、ボランティア支援室サポートスタッフ(以下、サポスタと略す)からの報告です。

今年度の合同新歓は、前年度のもの比べて人の入りも多く、全体として盛況となりました。二日間ともに一般来場者は約100人にのぼり、さまざまな団体にとって広報・勧誘の場として大いに機能したと考えられます。

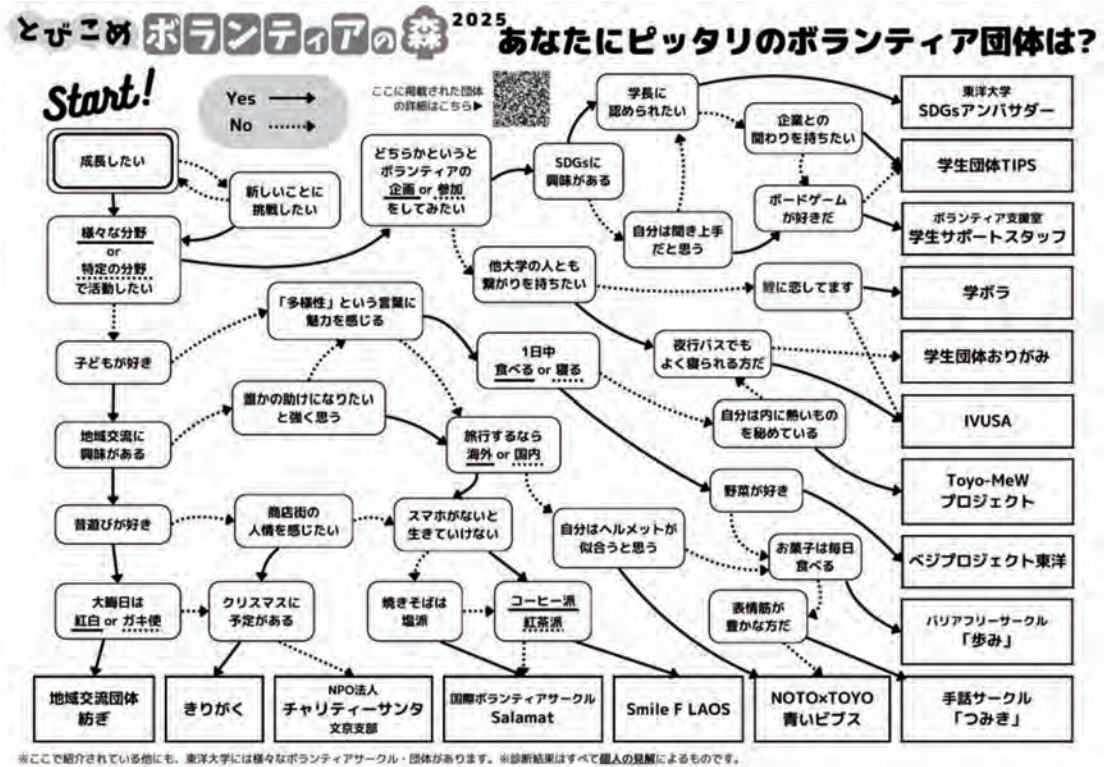
団体関係者の参加も例年より増加し、出展団体は16団体、関係者数は二日間で約60名に達しました。また、他団体との交流も活発に行われ、団体間の横の繋がりが生まれたことも今回の成果の一つといえるでしょう。

当企画では、来場した一般学生がさまざまな団体のブースで話を聞いている場面や、団体に入会する場面を創出することができ、新歓活動としても十分な成果を得ることができました。サポスタとしても東洋大学に関わる多くの団体と交流できたことで、今後の活動の弾みとなりました。また、コーディネートの面でも自信を持つことができ、有意義な機会でした。

出展者からは「自分の団体の強みを伝える方法が分かった」「普段関わることのない団体の人と話せ

てよかった」といった声も多く寄せられ、運営側としても手応えを感じられました。広報や会場配置など、前年度の反省点を踏まえて改善した点も多く、全体としては成功と評価できると考えます。一方で、団体間の事前準備における課題も見られたため、次年度以降に向けて改善を図っていきたいと考えています。

(福祉社会デザイン学部社会福祉学科3年 ボランティア支援室サポートスタッフ 都築 郁昭)



※ここで紹介されている他にも、東洋大学には様々なボランティアサークル・団体があります。※診断結果はすべて個人の経験によるものです。



② フェアトレードの普及促進を目的とした ラオス産オリジナルコーヒーの販売会①

開催期間・日時	2025年4月22日(火)、23日(水) 11:00~16:00
会 場	東洋大学 白山キャンパス 1号館エレベーター前、6号館学生部前
目 的	今回、学内でフェアトレードコーヒーを販売する目的は以下の3点です。 ① ラオスフェスティバルの資金調達と来年度の支援活動の展望 ② エフラオとフェアトレードの認知度向上 ③ 4月に入学する新入生に関心を持たせ入会喚起
参 加 者 数	55名
主 催	Smile F laos
協 力	ボランティア支援室、学生部

■ 活動内容 (概要)

【当日の具体的な流れ (両日とも同様)】

- 9:00 準備開始: 会議室をボランティア支援室より借用
商品、展示品、会計設備をボランティア支援室より、開催場所に搬入
4号館1階生協横にある展示用パネルを学生部より、開催場所に搬入
- 11:00 販売開始
- 16:00 販売終了
- 16:30 片付け終了
- 17:00 反省会開始
- 18:00 反省会終了

来場者数 約55人

販売数 80製品完売

私たちの販売会は、単にコーヒーを購入してもらうことが目的ではなくその背後にあるフェアトレードの価値や、ラオスの子供たちへの支援の重要性を伝えることを目指しています。展示を通じて来場者に以下の4点のような気づきを促したいと考えています。

① フェアトレードの意味と影響

コーヒーを購入することは、単なる取引ではなく、生産者の生活を支え、適正な労働環境と公正な価格を保証することです。フェアトレードに参加することで、消費者として自身の選択が、世界のどこかの地域でポジティブな影響を与えているという意識を持ってほしいです。

②ラオスの現状と教育支援の必要性

昨年12月に実施したばかりのスタディーツアーで私たちが目にしたラオスの教育環境や生活状況の現実を展示で紹介し、教育支援の必要性を理解していただきたいです。子供たちが質の高い教育を受けられない状況が将来の職業選択にどのような影響を与えているのかを感じてもらい、私たちの支援活動の意義を理解してもらうことが重要です。またそこから自分たちが受けてきた日本の教育の良い面、悪い面において考えるきっかけとしても機能すればいいと思います。

③コーヒーを通じた支援のつながり

販売されているコーヒーが、現地の農家やラオスの子供たちの未来にどのように繋がっているかに興味を持っていただくきっかけになればと思います。日常で何気なくしている単なる消費行動が、遠くの国での持続的な発展に繋がるのだということを感じ取ってほしいです。

④私たちの日常と世界のつながり

ラオスでの現実を通じて、「私たちの日常の選択が、どのように他国の人々の暮らしに影響しているのか」を実感してもらうことが大切です。自分が日々飲むコーヒーの背景にあるストーリーを知ることによって自分の生活が世界の一部であると感じ取ってほしいです。

コーヒーを買って終わりではなく、その背後にあるストーリーに共感し、自分にできる他の支援方法を考えるきっかけにしてほしいです。例えば、情報を周囲にシェアすること、または次のステップとして、フェアトレードや教育支援の活動に参加することなど、自分なりのアクションに繋がっていただければいいと思います。また、販売会に来てくれたお客さんへSmile F LAOSのSNSを周知して、フォロワーを増やすことにより、他団体からみて魅力的に映るようにする。そうすることによって、他団体との交流を増やし、合同イベントなど実現できる活動の幅を広げたいです。



③ TOYO 1Day ボランティアプログラム 「カンボジアフェスティバル2025」 運営ボランティア活動

開催日時・会場	【事前学習会（オリエンテーション）】 ・日時：2025年4月22日（火）12：20～12：50 ・会場：東洋大学白山キャンパス雨水会館3階301教室 ※この他、個別説明会を実施。 【本番】 ・日時：2025年5月3日（土）～4日（日）7：45～20：00 ・会場：代々木公園イベント広場
目 的	・ボランティア活動や社会貢献活動に関心があるが、何をしたら良いか分からない、どんな活動があるのか分からない学生向けに、実際にボランティア・社会貢献活動の現場を体験してもらう機会を創ること。 ・ボランティア活動や社会貢献活動の現場体験を通じて、次の一歩につなげること。 ・ボランティア活動への意識を高め、参加を促進すること。
参 加 者 数	39名
カウンターパート	松村 裕介さん（カンボジアフェスティバル実行委員会 ボランティアリーダー）
共 催	多摩大学学生社会ボランティアコーナー （「多摩大学ボランティア体験プログラム2025」として実施）
プログラム 運営サポート	ボランティア支援室学生サポートスタッフ

■ 活動内容（概要）

ボランティア支援室では、ゴールデンウィーク期間中の5月3日・4日両日に代々木公園において開催された「カンボジアフェスティバル2025」の運営ボランティア活動のコーディネートを行いました。

「カンボジアフェスティバル」は、日本とカンボジアの友好による平和の保全や経済発展、多文化共生を推進していくことを目的に、カンボジアフェスティバル実行委員会の主催により開催されています。

本プログラムは、フェスティバル本番の活動日のほか、事前学習会（オリエンテーション）の機会を設け、顔合わせや情報共有などを事前に行うことによる参加者の不安解消や、ボランティア活動を通じた気づきを学びにつなげるための機会を予め設定しました。

また、多摩大学学生社会ボランティアコーナーの「多摩大学ボランティア体験プログラム」と共同で実施し、集合場所から両大学の参加者の接点をつくることを試みました。

【事前学習会（オリエンテーション）】

事前学習会は、ボランティア支援室サポートスタッフ（以下、サポートスタッフ）が進行を担い、以

下の内容で実施しました。

(1) 顔合わせ

会場参加者、オンライン参加者それぞれ、グループに分かれ、今回のプログラムに参加を決めた動機などについて意見交流をしました。

(2) カンボジアの事前知識

日比野コーディネーターより、クイズを交えながらカンボジアに親しむための事前知識を共有しました。

(3) 「カンボジアフェスティバル」概要説明

日比野コーディネーターより、フェスティバルの詳細やボランティア活動の概要、当日の集合等に関する事務連絡等を行いました。

【当日】

フェスティバル当日、ボランティアは以下の活動を、時間帯で区切り交代で担当しました。

- 1) 会場や駐車場の案内・管理
- 2) ステージの補助
- 3) 出店ブースの補助
- 4) 来場者等の案内・安全・衛生管理（感染症対策も含む）
- 5) エコステーション運営
- 6) 準備・後片付け
- 7) 写真／映像撮影
- 8) その他実行委員会が必要と認める事項
- 9) カンボジアフェスティバルをより盛り上げるための施策

以下、当日活動に関わった、学生サポートスタッフからの報告です。

【「カンボジアフェスティバルでの国際ボランティア活動を通じて ～人と文化にふれる現場から～】

カンボジアフェスティバル当日は、朝から多くの来場者でにぎわい、会場全体がエネルギーに満ちていました。伝統音楽や舞踊のパフォーマンス、美味しいカンボジア料理の屋台、民芸品や雑貨の販売などが並び、訪れた人々はカンボジア文化を五感で楽しんでいました。

今回、私はカンボジアの骨董品や食品を販売するブースで活動しました。実は、私自身も学生サポートスタッフとして、ボランティアに参加するのはこれが初めてで、どんな役割を果たせるのか不安もありました。しかし、実際に販売や接客を通して多くの方と交流し、国際的なボランティア活動の楽しさと難しさ、そしてやりがいを肌で感じることができました。

活動中には「言語の壁」に直面する場面もありました。カンボジア人の来場者と英語でコミュニケーションを取ろうとする中で、うまく伝えられないもどかしさを感じることもありましたが、翻訳アプリやジェスチャーを使ったり、実物を見せたりしながら説明することで、少しずつ理解を深めてもらえるよう工夫しました。そうした経験から、知識を伝えるだけでなく、「伝えようとする姿勢」が信頼関係を築くうえで大切なのだと学びました。

また、同じブースで一緒に活動した大学2年生の学生の様子がとても印象に残っています。彼女は「英語は勉強しているけれど、こうしたボランティアは初めて」と話していて、最初は緊張した面持ちでしたが、時間が経つにつれて表情が和らぎ、自分から積極的に声をかけている姿に変わっていききました。活動の終わりには、「これをきっかけに国際ボランティアやサポートスタッフの活動にも興味を持った」と話してくれて、その変化を間近で見られたことがとても嬉しかったです。

自分自身が何かを得るだけでなく、活動を通して周りの人の興味や可能性が広がっていく瞬間に立

ち会えたことが、今回の一番の収穫だったかもしれません。サポートスタッフとして関わるからこそ気づける「人の変化」や「興味の芽生え」に、もっと目を向けていきたいと思いました。今後も、文化を「知る」「伝える」ことの責任と面白さを感じながら、ただの参加者ではなく、現場の“つなぎ役”のような存在としてボラ室の活動に関わっていかれたらと思います。

(国際観光学部国際観光学科3年 ボランティア支援室学生サポートスタッフ 長嶋 優歩)

【参加者の所感】

- ・「ボランティアは楽しんでやるものです」という呼びかけと、実際に一日中動いたことで、ボランティアは「給料が出ない労働」ではなく、「楽しんで、進んでするもの」ということに気づき、ボランティア観がまるで変わりました。

- ・ゴミの仕分けは忙しくて一番大変でしたが、スマートに誘導できた時は達成感がありました。初めて会う人にも積極的に話しかけてみると面白い出会いがあることを、勇気を出して話しかけてくれた人から学びました。なかなか勇気は出ませんが、新しい出会いは好きなので、頑張って知らない人にも物怖じせず話しかけていくことに慣れていきたいと思います。

- ・ボランティアに参加している人たちは学生よりも大人が多い。なのでそういう人たちと会話することで今までの自分の人生にはなかったことについて知ることができる。初めましての人とでも沢山話す機会がある。みなさんとても優しく笑顔で寛容なので自分もお客様に対して優しくなれる。

- ・(この活動に参加したことで、ボランティア観が「変わった」という回答に対し) 時間内はずっと決められた仕事をしているイメージだったけど、同年代の人たちと話したり、休憩時間で一緒に回ったりなど楽しみながらできたから。同年代以外の幅広い方達と助け合うという普段はあまりできないことができたから。



4 「とびこめ! ボランティアの森～ボランティア団体合同新歓2025 in 白山&赤羽台～(5月)」

開催期間・日時	【白山キャンパス】 2025年5月8日(木) 15:00～19:00、9日(金) 12:00～15:30 【赤羽台キャンパス】 2025年5月13日(火)、15日(木) 11:00～16:00
会場	【白山キャンパス】 2025年5月8日(木) 15:00～19:00、9日(金) 12:00～15:30 【赤羽台キャンパス】 2025年5月13日(火)、15日(木) 11:00～16:00
目的	・新入生を主な対象に、ボランティアサークルや、ボランティア団体・NPOなどを通じた、ボランティア活動参加の機会を提供すること。 ・ボランティア活動にはじめて関わろうとする学生に向け、ボランティア活動相談コーナーを設けることで、活動参加への後押しをすること。 ・出展団体同士が、お互いの存在を認知し、協力し合える関係を築くこと。 ・地域のボランティア相談機関にブースを出展いただくことで、本学の学生ボランティア団体を地域資源と結びつけるきっかけとすること。
参加者数	【両キャンパスにおいて出展】 ・東洋大学ボランティア支援室学生サポートスタッフ ・地域交流団体「紡ぎ」 ・バリアフリーサークル歩み ・Toyo-Mew プロジェクト ・きりがく(東洋大学支部) ・NPO 法人チャリティーサンタ文京支部 ・IVUSA ・CFA 学生チーム (NPO 法人Chance For All 学生チーム) ・NPO 法人NICE (日本国際ワークキャンプセンター) 【白山キャンパスでのみ出展】 ・SDGs アンバサダー ・学ボラ ・TUEP ・NPO 法人湘南自然学校 ・ISR-ConnAction ・東洋大学点訳サークル ・Smile F LAOS ・学生団体おりがみ ・学生団体TIPS ・国際ボランティアサークルSalamat ・社会福祉法人文京区社会福祉協議会(地域連携ステーション「フミコム」) 【赤羽台キャンパスでのみ出展】 ・地域づくりインターンの会 ・ボードゲーム地域交流団体「ぼどのわ」 ・社会福祉法人北区社会福祉協議会 ・北区NPO・ボランティアぷらざ
企画・運営	東洋大学ボランティア支援室サポートスタッフ

■ 活動内容 (概要)

4月に引き続き、5月も「とびこめ! ボランティアの森」と題して、本学ボランティアサークルや、学生ボランティアの受け入れを行なっているNPO等の活動紹介を、ブース形式で行いました。

4月は、ボランティアサークルの新入生歓迎という性格が強かった本企画ですが、5月開催時にはより「ボランティア活動参加のきっかけ」を提供するというコンセプトに舵を切った企画と位置付けました。

また、両キャンパスともに、キャンパス設置自治体のボランティア・市民活動センターにもブース出展していただいたことで、ボランティアサークルと地域のセンター間の接点づくりのきっかけともなり、学生の活動ニーズと、地域のボランティア参加により地域課題ニーズを結びつける足掛かりとなりました。以下、ボランティア支援室サポートスタッフからの報告です。

【白山キャンパス】

今回は、団体間の交流が活発に行われていたという点が印象に残っています。私たちサポートスタッフも企画の一部として、団体間交流を目的としたお茶会を、8日(木)の本企画開始直前に開催しました。約30分程度と短い時間ではありましたが、たくさんの団体が積極的に参加してくださり、賑わっていました。

今回の「とびこめ! ボランティアの森」には、最近ボランティア支援室に登録された団体をはじめ、多くの団体が出展してくださったことも良かったです。そして、学内サークル以外の団体にも複数来ていただいたこともあり、交流の幅がさらに広がったこと、出展団体同士の協力関係を築くという目的を達成できたと感じます。特に、フミコム*¹などの中間支援組織と、各サークルとが交流し、その後のフミコムにおける文京区の市民活動団体としての登録に結びつけていたことが印象的でした。

新入生等の来場者に関しては、4月開催時には劣るものの2日間で合計58名でした。サークルを探している人だけでなく、ボランティア活動に個別で参加したいと考えて相談してくれる人や、1年生だけでなく2,3年生にも来場していただきました。サポートスタッフとして会の運営だけでなく、ボランティア活動相談への対応ができたという点は、非常に良かったと思います。

反省点や気になった点としては、参加していただいた出展団体が4月と比較して広報に力が入っていなかったことです。5月ということもあり、各団体の新歓活動も終わりに差し掛かっていたため、4月ほどの活気がなかったと感じました。私たちサポートスタッフが活気を出すためにできたことがあったのではないかと考えているため、改善したいと思います。

(経済学部総合政策学科4年 ボランティア支援室サポートスタッフ 小幡 子竜)

【赤羽台キャンパス】

赤羽台キャンパスでは、ボランティア支援室分室にて5月13日(火)、15日(木)の2日間開催しました。

全体的に、赤羽台としての特色が表れたイベントとなったのではないかと感じています。その理由の1つは、地域で活躍されている団体の出展が多かったことです。赤羽台は特に、キャンパス近隣の「地域」に活動の拠点を置いたボランティア活動をしているサークルが多く、地域との交流を積極的に行っている印象があります。実際に地域を現場としている北区社会福祉協議会や、北区NPO・ボランティアぱらどなど、中間支援組織の方々にも出展いただいたことで、より一層赤羽台と地域の関係性が現れていたのではないかと感じました。

また、今回の合同新歓に向け、ボランティア支援室登録サークルや、その他学内の社会貢献系の団体の情報をまとめた「団体紹介冊子」を作成し、配布できたこともよかったです。新入生が自分たちの作った冊子を読み、東洋大学のボランティアサークルや団体に少しでも興味を持ってくれたら嬉しいです。

私は昨年度の合同新歓にも新入生側として参加しましたが、今年は昨年度に比べ出展団体も増え、活気に満ちたイベントになったと感じました。今回の来場者数36名(出展者含めず)は白山に比べまだまだですが、来年はもっと広報に力を入れ、白山に負けないようにボランティア支援室を広めていきたいと思います。

今回の赤羽台キャンパスでの2日間の「ボラ森」の交流を通じて、他団体同士でちょっとした顔見知りになったり、繋がったりできた縁を、団体間の情報交換の機会や今後のサポートスタッフとしての企画

に活かしていけると良いと感じました。

(福祉社会デザイン学部社会福祉学科2年 ボランティア支援室サポートスタッフ 細井 瑞希)

*1：社会福祉法人文京区社会福祉協議会が運営する、地域連携ステーションの通称。NPO等の市民活動団体の支援や、企業・行政との協働を促進する「市民活動担当」と、ボランティアセンターとしての機能をもつ「ボランティア担当」とに職員の役割が二分されている。また、文京区内で活動するボランティア・市民活動団体が登録をすることで、同施設のさまざまな機能を活用することができる。

【白山キャンパス】



【赤羽台キャンパス】



5 b-lab 見学ツアー

開催期間・日時	2025年6月7日（土）10：00～11：30
会 場	文京区湯島 文京区青少年プラザ b-lab（ビーラボ）
目 的	b-labは、いつでも、なんでも挑戦できる中高生の秘密基地であり、そんな施設を見学しながら中高生の居場所について考えること。 文京区で活動する施設や団体への理解を深め、学生自らが社会貢献活動に踏み出すきっかけを作ること。
参 加 者 数	8名 ※主な内訳は以下の通り。 【内訳】学生7名、社会貢献センター事務局職員1名

■ 活動内容（概要）

b-labは中高生向けの居場所として2015年に開設され、教育とユースワークの拠点として地域に貢献しています。当日はb-labの役割や運営に対する理解を深めるために館内見学を行ったほか、質疑応答やディスカッションもありました。b-labの施設を見学し、中高生のことを1番に考えた施設・仕組みづくりがされているという印象を受けました。一番感心したことは、中高生のやりたいことや要望を意見ボード等で募集し、可能な限り中高生に寄り添っている点です。また、サークル活動も行っていて中高生の自主性を尊重し、やりたいことを叶えるサポート体制の充実さを感じました。最大限中高生のことを考え、その思いを制度や施設に反映している素晴らしいボランティアの形を知ることができ、とても充実した時間でした。また、ディスカッションの中で中高生の視点や地域単位でのb-labの存在意義についても考えることができ、地域社会の課題へのアプローチにより一層興味を持てる機会となりました。今後も地域社会に深く関わるボランティアにたくさん参加し、私たち学生がどのような関わり方ができるか考えていきたいです。

（経済学部総合政策学科4年 SDGsアンバサダー 小幡 子竜）

【参加者の感想】

- b-labの居場所支援だけでなく、ナナメの関係の概念が印象的で勉強になりました。
- 色々な立場で市民活動・ボランティア活動を支援できることが発見でした。今回は東京ならではの支援について知ることができたので、これからは地方ではどのように応用できるか考えていきたいと思います。
- 居場所やフリースクールと呼ばれる場所をNPOやボランティアだけで担うことへの限界を感じていたため、行政（文京区）とNPO（カタリバ）がともにつくる居場所の形を実際に見ることができ、いい経験になりました。



6 ゴールボール^{*1} 体験会2025

講 師	- 山口凌河さん（東洋大学OB）：東京パラリンピック5位 - 川嶋悠太さん：東京パラリンピック5位 - 金子和也さん：東京パラリンピック5位、パリパラリンピック金メダル - 宮食行次さん：東京パラリンピック5位、パリパラリンピック金メダル
開催期間・日時	2025年6月7日（土） 14：15～15：45
会 場	東洋大学白山キャンパス4号館 地下1階アリーナ
目 的	①ボランティア活動（特に、福祉・スポーツ分野）に興味を持つ ②パラスポーツ体験会の参加や運営に興味を持つ ③パラアスリートを応援する人が増える ④障害への理解が深まる ⑤東洋大学OBのパラアスリートと交流が生まれる
参 加 者 数	38名（講師の方を除く）
主 催	SDGs アンバサダー
協 力	ボランティア支援室

■ 活動内容（概要）

昨年行ったパラスポーツ体験会に引き続きゴールボール体験会を行いました。今回はパリパラリンピックに出場した選手を含む4人の選手を講師としてお招きし、今回は東洋大学の学生だけでなく、他大学の学生や視覚障害者を含む一般の方にも参加していただきました。

まずは、ゴールボールに触れるために講師監修のもとキャッチボールを行い、その後試合の際のブロック練習を行いました。キャッチボール中には「思っていたより軽い」「集中しないと音が聞こえない」という声が聞こえました。その後、3人グループに分かれ、試合形式で体験を行いました。講師の方の声掛けでスタートし、順番にボールを投げました。その後は1人ずつ投げたい人を募り、1体1での体験も行いました。

体験を終えたあとは、選手の方へのインタビューを行い、パリパラリンピックに出場したときの心情や日々の練習で心がけていることなどを聞きました。「楽しく学ぶ」という目標に沿った充実した体験会となりました。

【参加者の声】

- ・障がいに関わらずコミュニケーションをとってみんなで楽しめること
- ・“誰でもできる”という意味を身をもって感じることができました。
- ・世界で戦える話は斬新に感じた。
- ・想像以上にスピードが早いことやボールがどこに来るか分からないなと思いました。
- ・ボールを投げる際に、鈴の音が聞こえ、いかに鈴を鳴らさないようにするかが重要になってくるのではないかと思います。

- パラスポーツが障がい者の方に向けたものだが実際障害が無くとも楽しく遊べた。
- 若い人達の意識の高さから、まだまだ日本は捨てたものではないなと感じた。
- 視覚障害を持っていても環境次第ではそれを生かし輝ける。だからこそ障害の有無は関係なく純粋にゴールボールという分野の代表選手を尊敬できて、多様性社会の実現の可能性を感じた。
- ボールの中の鈴はあまり聞こえなかったです。あの硬さであんなにバウンドさせることができるのはスゴイ！の一言です！

【運営メンバーの声】

- 去年は当日ボランティアで参加し、今年初めて直接的な運営に関わった。一般の方も募集ということで充実した体験会にしたいということと、「楽しく学ぶ」を大事に当日まで動いてきたが、当日の皆さんの様子を見て頑張ってた良かったと思った。山口さんがパラスポーツに興味を持つ場を作ってくれるだけで感謝しかない、と言ってくださったことがとても心に残っている。自分なりの改善点も見つかったため、次は更にパワーアップした体験会にしたい。
- 私はこれまでに、今回を含めて3回ほどパラスポーツの運営に携わってきました。これらの経験を通して感じたのは、やはりどの人も隔たりなく、みんながゴールボールを楽しんでいたことです。それが何よりも嬉しく、心に残っています。参加者の皆さんがゴールボールの楽しさをきっかけに、他のパラスポーツにも関心を持ち、「体験してみたい」と思ってくれたら嬉しく思います。そして今後、こうしたスポーツの魅力が東洋大学のより多くの人たちに広まり、認知されていくことを心から願っています。
- 運営の人数が少なかったので、準備～体験会中と常にバタバタしていた印象が残っている。実際に体験できなかったのが非常に残念なので、当日ボランティアの人にもうまく指示を出し、交代でできるようにしてほしかった。時間通りに集合したのが2人だったので、以後改善すべき。選手の方のプレーが見られたのは貴重な機会であり、参加して良かったと思わせてもらった。

 *1：パラリンピック正式種目。1チーム3人の選手が、鈴の入ったボールを転がすように投げ合って、味方ゴールを守りながら、相手ゴールにボールを入れて得点を競う競技のこと。（参考：一般社団法人日本ゴールボール協会 公式ウェブサイト）



7 食糧配布会

開催期間・日時・会場	2025年7月3日(木) 12:10~13:30、17:00~18:00 白山キャンパス 1号館1階&6号館学生部前、ボランティア支援室 2025年6月11日(水) 12:00~13:30 朝霞キャンパス 朝霞キャンパス事務課前 2025年6月19日(木) 12:10~13:30 川越キャンパス 1101教室
目的	文京区・京北中学校・高校では、地震・災害の対策のためローリングストックを実施しており、毎年保管されている。そして、保存期間が迫っている防災備蓄品を東洋大学が引き受けることで、食品ロスを減らすことを目的としている。
参加者数	908名 ※主な内訳は、以下の通り。 白山キャンパス 471名 朝霞キャンパス 320名 川越キャンパス 117名
協力	文京区フミコム・京北中学・高等学校

■ 活動内容 (概要)

白山キャンパス

京北中学、京北高校の備蓄食糧品の中で消費期限が迫ってきたものを中心に、昼は白山キャンパス1号館1階と6号館学生部前、夕方はボランティア支援室において無料配布を行った。

数が少ない食糧品は複数種類の中から一つ、数が多いハリボーや水などは一人一個～複数個持っていってもらうようにした。

数が少ないものは比較的減りが早かったが、食糧品以外のカイロやタンポンは最後まで余っていた。カイロは使用期限が切れており、持っていく人が少ない印象だった。

【参加者の声】

- ・楽しそうに選んでくれる人や、「こんなにもらってもいいの?」という声もあり嬉しかった。
- ・今回カイロの使用期限が切れていたということで、食糧品の消費期限と合わせて使用期限もしっかり確認するべきだと思った。カイロを配るのは冬の方が良いのではないか。
- ・ある程度列ができていた時は自然と人が集まってくるが、列が途切れると足を止めてくれる人が減ってしまうように思った。
- ・多くの学生が関心を持って参加してくれる企画だと思うので、並んでいる学生にSDGsアンバサダーの活動を紹介したり、チラシを配ったりできたら良いと思った。
- ・非常食の配布をすることで災害や防災に対する意識を高め、期限が近いものを受け取ってもらうことで食品ロスを防ぐことができた。
- ・配るアンバサダー学生も、受け取る一般学生も参加しやすく、多くの人に啓発活動ができる機会だった。

- もらった非常食を食べてみることで、大きな災害があったときに慣れない味に感じるストレスを抑えられると思う。
- 災害に対する意識をさらに高め、自宅の備蓄品を見直そうと考えた。



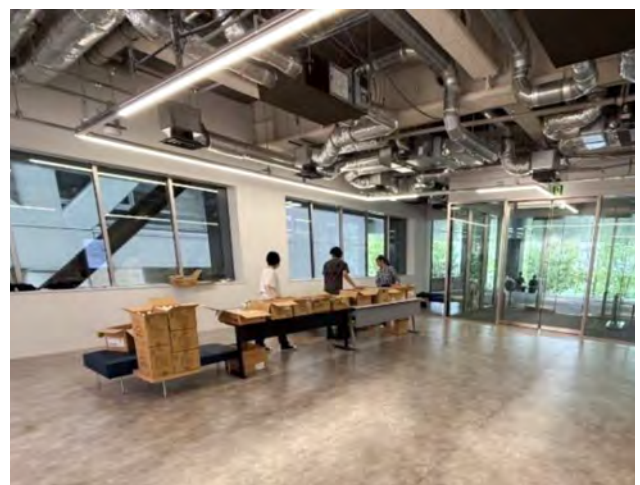
朝霞キャンパス

京北中学、京北高校の備蓄食糧品の中で消費期限が迫ってきたものを中心に、朝霞キャンパス事務課前において無料配布を行いました。数が少ないものは複数種類の中でひとつ、数が多いものは複数個持って行ってもらおうようにしましたが、一番数の多かったスープ類が最後まで余っていました。

SDGs アンバサダーのことをまだ知らない人に存在を知ってもらうという一つの良いきっかけになったと考えられます。

【参加者の声】

- 嬉しそうにもらってくれる人が多く、配っていても楽しかった。
- 今年、数が多くて最後に残ってしまったスープ系が来年も同様にある場合は、はじめから一人に対して複数個配ってもいいのではないかな。
- 2Lの水は大きいため持ち帰る人がいないのではないかなと思ったが、「サークルがあるから丁度いい!」と持っていく人がいたため、もしも来年以降雨があまりそうだったらサークルや部活がある層をターゲットに声をかけてみると良いのではないかな。
- 事前の告知が少ないと感じた。
- 食糧配布会を知らずにたまたま通りかかって参加した人がいたり、「これは何の団体の活動ですか」と質問してくださる方がいたりしたため、SDGs アンバサダーの認知度はまだまだこれから上げることができそう。
- 事務課前は意外と人が通らないので、食堂前の広いところで開催した方が活動を知ってもらえそう。
- アンバサダーという存在自体も、食糧配布会というイベントについてもより周知するため、配布の列に並んでいる人が見られるような看板やプリント（飲食店のメニューのように）で、SDGs アンバサダーの活動報告や広告などをお知らせするといいいのではないかな。



川越キャンパス

文京区と東洋大学附属京北中学・高等学校の協力のもと、廃棄期限が迫った防災備蓄品を東洋大学の学生へ配布する活動を実施しました。本活動の主な目的は、通常であれば廃棄処分となる備蓄品を有効活用することにより、フードロスの削減を図ることにあります。近年、食品ロスや資源の有効活

用は社会的にも重要な課題とされており、こうした取り組みは持続可能な社会の形成に寄与するものです。今回の活動では、賞味期限が近づき、本来であれば廃棄されてしまう備蓄品を大学生へ配布することで、資源を無駄にせず活用できる実践的機会となりました。また、備蓄品を有効に消費したい側と、食料を必要とする大学生の双方のニーズを満たす取り組みとしても意義があったと考えられます。

実施当日は昼休みの時間帯に、アルファ米や乾パン、保存水など災害時に役立つ食品を学生に受け取ってもらいました。当日は多くの学生に足を運んでいただき、提供いただいた備蓄品はすべて配り切ることができました。

この活動を通して、学生たちは単に物品を受け取るだけでなく、防災に関する意識を自然に高める機会にもなったと考えられます。配布活動により、災害時に必要となる備蓄品の重要性や、資源を無駄にせず活用する工夫、さらには食品ロス削減の視点を学ぶことができ、学生にとって日常生活や災害対策への関心を高める契機となったといえます。さらに、本活動は学生に対してSDGsアンバサダーの活動を知ってもらう良いきっかけになったと考えます。学生自身が、資源の有効活用や食品ロス削減、防災意識の向上など、持続可能な社会の実現に関わる活動に触れることで、自らの行動や価値観を見直すきっかけとなったことが期待されます。

今回の取り組みを通じて、廃棄予定の備蓄品の有効活用だけでなく、学生一人ひとりの防災意識向上やSDGsに対する理解促進にも貢献できたと考えられます。



⑧ 白山神社 あじさい祭り ボランティア

開催期間・日時	2025年6月15日(日) 9:00~17:30
会場	白山神社
目的	・白山神社で開催される「あじさい祭り」の運営を支える。 ・出されるお店のお手伝いをし、地域の方がお祭りを楽しめるようにする。 ・歴史ある祭りに参加し、その歴史に触れ、「白山」という場所の理解を深める。
参加者数	学生50名 教職員3名
主催	文京あじさいまつり実行委員会、一般社団法人 文京区観光協会
協力	東洋大学 社会学部、東洋大学 ボランティア支援室

■ 活動内容 (概要)

東洋大学の学生ボランティアメンバーと共に、白山神社で開催された「あじさい祭り」に参加しました。このお祭りは毎年開催されており、今年で41回目を迎える、文京区の五大まつりの一つです。メイン行事である紫陽花の即売会をはじめ、地元の方々が出店する屋台や音楽ステージなど、地域の皆様と共につくる温かいお祭りです。

今回は、地域の方のお手伝いを中心に、各お店のサポートや本部の運営補助を行いました。お店は10店舗以上あり、私たちは2~3名ずつ各店に付き、円滑に運営ができるよう地域の皆様と協力しながら活動しました。屋台の多くは飲食店で、鈴カステラやわたあめなど、小さなお子さんから大人まで楽しめる内容です。お手伝いの傍ら、わたあめ作りを練習させていただいたり、地域の方お手製のまかない料理をご馳走になったりと、お祭りならではの温かいおもてなしも受けることができました。

お祭りの運営でお忙しい中でも、地域の方々は常に私たちのことを気にかけてくださり、多くのサポートをしていただきました。地域の方々と協力しながらお祭りを創り上げていくことで、参加される皆さんが笑顔になっていく様子を間近で感じることができました。特に子どもたちの笑顔を見る瞬間は、とても嬉しく、励みになりました。

お祭りボランティアは、私たちが運営を手伝うだけでなく、学びの場としても大きな意味があります。歴史あるお祭りに参加することで、白山という地域について知ることができ、また地域の方々との交流を深められたことは、とても貴重な経験となりました。

(社会学部第2部 社会学科2年 ウスマン ザイド)

【参加者からの感想】

- ・個人で申し込んで友達もいなくて不安だったけれど、周りの人と積極的にコミュニケーションをとることが出来たり、ボランティアが楽しいと感じた。
- ・先輩や地域の方とたくさん交流できたように感じました。本部担当の時にパンフレットを多くの人に配り、受け取ってもらえた時の嬉しさや、子どもたちがスーパーボールすくいで目を輝かせていた姿は特に印象に残っています。
- ・多くの子どもたちと触れ合えた。誰かのために働けて幸せを感じた。

- 無理なく楽しくボランティアできた。感謝の言葉をいただくことが多く、ボランティアのやりがいを感じた。わたあめ作りをして初めての経験ができとても楽しかった。呼び込みも、工夫するとお客さんが来てくれてお店の方に褒められたりと嬉しかった。
- 子供向けのブースだったので、子供達が楽しそうに遊んでくれたのが印象的でした。ボランティアに来て良かったと思いました。
- かき氷のブースでは小さい子どもが多くて、味を選ぶのを一緒に手伝ったりして結構忙しかったけど、楽しかったです。



⑨「赤羽台のヒト・モノ・コトさがしのまちあるき ～あるいてみつける、赤羽台の地域資源～」

開催日時 企画構成	・日程：2025年6月24日（火） ・第1ラウンド：8：40～10：30（桐ヶ丘中央商店街「朝活」～スワンベーカーリー赤羽店） ・第2ラウンド：10：45～12：30（北区ふるさと農家体験館（赤羽自然観察公園）～ヌーヴェル赤羽台団地「Hintmation」）
目的	1) 赤羽台・桐ヶ丘地域の地域資源（ヒト、組織、場所、イベントetc.）を知ること。（特に直接対面・直接体験することを通じて、参加者が「資源」として活用できるようになるための足掛かりをつくること。 2) 今後赤羽台キャンパスの所属の学生ボランティアが企画を立てる際に、今回の赤羽台まちあるきで得られた資源を活用して、企画づくりのための材料にすることができる。また、地域における交流企画を立てたいと考えた際に、社会福祉協議会の方らの協力を得ることや、地域の方に私たちの存在を知っていただけるような「顔の見える関係性」を構築すること。 3) ボランティア支援室赤羽台キャンパス分室を利用する学生の8割強は、社会福祉学科の学生である。こうした状況を踏まえ、特に社会福祉学科の学生や、地域福祉に関心のある学生に対しては、ここでの体験を学部学科での学びにつなげるための材料を提供できれば、なお望ましい。
参加者数	第1ラウンド：12名 第2ラウンド：15名
協力	・社会福祉法人北区社会福祉協議会（桐ヶ丘地区コミュニティソーシャルワーカー） ・北区ふるさと農家体験館 運営協議会 ・UR都市機構 ヌーヴェル赤羽台団地 Hintmation
企画運営	SDGs アンバサダー（赤羽台キャンパス所属学生）

■ 活動内容（概要）

東洋大学ボランティア支援室は、2023年度より赤羽台キャンパスに分室を設置してから、まる2年を経たことになる。この間、本学SDGsアンバサダーを中心に、地域住民や組織・団体と関わりを持ちながら、さまざまな事業を展開する中で、白山キャンパスでの取り組みと比較して、より「地縁的」な取り組みが目立っている。

特に、赤羽台分室設置当時から訪れていた、桐ヶ丘商店街の「朝活^{*1}」は、今では毎週のように本学学生が参加をし、地域住民の方と交流が紡がれる「場」となっている。また、キャンパスに隣接し、夏祭り際には本学学生をボランティアとして送り出しているヌーベル赤羽台団地（UR都市機構）には「Hintmation^{*2}」という、住民と地域社会をつなぐハブ機能をもったスペースが登場し、「ヒントさん」と呼ばれるコーディネーターが常駐している。ここを核として、本学ボランティアサークルが定期的に催しを開催するなどの動きに発展している。

こうした本学学生と、赤羽台・桐ヶ丘地域との交流が発展してきたのは、交流を生み出す「場」の存

在と、それぞれにキーパーソンが存在していることが大きい。気軽にキーパーソンに相談することで、地域住民と交流するためのヒントが得られ、まさしく「ボランティア」として学生の自発的な活動に結びつくきっかけとなっている。

本企画は、こうしたスポットをツアー形式で訪れ、それぞれのスポットで体験的な活動を行ったり、キーパーソンからお話を伺ったりすることを通じて、地域を紡ぐ「ヒト」と「場」、すなわち地域資源を知り、参加者が自ら活用できるようになるためのきっかけとすることを目的に、ボランティア支援室主催のもと、赤羽台キャンパスに在籍するSDGs アンバサダーが企画運営を担う形で実施することとなった。

【しおりづくり】

今回、新たに加入したSDGs アンバサダーのチームビルディングを兼ね、当日参加者に配布するしおりを共同作業で製作することとなった。しおりづくりの前に実際に第1ラウンド、第2ラウンドの場所へ下見をおこなった。普段通らない道が多かったためはじめは緊張したが、新しい発見の連続で魅力に引き込まれた。地域の人々との交流を通じて赤羽台、桐ヶ丘についてより理解を深めることができた。この下見で得た情報や雰囲気はしおり作成に大いに役立った。

しおりは「タイムスケジュール」「第1,2ラウンドの説明」「地図」「表紙、裏表紙」をメンバーがそれぞれ担当した。

自分は「地図」を担当し、誰が見てもわかるようにしたり重要なポイントを色分けしたりなど工夫をした。下見の際に撮った写真は「表紙」ならびに「第1,2ラウンド」の説明に使い、よりリアルな雰囲気を伝えることができたと思う。

作成する中で、特にしおり全体の構成やバランスを調整することに注意を払った。例えばフォントやデザインを統一し、大幅にイメージが変わることなく一貫性のあるしおりを作ることができた。

参加学生に地域の魅力を楽しんでもらえるように、メンバー同士協力して取り組めた。

【第1ラウンド】

最初に桐ヶ丘中央商店街の「朝活」に参加しました。

朝活は、最初に体操を行い、その後「かよう市」と呼ばれるバザー型の催しが行われていました。

朝活に実際に参加してみて、朝9:00に体操することで、運動不足になりがちなこの季節でも健康的に負荷をかけすぎずに楽しめるもので、参加している地域の方もとても楽しそうにっていて、とても良いものだと思います。

「かよう市」では、桐ヶ丘に住む方がバザーに近い形で物品の販売を行っていて、手作りのものから衣料品や食品などが販売され、様々なジャンルで楽しむことができました。

朝活の見学終了後は、スワンベーカリー赤羽店に行きました。スワンベーカリーは、就労支援として、障がいを持つ方がパンの製造や販売を行っている施設です。

私は、スワンベーカリーでレモンパイとメロンパンを購入しました。とても美味しかったです。今回のこの2つの活動や施設の見学を通して、赤羽地域の知らないところをたくさん知ることができてとてもいい経験となりました。



【第2ラウンド】

○北区ふるさと農家体験館

この施設は指定有形文化財に指定されている旧松澤家住宅である。自然観察公園に移築復元されてからは年中行事や工作教室など子どもから高齢者まで幅広い年代を対象とした活動が行われている。今回私たちは「クラフトひもで作るかご」教室の見学をし、同館ボランティアスタッフの方に館ならびに館でのボランティア活動についてのお話をいただいた。館内はたくさんの参加者とボランティアの方々にぎわっていた。館内での活動が一人暮らしの高齢者など、赤羽台周辺に住む人々の貴重な交流の場になっているという。私たち学生もボランティアスタッフとしてこれらの活動に参加し、赤羽台地域の方々との関わりを持ちたいと思った。

○ヌーヴェル赤羽台団地「Hintmation」

Hintmationは、担当スタッフの「ヒントさん」に団地でやってみたいことを相談できる施設です。施設内にはコーヒースタンドやシェアスペース、Hintmation内外に対して情報を発信できるインフォメーションボードなどがあります。

今回はまずヒントさんからHintmationがどんな施設かをご説明いただき、その後参加者からの質問にもお答えいただきました。私はまちあるきに参加して初めてHintmationの存在を知ったのですが、大学内ではすでに他のサークルでヒントさんと協力して企画をしていらっしゃる場所もあるそうで、我々学生の声を形にできるとても貴重な場所だと感じました。

【参加者の所感】

- (第2ラウンドのみ参加) 北区ふるさと農家体験館とHintmationを見学した。現地の方と直接交流することで、実際の活動や雰囲気を感じられた貴重な経験になった。今回のまちあるきを通じて、赤羽台キャンパス周辺の様子を具体的に把握することができた。今後のアンバサダーの活動に活かせるようなヒントも見つけられた。今回の取り組みをまちあるきという目的にとどめず、そこからどのような活動へ繋げていけるのか、また新しくどのような活動ができるのか、考えられるきっかけにしていきたいと思う。
- (第2ラウンドのみ参加) 北区ふるさと農家体験館とHintmationについて現地の方の説明を聞きながらの見学を通して、赤羽地域の今までの歴史とこれからについて新たに知識を得ることに繋がった。現地の方がこれまでどのようにふるさと農家体験館を活用した地域交流の取り組みを行ってきたのか実際に行っている様子を目に当たりにながら実感した。Hintmationでは地域交流を活発にするための現代にちなんだ工夫が多くあり、アンバサダーの活動に生かしていけるヒントを発見することができた。今回のまちあるきが地域資源と人のつながりをどのように結び付けているのか学ぶ機会になった。またそれらのアイデアをこれからのアンバサダーの活動にどう組み合わせたいのか考察していきたい。

(福祉社会デザイン学部社会福祉学科1年 SDGs アンバサダー
澤田、増田、上野、吉岡、中西、笠原)

*1：東京都北区桐ヶ丘地区に所在する「桐ヶ丘中央商店街」において、毎週火曜日の午前9時から行われている活動。地域住民の孤立予防と地域活性化を目的に、体操・朝食・社会参加を三本柱として令和元年6月にスタートした地域活動のこと。(社会福祉法人北区社会福祉協議会発行資料を参考とした)

*2: 詳しくは、<https://www.ur-net.go.jp/east/action/akabanedai/index.html>参照。



10 「第19回環境マネジメント全国学生大会」への参加

開催日時・会場	【日程】 2025年6月28日（土）～29日（日） 【会場】 1日目：琉球大学千原キャンパス文系講義棟114教室およびZOOMによるオンライン会場 2日目：吉の浦公園ビーチ
内 容	大会テーマ「#35（サンゴ）から紐解く環境×経済」 ○1日目（6月28日） ・環境マネジメント全国学生協議会総会 ・基調講演 講師：梶山純氏（ソーエイドー35コーヒー株式会社） ・参加団体活動発表 ・琉球大学キャンパスエコツアー ○2日目（6月29日） ・ビーチクリーン活動（吉の浦公園ビーチ）
参 加 者 数	SDGs アンバサダー学生3名
主 催	琉球大学エコロジカル・キャンパス学生委員会
参加大学・団体（本学除く）	琉球大学エコロジカル・キャンパス学生委員会、千葉大学環境ISO 学生委員会、三重大学Eco Green Campus 学生委員会（オンライン）、信州大学環境学生委員会（対面、オンライン）、中部大学ESDエコマネーチーム（オンライン）、公立鳥取環境大学（オンライン）、香川大学ESDプロジェクトSteeep（オンライン）、東京大学GX 学生ネットワーク（オンライン）、東邦大学、共通教育科目「環境インターンシップI」受講者
協 力	環境マネジメント全国学生協議会

■ 活動内容（概要）

本学SDGsアンバサダーとして、12月に東京ビッグサイトにおいてブース出展を行っている「エコプロ」（SDGs WEEKs EXPO）は、日本最大級の環境見本市として全国各地のさまざまな企業・団体による環境配慮型の取り組みや、持続可能な社会に向けた先進事例が紹介されていますが、展示会には「大学・教育機関コーナー」が設けられ、本学を含めた全国各地の大学・学生団体が集い、環境活動に関わる学生の活動紹介・交流の場としても機能しています。一方、エコプロ以外でも主に大学における環境マネジメントシステム（EMS）運用の一旦を担う、大学の学生環境委員会やISO*¹学生委員会が、事例発表などを通じて学び、交流する機会として「環境マネジメント学生全国大会*²」が、主として環境マネジメント全国学生協議会の加盟団体が集まる形で、これまでに18回に渡り開催されてきました。昨年12月の「エ

コプロ」出展時に、互いにブース訪問を行っていた琉球大学エコロジカル・キャンパス学生委員会より、このたびの「環境マネジメント全国学生大会」（以下「全国大会」）を主催することになったこと、そしてSDGsアンバサダーの参加を直接呼びかけていただいたことから、今回3名のSDGsアンバサダーが当地に赴き、プログラムへの参加と活動発表を行うことになりました。

1. 「環境マネジメント全国学生協議会」総会

開会直後、千葉大学環境ISO学生委員会事務局長の進行のもと、「環境マネジメント全国学生協議会」（以下「協議会」）総会が行われ、これまでの全国大会の開催経緯と、協議会の概要についての説明がありました。協議会には2025年6月現在、9団体が加盟していますが、全国大会には加盟団体以外も参加が可能であり、よって本学からの参加も可能となっていました。一方、協議会には入会費・年会費無料で加入ができ、加入することで全国の団体に対し自団体のPRができることや、海外大学の団体とのネットワーク構築の機会につながるといったメリットが紹介されました。

2. 基調講演（ソーエイドー35コーヒー株式会社梶山純氏）

今回の大会テーマである「#35（サンゴ）から紐解く環境×経済」の基調講演は、ソーエイドー35コーヒー株式会社の梶山純氏を迎えて行われました。同社の主力商品は、サンゴ焙煎によるコーヒーと、ハイビスカスティーですが、サンゴは沖縄県外への持ち出しが禁止されているため、サンゴ焙煎によるコーヒーや、ハイビスカスティーの茶葉は沖縄でしか生産することができず、同社の商品展開における差別化を強固なものとしています。また、これらの売上の3.5%が、サンゴ再生のための資金として活用されるCRM (cause-related marketing) ^{*3}手法を展開しているという特徴もあり、消費者は同社の商品を購入することにより、同時に社会参加につながる行動をしていることにもなります。沖縄近海のみならず、世界のサンゴ礁は、白化現象により死滅の危機に瀕しています。このままサンゴ礁が減少を続けると、生態系に顕著な影響をもたらし、私たちの生活にも影響を及ぼすことになり、このことはSDGs 14-2のターゲット^{*4}においても位置付けられています。本業とは直接無関係なCSR活動としてではなく、本業のプロセスの中に社会貢献性を含めることにより、持続可能なビジネスモデルを構築している同社の取り組みは、大会テーマの「環境×経済」を考える上でのヒントとなりました。



3. 参加団体活動発表

対面参加の4団体と、ZOOMによるオンライン参加の5団体による活動発表は、各団体10分ずつの発表と、5分ずつの質疑応答とで構成されていました。本学のように、ウォーターサーバー設置の取り組みを行っている大学が複数あり、同様の取り組みを行っている大学であっても、そこへ至るまでのプロセスはさまざま、取り組みの類似と相違がいずれも見られた点が興味深く感じました。SDGsアンバサダーも活動紹介を行い、特に年間を通じた取り組みが非常に多岐に渡ることに、他大学からはどのようにこれだけの数の活動をマネジメントしているのか?という点について関心が寄せられ、ある団体からは自分たちの活動を省みる機会にもなったとのコメントをいただきました。



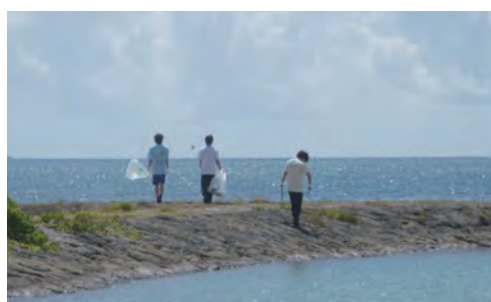
4. 琉球大学キャンパスエコツアー

琉球大学エコロジカル・キャンパス学生委員会による、大学の環境配慮型の取り組みを紹介するエコツアー。千原キャンパスの図書館には、屋上に450枚を超える太陽光パネルが設置されており、ほかにもキャンパス内に14箇所の太陽光パネルが設置されています。風力発電も活用しながら、大学内の再生可能エネルギーの使用状況について説明がありました。続いて、学内のメインストリートともいえるプロムナードをご紹介します。プロムナードは、中央部分がやや凸型となっており、雨水などが溜まりにくく撥水性を高める効果があるなど、工夫がなされた設計となっていました。このことにより、熱がこもりにくくヒートアイランド現象の軽減にも一役買っているという点が興味深く感じられました。キャンパス内に突如出現する渓谷のような風景。その眼下には、千原池という人工池が広がり、この池の水は学内のトイレの洗浄水や、植物類の散水などの活用されています。年間の上水道代に換算すると、約2,500万円の削減にも成功しているとのこと。また、ゲリラ豪雨などの豪雨災害への対策として、調整池としての役割も担っており、地域社会への貢献も果たしているとの紹介もありました。

5. ビーチクリーン

大会2日目、ゆいレールのでだこ浦西駅より車で20分ほど離れたところにある、吉の浦公園ビーチにおいて、ビーチクリーン活動が行われました。

時折、海風がそよぐ中ではあったものの、厳しく照りつける日差しの中での活動で、熱中症に留意しながら、日陰で適度に休憩をとることができる環境の中で、前日の大会参加者のほか、一部一般参加の呼びかけがなされ、親子で参加された方もいらっしゃいました。



海岸の眼前に広がる沖縄の海は、エメラルドブルーに輝き大変美しい姿を見せていましたが、それでも1時間ほどのビーチクリーン活動を通じて収穫されたごみの総量は、およそ50kgにも及びました。他のところから海をこえて漂着したごみも多数見受けられ、中には海外から漂着されたと思われるごみも発見されました。

地球という星は1つであり、海は7つの海洋に区分されるものの、1つにつながっています。ビーチクリーンを通じて収集したごみの内容からも、地球環境の循環性や、日頃意識することが少ない国境を超えたつながりへの気づきが見られたことが印象的でした。過去エコプロにおいて、琉球大学エコロジカルキャンパス学生委員会のブースでは、ビーチクリーン活動を通じて収集された海洋ごみの展示がありました。今回、日頃琉球大学の皆さんが行っているビーチクリーンに、全国から集まった学生・教職員や、一般参加者も交えて、互いに交流しながら共同作業を行うという、参加者相互の関係性を強めるという意味でも大変有益な機会となりました。

6. 謝辞

今回の大会は、事前準備の段階から琉球大学エコロジカル・キャンパス学生委員会のきめ細やかな連絡や、車による送迎などの対応もあり、遠隔地からの参加者も安心して参加ができる配慮が多数なされていました。

また琉球大学を含め、全国からの参加大学の皆さんともさまざまな交流の機会に恵まれ、ここで培われたつながりが、これからの関係性を豊かなものとなることを願ってやみません。この場を借りて、御礼申し上げます。

(ボランティア支援室ボランティアコーディネーター 日比野 勲)

【参加学生の所感】

- 昨年のエコプロで今回の環境マネジメント全国学生大会にお誘いいただき、今回行くことが出来て本当に良かったと感じました。1日目は各大学の取り組みを紹介し、ウォーターサーバーやコンタクトレンズケース回収等、わたしたちと同じ活動を行っていることを知ることが出来てうれしく感じました。また各大学の地域に根ざした活動も知ることが出来てとても興味深く感じました。発表終了後はグループで、大会テーマの「環境と経済」の両立について議論を行い発表しました。両立という難しい議題でしたが、活動を通じて得た知識や経験を用いて両立案を考えることができました。2日目は対面参加者のみでビーチクリーンを行いました。炎天下の中でしたが、参加者同士協力して行うことができました。私は過去にビーチクリーンに参加した経験がありますが、今回の海岸では多くのゴミが存在していたのを発見しました。
- 最初にお話をいただいた時には、本当に沖縄まで行くのか、という迷いが正直ありました。しかし実際に2日間対面で参加してみて、現地に行ったら良かったと心から感じました。対面参加者限定であった2日目のビーチクリーンでは、私たちアンバサダーがビーチクリーンを行っている、由比ガ浜海岸（鎌倉）と比較しながら活動することができました。今回の浜辺は鎌倉と比べ、大きめのごみやシーグラスが多く見られた一方、鎌倉と同じくマイクロプラスチックも多く落ちており、マイクロプラスチックがどこにでも当たり前に存在してしまっていることを改めて痛感しました。私はそれらの細かめのごみをメインに拾おうとしたのですが、とにかく数が多いため、より環境負荷が大きいマイクロプラスチックを中心に拾う、などと時間が限られている中でより効果的にゴミが拾えるよう意識しました。また、2日間同じメンバーで活動をしていく中で、対面での交流の良さを特に感じました。お互いただ一方的に発表をするのではなく、その後に直接感想や質問を伝え合えるからこそ、自然とつながりが生まれるのだと思います。25人という多くはないメンバーで、2日間のイベント運営をするだけでも大変だったと思いますが、さらに懇親会まで企画してくださったエコキャンの皆さまには深く感謝いたします。

 *1：大学運営や研究活動などに伴う環境負荷を、PDCAサイクルを用いながら改善していく取り組みに対し、国際標準化機構（ISO）が定めた環境マネジメントシステムの国際規格ISO14001を取得する大学が2000年代初頭より増加し、大学の学生環境委員会も「ISO」の名称を冠するところが多数存在していた。しかし、ISO14001認証取得を継続するための費用的・事務的負担などを理由に、ISO14001の認証を返上する動きが大学にも見られるようになってきている。

*2：環境マネジメントシステムの運用や学内外においてさまざまな環境活動に取り組む全国の大学生が集い、互いの活動報告や分科会での意見・情報交換を行う大会。大学間の垣根を越えた交流により、持続可能な開発目標（SDGs）の達成に向けてそれぞれの学生団体の活動を促進させるとともに、各団体が新たな活動の可能性を創造し、互いの価値観を共有して今後の活動の幅を広げることを目的に、2007年から毎年開催している。（大会実施要項より）

*3：コース・マーケティングとも呼ばれる。企業や団体が、商品やサービスの売り上げの一部を、環境保護をはじめとする社会貢献活動を行う団体に寄付することにより、企業イメージ向上と社会貢献という2つの目的を両立させることにつながるマーケティング手法のこと。

*4：SDGs14-2の「ターゲット」は、このように明記されている。「2020年までに、海洋及び沿岸の生態系に関する重大な悪影響を回避するため、強靱性（レジリエンス）の強化などによる持続的な管理と保護を行い、健全で生産的な海洋を実現するため、海洋及び沿岸の生態系の回復のための取組を行う」。



11 Let's 紙すき体験

講 師	小笹悦子さん
開催期間・日時	2025年7月1日(火) 12:00~14:00
会 場	東洋大学赤羽台キャンパス WELB-HUB2 5F ボランティア支援室分室
目 的	本企画は、地域の伝統文化継承を目的とした学生体験型の企画である。日本各地で高齢化が進むなか、地域の伝統技術や知恵が失われつつある。そのような背景の中で、紙すきのような手仕事は、日常生活の中で触れる機会がほとんどなくなり、継承が危ぶまれている。そこで学生たちが、実際に地域の方から紙すき技術を直接学び、伝統文化の継承を行う場をつくる必要がある。今回の紙すき体験では、実際の体験会を通じて地域の伝統文化に興味関心を向けるきっかけになるように促すとともに、地域とのかかわりの場を提供することで、地域活性化と持続可能な社会への意識向上を目指す。
参 加 者 数	学生14名
主 催	東洋大学 SDGs アンバサダー

■ 活動内容 (概要)

1. 概要

2025年7月1日(火)、東洋大学赤羽台キャンパス WELB-HUB2 5F ボランティア支援室にて、「紙すき体験」を実施した。本イベントは、学生が昔ながらの紙づくりを体験することを目的として企画したものである。参加者は昼休み時間内に自由に参加できる形式とし、学生を中心に多くの来場があった。

2. 実施の背景

今回、地域活動の中で“紙すき”の技術を教えていた小笹悦子さんと出会い、その知識と技術を次世代である学生に伝える貴重な機会をつくることができた。この出会いがきっかけとなり、本イベントの開催へとつながった。

3. イベント内容

当日は、講師の方が紙すきの道具と素材（紙パルプ、簀桁など）を持参くださり、以下の流れで実施した。

紙づくりの工程説明

原料の準備から実際に紙になるまで、伝統的な技法を実演しながら紹介。

学生による紙すき体験

学生は道具を使い、紙パルプをすく→水を切る→乾燥を行う一連の作業を実際に体験した。
初めて触れる道具に戸惑いながらも、講師の方が声をかけ、和やかな雰囲気で行進した。

講師と学生の交流

紙すきに関する地域の歴史や、講師の方が紙すき技術を教えていた頃の話など、普段聞けない地

域の物語が語られ、非常に盛り上がった。

4. まとめ

今回の紙すき体験は、地域の方の技術と学生の学びを結びつける非常に有意義な取り組みとなった。特に、地域で講師として活躍していた方の実体験に基づく体験は、学生にとって大きな刺激となり、地域文化への理解と興味を深める貴重な契機となった。初めて見る道具や技法は非常に興味深いものであった。普段生活をしていれば見ることもない道具や技法であったので非常に貴重な経験となった。実際に紙すき体験は家に帰ってからも行うことができるため、今回教えてもらった技術を忘れずに実践の場を設けていきたい。そして今後は、より一層地域の方とのかかわりを活性化させて、文化・歴史を生かした活動を広げていきたいと考えている。

【参加者の感想】

- 初めて体験したが、面白かったし夏にぴったりのワークショップだなと思った。優しい講師の先生に教わりながらみんなでわいわい飾り付けなどできたのも良かった。こういった地域の方の得意なことを生かした学生との交流の機会はお互いにとって良い影響があると思った。
- 牛乳パックから白い綺麗なポストカードができ、驚いた。また、普段関わりのない方と交流が図れたので良かった。
- 材料も少なく、工程が難しくないのので、家でもやってみたいなって思いました！

(経営学部会計ファイナンス学科3年 SDGs アンバサダー 奥村 碧斗)



12 「ボランティア入門講座2025 in 赤羽台」

講 師	日比野 勲 (ボランティア支援室 ボランティアコーディネーター) 成瀬 響之さん (東洋大学社会学部社会福祉学科4年、ボランティア支援室学生サポートスタッフ) 加藤 美咲さん (東洋大学文学部教育学科2年、ボランティア支援室学生サポートスタッフ)
開催期間・日時	2025年7月3日 (木) 18:15~19:45
会 場	・東洋大学赤羽台キャンパス ボランティア支援室分室
目 的	・ボランティア活動に関心はあるが、一步を踏み出すのに躊躇している学生向けにボランティアとは何か、どのような関わり方があるか等を紹介し、活動参加のための判断材料を提供すること。 ・ボランティア活動への意識を高め、参加を促進すること。
参 加 者 数	11名

■ 活動内容 (概要)

ボランティア支援室では、初めてボランティア活動に参加する人や、これまでボランティア活動に関わったことがあるものの、そもそも「ボランティア活動とはなにか?」ということのを改めて考える機会を提供するため、「ボランティア入門講座」を例年実施しています。

講座は3部構成で進行し、第1部は〇×クイズを交えて、ボランティア (活動) の基本的な考え方について、参加者全員で考えていきました。例えば「ボランティア活動は『労働』ではないため、労働基準法の適用外になる」かどうか?というクイズの問題から、「有償ボランティア」と呼ばれる活動の問題点を指摘したり、そもそもボランティア活動の「有償・無償」の線引きはどこでなされるのか? (交通費・食費といった、いわゆる実費弁償の範囲に含まれるものは「有償」の範疇なのか) といったテーマについて、クイズの解答とともに解説をしながら進めました。

第2部は、ボランティア活動の体験談を、2名の学生登壇者からお話しいただきました。(詳細は後述)

第3部は、ボランティア活動情報の具体的な探し方についての説明を行い、最後に「ボランティア活動を、社会参加のための『手段』として捉えることで、本業・学業や余暇活動などと柔軟に組み合わせるという発想が生まれ、より柔軟に社会に関わることが可能となるのでは?というまとめとともに、講座は終了しました。

以下、ボランティア体験談をお話しいただいた、学生登壇者からのコメントです。

- ・私は、「ボランティアで何を得るのか」をテーマに、これまで「『居場所』を集める」と「『Tシャツ』を集める」ことを軸に体験談を話しました。「『居場所』を集める」とは、自分自身の興味・関心を出発点としてボランティアを行っていること、「『Tシャツ』を集める」とは、挑戦した証としてTシャツを集め、さらに挑戦したいと思う勇気の好循環になっていること、それらのことを活動写真とともに話しました。参加者の方は最後まで真剣に聞いてくださり、また普段から活動を一緒にしてい

る方からは「知らない一面を見ることが出来て良かった」と話していたので、私も嬉しい気持ちになりました。

(社会学部社会福祉学科4年 ボランティア支援室サポートスタッフ 成瀬 響之)

- 私は、『ボランティア』を始めるまでの経緯と、自身の児童養護施設でのボランティア体験を通して今まで持っていた児童養護施設に関する固定観念を覆すまでの体験談を話しました。母の経験から抱いていた児童養護施設のイメージは、活動を通じて大きく覆されました。当初は固定観念に縛られていましたが、子どもたちの背景やニーズが想像以上に多様であることに驚き、私の「困っている子を一括りに支援する」という考えは活動を通じて一変しました。施設が一人ひとりのニーズに合わせ、体制や支援内容を柔軟に変化させられていることが衝撃的でした。この経験から、施設は子どもたちそれぞれの「普通の生活」を支え、希望を育む場所だと強く感じ、私自身の価値観も大きく広がりました。参加者から「もっと詳しく聞きたかった」、「知れてよかった」と言っていただき、このような機会をいただけたこと改めて嬉しく思います。

(文学部教育学科2年 ボランティア支援室サポートスタッフ 加藤 美咲)



13 「そなエリア東京」フィールドワーク （「防災クイズ&ゲームDay2025」実施に合わせて）

開催日時・会場	- 日時：2025年7月6日（日）9：30～16：00 - 会場：東京臨海広域防災公園（そなエリア東京）
目的	(1) 首都直下型地震を念頭においた大規模災害発生時の状況をイメージでき、そのための対策として何が必要かということを理解すること。 (2) 防災ゲームを通じて気軽に防災・減災に親しみ、アンバサダー学生が自ら関心を持てるようになること。 (3) 「防災クイズ&ゲームDay2025」出展団体との関係性を築き、今後の交流につなげること。
参加者数	5名
ナビゲーター	日比野 勲（ボランティア支援室 ボランティアコーディネーター）
企画運営	東洋大学SDGsアンバサダー（防災まちづくりチーム）

■ 活動内容（概要）

東洋大学SDGsアンバサダー防災まちづくりチーム（以下、防災まちづくりチームと表記）は、大規模災害時における本学の学生ボランティアリーダーとしての行動計画策定と、災害時の支え合いに備えた平時からの大学近隣地域との関係性づくりのための地域ボランティア活動などを行うチームとして活動を行っています。

防災・減災に関する基礎知識を楽しく学び、親しむ機会として、首都直下型地震発生状況を追体験できる「そなエリア東京」の「東京直下72h Tour」への参加と、同日開催された「防災クイズ&ゲームDay2025」（主催：一般社団法人防災教育普及協会、東京臨海広域防災公園管理センター）の参加を含めたフィールドワークを実施しました。

以下、防災・まちづくりチームの学生からの報告です。

「東京直下72hTour」

「東京直下72hTour」は、マグニチュード7.3・最大震度7の首都直下地震を想定し、発災から避難までの流れを体験できる防災ツアーである（公式サイトより）。

ツアーでは、倒壊した家屋や被災した商店街、避難所となった体育館の様子がリアルに再現されており、タブレット端末を使ってクイズに答えながら災害時に必要な行動を学ぶ。現場では、自分自身も含め、参加者の多くがそのリアルさに圧倒されていた。自分はこれまで一度も災害に遭ったことがなく、地震についての知識はテレビやニュースなどのメディアを通して得ていた。しかし今回、疑似的にとはいえ実際の状況を体験することで、もし本当に被災した場合の悲惨さや混乱の大きさをリアルに想像することができた。自分自身はパニックになりやすい性格だが、こうした体験を通して、少しでも冷静に行動できる準備になるかもしれないと感じた。また、当日は老若男女さまざまな年齢層の方々が参加しており、海外から来た家族連れの姿も見かけた。災害は国籍や年齢に関係なく突然襲ってくるもの

なので、こうした体験を幅広い人々が受けられる場があることは非常に意義深いと感じた。このような体験ができることを知らない人もまだ多いと思う。自分自身も今回のツアーをきっかけに防災について考え直すことができたし、今後は周りの人にも広めたいと思った。今回は防災の基礎を学ぶことができ、とても貴重な経験となった。災害が「いつか起こるかもしれないこと」ではなく、「いつ起こってもおかしくないこと」として実感できたことが、今回の最大の学びだった。

「防災ゲーム『ダイレクトロード』」（神戸市消防局 樋口貴洋氏考案）

防災ゲーム「ダイレクトロード」は、設定された土地にまったくなじみのない人という設定で大地震が起き、津波が発生した際に避難して助かる場所はどこか?ということを考えながら、グループで意見交換をするというゲームであった。

まず、私たちを含むこの日の参加者12人が6人2グループに分かれ、どこに海があるのか、方角などが書かれていない町の地図と、町に関する情報が書かれたカードがそれぞれ配られた。そのカードをグループの班員に均等に配り、班員全員が協力し合ってそのカードに書かれている内容を他のグループ内の班員に伝え合い、配られた地図を見ながら海はこの方角にあるのではないかと、ここにとどまってしまうと津波が来て流されてしまうのではないかと、この神社は安全そうに見えるが、すぐそばを流れている川から津波が逆流してあふれてしまうのではないかなどを想像し、津波から助かる唯一の避難場所を探し当てることを試みた。結果として参加者12人全員が同じ場所に避難することに決め、その場所が唯一津波から助かる避難場所であった。

このワークショップからは情報を的確に捉えることやお互いに協力し合うことの大切さ、情報共有の重要性を身にしみて感じた。また、自分の慣れていない土地に観光などで行く際に事前にどのような災害が行く土地では起きることが予想されているのか、実際起きたときにどこに避難すればいいのかを考えることも重要であると感じた。

なお、このゲームは東日本大震災時に、宮城県石巻市で発生した、大川小学校の事故を参考に開発されたものであったということが、製作者より伝えられた。

「チームであてっこ!防災カードバトル」（法政大学チーム・オレンジ考案）

法政大学のボランティア団体であるチーム・オレンジ主催の防災カードバトルでは、クイズ形式でチーム一丸となって競争するというとても楽しく防災について学べるイベントでした。

ゲームの内容としては、災害の状況に合わせて、手元にある丸いアイテムカードをチームで三枚まで選択し、その状況に適切な判断であるカードであればあるほど得点が高くなるというものです。例えば、「プールで溺れている子を発見!!どのアイテムを投げて助ける?」という問題に対して、ビーチボールであれば10点、クーラーボックス、寝袋であれば5点、逆に毛布や消火器を選択した場合には-5点になってしまうということです。その他にもたくさんのユニークな問題が出され、参加者のみんながクイズにとっても盛り上がりながら防災について学んでいました。

このクイズゲームでは、災害が起きた時の判断として、こんなものも利用できるのかという学びを得ることができることに気づきました。災害には何を履いていくのがいいのかという問題の際に、私はスニーカーだけが良いと感じていたが、クイズの正解の中には自分があると思わなかった長靴という選択肢が正解にあったため、災害時に助かるための判断材料をより増やすことができることにつながると感じました。また、クイズの内容はとてもわかりやすく、楽しみながら防災について学べるものだったため、こういったクイズを子供たちと共に取り組むことで、幅広い年代の防災意識の向上につながるのではないかと感じました。

これらの学びを通し、自分自身が防災においての助かるための選択肢を広げることができとても素

敵な学びになりました。また、何個も選択肢があって、だれでも楽しめるクイズ形式というものがとても良いと感じたため、これらを参考に自分自身もクイズを作り、多くの年代に防災について学んでもらえるようなイベントが開けたら良いなと思いました。

(国際学部国際地域学科1年 SDGs アンバサダー 植本、石黒、吉田)



14 フェアトレードの普及促進を目的とした ラオス産オリジナルコーヒーの販売会②

開催期間・日時	2025年7月11日(金) 11:00~16:00
会 場	東洋大学 白山キャンパス 1号館エレベーター前、6号館学生部前
目 的	今回、学内でフェアトレードコーヒーを販売する目的は以下の3点です。 1 白山祭に向けての資金調達と春学期の集大成 2 エフラオとフェアトレードの認知度向上 3 新入生が参加する初めての販売会
参 加 者 数	44名
協 力	ボランティア支援室、学生部
主 催	Smile F laos

■ 活動内容 (概要)

【当日の具体的な流れ(両日とも同様)】

10:00 準備開始:会議室をボランティア支援室より借用
商品、展示品、会計設備をボランティア支援室より、開催場所に搬入
4号館1階生協横にある展示用パネルを学生部より、開催場所に搬入
11:00 販売開始
16:00 販売終了
16:30 片付け終了
17:00 反省会開始
18:00 反省会終了

来場者数 約40人

販売数 46製品

私たちの販売会は、単にコーヒーを購入してもらうことが目的ではなくその背後にあるフェアトレードの価値や、ラオスの子供たちへの支援の重要性を伝えることを目指しています。展示を通じて来場者に以下の4点のような気づきを促したいと考えています。

①フェアトレードの意味と影響

コーヒーを購入することは、単なる取引ではなく、生産者の生活を支え、適正な労働環境と公正な価格を保証することです。フェアトレードに参加することで、消費者として自身の選択が、世界のどこかの地域でポジティブな影響を与えているという意識を促したいです。

②ラオスの現状と教育支援の必要性

昨年12月に実施したばかりのスタディーツアーで私たちが目にしたラオスの教育環境や生活状況の現実を展示で紹介し、教育支援の必要性を理解していただきたいです。子供たちが質の高い教育を受けられない状況が将来の職業選択にどのような影響を与えているのかを感じてもらい、私たちの支援活動の意義を理解してもらうことが重要です。またそこから自分たちが受けてきた日本の教育の良い面、悪い面において考えるきっかけとしても機能してほしいと考えております。

③コーヒーを通じた支援のつながり

販売されているコーヒーが、現地の農家やラオスの子供たちの未来にどのように繋がっているのかについて興味を持っていただくきっかけになればと思います。日常で何気なくしている単なる消費行動が、遠くの国での持続的な発展に繋がることを実感してもらい、「私たちの日常の選択が、どのように他国の人々の暮らしに影響しているのか」を考えた消費行動を促したいです。また自分が日々飲むコーヒーの背景にあるストーリーを知ること自分たちの生活が世界の一部であることを感じ取ってもらいたいです。

今回の販売会でコーヒーを買って終わりではなく、その背後にあるストーリーに共感し、自分にできる他の支援方法を考えるきっかけにしていきたいです。例えば、情報を周囲にシェアすること、または次のステップとして、フェアトレードや教育支援の活動に参加することなど、自分なりのアクションに繋げていただければ嬉しく思います。また販売会に足を運んでくださったお客様へSmile F LAOSのSNSを周知しフォロワーを増やすことによって、他団体様からみて弊団体が魅力的に映るようになります。それは他団体様との交流の機会を増やすことにつながり、合同イベントなどの実現できる活動の幅を広げることが可能になると考えております。



15 「ボランティア入門講座2025 in 白山」

講師	- 李艶舒（ボランティア支援室 ボランティアコーディネーター） - 小幡子竜さん（東洋大学経済学部総合政策学科4年、ボランティア支援室学生サポートスタッフ） - 塚原千晴さん（東洋大学経済学部総合政策学科4年、ボランティア支援室学生サポートスタッフ）
開催期間・日時	2025年7月16日（水） 13：00～14：30
会場	・東洋大学白山キャンパス 甫水会館1階学習室
目的	- ボランティア活動に関心はあるが、一歩を踏み出すのに躊躇している学生向けにボランティアとは何か、どのような関わり方があるか等を紹介し、活動参加のための判断材料を提供すること。 - ボランティア活動への意識を高め、参加を促進すること。
参加者数	12名

■ 活動内容（概要）

白山キャンパスにおいても、「ボランティア入門講座」を例年実施しています。

講座は3部構成で進行し、第1部はまず〇×クイズを交えて、「ボランティアとは何か」について、参加者全員で考えていきました。例えば、ボランティアの原則、ボランティア保険の重要性、「してあげる」のではなく「対等な支え合い」であることなど、ボランティアの正しい在り方について理解を深めました。次に、具体的な活動のイメージを掴むため、講師の体験談の共有が行われました。講師からは、国内外でのボランティア活動の経験をもとに、「現地のニーズとボランティア活動のギャップ」など、現場での気づきが語られました。

第2部は、ボランティア活動の体験談を、2名の学生登壇者からお話いただきました。（詳細は後述）

第3部では、参加者同士で2つのグループに分かれ、「あなたにとってボランティアとは？」と「自分のためにボランティアをしてもいいと思う？」をテーマにディスカッションを行いました。最後にグループごとに発表し、お互いの意見を共有しました。その後、夏休みに参加できる活動として「夏ボラ」や「盆踊りボランティア」などの具体的なボランティア活動の情報提供を行いました。結びとして、ボランティアの基本である「自発性」や「無理なく自分のペースで参加すること」、そして「小さな一歩が自分や社会を変える」というポイントを再確認し、講座を終了しました。

- 今回の入門講座では、「流されボランティアのすすめ」というテーマで、これまで自分がボランティアに求めてきたこと、そして“流され続けてきた”と思っていた経験から得た気づきについてお話ししました。

私はこれまで、ボランティア団体に所属し、誘われるままに活動に参加してきたと捉えていました。しかし振り返ってみると、その場に居続けることや、流れに身を任せて参加すること自体も、ひとつの“選択”であり、そこには確かに自発性があったのだと気づくことができました。

参加者の方からも、「ボランティアに対する姿勢を見直すきっかけになった」「考え方が少し楽になっ

た」という感想をいただき、とても嬉しく思っています。

4年生になったこのタイミングで、改めて自分の経験を言語化し、誰かに届ける機会をいただけたことに感謝しています。

(経済学部総合政策学科4年 ボランティア支援室サポートスタッフ 塚原 千晴)

- 私自身のボランティア経験を交えながら、ボランティアに対する考え方・向き合い方について話しました。ボランティア団体に既に所属している人が参加者に多かったため、過去のしくじり体験から学んだボランティアサークルへの向き合い方、ボランティアをする目的について話をしました。この話をきっかけに、ボランティアに対しての向き合い方などを考える良い機会になっていると嬉しいです。

また、私自身も大学生活での経験やボランティアについて考えてきたことを振り返る機会になったため、登壇者としても有意義な時間を頂けて感謝しています。登壇者は自身のボランティア経験を振り返る場、参加者はこれからのボランティア活動について考える場として、来年以降もボランティア入門講座を続けていってほしいと思います。

(経済学部総合政策学科4年 ボランティア支援室サポートスタッフ 小幡 子竜)



16 わらしべ長者プロジェクト～Reuse～

開催期間・日時	2025年7月29日(火)～7月30日(水) 11:30～13:00
会場	東洋大学 白山キャンパス 6号館 学生部前
目的	サステイナブルな社会を目指した取組みとして、まだ利用できる製品を再利用することでゴミを削減し、持続可能な社会に繋げることを目的としたプロジェクトである。
参加者数	学生：21名
運営	東洋大学ボランティア支援室
協力	東洋大学校友会事務局(提供)

■ 活動内容(概要)

【わらしべ長者プロジェクト～Reuse～とは?】

ご自宅に眠っているまだ使える製品をリユース品として回収し、必要とする方へ還元を行う。また、自身も必要なものを持ち帰ることができる。このプロジェクトを通して、ゴミを削減することは、持続可能な社会へ繋げるSDGsゴールへの小さな一歩となる。

本プロジェクトについては本学海外研修先であり、サステイナブル都市である米国ポートランド州立大学(PSU)の事例を参考に取組みを開始した。

PSUではリユースルームを設置しており、常時教職員や学生がまだ使える製品を持ち込み、ゴミを出さない取り組みをしている。リユースは環境保全のみでなく、学生の経済的サポートにも繋がる。また、校友会事務局と協力することで、卒業生と学生のつながりを作ることができる。

社会貢献センターでは、学生・教職員の一人ひとりがサステイナブルな意識をもつことを目指し、継続して本プロジェクトの実施を予定している。

◆回収できるもの

◎回収対象品

衣類(肌着は不可)・かばん・文房具・事務用品・本(ISBN入り)・食器等 ※再利用可能なもの

○未使用品のみ

ウォーターボトル、水筒、タオル等

×回収不可

家具・家電等、肌着下着類、古く使用できないもの

【当日】

開催当日は2日間で合計21名の学生が来場した。特に文房具やタオル、日用品などは人気が高く、「これ、欲しかったんです!」という声が多く聞かれました。

プロジェクトを通して、モノを大切に使い続ける意識が広がるだけでなく、学生同士・卒業生(校友会からの提供による)とのつながりを感じられる、あたたかい取り組みとなりました。

【参加者の声】

- 色々な品物が寄付されていて驚きました！友達にも紹介したい★
- 夏休みにもらったノートで日記を書きます♡
- 猛暑を乗り切ります！！ありがとうございます！！
- 可愛いノートありがとうございます。いっぱいメモします。^▽^
- 今必要だったノートを受けとることができました。
- 教科書をいただきました。一生勉強！
- 夏らしいタオルと爪切りなどをいただきました！活用させていただきます！
- タオルたくさん使います！！
- カレンダー！もらいました。これを使って目標達成頑張ります！！
- 冷え続けるコップとUVカットスプレー、夏に最適なものありがとうございます。



17 Toyo 1day ボランティアプログラム 「『蓬萊町会盆踊り』ボランティア活動」

開催日時 活動場所	日時：2025年8月22日（金）12：00～20：30 2025年8月23日（土）14：00～20：30 活動場所：文京区向丘地区 ※事前説明会を以下の日程で実施 日程：2025年7月30日（水）12：10～14：30 会場：ZOOMによるオンライン会場
目的	1) 東洋大学白山キャンパスが設置されている文京区の地域行事への参加・参画を通じて、学生が地域の方との交流を通じて地域への愛着・理解を深め、今後自発的に地域に関心を持ち、関わっていくことになるためのきっかけをつくること。 2) 担い手不足による伝統行事の持続可能性・伝承といった問題を、自ら考え、解決するための自分なりの考えを持てるようになること。
参加者数	8月22日（金）：19名 8月23日（土）：24名 プログラム参加者計：32名
受け入れ先	文京区蓬萊町会
企画運営	東洋大学公認ボランティアサークル「学ボラ」

■ 活動内容（概要）

「Toyo 1day ボランティアプログラム」として、本学公認ボランティアサークル「学ボラ」がこれまで関係性を築いてきた蓬萊町会の受け入れのもと、昨年度に続き実施されるプログラムです。

学ボラは100名を超える部員が所属する大規模なボランティアサークルであり、部員の関心領域に応じた「班」に分かれて多様な活動を展開しています。その中でも蓬萊町会と継続的に交流してきた班が中心となり、今年度は夏祭りの運営サポートを担うこととなりました。祭りでは、盆踊りや太鼓演奏、屋台・ゲームコーナーなど、日本の夏の伝統行事に直接関わる機会が用意されており、世代を越えて多くの人々が集う場において地域の一員として活動することができます。

今年度は、昨年度同様、学ボラ外の学生を募集したいと考え、プログラムを実施することとなりました。以下、本プログラムの報告です。

「Toyo 1day ボランティアプログラム」として実施された本プログラムは、学生が単にボランティアを遂行するだけでなく、参加しやすく地域の人々と交流しながら心に残る体験となることを目指して企画・構成しました。蓬萊町会の受け入れのもと、盆踊り大会の運営サポートを中心に、学生が主体的に活動し、地域とのつながりを実感するプログラムとなりました。

本プログラムは、(1) 事前説明会、(2) 活動当日、(3) ふりかえりの3部構成で実施しました。事前

説明会では、蓬萊町会の活動概要や活動当日の流れ、担当業務などを共有し、参加者の不安解消に努めました。

活動当日は、8月22日(金)・23日(土)の2日間にわたり、盆踊り大会の設営・屋台運営・踊り手・太鼓演奏などを担当しました。参加者の緊張をほぐすために最初にアイスブレイクを行い、活動時に参加者同士の名前と顔が一致するように努めました。猛暑の中での活動となりましたが、学生たちは協力し合いながら地域の方々と共に準備・運営・片付けを行い、来場者の笑顔に触れることで大きなやりがいを感じていました。屋台では子どもたちとの交流を楽しむ姿が見られました。しかし踊り手や太鼓の練習に参加した学生からは「踊りと太鼓に関しては学生側がアウェイだった」という感想も寄せられました。活動中は、参加者の体調管理にも配慮し、適宜休憩をとりながら安全に進行しました。

活動後には、「ふりかえり会」を2回(9月24日・26日)に分けて実施しました。Google フォームでの回答をもとに、

- 「お祭りの魅力・地域にとっての必要性」
- 「あなたにとっての地域・ふるさととは」
- 「ボランティアに求めるもの」

といったテーマで意見を共有しました。単なる感想共有にとどまらず、ボランティアを“やっただけで終わらせない”ことをコンセプトに、今後の行動や地域への関わり方を考える時間としました。

Google フォームの回答から多くの参加者が、「お客さんの笑顔や“ありがとう”という言葉にやりがいを感じた」と回答しました。特に子どもたちや地域の方々との交流を通して、「普段関わらない世代と一緒に活動できて刺激的だった」「一緒に焼きそばを作ったり、屋台を運営したりする中で協力する楽しさを感じた」といった意見が目立ちました。また、「初めて会った学生同士や町会員とすぐに打ち解けられた」「自分も地域の一員としてお祭りを盛り上げている実感があった」という声も多く、事前のアイスブレイクや説明会が活動の円滑化に大きく寄与したことがうかがえます。

一方で、「炎天下での立ち仕事がつらかった」「屋台の休憩タイミングが難しかった」といった声もあり、今後の運営面での改善点として共有されました。さらに、ボランティアへの意識の変化については、「参加前は“手伝う側”というイメージだったが、地域の人と一緒に作り上げる楽しさを知った」「ボランティアは義務ではなく、自分も楽しむことが大切だと感じた」といった感想が多く寄せられ、全体の約6割が“ボランティアに対する印象が変わった”と回答しました。町会の高齢化や担い手不足といった社会課題にも関心が広がり、「若い世代が継続的に関わる仕組みが必要」「大学や地域が協力することで伝統をつないでいける」という意見が複数見られました。

活動を通して、地域の現状を自分ごととして考えるきっかけになったことがうかがえます。

本プログラムを通じて、学生たちは「地域活動は特別な人が行うものではなく、私たち一人ひとりが担い手である」という意識を育むことができたと思います。今後も、蓬萊町会との継続的な連携を通じて、地域と学生が共に支え合い、伝統を次世代へつなぐ取り組みを続けていきます。

(経済学部総合政策学科2年 学ボラ 横塚 悠那)



18 「ののの」に参加して本場の農業を体験しよう！ ～農業ボランティア活動体験～

開催期間・日時	女子組：2025年8月26日～28日（2泊3日） 男子組：2025年9月11日～14日（3泊4日）
会 場	静岡県熱海市下多賀
目 的	規格外野菜や未利用資源の活用を通じて、持続可能な消費行動を学び、食品ロス削減への意識を高める ・地域農産物の収穫・調理・実食を体験し、地域循環型経済への関心を高める ・有機農法や自然農法を通じて、気候変動対策に貢献する農業の在り方を学ぶ ・本場の農業を、身をもって体験し、その大変さややりがいを実感する 上記の学びを通して我々の目標（食や農の良さを学生に啓発し、身近な「食」からSDGsへの関心を高めるとともに、住や行政と連携しながら朝霞市の地域課題の解決を目指す）の達成につなぐ。
参 加 者 数	7人
主 催	東洋大学SDGsアンバサダー（朝霞キャンパス）
協 力	株式会社Perma Future、西島農園

■ 活動内容（概要）

「ののの*1」は、「No 農 No LIFE」の頭文字をとった名称であり、「農」への敷居を限りなく低くし、より多くの人々に農業の魅力を伝えることを目的として活動している。1泊2日から気軽に農ライフを体験できるサービスを提供しており、誰もが農に親しむきっかけを得られる仕組みを整えている。

私たちは、朝霞キャンパス内で活動を行う機会が少なかったという現状を踏まえ、生物・農・食が深く関わる生命科学部および食環境科学部の2キャンパスとして、何か共同で取り組めることがあるのではないかと考えた。そこで、SDGsの観点も踏まえ、農業への理解を深めるとともに、現場が抱える課題や現状を学ぶことを目的として農業体験を企画した。その際、学生が団体で参加できる農業体験先を探す過程で、「ののの」の活動を知り、今回は女子組、男子組の2回に分けて参加に至った。

【主な活動内容】

みかん畑での除草作業（草刈りや手作業）をはじめ、斜面での農作業体験や自然農法の現場での除草・防虫作業などを行い、みかん狩りに向けた畑の整備にも取り組みをした。また、地域の市場や農家の交流拠点、干物屋などを見学し、地元の方々との交流や聞き取りを通して、地域が抱える課題についても学んだ。

【ホスト（西島さん）、地域の方の声】

- ・熱海地域は観光地としての知名度が高く、行政も漁業や観光産業に力を入れているため、山間部の農業振興には支援が得られにくい現状がある。そのため農家は、農業団体など外部の支援を受

けながら活動が続けている。漁業・観光産業への注力から、西島さんのお話によると、行政に事業相談をしても前向きな反応は得にくく、連携の難しさを感じているのでは?とおっしゃっていました。

- 西島農園では、生理落下したみかんを肥料として再利用しているが、小規模のためジュース用の買い取り条件(1トン以上)を満たすのは難しい。また、地球温暖化の影響で果実の品質が落ち、早めの収穫を余儀なくされている。
- 地域の農業系大学生が研修に来ることもあるが、就農する人は少ない。農家の中には作業ごとに人を雇い、効率的に作業を行うところもある。

このように熱海地域では、観光中心の経済の中で、農業従事者が工夫や兼業を通して地域に貢献している実態が見られた。

【参加者が感じたこと】

- 今回の西島農園での体験を通して、農業は単に作物を生産するだけでなく、人とのつながりや地域との協力によって支えられていることを学んだ。
- 西島さんは僧侶やカフェ経営など多方面で活動しながら地域に貢献している姿勢が印象的だった、また市役所と良好な関係を築き、農業に関する情報を積極的に受け取っており、その温かい人柄から地域の人々にも信頼されていた。
- 地域では定期的に市場が開かれ、農家同士が情報交換を行うなど、互いに助け合いながら活動している様子が印象的であった。
- 天候に左右されやすい中で、晴れた日に役割分担をして効率的に作業する工夫や、自然農法・観光農業など付加価値を高める取り組みも見られた。さらに、落ちたみかんを肥料にしたり、灰を害虫予防に活用したりと、自然の循環を生かした知恵にも感心した。今回の体験を通して、農業は自然・地域・人が一体となって発展していく産業であると実感した。

*1：株式会社Perma Futureが運営する、農家とボランティアのマッチングサービス。農業の敷居を低くするために、午前中に農作業、午後は滞在先での観光やテレワークなど、「半農半X」の形態で農業に関わるきっかけを、ウェブサイトを通じて提供している。

(男子組)



(女子組)



19 SDGs Students Dialogue Expo 2025

開催日時・会場	9/4 大阪・関西万博内（サステナドーム）
目的	日本とフィリピンをつなぐ太平洋をテーマに、深刻化する海洋プラスチック問題に対し、若者世代が主体となって意識改革と行動変容を促すことを目的としている。
参加者数	6名（職員：1名 学生：5名）
企画運営	環境省、フューチャーアーティザン株式会社、ボランティア支援室

■ 活動内容（概要）

（1）参加経緯

環境省より、2025年日本国際博覧会における環境教育・ESDプログラムへの参加についてお声がけをいただき、本学のSDGsアンバサダーを中心にメンバーを募り、参加することとなりました。

（2）企画概要

2025年9月4日に大阪・関西万博にて開催された「SDGs Students Dialogue Expo 2025」において、日本の大学と海外の大学が、日本企業（メンター企業）より提示された課題について協働し、課題解決に向けた取組を検討・発表することが本企画の主軸となっています。当日は、日本の大学と海外の大学を合わせて、計10チームが参加しました。

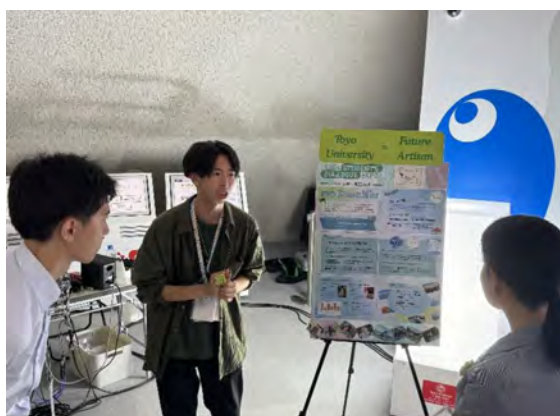
本学は、フィリピンのISAT-U（イロイロ・サイエンス・アンド・テクノロジー大学）と協働し、「Re-placific (ISAT-U × TOYO)」という国際共同チームの一員として活動しました。チーム名である「Re-placific」には、フィリピンと日本をつなぐ太平洋がプラスチックごみに覆われつつある現状を踏まえ、「この海を取り戻したい」という思いが込められています。

本プロジェクトでは、日本とフィリピンをつなぐ太平洋をテーマに、深刻化する海洋プラスチック問題に対し、若者世代が主体となって意識改革と行動変容を促すことを目的としました。企業から提示された課題は、「アジアにおける海洋プラスチックごみ問題への対応策を発信する」といった内容でした。

発表当日は、本学は全体の3グループ目として、スライド資料を用い、オンラインで接続したフィリピンの学生とともに発表を行いました。プラスチックごみ削減に向けた具体的なアクションとして、日本とフィリピンの学生が共同でInstagramアカウントを開設し、環境に関する取組を世界に向けて発信してきました。SNSを通じて情報発信を行うことで、多くの人に環境問題へ関心を向けてもらえるのではないかと考え、継続的に投稿を行い、中でも、「ノープラスチックチャレンジ」と題し、1日の中でできる限りプラスチックに関わらない生活に挑戦する様子を紹介した動画は、多くの方に視聴され、発表当日の来場者からも高い関心を得ることができました。また、環境省担当者からの講評においても、実際に行動に移し、環境問題をゲーム感覚で楽しく取り組める仕組みである点が高く評価されました。本発表を一つの区切りとするのではなく、今後もSNSでの発信をはじめ、環境問題について多角的に注視し、継続して考え、行動していきたいと考えています。

【参加者】

学生：伊藤 一（国際学部国際地域学科2年）
伊藤 楓真（経済学部総合政策学科4年）
塩澤 尚（国際学部国際地域学科3年）
塚原 千晴（経済学部総合政策学科4年）
松本 和大（国際学部国際地域学科4年）
引率：青木勇（社会貢献センター事務室職員）



20 第一生命(株) CSR スタディーツアー

開催日時・会場	2025年9月4日(木) 10:00~12:20 第一生命(株) (東京ガーデンテラス紀尾井町紀尾井タワー)
参加者数	10名(引率2名含む)
コーディネーター	林 大介先生(福祉社会デザイン学部准教授)
企画運営	ボランティア支援室

■ 活動内容(概要)

【活動内容】

1. 会社説明
2. ゲーム
3. オフィス見学
4. 座談会

1. 第一生命保険会社の概要と現在の動向について担当者からのお話があった。

まず、第一生命グループの現状としては、第一ライフグループに名称を変更し、世界基準の業務レベルと海外進出を目指していることを知った。

次に、第一生命保険が行っている社会貢献活動の一つとである金融ゲームについての説明があった。これは主に学校や会社に向けて行っているものである。

現在の日本では高齢化や老年年金などの問題があるにも関わらず、金融リテラシーが低いという問題が存在する。国はこうした問題を受けて、退職後のお金について自分で備えるiDeCoやNISAの制度の利用を推奨しているものの、浸透率は低いのが現状である。そこで、第一生命保険会社は金融リテラシーを底上げし、自助努力を進めるために、ゲームを開発したという経緯を聞いた。

2. 実際に活動で使用されているゲームを実際に体験した。人生ゲーム方式のゲームで、ゴール時点でライフサイクルマネーが最も多い人が勝利するルールであった。

実際に体験した感想としては、順位がすぐに入れ替わるほどイベントのマスが増減の金額がかなり大きく、人生はいつどのくらいの出費が発生するかが分からないということに気づいた。だからこそ、ある程度の資産形成と運用の計画を前もって考えることの重要性を学べた。

現在の平均寿命はおよそ81歳で、今後も医療の進歩などにより平均寿命は延びる予測である。つまり、退職して終わりではない。退職後半分近くある残りの人生をどのように過ごすかを考えなければならぬと知ることができた。

これからは自分のことは自分で守らなければいけないからこそ、人ごとに感じず、調べて考えることが必要だと感じた。

3. オフィス見学では、オフィスである12階と13階を見させていただいた。12階は会議や朝礼、イベントなどに使用されているフィールドがある。他にもオンライン会議やミーティングで使用するリモー

トブースも完備されていた。

また、12階は主にライフプロフェッショナル職のオフィスである。営業チームが複数に分かれ、区画で分けられていた。チームごとの目標に対する進捗を共有できるよう大きなホワイトボードが一面に広がっていたり、会話が円滑に行われるようフリーアドレスを採用していたりとさまざまな工夫がされていることがわかった。

13階では応接室と支社のスペースを見学させていただいた。応接室は社員との面談や就活生との面接で使用される。支社のスペースでは、チームごとの施策や法人の割り振りなどライフプロフェッショナル職のサポートを行っている様子を見ることができた。

4. 座談会では、東洋大学を卒業した社員さんと就職活動から第一生命保険会社のことまで幅広く話をすることができた。第一生命保険会社の良いところだけでなく、大変なことについても聞くことができ、社員の率直な思いを知ることができた。

特に重視されているコミュニケーション力や折れずに楽観的であることなど、働くうえで必要な物を教えていただけたので、自身の就活軸に合っているかを考えられた。

私は今回のオフィスツアーで、第一生命保険会社の表側だけではなく裏側についても詳しくすることができ、とても良い機会になったと感じた。資産運用については、iDeCoやNISAなど名前だけぼんやり聞いたことがあるくらいだったのだが、今から将来に向けてお金について考える必要があると感じた。

ゲームを通して一人でも多くのお金について考える機会を作れるよう活動されていると分かった。また、オフィスツアーでは実際の社員の働いている姿を見ることができ、座談会で社員の働き方について具体的に理解できた。お金や会社を踏まえて将来について考えられたと思う。

(法学部法律学科3年 須藤 千秋)





21 災害救援ボランティア講座2025

講 師	宮崎 賢哉さん（災害救援ボランティア推進委員会）他オムニバス形式
開催期間・日時	2025年9月17日（水）9：00～16：30～9月18日（木）8：30～17：00
会 場	東洋大学 白山キャンパス 4B13教室・池袋防災館
目 的	1) 東洋大学の学生災害ボランティアリーダーを育成する一環として、災害ボランティア活動についての基礎的な技能・知識を習得できること。 2) SDGS アンバサダー・防災まちづくりチームにおける企画創出へのきっかけとすること
参 加 者 数	25名（本学学生）
協 力	災害救援ボランティア推進委員会、文京区社会福祉協議会、小石川消防署、富坂警察署、東洋大学管財課、IVUSA東京白山クラブ

■ 活動内容（概要）

首都直下型地震は、今後30年以内に70%の以上の確率で発生するといわれている。また、近年は豪雨や台風などの風水害もたびたび発生しており、災害への備えが急務となっている。

そこで、東洋大学の学生が、災害発生時に「学生ボランティアリーダー」として活躍できるように、本講座を開講した。本講座では、災害時に救援ボランティアとして地域に貢献したい方を対象に、様々な実践的取り組みを通して地域防災について学んだ。本学学生と社会人の方々を中心に実施をした。

初日は座学とグループワークを中心に、2日目は池袋防災館での実技を含む講座を行った。

この講座を受講すると「セーフティリーダー（SL）認定証」が発行され、最終日に各自へ配布された。

○講座

- 災害ボランティアに関すること
- 学生団体の紹介
- 大学単位での防災意識の伝達
- 災害時のシュミレーション（グループワーク）

これらを通じ、災害時の対処を学んだり、災害後のボランティア参加時の気をつけるべき事項に関し学んだ。各種のグループワークとその前後の講座より、実際の災害時において昨今騒がれる都市型の水害等が起こり家に帰れなくなった時を想定したり、ボランティアに参加する際の心得を学んだ。結果的に災害の当事者である自分は、どのように行動すればみんなが助かり怪我や病気をせずに家に帰ることができるかというテーマで講座とグループワークを2日間に分けて行った。参加した感想としては、基本知識を身につける場でありグループワークを交えてとても楽しい時間でした。同時に、防災という一見掴みどころがわかりにくいテーマに対し、災害ボランティアという自分にはあまりなかった視点を今回教えてもらい今後、自分が災害に対しどう関わっていくかということを考えるきっかけになった。また今後は、この経験を活かし災害を正しく恐れて正しく対策できるようになりたい。

○池袋防災館の見学

- 地震発生時の対応
- 火事発生時の対応
- 住宅等における火災発生への一時対処（消火器等の使い方）
- 実際の災害発生時を想定したVR体験

池袋防災館では、主に上記のことをメインで行った。

消火等の使い方に始まり、火災が起こった想定の部屋を使い、災害時非常灯を駆使し避難を行うことや、震度7の地震を想定し体験するプログラムを行った。

ここでは主に個々でできることはないかという視点から知識を学び、体験することがメインであった。感想としては、自身がこれまで体感したことのない震度7の揺れが印象的だった。個人的にスポーツをやっており体幹には自負があったものの、全く耐えられそうになく、高齢者はしゃがんでも震度7に耐えられないかもしれない。だからこそ私達が積極的に助けてあげられるような存在でありたいと思った。

（国際学部国際地域学科4年 SDGs アンバサダー 小笠原 岳）



22 フェアトレードの普及促進を目的とした ラオス産オリジナルコーヒーの販売会③

開催期間・日時	2025年10月2日(木) 10:30~17:00 10月3日(金) 10:30~17:00 10月6日(月) 11:00~16:00
会場	東洋大学 白山キャンパス 1号館エレベーター前、6号館学生部前
目的	今回、学内でフェアトレードコーヒーを販売した目的は以下の3点です。 1 白山祭とスタディツアーに向けての資金調達 2 エフラオとフェアトレードの認知度向上 3 販売会運営の質向上
参加者数	69名
主催	Smile F laos
協力	ボランティア支援室、学生部

■ 活動内容 (概要)

当日の具体的な流れ

9:00 準備開始：商品、展示品、会計設備をボランティア支援室より開催場所に搬入。
4号館1階生協横にある展示用パネルを学生部より開催場所に搬入

10:30 販売開始
17:00 販売終了
17:45 片付け終了
18:00 反省会開始
19:00 反省会終了

来場者数 69人

販売数 77製品

私たちの販売会は、単にコーヒーを購入してもらうことが目的ではなくその背後にあるフェアトレードの価値や、ラオスの子供たちへの支援の重要性を伝えることを目指しています。展示を通じて来場者に以下の4点のような気づきを促したいと考え、フェアトレードコーヒーの販売会を行いました。

①フェアトレードの意味と影響

コーヒーを購入することは、単なる取引ではなく、生産者の生活を支え、適正な労働環境と公正な価格を保証することです。フェアトレードに参加することで、消費者として自身の選択が、世界のどこかの地域でポジティブな影響を与えているという意識を促しました。

②ラオスの現状と教育支援の必要性

昨年12月に実施したスタディツアーで私たちが目にしたラオスの教育環境や生活状況の現実を展示で紹介し、教育支援の必要性を伝えました。子供たちが質の高い教育を受けられない状況が将来の職業選択にどのような影響を与えているのかを感じてもらい、私たちの支援活動の意義を理解してもらうことが重要です。またそこから自分たちが受けてきた日本の教育の良い面、悪い面において考えるきっかけとしても機能してほしいと考えております。また今年度も12月に行うスタディツアーにて、具体的にどのような支援を行うのかをお伝えすることで、支援者の方にも自分ごととして捉えていただくことを目指しました。

③コーヒーを通じた支援のつながり

販売されているコーヒーが、現地の農家やラオスの子供たちの未来にどのように繋がっているのかについて興味を持っていただくきっかけになればと思います。日常で何気なくしている単なる消費行動が、遠くの国での持続的な発展に繋がることを実感してもらい、「私たちの日常の選択が、どのように他国の人々の暮らしに影響しているのか」を考えた消費行動を促したいです。また自分が日々飲むコーヒーの背景にあるストーリーを知ること自分たちの生活が世界の一部であることを感じ取ってもらいたいです。

今回の販売会でコーヒーを買って終わりではなく、その背後にあるストーリーに共感し、自分にできる他の支援方法を考えるきっかけにしていきたいと思います。例えば、情報を周囲にシェアすること、または次のステップとして、フェアトレードや教育支援の活動に参加することなど、自分なりのアクションに繋がっていただければ嬉しく思います。そのため11月に出店する学園祭や文京博覧会へのご案内を積極的に行い、販売会に足を運んでくださったお客様へSmile F LAOSのSNSを周知しフォロワーを増やすことで注目度を高めていきたいです。このことにより他団体との交流の機会を増やすことにつながり、合同イベントの実現など、活動の幅を広げることが可能になるのではと考えております。



23 Toyo 1day ボランティアプログラム 「ビーチクリーンアップ in YUIGAHAMA Beach～SDGs14『海の豊かさを守ろう』～」

開催日時・会場	・日時：2025年10月12日（日）10：00～12：30 ・会場：由比ヶ浜海水浴場 ※事前交流会を以下の日程で実施 ・日程：2025年10月5日（日）20：00～21：30 ・会場：ZOOMによるオンライン会場
目 的	1) 海洋汚染の現状を知り、その対策としての行動を参加学生が自ら実行できるようになるためのきっかけとすること。 2) 参加学生が、ボランティア活動の意義や楽しさを実感できるようになること。
参 加 者 数	34名（本学学生26名、多摩大学学生8名）
インタープリター	相良 菜央さん （一般社団法人I.C.E.R.C Japan（国際イルカ・クジラ教育リサーチセンター）代表理事）
共 催	多摩大学学生社会ボランティアコーナー
企 画 運 営	東洋大学SDGsアンバサダー、多摩大学学生有志
協 力	一般社団法人I.C.E.R.C Japan（国際イルカ・クジラ教育リサーチセンター）

■ 活動内容（概要）

今年度も、多摩大学学生社会ボランティアコーナーとの共催プログラムとして、本企画を実施しました。今年度は、白山・赤羽台・朝霞キャンパスから運営学生が集まり、多摩大学の学生とともに、夏休み期間から準備を重ね、事前交流会を経て本番の実施に至りました。

本番は、34名の参加者を迎え、東洋大学の4キャンパスから学生が集まった他、多摩大学も多摩キャンパス、湘南キャンパスの双方から学生が集い、6つのキャンパスから集まった学生が入り混じったグループで、クリーンアップ活動と、事後のディスカッションを行いました。以下、本学学生からの報告です。

昨年度に続き、今年度も多摩大学の学生と協力し、7月から10月にかけて計5回のミーティングを重ね、開催に向けた準備を行いました。ミーティングでは、活動の目的や活動を通して何を大切にするかなどを中心に話し合いました。また、東洋大学と多摩大学の学生がお互いの交流を深めたいという思いもあり、ビーチクリーン実施前に行ったオンライン事前交流会では、自己紹介ゲームや共通点探しゲームを実施しました。

当日は、5、6人ごとのグループに分かれ、由比ヶ浜のビーチクリーンを約一時間行いました。短い時間ではありましたが、一人ひとりが熱心にゴミ拾いに取り組みました。実際に落ちていたゴミは、大

きなものは少なかったものの、よく見ると小さなごみが散乱しており、元は何であったのか判別できないほどに砕けたマイクロプラスチックも確認することができました。

ゴミ拾い終了後、周辺の公園にて相良さんからのレクチャー、グループディスカッション、今後の生活に関する宣言などを行いました。相良さんからのレクチャーでは、海の生き物が人間の排出するゴミによって受ける被害や、小さな行動でも海を救うための大きな変化につながるなど、大切なことをお話していただきました。グループディスカッションでは、活動中に感じたことや、相良さんからのレクチャーを受けて、これからどのような生活を送りたいかを話し合いました。参加者の意見は、「海のためになれたと達成感を感じた」というものから、「この活動だけでは実感が湧かない、スケールの大きな問題だと感じた」というものまで多岐にわたりました。一人では気づかなかった考えを知る、良い学びの場となりました。

今後の生活に関する宣言では、ペットボトルなど身近なプラスチックの排出を減らすこと、周囲の人への啓発、自身の学ぶ学問と紐づけてできることを考えてみるなど、さまざまな行動目標を共有することができました。

今回の活動は、学年・学部学科、そして大学の枠組みを超えて多くの人と交流し、環境問題に対しての一人一人の意見を分かち合うことのできた、大変すばらしい機会となりました。当企画は運営メンバーをはじめ、相良さんの多大なるご協力により、無事開催することができました。末筆ではございますが、本企画にご協力いただきました相良さんに、心より感謝申し上げます。

今回の企画は多摩大学との共同開催となりましたが、今後もビーチクリーン企画の継続に尽力してまいります。また、SDGs アンバサダーとして、他の企画でも多摩大学と一緒に企画・運営ができるよう引き続き精進してまいります。

(経済学部総合政策学科1年 東洋大学SDGs アンバサダー 宮下^{はると}陽大)
(福祉社会デザイン学部人間環境デザイン学科1年 東洋大学SDGs アンバサダー 矢嶋^{ひなた}日葵)



24 八丈島支援募金活動

開催日時・会場	2025年10月25日（土）文京シビックホール入口
目 的	台風22号・23号に伴い被害を受けた八丈島への支援のため
参 加 者 数	約15人 東洋大学学生5人、一般参加者10人程度
企 画 運 営	文京区社会福祉協議会

■ 活動内容（概要）

【詳細】

文京区社会福祉協議会では、10月24日（金）・25日（土）に、台風22号・23号によって被害を受けた八丈島を支援するための募金活動を実施しました。25日（土）には、東洋大学の学生もボランティアとして参加しました。

当日は雨風が強く、厳しい天候の中でしたが、学生を含む約15名のボランティアが文京シビックホールの入口付近で声をかけながら募金活動に取り組みました。私たちの呼びかけに足を止め、募金してくださる方々の姿を見て、心が温かくなりました。特に、子どもたちが積極的に募金してくれる様子が印象的でした。募金してくださった方々の姿を見て、復興の輪が広がっていくことを願うと同時に、通り過ぎてしまった方々にも「八丈島が台風被害を受けた」という事実を知っていただけたのではないかと感じました。そうした認知の広がりも、私たちが声を上げて活動した意義のひとつだと思います。

二日間の活動で、合計105,708円の募金が集まりました。この募金が八丈島の早急な復旧・復興につながることを願っています。今回の活動を通じて、募金は単なる資金提供ではなく、社会課題への関心を高め、支援の輪を広げるための大切な手段であることを実感しました。募金してくださった方も、そうでなかった方も、「八丈島」に関心を持っていただけたのであれば、それが復興への一歩になると信じています。近年、日本のみならず世界各地で自然災害による甚大な被害が発生しています。そうした地域の復興を支える手段として、募金活動は大きな意味を持つと考えています。今後も積極的に取り組んでいきたいと思っています。

（文学部史学科4年 能登復興支援団体 青いビブス 伊東 航洋）

【参加者の感想】

初めて募金活動に参加しましたが、通行人の方が足を止めて募金してくださる姿を見て、人の温かさを感じました。特に小さな子どもが自分のお小遣いを募金してくれたときは、胸が熱くなりました。声をかけるのは勇気がいりましたが、八丈島の現状を知ってもらえたと思います。



25 第4回文京区内大学サステナビリティ関連 取組紹介のための交流・意見交換会

開催日時・会場	2025年10月31日（金）13：30開場、14：00開始（18：00閉会）文京区民センター3階3A会議室
目的	文京区内に所在する大学・企業によるサステナビリティ関連取組紹介を中心として交流・意見交換を行う
参加者数	3名（東洋大学SDGsアンバサダー、登壇者として）
コーディネーター	東洋大学副学長・国際学部教授 荒巻 俊也（東洋大学SDGs推進センター副センター長） 小牧 涼（東洋大学 学長室学長事務課）
企画運営	文京区

■ 活動内容（概要）

文京区は令和4年2月にゼロカーボンシティ宣言を行い、2050年までに二酸化炭素排出量実質ゼロを目標に掲げています。また、区内に19大学を有する特徴もあり、区内に所在する大学におけるサステナビリティのための取り組みの報告、及び交流・意見交換の場として、「文京区内大学サステナビリティ関連取組紹介のための交流・意見交換会」を毎年開催しています。

第4回となる今年度は、12大学、2団体、11企業が参加し、本学からも主にSDGsについて取り組む東洋大学SDGsアンバサダーが活動報告を行いました。

本学SDGsアンバサダーは15分間の発表時間を頂き、スライドを用いてアンバサダーの概要や、主に環境チームを軸として昨年度から今年度にかけて取り組んだ「エコプロ参加」や「クールアースフェア2025参加」、「第19回環境マネジメント全国学生大会参加」「2025年大阪・関西万博SSDE2025参加」などを紹介した上、学園祭やSNSについての告知を行いました。

発表の後は意見交換や交流の場として参加大学・団体・企業と交流を行いました。本学もウォーターサーバープロジェクト“SPRING”や、大阪・関西万博等について質問を頂くなどした他、他大学における取り組みとしては東京大学GX学生ネットワークや日本女子大学等の取り組みについて交流会にて質問や交流をさせていただく機会がありました。

本学においても、SDGsやサステナビリティ活動については区内の大学・企業と連携を行いながら進めているものが数多く存在します。このような取り組み紹介・意見交換会への参加は、他大学・団体・企業からの意見を頂ける場として自らの活動を客観的に捉え直す大変貴重な経験となったと考えています。

最後に、東洋大学SDGsアンバサダー登壇に際し、東洋大学副学長、及び東洋大学SDGs推進センター副センター長を務められます国際学部教授 荒巻 俊也先生、並びに東洋大学 学長室学長事務課より小牧 涼様に臨席賜りました。厚く御礼申し上げます。

（東洋大学国際学部 国際地域学科4年 SDGsアンバサダー 松本 和大）

第4回 文京区内大学サステナビリティ関連取組紹介のための交流・意見交換会

◆ タイムスケジュール

13:30～ 開場・受付開始	<<休憩20分予定>>
14:00～ 開会あいさつ	15:50～ 日本女子大学
14:05～ 区長あいさつ	16:05～ 東京大学消費生活協同組合
14:10～ 参加大学等紹介	16:20～ お茶の水女子大学
<< 発 表 >>	16:35～ 文京区
14:15～ 跡見学園女子大学	16:50～ 講評・意見交換
14:30～ 中央大学	17:45～ 閉会
14:45～ 東京大学	18:30～ 懇親会
15:00～ 東京大学（学生）	
15:15～ 東洋大学	



東洋大学SDGsアンバサダー概要・活動紹介

第4回文京区内大学サステナビリティ関連取組紹介のための交流・意見交換会

26 東洋大学第61回白山祭 SDGs アンバサダー出展企画 「TOYO HAKUSAN SDGs EXPO 2025」

開催日時・会場	日時：2025年11月2日（日）～2025年11月3日（月）10：00～18：00 会場：東洋大学 白山キャンパス 1号館1601教室
目 的	SDGs アンバサダーの活動を認知してもらうため
参 加 者 数	【SDGs アンバサダー】18名【来場者数】2日間 合計 307名
企 画 運 営	SDGs アンバサダー（白山キャンパス）

■ 活動内容（概要）

SDGs アンバサダーは、第61回白山祭に出展しました。

今年度の白山祭では、1日目に142名、2日目に165名の合計307名の方がSDGs アンバサダーブースへ来場しました。来場者層については、お子様連れや近隣住民の方など、体験型企画の幅広さから多様な層の関心を引くことができました。今回の出展では、昨年度と比べ会場スペースが拡張されたため、ポスター展示に加え、来場者の方が体験できるブースを数多く展開しました。これにより、単にポスターで私たちの活動を知ってもらうだけでなく、体験を通じてSDGs への理解を深めることができ、内容の充実した展示を実現することができました。ゲームに参加し、アンケートにご回答くださった来場者の方には景品をお渡しし、来場者自身にSDGs への関心を高めていただく機会を提供しました。

以下に、各企画の報告をいたします。

●ゴミ分別ストラックアウト

環境チームの恒例企画である「ゴミ分別ストラックアウト」を今年も実施しました。この企画は、環境問題への関心を高めるとともに、文京区のゴミ分別のルールに基づき、「可燃」「不燃」「資源」「プラスチック資源」の4種類を正しく分類するストラックアウト形式のゲームです。具体的には、段ボールで作られた4つの分別区分が書かれた箱を設置し、参加者には模擬ごみが書かれたガチャガチャのボールを、正しい分別方法が記された箱に向かって投げ入れるストラックアウト形式を採用しました。

●防災ボトルゲーム

防災チームとして初めて企画したのが、「防災ボトルゲーム」です。このゲームは、防災グッズの重要性和、平時からの備えの必要性を楽しく学んでもらうことを目的としました。内容は、制限時間2分以内に、携帯用トイレや笛などの防災グッズの中から最大10個選び、指定のボトルに詰めるというものです。普段からすべての防災用品を持ち運ぶのは困難であるため、このゲームを通して、参加者には「限られた状況下で何が必要か」という優先順位を考えてもらうことを狙いとしました。ボトルという限られた容量の中で、参加者自身が持ち出し品の重要性を認識し、防災への意識を高める良い機会を提供できました。来場者からは、「非常時に備えて準備することと、詰めるものの優先順位について考

える機会になった」「体験することで、災害の意識を持つことができた」といった感想が寄せられ、防災の「自分ごと化」を促す、実りのある企画となりました。

●ボッチャ&ゴールボール体験

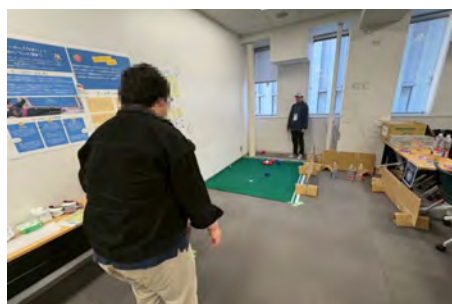
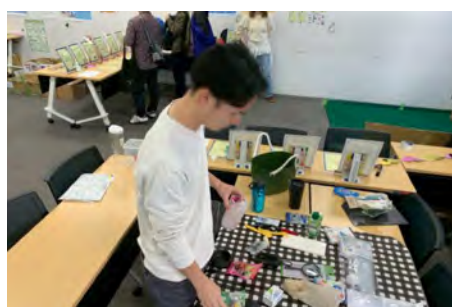
ダイバーシティチームからは、パラリンピック正式種目として知られるゴールボールとボッチャの体験を企画しました。ゴールボール体験では、来場者にアイシェードを着用してもらい、段ボールで作成したレーンを使ってペットボトルの的を倒してもらいました。実際の競技とは異なりますが、視覚が使えない状態で狙い通りに投げることの難しさや、重さのある特徴的なボールの存在を伝えることを目的としました。この体験を通じて、競技自体を知らない方にもゴールボールの特徴を伝えることができました。また、同じパラスポーツであるボッチャ体験も実施しました。チームメンバーからも「名前は知っているが、詳しくは知らない」という意見が多かったため、来場者にも同様の状況が想定されると考え、競技の啓発を目的に行いました。その結果、大人から子どもまで、参加者全員が楽しみながらボッチャという競技を理解することができました。

さらに、ゴールボールやパラスポーツについてのクイズも展示し、体験と連動させることで印象を深める工夫をしました。クイズが来場者の興味を引き、パラスポーツに対する関心の向上につながりました。

今年度の白山祭への出展においては、「参加・体験」を最重要テーマに掲げ、来場者の方々に主体的に関わっていただけるような企画・展示の実施に注力しました。単に活動内容をポスター展示するだけでなく、実際に手を動かし、感覚的に理解してもらう機会を提供することで、来場者の皆様には楽しみながら私たちの活動をより深く知ってもらうことができたと考えております。このアプローチは、私たちが目指していた「大学内での取り組みや大学生ならではの活動を、より多くの人々に知ってもらう」という目標に対し、大きな成果をもたらしました。

来場者からの感想においても「体験することで、災害への意識を持つことができたので良かったです」「実際に体験すると興味がわきました」など、「体験」が学びや関心の深さに直結したというポジティブな声を多数集めることができました。この経験を通じ、「体験型」コンテンツが持つ可能性を再認識いたしました。次年度以降の活動においても、さらにコンテンツの質を高め、より幅広い層への訴求力を強化してまいります。

(経済学部総合政策学科1年 SDGs アンバサダー 環境チーム 宮下 陽大)



27 東洋大学川越キャンパス「こもれび祭」におけるSDGsアンバサダーの出展

開催日時・会場	11月2日(日)～11月3日(月) 東洋大学川越キャンパス2104教室
目的	来場者に持続可能な社会づくりについて、自分ごととして考えていただく機会となることを期待する。また、近隣住民の方々が多く参加することが見込まれることから、社会貢献活動に積極的に取り組んでいる大学であることをPRし、大学のイメージアップにつながることも期待している。
参加者数	11/2 127人、11/3 123人 計250人
企画運営	SDGsアンバサダー（川越キャンパス）

■ 活動内容 (概要)

本活動は、SDGsアンバサダーの取り組みを発信するとともに、地域住民をはじめとする来場者にSDGsへの参画意識を醸成することを目的として、毎年「こもれび祭」において継続的に実施しているものである。2025年度においては、視覚的な展示と体験型の企画を組み合わせ、以下の通り多面的な展開を行った。

2025年度の活動では、SDGsへの理解をより深めていただくため、視覚的な「展示」と、実際に体を動かす「体験」を組み合わせた企画を行いました。展示については、「ダイバーシティ」「環境」「防災・まちづくり」の3つのチームが中心となり、それぞれの活動内容や成果がひと目でわかるポスターを作成・掲示しました。各チームがどのような想いで活動しているかを、来場者の方々に詳しくお伝えすることができました。また、ごみの分別について楽しみながら学んでいただけるよう、独自の企画「何のゴミ?ゲーム」を実施しました。これは、「ごみ」と書かれた球を投げ、川越市の正しい分別区分が書かれた的を狙って入れるというルールで、ポイントを競いながら地域の分別ルールを再確認できるゲームです。大人から子どもまで、ゲームを通じて環境意識を高めてもらうことを狙いとししました。さらに、フードロス問題について知っていただくきっかけ作りとして、「おにぎりアクション」に関する展示物も併設しました。そして、来場者参加型の取り組みとして、SDGsの17の目標の中から「一番気になるもの」にシールを貼っていただくシールアンケートを行いました。多くの方にご参加いただき、SDGsのどの分野に関心が高いのかを共有するとともに、SDGsを身近に感じていただく良い機会となりました。

アンバサダーメンバーの感想

- ・ごみの分別について、親子で改めて理解を深めていただけたので、ゲームを実施してよかったと感じています。
- ・どの年齢層にも好評でしたが、特に子供たちがたくさん挑戦してくれて、反応も良かったので、今後の企画につながる結果となり大変良かったです。今回、配布した飴を目当てに来てくださった方もいたので、景品を用意することの大切さを学びました。
- ・「勉強になった」という参加者が多くいたため、次の企画でも、参加者のごみ分別に対する関心の

高まりが期待できそうです。

来場者の感想

- ごみの分別について、これまでしっかりと学ぶ機会がなかったので、良い勉強になりました。
- ゲームで学んだことを、これから生活の中で試してみようと思います。
- 思ったよりも難しかったですが、とても楽しかったです。
- 自分もこのようなゲームを通じて、分別について他の人に教えたいと思いました。

今後の改善点

【全体】

開催時刻は10時でしたが、準備不足が見られました。少なくとも10分前には全員が集合し、当日の流れなどの打ち合わせを行う必要がありました。また、来場者がいらっしやる中でゲームの難易度調整を行う場面があったため、機材の事前確認やスタッフ間のルール共有・把握は、必ず開場前に済ませておくべきでした。

【ゲーム企画】

ルールの設定（詰め）に不十分な点がありました。ゲーム自体は楽しんでいただけましたが、得点計算が分かりにくかった点が課題です。また、「ごみの分別方法を知ってもらう」という本来のコンセプトよりも、的を狙い入れるというアクション要素が前面に出すぎてしまった点も反省点です。次回に向けては、参加者がより達成感を得られるような難易度調整を行うとともに、ごみの種類を増やすことで、さらに多様な分別方法を学べるよう改善を図ります。

【展示】

せっかく用意した展示ですので、置いておくだけでなく、来場者に「どんな活動をしているのか」を直接説明できるとよかったと感じました。しかし、どうしても全体の人数が少ないうえに、ゲーム企画の運営に人を配置する必要があるため、現状の体制では展示担当まで置くのは難しいという課題も見えました。



28 東洋大学赤羽台キャンパス赤羽台祭 「SDGs天国～ミラクルサステナブル～」

開催期間・日時	2025年11月2日(日) 10:00～11月3日(月・祝) 18:00
会場	東洋大学赤羽台キャンパス 20208教室
目的	来場者の方々にSDGsアンバサダーの活動を知っていただくとともに、クイズ大会や体験型ブースを通じて、SDGsにより親しんでいただく機会とすること。
参加者数	1日目:312人 2日目:358人 計670人
協力	特定非営利活動法人スペシャルオリンピックス(SO) 日本・東京
企画運営	SDGsアンバサダー(赤羽台キャンパス)

■ 活動内容(概要)

赤羽台キャンパスにおいても、第9回赤羽台祭にSDGsアンバサダーが出展を行いました。

昨年度に引き続きの出展となります。今年度は1日目に312名、2日目に358名の方がSDGsアンバサダーのブースに来場していただきました。両日とも昨年度を上回る来場者数で、より多くの人へ活動内容を知ってもらう良い機会となりました。今年度は、展示以外にも、来場者の方へ体験してもらえるブースを多く展開しました。また今年度はスペシャルオリンピックス日本・東京の方と連携した企画としてスペシャルオリンピックスクイズ大会を1日目に行いました。その他、SDGsクイズ大会、防災ベット、防災トイレの展示、おにぎりアクション、点字体験、ボッチャ体験、ランタン展示を両日行いました。わらしべ長者プロジェクトの回収を行いました。

●SO(スペシャルオリンピックス日本・東京)コラボクイズ大会

今年度は、2018年3月6日に国内の大学として初めて、スペシャルオリンピックス日本とユニファイドスクールパートナーシップ協定を結んでいるスペシャルオリンピックス日本・東京とのコラボクイズ大会を開催しました。ユニファイドスクールとは、小学校から大学までの学校と連携し、スポーツを通じて知的障害のある人とない人がお互いを理解し、共生社会を実現することを目指すもので、私たちSDGsアンバサダーは、来場者と知的障害のある人とが接する機会を提供することで関わりました。また、ウェブや広報誌を通じた広報活動でより多くの人にこの取り組みを知ってもらうことを目指し、今年度の赤羽台祭で実施に至りました。

当日のクイズ大会では、アスリートコミュニケーションリーダー、アスリートコミュニケーションサポーターの方々と司会進行を行いました。多くの来場者の方にSOについて楽しく知っていただく機会となりました。以下学生の感想です。

- ・スペシャルオリンピックスについて、クイズ形式で楽しく学んでいただけたらという思いで作りました。

障害者スポーツに関して、詳しく知らない人が多いと思うので、SOはどのようなものなのか知っていただこうという思いで作りました。

●問題数が多い中で聞き手が最後まで楽しめるようにするための工夫を追加することが難しかったです。
今回のSOクイズを通して、少しでも多くの人にSOのことについて知ってもらい、周りで気になる人がいたら広めて欲しいという思いで、私たちクイズ司会者側も楽しみながらSOってというものがあるよ！私たちが知っているオリンピックという固定観念から、幅広い種目とかがあるんだよ！と伝えることができた。



●SDGsクイズ大会

今年度の赤羽台祭でも、子どもから大人まで幅広い年代の方々を対象とした、参加型SDGsクイズ大会を開催しました。SDGsクイズを通じて楽しく学び、知り、また振り返る機会となるよう、1年生を中心にスライド準備から司会進行を行いました。以下クイズ大会に関わった学生の感想です。

- SDGsについて来場された方々に理解していただくことで、これからの行動がどのような影響を与えるのか知ってほしいという思いで、クイズスライドを作成しました。来場者へクイズを通じて、他人事とは思わず「自分でも地球を守れる」ことを伝えたかったという思いが強かったです。また、日常の行動が環境保護につながり、持続的な社会をつくるためのきっかけになることを理解してくれたら良いなと思っています。クイズ大会参加者には子どもたちが多いとのことだったので、マイクロプラスチックなどの難しい用語を簡単に理解してもらうにはどうしたらよいか考えることが、一番の苦労した点でした。
- みんなにSDGsが何なのか知ってもらいたいという気持ちで作りました。また、今世界がどんな問題を抱えていて、解決していく必要があるのかを伝えたいという気持ちで作りました。子供達にも理解しやすく、楽しめる問題にすることが難しかったです。
- 飢餓問題についてしっかり認識した時期が私は遅かったので、小さい子から大人まで今の現状を知って欲しくて作りました。また、飢餓が深刻な場所があること、「とても貧しい状況」*1とは具体的にどのくらいか、特にこの2点を伝えたかったです。小さい子も参加するクイズだったため難しい言葉の意味を分かりやすく説明することに苦戦しました。



●ボッチャ体験

終始一番人気のブースとなり、来場された多くの方にご体験いただきました。楽しみながらパラスポーツを体験していただいたことで、気軽にこどもから大人の方まで楽しんでいただけるブースとなりました。



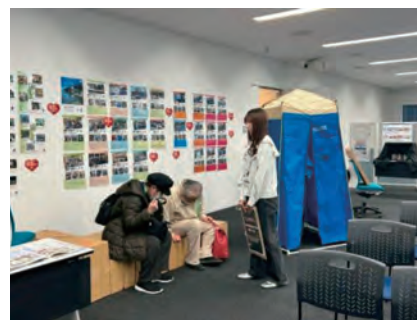
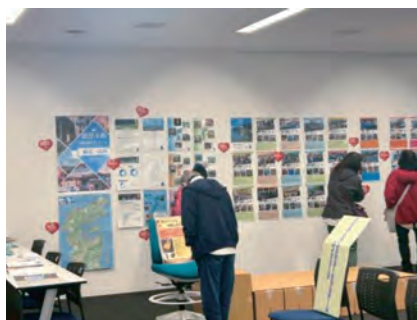
●活動記録紹介展示

今年度は、赤羽台キャンパスの活動報告、SDGs アンバサダーの3つのチームの活動報告に加えて、アンバサダー主催企画のポスターを展示しました。その他にも、能登半島地震ボランティアの活動を行ったメンバーが載っているポスターを掲示し、東洋大学としての取り組みも伝えることができました。ポスターを見ている来場者へは、実際に活動を行ったメンバーが説明を行うことを通して、地域の方々に私たちの活動を知っていただく貴重な機会となりました。また、来場者からは、「学生など若い人から能登での活動やSDGsの活動など社会貢献の活動について聞けて、それを吸収して帰れることがすごく嬉しい」「このようなSDGsのブースがあることで当たり前を再認識直すことができた」といった感想をいただきました。今後も展示を行う際には積極的に来場者へ声掛けや説明を行い、自身の取り組みを伝えていきたいと思います。

●災害時用防災トイレ・災害時用防災ベッド体験

能登半島地震ボランティア活動展示とともに、防災トイレ・防災ベッドを実際に見て、体験し災害発生時に活用するイメージを持っていただきたいという目的から体験ブースを設けました。

来場された方々から、「実際に防災ベッドに寝てみて結構しっかりしてるんだ」「防災トイレこうなるんだ」や次の学祭に向けて「防災ベッドを体験することは大切だけど、組み立てるという過程も大事だからぜひ今後あったら嬉しい」など実際に体験していただいたことで、多くの方に知っていただけたこと、また私たちも新しく気づきを得ることに繋がりました。



●点字体験

視覚障がいのある方は、私たちが普段読んでいる文字（墨字）ではなく「点字」を情報源にしていることを知ってほしいと思い、赤羽台祭では実際に点字キットを使って来場された方々に「名前」「好きな

言葉」を打っていただくブースを設置。街中で点字を見かけた時に、「大切なものなんだ」と気づけるきっかけになればと思った。また、点字体験を通して、点字に触れたことがない人にも「意外と身近なものなんだ」と感じてもらえたら良いなと思い企画した。



●わらしべ長者プロジェクト(回収のみ)

「SDGsに貢献したいので日々1人でリサイクルをちょこちょこやっている。もし来年も『わらしべ長者プロジェクト』をやっているのなら、来年何かもってきますね」と仰ってくださった方もいた。地域の方々、本学教職員から寄付をいただいた。11月25日・27日赤羽台キャンパスにて、学生に還元する頒布会^{*2}を行う。

○全体として

学生からの感想としては、体験型のブースの企画・運営を通して実践的な学びとなったことに加え、知識をアウトプットする機会となり、貴重な経験となりました。点字の打ち方を子どもたちに説明する際は難しさも感じましたが、完成した後に喜ぶ顔をみた際はとても嬉しかったです。来場者が楽しそうにSDGsの知識を得たり、ポッチャで一緒に遊んだりする様子を見ることができ、やりがいを感じました。

また、クイズ大会には多くの方々が参加してくださり、大変盛り上がりしました。事前に台本作成や役割分担を丁寧に行ったことで、当日は円滑に進行することができ、SDGsアンバサダー同士の仲も深まる活動となりました。同時に、来場された方々との関わりから、普段私たちが取り組むSDGsに関する活動を直接発信することもでき、活動に関心を持っていた方々から助言・感想をいただけた、大変貴重な機会となり、今後のSDGsアンバサダーの活動において支えとなると感じました。

^{*1}: 世界銀行が定める「国際貧困ライン」に規定された、1日あたりに使えるお金が(食事、水、電気、住むところや着るもの、くすりなどすべて合わせて) 2.15米ドル(約300円)未満で生活しなければならない状態のこと。

^{*2}: 「わらしべ長者プロジェクト」の概要、ならびに頒布会の実施については、P63からの報告を参照。

1日目メンバー



2日目メンバー



29 2025年第2回東洋大学朝霞キャンパス 学園祭『霞祭』SDGsアンバサダー出展 「見て・描いて・味わって、SDGsを身近に 感じてみよう！」

開催期間・日時	2025年11月2日(日)～3日(月・祝) 10:00～18:00
会 場	東洋大学 朝霞キャンパス5号館 5103、5104教室
目 的	• 学園祭という場を活かして、地域住民や学生との交流を通じ、SDGsアンバサダーの魅力を発信し、来場者に楽しんでもらうこと。 • お絵描きおにぎりアクションやペットボトルキャップアートなど、多様な出展を通してSDGs関連活動を学内外へ発信すること。 • 本学生命科学科実務研修先農家の支援活動や農産物販売を通じ、地域経済との関わりを体験的に理解するとともに、学外連携の成果を発信すること。
来 場 者 数	607人(11月2日:259人、11月3日:348人)
企 画 運 営	SDGsアンバサダー(朝霞キャンパス)
協 力	株式会社佐藤農園

■ 活動内容(概要)

本祭では、屋内および屋外にて複数の企画・展示を実施しました。屋内出展では、各チームによる活動内容のポスター展示を行い、来場者に対して日頃の取り組みや成果を発信しました。また、モッティナブル*¹によるペットボトルキャップアート展示、能登(青いビブス)の活動写真展示を通して、環境・地域支援分野での活動を紹介しました。

屋内出展では、来場者参加型企画として、ゴミ分別ストラックアウトゲームやお絵描きおにぎりアクション*²を開催し、楽しみながら環境問題への関心を高めるきっかけをつくりました。これらの企画により、学生および来場者が主体的に環境意識について考えることができたと感じました。特に「お絵描きおにぎりアクション」では、ファミリー層が多く在住する朝霞市という地域性もあり、多くの子どもたちが楽しそうに絵を描き、終日賑わいました。保護者や大人の方からも「何十年ぶりに筆を使って絵を描いた」という声があり、全年代に親しんでいただける企画となりました。これらのことから、来年度も継続して実施する価値があると考えます。

屋外出展では、実務研修先の農家から提供されたモモ・キウイ・ブドウ・黄金桃のジャムを販売し、地域農家との連携を発信しました。ジャム販売による売上は約20万円となり、多くの来場者に購入いただきました。

さらに、古材を活用した「マイ箸づくり」の企画には運営メンバーとして企画運営に携わり、環境配慮につながる取り組みの支援を行いました。

昨年度、ゴミ収集が不十分でゴミ箱が溢れた課題を受け、本年度は霞祭実行委員と連携し、回収

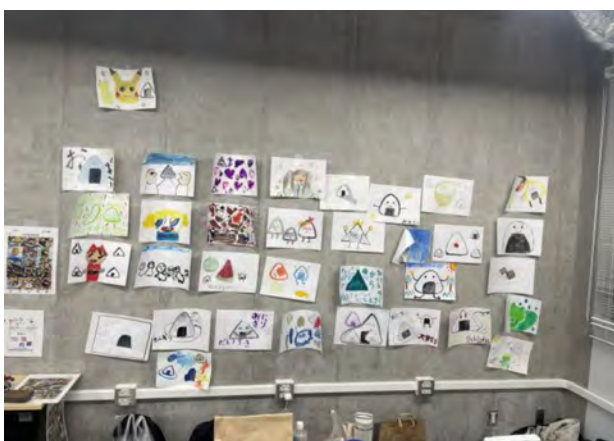
サイクルの決定と分別種類の細分化(キャップ・割り箸)を実施しました。これにより、ゴミの溢れを防ぎ、清潔な会場環境を維持しました。回収した割り箸は木材として再利用されるようにリサイクルを行い、キャップはワクチンにするために寄付をします。本取り組みは、参加者のゴミ分別意識の向上にも繋がることが期待されます。

今回の霞祭での活動を通して、SDGsは知識として「知っている」だけではなく、実際に行動し、他者と共有することで初めて意味を持つものであると感じました。お絵描きおにぎりアクションやゴミ分別企画では、来場者が自然と参加し、楽しみながら環境や社会課題などに触れるきっかけとなり、世代を問わず多くの人に関心を持つ様子が見られました。この経験から、SDGsを身近に感じてもらうためには、一方的に伝えるのではなく、体験を通じて関心や理解を深められる場をつくることが重要であるという気づきを得ました。

*1:SDGsアンバサダーと、本学公認ボランティアサークル「学ボラ」との間で行っている、環境ボランティア活動プロジェクトの名称。コンタクトレンズのアイシティ(株式会社HOYA)の実施する、コンタクトレンズの空ケース回収活動「アイシティecoプロジェクト」を本学において実施するなどといった活動実績がある。

*2:認定NPO法人TABLE FOR TWO Internationalが毎年実施している、「世界食糧デー」キャンペーンの一環としての取り組み。イラストやモチーフを含めたおにぎりの写真を撮影し、SNSや専用サイトへのアップロードを行うことで、協賛金を原資としてアジア・アフリカの子どもたちに給食5食分が届けられる活動のこと。





30 青いビブス防災講座

開催日時・会場	2025年 11月6日（木）13：00～15：00
目 的	青いビブスの活動報告
参 加 者 数	19人
企 画 運 営	能登復興支援団体 青いビブス、北区社会福祉協議会

■ 活動内容（概要）

第1部 13：00～14：00

青いビブス活動報告（2024年・夏季 / 2025年GW・夏季）

第2部 14：00～14：30

防災バック講座

【企画詳細】

活動周知と防災意識向上を目的に活動報告と防災バック講座の二部構成で実施した。

第1部では、4名の学生により輪島 / 珠洲 / 七尾の3コースを中心に活動報告を実施し、昨年と今年の状況を写真を用いて比較し、発表した。質疑応答では、公共交通機関をはじめとしたインフラ関係、具体的な被害・復興状況の質問が多く見受けられた。交通機関や飲食店では、ある程度の復旧は進んでいる旨を説明すると非常に驚かれていた。徐々にニュースで報じられなくなっているため現状を知らない人が多い印象を受けた。

第2部では、防災バック講座を開催し、学生が作成した防災バックと資料を用いた講座を開いた。100 / 300円均一で購入できるものは反応が良かったが、防災グッズを安価に購入できること自体を知らない方もいた。防災バックの作成方法、ポイント等に関してはメモを取っている方もおり、質問も多かった。続く体験コーナーではバックを実際に持ってもらい、内容物や重さを考える場を設けた。特に水に関しては、必要度と重さの関係が課題になっており、高齢者に向けた防災バック講座は日本の性質に照らしても課題であると強く感じた。全体としては、非常に盛り上がり、有意義な防災講座となった。

【今後の活動に向けて】

能登への知識がない方々を対象とした防災講座の実施は今回が初めてであったため改善点も多く見受けられた。加えて、年齢層に応じた災害講座の実施も検討していきたい。また今回の防災講座はかなり好評であったため、災害への意識向上 / 能登の現状周知を目的として今後も継続的に行っていきたい。

【参加者の感想】

私たち学生がこれまでに取り組んできた支援活動を通じて被災地の現状を共有することで、地域のつながりや支えあいの大切さを改めて感じる場になったとも思う。また、報告会では、防災バックの作り方や避難所の確認など、日常生活の中でできる備えを中心に取上げたことで、具体的な行動につなげる機会となった。能登の現状を知る機会が少なくなっている今だからこそ、私たちが継続的に発信し、現地の声を伝えていくことが大切であると実感し、今後もこのような活動を続け、復興の一助

となるよう努めていきたい。

(法学部法律学科2年 能登復興支援団体 青いビブス 加藤 凌輝)



31 東洋生の知らない世界～完全攻略脱炭素化社会～

開催期間・日時	第1回：2025年11月21日（金）17：00～19：00 第2回：2025年12月20日（土）13：00～15：00
会 場	第1回：東洋大学 白山キャンパス A304教室 第2回：東洋大学 白山キャンパス 1608教室、キャンパスプラザ
目 的	①脱炭素化社会を学ぶ 水素エネルギーを題材に脱炭素化社会の仕組みや課題について学び、最低限の基礎知識を身につけることができる。また企業実例や技術動向に触れることで、得た知識を実社会の動きと結び付けて理解することを目指す。 ②将来の進路選択の視野を広げる エネルギー・環境分野は理系のイメージが強いが、文系を含め幅広い分野に関わるテーマである。本企画での学びを通じて、学生自身の専攻や興味を活かせる可能性を知り、就職活動や今後の進路選択において、より多角的な視野を持つことを促す。
参 加 者 数	第1回：16名 第2回：20名 ※両日とも運営学生6名を含む
企 画・運 営	東洋大学SDGsアンバサダー環境チーム（塚原千晴、藤田琉綺、大関美憂、柳鶴泰晴、上地梨月、秋山紘輝、矢嶋日葵）
協 力	オフィスH2レジリエンス、本田技研工業株式会社

■ 活動内容（概要）

水素エネルギーへの理解を深める目的で、5月にアンバサダー内部で実施した「大人の社会科見学」にて、「東京スイソミル」*¹を見学した際、施設運営に携わっているオフィスH2レジリエンスの長谷川様より、「共同で企画実施をしませんか」とお声がけをいただいたことが契機となり、本企画はスタートしました。

国際情勢の変化に伴う資源価格の高騰やエネルギー安全保障への懸念を背景に、カーボンニュートラルの実現に向けた技術革新や産業構造転換の重要性は一層高まっています。中でも水素は、再生可能エネルギーや蓄電池と並ぶ次世代の脱炭素技術として注目されている一方で、導入に伴う課題や経済的価値の変動については、幅広い理解が求められています。

アンバサダー活動の中でもエネルギー分野に取り組む事例は少なく、大学においてもエネルギー問題を専門的に扱う機会は限られていますが、脱炭素化やエネルギー問題は、現代社会において避けて通れない重要なテーマであると考え、本企画においてカーボンニュートラル社会への転換を「自分ごと」として捉える機会を提供できる場を創出することを目指しました。なお本企画は全2回構成とし、連続参加を推奨するイベントとして実施しました。

【第1回】

第1回では、タイトルの通り「脱炭素化社会」への構造転換をテーマに、水素を軸とした全体像につ

いて、オフィスH2レジリエンスの長谷川様よりご講演いただきました。約90分間の講義は3つのセッションに分けて行われ、脱炭素化社会の背景や水素の役割について体系的に学びました。専門用語も多く難易度が高い内容であったため、セッションごとに運営学生が質問を行う簡単なパネルディスカッション形式を取り入れ、参加者が内容を整理しながら理解を深められる構成としました。

残りの約30分はクイズタイムとし、講義内容のアウトプットを目的としました。運営側が事前に用意した問題に答える形式ではなく、参加者自身が講義内容を振り返りながらクイズを作成する形式とし、各グループにセッション①～③の出題範囲を割り当てました。シンキングタイムでは、他グループの問題に回答することで講義全体を振り返ることになります。この取り組みは想定以上に盛り上がり、参加者によるクイズ作成の工夫も見られ、理解の定着につながる時間となりました。

第1回は参加者募集に苦戦した点が反省として残っていますが、少人数であったからこそ、講師との距離が近く、丁寧なやり取りが可能となりました。また運営学生は事前学習のため、長谷川様より3～4回の模擬講義を受け、内容についての理解を深めましたが、模擬講義後には運営学生間で理解が難しかった点や改善できそうな点を共有し、それらを長谷川様にフィードバックすることで、当日の講義内容のブラッシュアップを重ねました。「普段エネルギー分野に触れる機会のない学生にとっては、かなり難しい内容になってしまうのではないか」、「果たして参加学生はこのレベルについて来られるのだろうか」といった不安が正直ありましたが、当日まで講義内容のすり合わせを重ねたことで、難易度の高い内容でありながらも、参加者からは前向きな感想が多く寄せられました。

～以下、第1回参加者アンケートより抜粋～

- 水素が身近なエネルギーになる未来が少し見えた。
- エネルギー関係の仕事には就かない予定だったが、生きるためにエネルギーを消費している以上は誰にでも該当するものであって、自分事として考えないといけない分野だと再認識した。
- 最後のクイズ時間では、参加者がただ答えるのではなく、参加者が作る側に回ることによってイベント全体を振り返る良いきっかけになっていたと思う。



みんなのクイズ

グループ1(セッション1)

排出量取引制度について説明せよ。なお、説明の際は「10万トン」「差分」を使うこと。

グループ2(セッション2)

CO2をリサイクルして、CO2の排出量を実質0にし、都市ガスの主原料であるメタンを作る技術を何というか？

グループ3(セッション3)

川崎市から水素のパイプラインを引こうとしています、どこで使いますか？

①神奈川 ②愛知 ③東京 ④三重



【第2回】

第2回では、本田技研工業株式会社にご協力いただき、ワークショップおよび燃料電池自動車を用いた給電デモンストレーションを実施しました。第1回で学んだ理論や社会背景を踏まえ、実際の企業の取り組みを体感することで、水素をより身近に感じてもらうことを狙いとししました。

約1時間のワークショップでは本田技研工業株式会社様より水素活用事例や燃料電池の仕組みについて説明を受けた後、「みんなが期待する水素社会」をテーマにグループディスカッションを行いました。「燃料電池自動車を利用してキャンプが楽しめる」といったアイデアや「自分で使う電気は自分で賄うことが当たり前になる」といった多様な意見が出されました。また、ミニカーを用いた実験を通じて、燃料電池の仕組みを理解することができました。

その後、キャンパスプラザに移動し、燃料電池自動車による給電デモンストレーションを実施しました。クリスマスツリーのライトアップや、スピーカーでのクリスマスソングの再生、電気ポットによるココアの提供など、季節性と独自性を取り入れた内容としたことで、参加者の関心を高めることができました。企業様からも、「これまで実施してきた給電デモンストレーションの中で最も盛り上がったと感じている」との評価をいただきました。

～以下、第2回参加者アンケートより抜粋～

- 水素エネルギーはもちろん聞いたことがありましたが、水素がこんなにも可能性を秘めている物質であったことは初めて知りました。水素自動車が一般的に普及すれば、未来はもっといい地球になってそうだなー！とワクワクしました！
- 実際に燃料電池自動車を見学した。実際に発生させた電気を供給していたり、水を排出していたりといった様子が見られた。内蔵されたシステムに環境問題を解決に導くヒントが多く散りばめられていた。
- まずは多くの人に水素の存在を知ってもらい、イベントなどを通して体験してもらうことが、水素社会や脱炭素社会の実現に近づくのではないかと思います。

全2回のイベントを通して、興味はあっても今まであまり触れる機会のなかったエネルギー分野や脱炭素化社会について、理解度を深める貴重な機会となりました。参加者はもちろん、運営学生にとっても企画段階から有意義な時間を過ごすことができたと感じています。

企画・運営の面では苦戦した場面も多く、いくつかの反省点が残りました。特に、運営学生と先方との間での意見のとりまとめや調整に難しさを感じることがあり、今後の企画運営に向けた改善点として認識しています。最後に、本企画に際し多大なるご協力を賜ったオフィスH2レジリエンスの長谷川様、ならびに貴重な機会を提供してくださった本田技研工業株式会社の皆様に、心より感謝申し上げます。

今回の経験を活かし、来年度以降は他キャンパスでの展開も視野に入れながら、SDGsアンバサダーとしてエネルギー分野の活動を継続していきたいと考えています。

(経済学部総合政策学科4年 SDGs アンバサダー 塚原 千晴)

*1:「水素情報館 東京イソミル」は公益財団法人東京都環境公社が運営する学習施設であり、東京都が目指す水素社会の実現に向けて、広く子どもから大人まで水素エネルギーの価値を学ぶことができます。



32 わらしべ長者プロジェクト

開催期間・日時	2025年11月25日(火)、27日(木) 12:10~12:50
会場	東洋大学 赤羽台キャンパス HELSPO、WELLB 渡り廊下
目的	まだ利用できる製品を、必要としている人に再利用することでごみを削減し、持続可能な社会の実現につなげる。リユースしてSDGs と関わる。
参加者数	1日目70名 2日目195名 計 265名
協力	東洋大学校友会事務局(提供)

■ 活動内容(概要)

11月2日、3日に行った赤羽台祭のブースで地域の方から不要になった衣類、文房具類、食器、雑貨、生活用品などを回収し、寄付いただいたリユース品を2日に分けて昼休みに配布した。今回は、交換品がなくても参加できる形式とし、1人2点まで自由にリユースできる仕組みとした。当日は古着好きの学生が多く来場し、特に冬物の衣類が予想以上の人気を集めた。一度通りかかった学生が友人を誘って参加する様子も見られ、楽しみながらSDGsの取り組みに関わってもらうことができた。1日目の状況を踏まえ、2日目は開始時間を10分早めるとともに、机を増設してリユース品をより選びやすくするなど、より多くの学生が参加しやすいよう運営面の改善を行った。また、参加した学生からアンバサダーメンバーに本プロジェクトの概要を尋ねられる場面が多く、アンバサダーの活動を認知してもらう良い機会にもなった。



33 セブ研修 支援物資配布

講 師	早坂 聡久先生 (福祉社会デザイン学部 教授)
開催期間・日時	2025年2月14日 (土)
会 場	フィリピン セブ島
目 的	本学科のセブ研修を長らく支えて頂いている NPO ハロハロとその被災地の支援について物資支援という形で協力する。
参 加 者 数	16名
協 力	校友会、地域の方々、東洋大教職員・学生

■ 活動内容 (概要)

2025年11月上旬、タリサイ市 (フィリピン・セブ州) の川沿いに位置するスラム地区が、台風 (ティノ) の影響により甚大な被害を受けた。約500世帯が住居を失い、多くの子どもたちが衣類や文具、学用品などの生活必需品をすべて失う状況となった。この状況を受け、赤羽キャンパスに通う学生および教職員を対象に支援物資の募集を行った。また、社会貢献センターからは、学園祭で実施した「わらしべ長者プロジェクト」によって集まった夏物衣類の一部も寄付物資として活用した。渡航前には、集まった衣類・靴・文房具・鞆などの物資を、サイズ別・男女別に仕分けし、セブ研修参加者16名で分担して持参できるようパッキング作業を行った。現地では、タリサイ デュブログバラング内3つの地区を訪問し、準備した支援物資を直接渡した。子どもたちが嬉しそうに本学生から受け取る姿が印象的だった。その後、この地域を支援している団体で、地域の教会、交流センター、その他協働運営中心地としての役割を果たしているシティオホープ幼児教育施設の牧師から台風のことなど話を伺った。この地域は人口約1万人で30の地区に分かれており各地区200~300世帯が生活している。住民の多くは仕事を求めて移住してきており、安定した収入は期待できず家を持つことができないために川沿いに住居を作り、そのコミュニティが広がったという経緯がある。川沿いに家が密集していたため、台風による浸水被害は深刻であった。水位は高いところで成人男性の鼻まであったという。住民は台風の接近自体は認識していたものの、これほど大規模な台風は未だかつて経験したことがなかったため、特別な備えは十分に行われていなかった。その経験を経て、台風の規模の大小にかかわらず早期に避難するという意識が共有されるようになった。台風の影響でほとんどの家が流されたため、現在はビニールシートを屋根代わりとし仮設住居が並んでいた。しかし、流れてきた土砂の撤去は追いついておらず復旧支援の遅れがうかがえた。また、災害被害の爪痕が大きく残っている理由としては、不法定住地域であるために国からの住居支援は受けることができない点も考えられる。このことから災害被害は政治的背景と深く関係していることが示唆された。



34 「ボランティアコレクション～うきうき地域生活～」

主 催	ボランティア支援室学生サポートスタッフ	
開催期間・日時	2025年11月30日(日) 13:00～16:00	
会 場	北区介護予防拠点施設「ぷらっとほーむ桐ケ丘」	
目 的	本企画は、東洋大学で活動している学生ボランティア団体と、東京都北区地域で活動する地域活動団体との情報共有を目的とするものである。 現在、地域の側からは「学生ボランティア団体へアクセスすることが難しい」という声が挙がっている。本企画を通じて互いの活動や想いを知ることにより、そのハードルを下げ、関わりやすい関係を形成していくことを目指すものである。 さらに、支援室学生サポートスタッフが学生と地域をつなぐ窓口として機能し、最終的には双方が自然につながり合い、協働できる関係を築くことを目標とする。 本企画は、地域の魅力を知り、学生と地域が共に歩んでいく未来を創出するためのものである。	
参加者数	53名【内訳】学生31名、一般22名	
参加団体	【本学学生ボランティア団体】 • ボランティア支援室学生サポートスタッフ(サポスタ) • きりがく • 学ボラ • 東洋大学点訳サークル • バリアフリーサークル「歩み」 • ボードゲーム地域交流団体「ぼどのわ」 • NOTO×TOYO「青いビブス」 • 地域交流団体「紡ぎ」 • Toyo-MeWプロジェクト • SDGs アンバサダー	【北区地域関係団体】 • 社会福祉法人北区社会福祉協議会(コミュニティソーシャルワーカー(CSW)の皆様、地域包括・生活支援コーディネーターの皆様) • きりのはな • ほほえみ会 • サロンサンサン • コスモスの会 • りゅうのすけくん茶論 • NPO 法人絵本のカーニバル
協 力	社会福祉法人北区社会福祉協議会	

■ 活動内容(概要)

本企画は昨年度の白山キャンパスにおける「ボランティアコレクション」でお招きした、北区社会福祉協議会(以下、北社協)の方からお声がけをいただいたことをきっかけに、北区の地域住民に向けて学生の活動発表を行う企画を検討し、実施に至った。

赤羽台キャンパスから徒歩15分ほどの「ぷらっとほーむ桐ケ丘^{*1}」にて、「ボランティアコレクション～うきうき地域生活～」を開催した。本企画は、北区で活動する地域団体の皆さんと、東洋大学のボランティアサークルに所属する学生が出会い、互いの活動を知ることが目的として実施した。

第一部では、学生・地域団体双方が3分間の活動紹介を行い、短時間ながら各団体の個性が伝わる発表を行われた。第二部では、学生・地域の方・専門職が混ざったグループで、クイズ大会やサイ

コトトークを通して交流を深めた。「勤めていた職業は?」「座右の銘は?」といったテーマを用意し、世代を超えて互いを知るきっかけが生まれ、終始和やかな雰囲気で行進した。また、名札に似顔絵や自身の性格を書き込める仕掛けを入れたり、各団体から募集したクイズ冊子を作成したりと、配布物にも工夫を凝らしたことで、参加者に楽しんでもらうことができた。

開催にあたり、北社協の皆様には地域のサロン活動やこども食堂を運営する方々との仲介や、会場提供など、多大な協力をいただいた。大学ではなく地域のスペースを会場としたことで、赤羽台という地域性を生かした、よりインフォーマルで温かい空気感を感じてもらえたのではないかなと思う。

また、地域から寄せられた「東洋大のボランティアサークルを知りたい」という声を受け、対象者の設定や企画の効果について、運営メンバーで丁寧に議論を重ねながら準備を進められたことは、本企画の大きな成果であると感じている。参加者からは「学生の活動が分かって良かった」「さまざまな団体とつながれた」といった声が多く寄せられた。さらに、交流の時間に北社協の方から声を掛けていただいたことをきっかけに、新たな地域団体と継続的に関わる機会を得た学生団体もあった。本企画を通じて、団体同士の大規模なコラボレーションがすぐに生まれたわけではない。しかし、こうした小さな接点の積み重ねによって、学生と地域の間に弱い紐帯が育まれ、今後の関わりへとつながるきっかけをつくることができたと感じている。サポスタとしても、こうした関係性を育む場を今後も継続していきたい。

*1：北区社会福祉協議会が指定管理者として運営する、東京都北区の介護予防拠点施設。高齢者が、住み慣れたまちで元気に自立した生活が送れるように、仲間づくり、健康づくり、いきがいくづくりを応援する施設のこと。



35 フェアトレードの普及促進を目的とした ラオス産オリジナルコーヒーの販売会④

開催期間・日時	2025年12月3日(水) 10:00~17:00
会 場	東洋大学 白山キャンパス 1号館エレベーター前、6号館学生部前
目 的	今回、学内でフェアトレードコーヒーを販売する目的は以下の3点です。 1 スタディツアーに向けての資金調達 2 エフラオとフェアトレードの認知度向上 3 販売会運営の質向上
参 加 者 数	50名
主 催	Smile F laos
協 力	ボランティア支援室、学生部

■ 活動内容 (概要)

当日の具体的な流れ (両日とも同様)

- 9:00 準備開始: 会議室をボランティア支援室より借用
商品、展示品、会計設備をボランティア支援室より、開催場所に搬入
4号館1階生協横にある展示用パネルを学生部より、開催場所に搬入
- 10:00 販売開始
- 17:00 販売終了
- 17:45 片付け終了
- 18:00 反省会開始
- 19:00 反省会終了

来場者数 約50人

販売数 58製品

私たちの販売会は、単にコーヒーを購入してもらうことが目的ではなくその背後にあるフェアトレードの価値や、ラオスの子供たちへの支援の重要性を伝えることを目指しています。展示を通じて来場者に以下の3点のような気づきを促したいと考え、フェアトレードコーヒーの販売会を行いました。

①フェアトレードの意味と影響

フェアトレードのコーヒーを購入することは、単なる取引ではなく、生産者の生活を支え、適正な労働環境と公正な価格を保証する行為です。フェアトレードに参加することで、消費者として自身の選択が、世界のどこかの地域でポジティブな影響を与えているという意識を促しました。

②ラオスの現状と教育支援の必要性

昨年12月に実施したスタディツアーで私たちが目にしたラオスの教育環境や生活状況の現実を展示で紹介し、教育支援の必要性を理解していただきたいです。子供たちが質の高い教育を受けられない状況が将来の職業選択にどのような影響を与えているのかを知ってもらい、私たちの支援活動の意義を理解してもらうことが重要です。また、そこから自分たちが受けてきた日本の教育の良い面、悪い面について考えるきっかけとしても機能してほしいと考えております。さらに、今年度も12月に行うスタディツアーにて具体的にどのような支援を行うのかをお伝えすることで、支援者の方々にも自分ごととして捉えていただくことを目指しました。

③コーヒーを通じた支援のつながり

販売されているコーヒーが、現地の農家やラオスの子供たちの未来にどのように繋がっているのかについて興味を持っていただくきっかけになればと思います。日常で何気なくしている単なる消費行動が、遠くの国での持続的な発展に繋がることを実感してもらい、「私たちの日常の選択が、どのように他国の人々の暮らしに影響しているのか」を考えた消費行動を促したいです。また自分が日々飲むコーヒーの背景にあるストーリーを知ること自分たちの生活が世界の一部であることを感じ取ってもらいたいです。

今回の販売会でコーヒーを買って終わりではなく、その背後にあるストーリーに共感し、自分にできる他の支援方法を考えるきっかけにしていきたいと思います。例えば、情報を周囲にシェアすること、または次のステップとして、フェアトレードや教育支援の活動に参加することなど、自分なりのアクションに繋がっていただければ嬉しく思います。そのため11月に出店する学園祭や文京博覧会へのご案内を積極的に行いました。また販売会に足を運んでくださったお客様へSmile F LAOSのSNSを周知しフォロワーを増やすことによって、他団体様からみて弊団体が魅力的に映るようになります。それは他団体様との交流の機会を増やすことにつながり、合同イベントなどの実現できる活動の幅を広げることが可能になると考えております。



36 「ESD推進ネットワーク全国フォーラム2025」への参加

開催期間・日時	2025年12月7日(日) 10:00~16:00
会場	立教大学池袋キャンパス7号館(7101教室)
主催	ESD活動支援センター、文部科学省、環境省

■ 活動内容 (概要)

ESD推進ネットワーク全国フォーラムは、ESD推進ネットワークの主たるステークホルダーが集い、ESDに関する最新動向、ネットワーク形成の状況を共有するとともに、全国各地の実践事例を学ぶ機会として毎年開催されている。

今回は、大阪・関西万博で実施された、環境省が主催する環境教育・ESDプログラム「SDGs Students Dialogue Expo 2025 (以下、「SSDE」と表記する。)」の活動成果を発表する機会として、同プログラム参加学生のうち2名が、ポスターセッションおよび「こども・ユースからの報告」に参加をした。

ポスターセッションでは、約40団体が複数の教室に分かれてポスター展示を行い、互いの取り組みについて学ぶ時間が設けられた。学校関係者から企業、地方自治体まで、幅広い主体がESDの推進に取り組んでおり、多様な視点から環境教育の実践例を知ることができた。

「こども・ユースからの報告」では、こどもエコクラブ、京都先端科学大学付属高校、東洋大学の3団体が発表を行った。私たちは、SSDEでの活動内容および成果を紹介するとともに、それを発展させ、小学生でもすぐにできるような環境アクションの提案を行った。

SSDEにおいては、東洋大学とフィリピンのイロイロ科学技術大学の学生がチームを組み、企業から提示された「アジアの海洋プラスチックごみに皆が取り組めるアクションを提案せよ」というミッションに取り組んだ。主にはSNSを用いた「意識改革」を提案し、実際にInstagramに動画や画像を投稿するという段階まで取り組んだ。今回の発表では、その中でも特に反響の大きかったリール動画を紹介した。

SSDEの活動時点では、SNS利用が活発な12~22歳を主なターゲットとして設定していたが、今回の発表では、より低年齢層である小学生をメインターゲットとして、「身の回りの持ち物の正しいリサイクルを学ぶ」という、日常生活の中ですぐに実践できる具体的なアクションを提案した。

「こども・ユースからの報告」の後には、発表を聞いた参加者同士で感想の共有をする時間が設けられた。2回に分けて行われ、近くの参加者と意見交換を行う形式であった。世代や立場の異なる参加者と直接意見を交わすことで、より幅広い世代が環境問題について考え、行動することの重要性を改めて実感する有意義な時間となった。

今回のフォーラムを通して、大人から子どもまで非常に多くの世代が環境教育に関わっていることを改めて実感した。中でも印象に残ったのは、発表後に設けられた感想共有の時間である。高校生の発表者や、こどもエコクラブに参加する児童の保護者の方と直接話をすることができ、世代や立場を超えた貴重な交流となった。私は大学生になってから環境に関する具体的な活動を始めたが、それよりも早い段階から環境問題に向き合い、主体的に行動している世代の話を聞き、大きな刺激を受けた。特に、小学生が自ら進んでこどもエコクラブに参加し活動を始めたという話を保護者の方から伺い、

そのような意識を持つ子供たちが今後さらに増えてほしいと強く感じた。本フォーラムは、将来的にすべての世代が環境問題を「特別なこと」ではなく「当たり前のこと」として考え、行動できる社会の実現を願うきっかけとなる、有意義な機会であった。

(経済学部総合政策学科4年 SDGs アンバサダー 塚原 千晴)

(経済学部総合政策学科4年 学ボラ 伊藤 楓真)



37 「エコプロ2025 (SDGs WEEK EXPO 2025)」への出展

主 催	株式会社 日本経済新聞社
開催期間・日時	2025年12月10日(水)～12日(金) 10:00～17:00
会 場	東京国際展示場(東京ビッグサイト) 東4～6ホール
目 的	①SDGs アンバサダーとしての活動を多くの来場者に伝えることで、アンバサダーとはどのような存在で、どのような取り組みを行っている団体なのかを分かりやすく説明すること。 ②企業や他大学の活動を知り、交流を通して、今後のSDGs アンバサダーの活動につながるきっかけを得ること。
来 場 者 数	総計：245人 (12月10日：40人、12月11日：104人、12月12日：101人)
企画・運営	東洋大学SDGsアンバサダー

■ 活動内容 (概要)

「日本最大級の環境見本市」として、毎年12月に東京ビッグサイトにて開催されている「エコプロ」(「SDGs WEEK EXPO」)の企画展の一部に、今年度もSDGsアンバサダーが同見本市の「大学・教育機関コーナー」へ出展を行いました。

ブースでは、本学4キャンパスのSDGsアンバサダーの取り組みや、ウォーターサーバープロジェクト「SPRING」の活動紹介ならびに成果報告などのポスター展示を行ったほか、赤羽台祭において実施したクイズを、ブースにおいても実施しました。

また「大学・教育機関コーナー」には、6月に参加をした「環境マネジメント学生全国大会」の参加校も集まり、学生による環境活動を行う大学・学生間の交流の場としても機能し、互いの出展内容から学び合うことのできる機会ともなりました。

以下、SDGsアンバサダーからの報告です。

【ブース運営について】

本イベントでは、SDGsアンバサダー環境チームの活動を紹介するポスター展示をはじめ、環境問題に関するクイズの実施、各キャンパスでの活動報告、ウォーターサーバープロジェクト「SPRING」の活動紹介を行った。出展の目的は、SDGsアンバサダーとしての活動を多くの来場者に伝えることで、アンバサダーとはどのような存在で、どのような取り組みを行っている団体なのかを分かりやすく説明できるようになること、また企業や他大学の活動を知り、交流を通して今後の新たな企画につながるきっかけを得ることであった。

来場者の反応について、SDGsに関するクイズには主に子どもたちが参加し、楽しみながら環境について考えてもらう機会となった。ウォーターサーバープロジェクトについては、「導入してみたい」「す

でに取り組んでいる」といった声があり、説明を行う中で関心の高さがうかがえた。また、ビーチクリーン活動を紹介するポスターでは、マイクロプラスチック問題への関心の高まりを背景に、説明時に興味を示して話を聞いてくれる来場者が多く、「自分の身近な海でも実施してほしい」といった意見を聞くことができた。来場者への説明を重ねる中で、どのような伝え方が分かりやすいか、次の話題へどのようにつなげると理解してもらいやすいかを徐々に掴むことができ、SDGsアンバサダーとして活動を説明する



る力の向上につながったと感じている。さらに、企業や他大学の活動の中には自団体の取り組みと近いものも多く、今後取り入れてみたいと感じる事例を知ることができたほか、ブースに来場した方と名刺交換を行う場面もあり、共同企画などにつながる第一歩となる交流を持つことができた。一方で、自団体のブース内容に関心を持っている来場者であっても自発的に立ち寄る人は少なく、積極的な声掛けの必要性を感じた。また、話を聞いてもらうためには、チラシや興味を引く展示など、来場者が足を止めるきっかけとなる工夫が重要であり、説明をよく聞いてくれる来場者に対しても、こちらから問いかけを行うことで、より双方向的なコミュニケーションにつながると感じた。

(生命科学部生命科学科2年 SDGsアンバサダー 上地 梨月)

【「エコプロ2025」の、他団体展示を見ての気づき】

他団体の展示を見学した結果、来場者の目を引き、立ち止まってもらうための工夫が効果的に行われていると感じました。具体的には、クレーンゲーム機械の設置やカプセルトイ、大学名を記載した旗などを活用している団体が多く見られました。特に、クレーンゲームやカプセルトイの「ガチャガチャ」は子どもたちの関心を集め、来場者の増加につながっていました。これらの工夫は、今後アンバサダー活動を行う上で参考にできる点であると思います。

また、活動の中で製作した物品を販売している団体もあり、活動内容を周知する手段の一つとして、販売企画も有効であると思いました。さらに、各団体が明るく親しみやすい雰囲気では活動内容を説明していたことも印象的であり、来場者との円滑なコミュニケーションに寄与していると感じました。加えて、自身が他団体の展示を訪問し説明を受けた際に、「後ほどそちらの展示も見に行く」との声をいただく場面があり、団体間の交流を深める良い機会となりました。

他団体の環境への取り組みとしては、本学と同様に、大学内へウォーターサーバーを設置したり、定期的にゴミ拾い活動を行ったりしている大学が多く見られました。その中でも特に興味深いと感じたのが、日本工業大学による「リユース傘レンタルシステム」です。この取り組みは、落とし物として回収された傘や研究室などに保管されたまま使用されていない傘を再利用し、急な雨に見舞われた際に、誰でも無料で傘をレンタルできる仕組みです。廃棄物の削減につながるだけでなく、利用者の利便性も高めており、環境配慮と実用性を両立した取り組みだと感じました。

(経済学部総合政策学科3年 SDGsアンバサダー 大関 美優)



38 学ボラ設立20周年記念シンポジウム 「山古志から能登へー20年の想いを、未来へつなぐ。」

開催期間・日時	2026年1月31日(土) 14:00~16:30
会場	東洋大学 白山キャンパス 円了ホール (オンライン配信あり)
目的	学ボラ設立20周年を記念し、旧山古志村との20年にわたる交流を振り返るとともに、能登半島地震を踏まえた今後の「関係人口」創出の可能性を探る。
参加者数	合計141人(来場者:131人、オンライン:10人)
主催	学ボラ

■ 活動内容 (概要)

【第一部】山古志が紡ぐ20年の軌跡

1. 開会の挨拶: 東洋大学学長 矢口 悦子
2. センター長挨拶: 社会貢献センター長 高山 直樹
3. 基調講演・報告
 - ・「20年の取り組みと新たな挑戦」竹内 春華 氏(山古志住民会議 代表)
 - ・「20年間の学生報告」伊藤 楓真(シンポジウム企画 ディレクター)



【第二部】能登への学びと対話セッション

4. ミニ講義: 「能登の地理的特性と学生関係人口」川澄 厚志 氏(金沢大学 准教授)
5. トークセッション: 「能登地域で関係人口を増やし続けるには?」
登壇者: 竹内 春華 氏、川澄 厚志 氏、伊藤 楓真、伊東 航洋(青いビブス 代表)
モデレーター: 高山 直樹 氏
6. 閉会(終了後、山古志マルシェ・活動パネル展を開催)

活動詳細報告

本シンポジウムは、2004年の能登半島地震を契機に発足した「学ボラ」の20周年を記念して開催された。第一部では、支援の持続性や人と人との重層的なつながりが共有され、NFTやデジタル村民といった新しい地域モデルが紹介された。第二部では、能登半島地震を踏まえ、学生関係人口や弱い紐帯を軸にした新しい関係性づくりについて議論が行われた。

参加者の感想・反響(抜粋)

- 「山古志と東洋大学の関係が、生まれる前からの縁として続いていることに学生の力を感じた」
- 「NFTやデジタル村民の話は、地方を盛り上げるための大きなヒントになると感じた」
- 「学長の『熱意を繋ぐ哲学』という言葉に感動した」
- 「トークセッションでもっと学生の声を知りたいと思った」

(経済学部 総合政策学科 4年 学ボラ 伊藤 楓真)

39 「生きる—大川小学校 津波裁判を闘った人たち—」上映会

主 催	東洋大学ボランティア支援室
開催期間・日時	2026年2月28日(土) 10:00 ~ 12:30
会 場	東洋大学白山キャンパス125周年記念ホール
参 加 者 数	59名
協 力	合同会社きろくびと

■ 活動内容 (概要)

「生きる」という映画は、2011年3月11日の東日本大震災において発生した、宮城県石巻市大川小学校での津波被害と、その後10年以上にわたり続いた遺族による裁判の過程を記録したドキュメンタリー映画である。大川小学校では、74人の子どもたちが津波により命を落とし、今も4人の行方が分らないままとっている。児童の遺族たちは「子どもたちが、なぜ安全なはずの学校で最期を迎えなければならなかったのか」という問いを抱き、真実を明らかにするために闘い続け、今もその課題と向き合っている。本作は、その親たちの葛藤や苦悩、そして社会や行政との向き合いをありのままに、丁寧に記録した作品であった。また、上映後には、監督がオンライン出演し、参加者からの質問に答えてくださる時間も設けられており、非常に有意義な会となった。以下に、上映会に参加させていただいた学生2名の感想を記載する。

●映画を拝見した感想として、まずご遺族の皆さんの行き場のない後悔や怒り、悲しみの気持ち、生き残った先生が自分自身を責め続ける思いなどを知り、本当にいたたまれない思いがした。さらに、あの日大川小にいた子どもたちの、寒くて痛くて怖かったであろう状況を想像すると、胸が締め付けられた。大川小の被害のことは存じていたつもりであったが、これほどの被害に至るまでに不可解な点がいくつもあったこと、当事者の方々の気持ち、裁判に至るまでの経緯など、初めて知ることが多くあり、改めて知っておくべき出来事であると感じた。

映画の中で特に印象に残った点は、遺族の方々が「学校側の責任追及」ではなく「あの日何が起こったのか事実を知りたい」という思いから裁判を続けてきたことである。ご遺族の方々は、単なる補償や責任の所在の話ではなく、二度と学校現場でこのような悲惨な事態が起きてほしくないという思いで、「なぜ避難の判断が遅れたのか」「教育機関として事前に備えることができたのではないか」といった構造的な問題と向き合われていた。大川小の出来事から学び、教訓を今後に生かしていくためにも、この問題は他人ごとではなく、社会全体で意識的に知り続けていく必要があると感じた。

●あの大きな震災から約15年。当時を知らない子どもたちが沢山生まれ、少しずつ私たちの防災意識も薄れ、自然災害に対する対策や意識などが二の次になりつつある。しかし、能登の震災で仮設住宅に移住された方がおっしゃっていた、「何もない時から常に様々な非常事態に備えることの重要さ」

をこの映画を見て非常に強く思い起こされた。能登の海沿いの地域の方々は防災意識が非常に高く、防災訓練の参加・防災バックの準備を常に行っているご家庭が多かったのにも関わらず、地震が来てから訓練通りに行動できた方は少なかった。ある方は、すぐに逃げられるように防災バッグを玄関に置いたのだが、そもそも玄関が崩れてしまいそのまま裸足のまま、とにかく逃げ続けた方もいた。このように、「平時」のときから備えていても「非常時」に何が起こるかは全くわからないのが正直なところであるが、常に様々な非常事態を予測し、準備を行うことの重要性を被災した方々は実際に感じたそう。

しかし、「学校」という子供たちの笑顔が集まる場で、大人たちの責任によって、子供たちの最期が「学校」になってしまうことがどれだけあってはならないことか。実際に経験してからでは全く遅く、ましてやよく登り、よく遊んでいて安全だと認識していた場所、5分もかからず到着するあの山になぜ逃げようとしなかったのか。雪の降る中恐怖に怯えていた子供たちが、なぜあの校庭に50分以上も放置されたのか。学校の防災に関して、教職員の安全場所に対する知識の低さや、非常事態にもかかわらず現状で最適な方法ではないマニュアルの通りに進めたこと、そもそも更新される防災訓練の内容をしっかりと実施していなかったこと、全てにおいてしっかりと対策ができたはずのことである。先ほども話した通り15年が経った今、地震に対する意識の低さは非常に高まり、そもそも大きな地震を経験していない子供たちも多く存在している中、この裁判を闘い続けたご遺族の方々がいること、このように学校現場で起こった人災ともいえること事象は、必ず語り続けなければならないと強く思う。ぜひ学校現場の教材用として、多くの方々に見ていただきたいと感じた。

(文学部 第2部 東洋思想文化学科2年 青いビブス 山崎 ゆらら)
(福祉社会デザイン学部 社会福祉学科2年 青いビブス 細井 瑞希)



40 ゴールボール体験会2026

講 師	- 山口凌河さん（東洋大学OB） - 川嶋悠太さん - 武田賢太さん - 永野陽希さん
開催期間・日時	2026年3月1日（日） 14：15～16：00
会 場	東洋大学赤羽台キャンパス HELSPO HUB-3 多目的室1
目 的	①本学学生がボランティア活動（特に、福祉・スポーツ分野）に興味を持つこと ②パラスポーツ体験会の参加や運営に興味を持つこと ③パラアスリートを応援する人が増えること ④障害への理解が深まること ⑤東洋大学OBのパラアスリートと交流が生まれること
参 加 者 数	22名（講師の方を除く）
主 催	SDGs アンバサダー（ダイバーシティチーム）

■ 活動内容（概要）

6月に行ったパラスポーツ体験会に引き続きゴールボール体験会を行いました。今回は東洋大学の学生だけでなく、桐ヶ丘団地の朝活*¹から一般の方にも参加していただきました。

最初に、ペアとなって1人がアイシェードを装着し、もう1人が動きを伝えるという体験をしました。アイシェードを着けた人は目が見えない状態を、動きを伝える人は身振り手振りなしで、言葉で伝えることの難しさを体感しました。

次いで、ゴールボールについて知るためにパスとブロックの練習を行いました。床に横向きで寝るような体勢でブロックすることに驚きの声が多く聞かれました。その後、チームに分かれ、アイシェードを着けた状態でのコミュニケーション練習をしました。目が見えない状態では、音が大切となります。初めは戸惑っている人が多かったのですが、次第に声出しをしたり手を叩いたり積極的に音を出し、コミュニケーションを取ることができました。

最後に3人グループに分かれ、試合形式で体験を行いました。講師の方の声掛けでスタートし、順番にボールを投げました。その後は希望制で2回目や実際の試合時間での体験を行い、ゴールボールという競技の特徴や楽しさを知ることができました。

体験を終えたあとは、選手の方へのインタビューを行い、今の目標や日々の練習で心がけていることなどを聞きました。「楽しく学ぶ」という目標に沿った充実した体験会となりました。



【参加者の声】

- 難しいゲームだと思っていたが、初心者でも試合に参加しやすかった。
- 視覚が遮断されることで、自分自身の行動に自信がなくなり、周囲の環境が怖く感じた。普段どれだけの情報を視覚に頼っているのかを思い知り、そのありがたみを実感した。
- 選手の方の日常生活に関するお話が印象的だった。注意書きや文字案内だけでは、視覚に障がいのある方にとって十分な情報源にならないというお話から、情報保障の在り方を考える必要性に気づかされた。
- ゴールボールを実際に体験できたことはもちろんですが、視覚障がいを持っている選手の声聞いたことが良かったです。
- 体験会という場だからこそ、初対面の参加者同士が見えない状況下で自然と声を掛け合う姿が見られ、パラスポーツが持つ魅力とイベントの意義を実感できた。
- 今回来てくださった選手の方々はとても話しやすくフレンドリーで、みんな見えてるんじゃないか!?って思うくらいの的確な指示や説明でとても驚きました。
- 視覚以外の感覚や情報を活用して体を動かすことの怖さを実感したが、それと同時に、周囲の誘導をはじめとした温かい声かけが頼りになり、とてもありがたかった。
- 視覚を遮断された状態の緊張感とコミュニケーションの重要性を学ぶことができた。

【運営メンバーの声】

- ゴールボールを現役で活躍されている選手の方に教わることでとても貴重な経験だった。また、最後の質問などするトークが、多くの人が質問をして、色々なお話を聞くことができてとてもいい時間だった。ゲーム中にボールを投げる時、私は何も見えず分からないのでとりあえずまっすぐ行くことだけ考えてなんとか投げていたけど、選手はどんなことを考えて投げているんだろう、見えなくても感覚では見えているのかな…!?ととても気になった。実際の試合でどんな攻防が繰り広げられているのか、次のパラリンピックで選手の方々が活躍されている姿を是非見てみようと思った。
- 今回の体験会は、学生だけでなく地域の方にも参加していただき、ゴールボールという競技を知ってもらえる良い機会となった。実際にアイシェードを着けて視覚以外の感覚で動く体験を通し、ゴールボールの特徴や面白さだけでなく、視覚障がいについての理解も深められた。音が頼りになる中で、初めは戸惑う人が多かったが、徐々に声を掛け合い積極的に取り組む姿が見られ、スポーツを通じた交流の大切さが実感できた。前回のゴールボール体験会は私自身にとって初めての運営だったため、反省点が非常に多かったが、今回はその反省を活かし、余裕を持った運営ができたと思う。参加した方々に、ゴールボールやパラスポーツについて興味を持ってもらえていたら非常に嬉しい。

(法学部企業法学科2年 SDGs アンバサダー 山田 結良)

*1：東京都北区桐ヶ丘地区に所在する「桐ヶ丘中央商店街」において、毎週水曜日の午前9時から行われている活動。地域住民の孤立予防と地域活性化を目的に、体操・朝食・社会参加を三本柱として令和元年6月にスタートした地域活動のこと。(参考：社会福祉法人北区社会福祉協議会発行資料)



41 「アースデイ川越in昭和の街 2026」への出展

開催期間・日時	2026年3月7日（土）10：30～14：30
会 場	蓮馨寺（埼玉県川越市）
目 的	ゴミ分別ゲームを実施した。来場者にゴミ分別の重要性を伝え、日常生活の中で環境に配慮した行動をとるきっかけを作ることである。また、ゲーム形式にすることで、環境問題をより身近に感じてもらい、幅広い世代に興味を持ってもらうことも目的としている。さらに、来場者との交流を通して地域とのつながりを深めるとともに、自分たち自身も環境問題への理解を深めることを目指した。
参 加 者 数	約50人
協 力	蓮馨寺、川越昭和の街の会、NPO 法人日本アメニティ研究所

■ 活動内容（概要）

2026年3月7日土曜日に東洋大学総合情報学部の小瀬博之教授が実行委員長を務めるアースデイ川越に参加しました。SDGs アンバサダー（川越チーム）としては「ゴミ分別ゲーム」の出店を行いました。約50人の来場者に参加していただき、大人から子供まで幅広い世代の方々に楽しんでいただくことができました。

ゲームの題材として、ペットボトルや食べ物（生ゴミ）、乾電池、蛍光灯、段ボール、油をしみこませた布、CD、写真、電球、緩衝材、鍋、フライパンなど、日常生活で迷いやすい多様なゴミを使用しました。

具体的なゲームの流れとして、題材となるゴミの名称が入ったカプセルを用意し、参加者は3つを引いたカプセルの中身を確認した上で、ゴミの種類が書かれたカゴに正しく分別して投げ入れる形式としました。また、ゴミの種類ごとに難易度を設定し、正解に応じて得点を算出する仕組みを取り入れました。ホワイトボードを用いてリアルタイムでランキングを更新することで、参加者が楽しみながら意欲的に取り組めるよう工夫いたしました。ゲーム終了後には、アンバサダーから正解・不正解の詳しい解説を行いました。

今回のゲームにおける分別の正解ルールは「川越市」のルールに合わせて実施いたしました。当日は近隣の市町村からの来場者もいらっしゃり、お住まいの地域とは一部異なるルールもありましたが、参加者の皆様はご自身の地域のルールと比較しながら積極的にゲームに参加してくださいました。

また、ご家庭でまだ具体的なゴミ分別を経験していない小さなお子様たちにとっても、このゲームへの参加が分別の知識を学ぶ非常に良い機会となりました。

結果として、多くの来場者にゴミ分別について関心を持っていただき、楽しみながら学べる場を提供することができました。さらに、アースデイに出店されていた他の参加団体の方々とも交流し、たくさんの意見交換を行うことができました。本活動を通じてよい評価をいただきました。

今回このイベントに初めて参加するにあたって、運営学生のなかで何をするかを考えるなどの準備をしましたが、たくさんの方々に楽しみながらゴミの分別について学んでもらえたのではないかと感じました。他の参加者の方と環境問題について意見交換をし、一緒に企画をやれたらいいねと言ってくれたところもあったので今後の活動にもつなげていきたいと思います。

（総合情報学部総合情報学科2年 SDGs アンバサダー 柳鶴 泰晴）



42 IKEA 横浜 CSR スタディーツアー

開催期間・日時	2026年3月9日(月) 10:00~13:30
会場	IKEA 横浜ストア
目的	社会貢献を行う企業に訪問し、社員の方にお話を聞きながら取組を学び、また社内見学をすることで、様々な角度から企業を知り、視野を広げる。
参加者数	14名 ※主な内訳は、以下の通り。 【内訳】学生12名、引率2名
協力	IKEA 横浜

■ 活動内容 (概要)

学生のキャリア形成の手助けと企業のCSR活動を学ぶために、IKEA 横浜店へツアーを実施した。はじめにIKEA 横浜店のCSR担当より、会社の「理念」と「サステナブル」に関する説明を受け、店長(本学社会学部卒)よりIKEA 横浜ストアでの事業展開についてお話をうかがった。その後実際に店内を見学しながら各展示セクションでのコンセプトや店長の思い入れ等をお話頂いた。店舗見学後は併設のレストランにてランチを取りながら、質問等にお答えいただいた。学生達はメモを取りつつ真剣に取り組み、質問も多く出る等、積極的に参加をしていた。

【参加者アンケートより】

● 環境・サステナビリティへの取り組みの理解

実際の店舗の工夫を見たり直接話を聞いたりしたことで、IKEAが環境を良くするための活動やサステナブルな取り組みに力を入れていることを実感できた。

● フラットな社風への共感とキャリア観の形成

上下関係がなく「一人ひとりを尊重する企業文化」を知り、このような職場で働きたいという意欲が高まった。また、自分が仕事をする上で何を大切にしたいかに気づくきっかけになった。

● 先輩社員(マネージャー)への親近感と講話の分かりやすさ

同じ大学の卒業生がマネージャーとして活躍していることに喜びを感じ、その分かりやすい説明が非常に勉強になったと高く評価している。



43 みらいのたねプロジェクト

講 師	東洋大学SDGsアンバサダー 川越チーム
開催期間・日時	2026年3月24日(火) 09:00~12:00
会 場	福岡放課後児童クラブ
目 的	小学生がゲームを通してゴミの分別方法を学び、普段からゴミの分別を意識してもらう。学んだ知識を生活で活用することで、家族中に広めるきっかけをつくる。
参 加 者 数	約80名
協 力	福岡放課後児童クラブ、東洋大学ボランティア支援室

■ 活動内容 (概要)

今回の活動では、ふじみ野市にある「福岡放課後児童クラブ」を訪問し、子どもたちと一緒にごみ分別について学ぶワークショップを行いました。まず最初に、ふじみ野市の分別ルールをレクチャーした後、身近な持ち物を使った4択クイズに挑戦してもらいました。題材に選んだのは、上履き、本、水筒、ランドセル、リコーダーの5つです。子どもたちにとって馴染みのあるものばかりですが、実は分別の判断が少し難しいアイテムをあえて選んだことで、「これはどちらかな?」とみんなで頭を悩ませながら、楽しく知識を深めてもらうことができました。

クイズで盛り上がった後は、体を動かしながら学べる「ごみ分別ゲーム」を実施しました。このゲームは、ごみの絵が描かれたカプセルを選び、その分別方法を答えたとえで、正解のカゴを狙ってカプセルを投げ入れるという体験型の企画です。知識としての正答はもちろん、投球が成功した場合でもポイントがもらえるルールにしたことで、分別の正解が分からず不安な子も、最後まで楽しみながら参加してくれていたのが印象的でした。

当日の運営にあたっては、ゲームを進行する班と、子どもたちとじっくり対話する交流班に分かれて行動しました。ゲーム班は班対抗のランキング形式で盛り上げ、交流班は子どもたちの輪に入って日常会話を楽しみつつ、今回のアクティビティについて「どう感じたか」や「もっとこうしてほしかった」といった生の声を聞き取っていききました。子どもたちの素直な意見に触れることで、自分たちが用意した企画の手応えを感じると同時に、今後の活動に活かせる多くのヒントを得ることができました。

【感想】

小学生が企画に全力で参加してくれてとてもうれしかったです。楽しそうに、元気に企画に取り組む姿を見て、改めて私たちも力をもらい、より一層SDGsのきっかけ作りをしていきたいと感じました。また、実施したクイズやゴミ分別ゲームに対してのリアクションがかなり良かったため、常設企画として今後運営していきたいです。

(理工学部応用化学学科1年 SDGsアンバサダー 熊谷 海琉)



44 東洋大生がワークショップで考えるSDGs 「身近なものから持続可能な開発について 考えてみよう」

講 師	認定NPO 法人開発教育協会 (DEAR) 松川 清美さん
開催期間・日時	2025年4月19日 (土) 10:00~12:00
会 場	ハイブリットでの開催 オンライン (Zoom) 東洋大学 白山キャンパス 1204教室
目 的	• SDGs 初心者から上級者まで楽しく学ぶ機会をつくること。 • 学生自身が、どのようにSDGsと生活が関わっているのか接点を知る。 • どのような行動がSDGs達成につながるかを考え、話し合う場をつくる。
参 加 者 数	17人※主な内訳は以下の通り 【内訳】東洋大生15人 ボランティア支援室職員2名
協 力	認定NPO 法人開発教育協会 (DEAR)、東洋大学SDGsアンバサダー

■ 活動内容 (概要)

「東洋大生がワークショップで考えるSDGs」の実施は、今年度で6年目となった。今回も主に初めてSDGsを学ぶ学生や、新たに「SDGsアンバサダー」に登録された学生を対象に実施された。講師は、NPO 法人開発教育協会 (DEAR) の松川清美さんにお越しいただいた。

ワークショップは「身近なものから持続可能な開発について考えてみよう」とのテーマをもとに、①オリエンテーション、②クイズ、③写真で知るパーム油、④ロールプレイ、⑤わたしたちにできること、⑥ふりかえり、という流れで実施された。各項目でチャットや、グループでの話し合いが行なわれ、終始発言のしやすい雰囲気であった。最初のオリエンテーションの際、講師より参加にあたって「立派なことを言わなくてOK」や「話を聞く・否定をしない」、「楽しもう」といった今回のワークショップにおける約束事項を確認した。

また、参加学生同士の自己紹介では、各自が自宅にあるお菓子を持ってきて、それを皆さんに紹介をした。そうしたオリエンテーションを経て、オンラインではあったが、緊張感が少しずつとけていった。その後、身近なモノの共通点クイズを通して本題である「パーム油」が導入された。さらにプランテーションの写真などを通して、参加者の「パーム油」への理解を深めた。

以上を踏まえたうえで、参加学生のうち6人がパーム油に関わる人になりきって、講師の説明上ロールプレイが行なわれた。ロール役の6人を中心にプランテーション開発について議論が進められた。

役を担当しなかった学生も、その後のグループディスカッションで自分の意見を話し合い、考えを深めることが出来た。

最後に、振り返りが行なわれた。「もっと知りたいこと」や「自分だったら何ができるのか」という講

師からの間を各自で考え、グループで共有をした。多くの学生が当事者意識を持ち、SDGsには今回のパーム油のように答えが明確に分からない問題があり、そういった問題へのアプローチ方法も学ぶ機会となった。

運営としては参加者が各グループに分かれ役を演じることによって自分事としてSDGsを捉えていた点を見ることができ良い経験になった。

今回のワークショップを通じてSDGsに触れる機会が初めての人も、何度か関わったことがある人も関係なしに理解を深めることができ、自分事として物事をとらえ考える機会となった。今回学んだことを活かして実践に関わって行きたいと感じた。

アンケートでも、参加された学生より多くの感想をいただいた。下記、一部抜粋で記載する。

- とても和気藹藹としていて、楽しかったです。隠れアンバサダーやアンバサダーの方々が和やかな空気感とともに引導してくださったので、安心して参加できました。硬い空気感がなかったところが私に合っていました。内容は、SDGs 初学者の私にも分かりやすい内容で嬉しかったです。
- SDGsについて現地の現状、国のために、自分のためにそうせざるを得ない切実な理由など、いつもの生活ではあまり考えないことも考えられたからです。
- 自身の身にしみて感じるほど内容が伝わってくるワークショップでした。積極的にコメントをする場面や意見を交換する場面も取り入れられていたのでたくさん考えて楽しく参加できました。
- 昨年度から引き続き参加し、改めて自分の消費行動を見直すきっかけになったから。
- SDGsについて興味があって、同じように問題解決に向けて意欲のある方々と語り合うことができ嬉しかったからです。
- SDGsについて、特にパーム油がどのような影響を与えているのかということが非常にわかりやすく、環境問題についてより興味・関心をもてたため。
- 普段考えたことのないSDGsについて考える機会になって、実際に自分で考えたことを共有して周りの意見も聞くことができとても勉強になったから。
- 自発的に考えたり、他者の意見を聞くことで考えが深まることが多かったからです。ロールプレイをやった方々の演技が非常に印象に残りました。
- ロールプレイをしていただくことで、アブラヤシ農園に関する現状の問題がとてもわかりやすく学ぶことができたため。また、その問題点において、様々な立場の視点からの思いや考え方ということを深く知ることができたため。この問題点を解決するために私たちに何ができるか、どのようなことができるかということに関して、様々な人の意見や考え方を知ることができたため。
- クイズから身近な問題を知ることができて、問題を考えやすくなったから。そして、まとめ、振り返りで改めてSDGsについて考えていきたいと思ったから。
- 人間と自然の両立ということは簡単に言えるけど、人間から歩み寄らなければ解決は出来ない問題なのにそれが簡単に出来ないという矛盾のようなものがあるのかなと感じました。
- SDGsは私自身のためであり、先の世代が生きるために必要な事項であると感じます。まずは知ることから始めたいです。
- SDGsと聞くと難しく思う人が多いと思うし、実際目指すところが壮大すぎてなかなか取り組むのは難しいが、まずは身近なところから考えをめぐらせていきたいと思う。

(国際学部国際地域学科3年 SDGsアンバサダー 塩澤 尚)



45 盲ろう者理解ワークショップ

講 師	東京盲ろう者友の会
開催期間・日時	2025年6月21日(土) 13:15~16:00
会 場	東洋大学 赤羽台キャンパス WELL-HUB2 5階 ボランティア支援室
目 的	①このワークショップを通じて盲ろう者への理解を深め、社会で生きづらさを抱えている盲者や聾者のアライ(理解し、支援する人)になる。 ②「見えない・聞こえない」という多様性に気づき、他者を尊重出来るようになる。 ③SDGsや人権の意識を向上させ、「共生社会」や「インクルーシブな社会とは何か」について考えるきっかけになる。
参加者数	23名
協 力	認定NPO法人 東京盲ろう者友の会

■ 活動内容 (概要)

【内容】

①盲ろうについての概説 (30分)

盲ろう者の障害状況、生活実態、コミュニケーション方法、支援方法、福祉制度などについて解説をしていただいた。

②盲ろう当事者の講演 (30分)

盲ろう者本人から、自分自身の成育歴や障がいを負った経緯、心理状態の変遷、日常生活における困難、必要としている支援等について講話をしていただいた。

③盲ろう疑似体験 (60分)

盲ろうの状態・心理面の共感的理解を図ることを目的に、視覚と聴覚の両方を遮断して行動するワークショップを行った。

- 1) 目隠しと耳栓をして何も見えないまたは相手からの声が届かないことを確認する。
- 2) ペアの人には指示を受け、それ通りに動いてもらえるように手に文字を書く。
- 3) 移動をして教室から出る・ペアの人が離れてみる・ペアの人を入れ替えるなどして、盲ろう者は実際どのような状況で過ごしているのかを体験する。

④簡単な手話や活動 (30分)

挨拶などの簡単な手話や、盲ろう者は手話通訳士の方とどのような活動を行ってきたのかを説明していただいた。



46 富士樹海清掃ボランティア（春）

開催期間・日時	2025年5月18日（日） 12：00～14：30
会 場	国道139号沿い 青木ヶ原樹海
目 的	自然の中にどれだけのごみが落ちているのか、現実を知ること。 環境保全の重要性を理解すること。 富士山と青木ヶ原樹海のおりなす自然を理解すること。 学生同士が協力し合う大切さを知り、交流を図ること。
参 加 者 数	学生49名 職員3名
協 力	認定特定非営利活動法人 富士山クラブ

■ 活動内容（概要）

認定特定非営利活動法人「富士山クラブ」のご協力のもと、青木ヶ原樹海にて清掃活動を実施しました。今回は、2つのグループに分かれ、国道沿いの歩道および樹海内でごみ拾いを行いました。各グループ内では、燃えるごみを回収する人、不燃ごみ（空き缶など）を回収する人といった形で役割分担を行い、互いに声をかけ合いながら協力して多くのごみを拾いました。

落ちていたごみの多くは、たばこの吸い殻、空き缶、お菓子のパッケージ、中身の入ったペットボトルなどでした。特に印象的だったのは、空き缶などを詰めたごみ袋が長期間放置され、近くの木の間と絡まってしまっていたものを発見したことです。また、今年もシカの落とした角を見つけることができ、青木ヶ原樹海の自然を肌で感じる機会となりました。

今回の活動で収集したごみの総量は、70kgを超えました。この量は、昨年（2024年）5月に実施した際の130kgに比べて少なくなっており、このまま年々ごみの量が減っていくことを願っています。

自然環境を保全するために、日頃の生活においても、より一層ごみの分別を心がけていきたいと思っています。今回の活動を通じて、富士山および青木ヶ原樹海の環境保全の重要性について、改めて理解を深めるきっかけとなりました。

（経済学部 総合政策学科 2年 SDGsアンバサダー 大関 美憂）

【参加者の声】

- ・拾う心より捨てない心を大事にして今後も生活していきたい。
- ・たくさんゴミを拾えて良かったが、その分だけ捨てられているという現実をどうにかしないといけないため、樹海のゴミ不法投棄問題の難しさを実感した。
- ・富士山の近くで綺麗な空気に触れ、自然の尊さを実感した。
- ・ゴミ拾いも普段とは違った足場の悪い場所で行うことは、いい経験になった。
- ・先輩後輩関係なく話せて楽しかった。ゴミ拾いボランティアが必要のない世界になってほしいと思った。
- ・人があまり通らない場所であればゴミを捨ててもいいと考えている人が多いと実感し、解決が必要な課題だと感じた。
- ・自分が想像していたよりもゴミの量が多く、定期的な清掃が求められていると感じた。ポイ捨ては

身勝手な理由によるものであるにもかかわらず、それが環境問題へ大きく影響しているため、無くしていかなければと実感した。



47 スポGOMI 東洋大学in 朝霞キャンパス

開催期間・日時	2025年6月1日(日) 9:00~13:00
会場	東洋大学朝霞キャンパス周辺
目的	地域の環境保全と景観の向上を図ること。 SDGs目標11と13の観点から学生が自ら行動する機会を提供すること。 ゲーム性を取り入れて環境活動への参加ハードルを下げ、関心を高めること。 大学と地域社会とのつながりを強め、信頼関係を構築すること。
参加者数	学生34名 教職員2名
協力	一般社団法人ソーシャルスポーツイニシアチブ、日本財団ボランティアセンター、 東洋大学甫水会、ボランティア支援室

■ 活動内容 (概要)

一般社団法人ソーシャルスポーツイニシアチブさんのご協力のもと、スポGOMI 東洋大学in 朝霞キャンパスを実施しました。各グループ4人が9チームになって、朝霞キャンパスを中心に1.5km範囲の朝霞市内のごみ拾いを行いました。事前に決めた作戦通り、チームリーダーを核に燃えるごみを集める人や不燃ごみを集める人、たばこの吸い殻を集める人などと役割分担をし、お互いに協力しながら90分という時間制限の中でゴミを拾いました。

落ちていたごみの多くは、たばこの吸い殻やお菓子のパッケージ、ペットボトルでした。中にはほうきや掃除機など、通常では外にあるはずのない大きなごみも落ちていました。

全体で拾得したごみの量は合計37.02kgで総ポイント数は4,932ポイントです。今回が朝霞市内では初めての開催だったため、この量が多いか少ないかは個人の感じ方で左右されますが、この量を指標に次回の結果と比べていきたいと思いました。

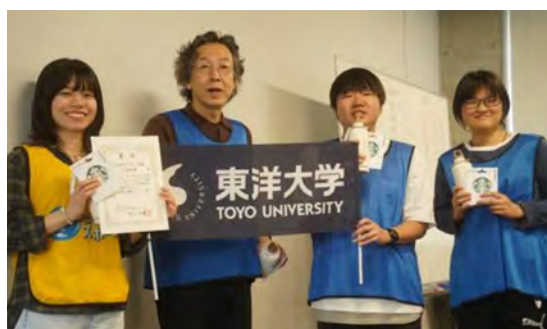
ゴミ拾いは一般的に「地味」「面倒」というネガティブなイメージがありますが、スポーツという形にすることで、自発的で楽しい活動に転換できます。日常ではあまり意識することのないごみに目を向けることで、環境問題の身近さを実感するきっかけになるのだと思いました。

【参加者の声】

- 時間が思ったより短く、ごみを十分に拾いきれなかった。初対面の人と仲良く話せたのが良かった。
- みんなで朝霞の街をきれいにすることができてよかった。
- 協力してごみを拾うことで達成感があり、とてもいい経験になった。
- たばこの吸い殻がとても多く落ちていたのが気になった。
- ごみ拾ってこんなにも楽しくなるのだなと思った。普段あまりゴミを意識して外を歩かないけれど、意識すると思ったよりたくさん落ちていて驚いた。
- 川沿いよりも飲食店の周りや道路沿いなどにゴミが多いことを知った。
- きれいなのは見えるところだけであると分かった。
- ごみ拾いとスポーツを融合した発想がとても面白く、心も体も清々くなりました。
- 意外と私たちの生活に支障をきたすほどのごみがあったわけではないが、ポイ捨てをした後は誰

かの労力を割いていることにつながります。その労力は減らすべきであり、定期的な呼びかけが大切だと痛感しました。

- スポゴミを通じてごみ拾いが楽しくなった。仲間とスポーツ感覚で活動することで目的意識が高まった。



48 富士樹海清掃ボランティア(夏)

開催期間・日時	2025年9月9日(火) 12:30~14:30
会 場	国道139号沿い 青木ヶ原樹海
目 的	富士山麓の青木ヶ原樹海清掃を行い、環境保全と自然との共生を体感することを目的とする。今後の生活で参加者がなにかアクションを起こすための一つの気づきになってほしい。また、他のボランティアやSDGsの企画に参加する意欲を高める。
参 加 者 数	38名
協 力	認定特定非営利活動法人 富士山クラブ

■ 活動内容 (概要)

2025年9月9日(火)「認定特定非営利活動法人富士山クラブ」の皆様にご協力をいただき、国道139号沿い青木ヶ原樹海で清掃ボランティアを実施しました。

当日は企画者であるSDGsアンバサダー7名と一般参加学生31名の学生が清掃活動に参加をしました。

現地に到着後はバスごとで、2チームに分かれて活動を開始し、国道139号沿い青木ヶ原樹海周辺をゴミの分別を行いながら清掃活動を実施しました。

【運営学生からの声】

・今回は38名の学生に参加していただきみんな積極的に沿道のごみを拾ってくれました。バスレクについてもほかの運営メンバーが良いものに仕上げて持ってきてくれたおかげで参加する学生同士の仲を深めることができました。

・アンバサダーとして課外のボランティアに参加できた経験は、今後の活動にも活かせると思います。この清掃活動について、学校の課題レポートと学祭の展示で紹介する予定なので、今回見聞きしたことや写真を用いた具体的なものを完成させたいと思います。今回は貴重な経験ができて良かったので、また機会があればぜひ参加したいです。

・今回の活動を通して、ゴミの分別の大切さや環境問題について改めて考える機会となりました。少しでも富士山の知識について自分たちも学ぶことが出来てとても貴重な経験になりました。

【参加学生の感想】

- ・初めて遠出する企画に参加させて頂いて、ゴミをポイ捨てしてない人がポイ捨てした人のゴミを拾わなければいけないこと、その大変さ、富士山クラブの人の取り組みを少しでも体験することができて良かった。暑い中、ゴミを拾うことでSDGsの達成がどのくらい難しいか理解しました。
- ・こういった機会でないと富士樹海まで行き清掃活動をするのではないと思うので良い経験となりました。また、改めて環境問題について考えるきっかけとなりました。
- ・前回も参加させて頂いたのですが、前回よりも重量が重くのゴミが集まり達成感があった反面、前回よりも多いということはゴミも減っていないということなので、ただ単にゴミを沢山回収できてよかったと思うだけでなく、その深いところまで考えを巡らせられればいいなと思いました。と

でも学びある活動でした。

- 今回の富士樹海清掃活動を通して、一見落ち葉しかないように見えても色々なゴミが広範囲にあり、清掃活動の重要さを知ることができました。今後も様々な形で社会貢献をしていきたいと思いました。
- 何においてもそうですが、ポイ捨てをする人達の神経が理解できません。せめてものご丁寧に歩道に置いていただく方がまだありがたいかと、これはごみ拾いボランティアをする人達目線の話ですが。樹海の中に潜って取りづらい場所にあると本当に面倒だったからです。ペットボトルや缶、パッケージ類のゴミが多いなと思います。その人の意識の問題なので標識などを作って啓発するでは変わらないなと思いました。
- 富士山クラブの方とお話した中で、昔に比べてゴミのポイ捨ては減ってきてはいるが、まだまだ多いという現状が本日の活動からも理解したので印象的でした。月に1回このような活動をされているとのことでしたが、ゴミの手放しやすさを考えると追いつかないなと思いました。そのため、ゴミをポイ捨てさせず持ち帰ってもらうための工夫を考えなくてはならないと感じました。富士山やその周辺環境を守るために、私たちにできることは何かを考えるきっかけになり、活動に参加して良かったと思いました。



49 NICE日本国際ワークキャンプセンター プログラム(2025夏休み)

開催期間・日時	2025年9月12日(金)～9月14日(日)
会場	福島県いわき市田人町
目的	• ボランティア • 活動地域の魅力や良さ体験・発見 • 参加者同士のチームワークを高める。
参加者数	学生10名
協力	NPO 法人NICE日本国際ワークキャンプセンター、ボランティア支援室

■ 活動内容(概要)

福島県いわき市田人町に田人ワークキャンプ・ビレッジを構える下條真輝(しもさん)と由美子さん(ゆみちゃん)は昔ながらの田人の風景と暮らしを守っていくために「田人ワークキャンプ・ビレッジ計画」を始めた。「地域の中の人と外の人とで一緒に作るまちにしたい」というコンセプトがあります。「田人ワークキャンプ・ビレッジ計画」以外にも地元の子ども向けに開催している「自然体験教室」や田人のブランド米計画などを手掛けています。このように田人を盛り上げる若手、しもさんが手がけるワークキャンプに参加しました。今回は地元のいちご農家さんの苗植えボランティアもさせていただきました。

以下、本学学生からの報告です。

<1日目>

田人ワークキャンプ・ビレッジに到着し、ワークキャンプ・ビレッジにいた子どもとUNOをして遊びました。その後参加者同士自己紹介を行い、しもさんからワークキャンプ・ビレッジについて説明を受けました。夕食は参加者間で決め、夕食のカレーを分担して作りました。

<2日目>

2日目は2グループに分かれて行動しました。

1グループ目はいちご農家さんのもとへ訪れいちごの苗植えを一緒に行いました。苗植えでは力作で体力を用いる場面が多かったが地域の方と協力して行うことが出来ました。

2グループ目はワークキャンプ・ビレッジで地元の子ども向けに開催されている「自然体験教室」のお手伝いを行いました。

最初に子どもたちと仲を深めるためアイスブレイクを学生間で考えました。アイスブレイクではジェスチャーゲーム等を通じて幸先の良いスタートを切ることが出来た。その後は大学生と子どもたちが一緒になって昼食を作りました。昼食では唐揚げを作りました。子ども達にとっては初めて揚げ物料理にチャレンジする機会であり、安全に留意しながら完成させることが出来ました。この経験は子どもたちにとって貴重な経験になりました。午後は焚火の窯を作る予定でしたが、悪天候により、しもさん・子どもたち・2グループの学生とで体育館で室内遊びを行いました。子どもたちの元気の良さに圧倒

され終盤には疲れ果てるまで楽しく遊ぶことが出来ました。

<3日目>

3日目はワークキャンプ・ビレッジにて2日目に出来なかった焚火の竈作り、ピザづくりの準備、ピザ窯の火力調整の三つに分かれて作業を行いました。

焚火の窯づくりではブロック塀を周りにおき、大きな石もブロック塀に沿って設置しました。石が重く大変でしたが、協力して行うことが出来ました。最後に竈の周りに鉄の網を設置し低く設定するため余分な部分を電動カッターで切断しました。メンバー全員初めての貴重な経験となりました。

ピザづくりの準備は生地から作り、生地の発酵では実際に膨らんでいるのを感じた。

火おこしではピザ窯の火を高温に保つため薪を割き、窯に入れ続けました。

3つの作業が終わった後全員でピザを作り、昼食として食べました。

【参加学生からの感想】

- 現地での3日間のプログラムはどれも普段の日常で体験できないようなものしかなく、特にみんなでご飯を協力して作ることや、知らない子供たちと一緒に一日を過ごす事などの貴重な経験が出来ました。また、現地スタッフの方々もとても優しく、楽しくラフに自分達と接してくれたため、より和やかな雰囲気でのコミュニケーションを取ることができました。
- 私は二日目にいちごの苗植えを手伝わせて頂きました。農業は機械に任せれば良いと失礼なことを思っていました。休憩中に農業について農家さん達とお話しする機会があり、農業は手でやるからこそいいものが作れ、農業機器はそこまで性能が良くないとおっしゃっていました。そこから、行ってみて体験しないと大変さはわからないということを深く学ぶことができました。
- 主催者さんが、子ども自然体験教室を開催している理由を聞いた。現代では子どもが遊べる公園が減っており、理由として、大人たちが騒音や危険を回避するために子どもから挑戦の機会を奪ってしまっているからだとおっしゃっていた。最近外で遊ぶ子どもを見かけるたびに、ゲームばかりで残念な気持ちになることが多かった。しかしその原因は周りの環境であり、大人達でもあったのだと気付かされた。子どもを守るためにリスクを避け、禁止していたことが、結果的に子どもたちのためにはならないことがあると知り、新たな発見となった。
- 今回の活動を通して子供たちとより良いコミュニケーションの取り方を学んだ。しもさん家の自然体験プログラムでは、子供たちになんでもやらせてあげていて、唐揚げを作る際には子供たちにほとんどの作業を任せており、普段できない火遊びができるように焚き火台を作っていた。そういったように、危ないから、子供だからやめなと言って子供の時には体験できないようなことを体験させてあげていたことから、子供たちの挑戦を否定するのではなく、それを応援してサポートする大人の体制が重要なのだと学んだ。
- 印象に残ったのは参加者や現地の人との関わりで、今まで初対面で馴染めるのかが不安で、こういったプロジェクトを避けてきた私にとって考え方が変わるきっかけになった。参加者は10人と大人数だったが、たった3日間で互いの価値観を知り理解することで驚くほど仲良くなることができた。人との交流が楽しいものであり、自分の考え方の幅を広げるのに役立つものなのだと知ることができた。



50 「里親子デイキャンプ」

講 師	小野道子先生（東洋大学福祉社会デザイン学部准教授）
開催期間・日時	2025年10月25日（土） 8：00～16：00
会 場	千葉県ふなばし三番瀬海浜公園
目 的	里親は都道府県知事など（指定都市や児童相談所設置自治体含む）が委託する事業であり、里親子への支援は基礎自治体ではほとんど行われておらず、地域支援を受ける機会はありません。東洋大学社会福祉学科では、千葉県里親会と連携して、千葉県の里親家庭の子どもたちと1日外遊びをし、里親の方々には里親同士の交流やレスパイト（休息）をとってもらう活動をこれまでも社会貢献センターの支援を受けて実施してきた。今年度も、公園でのデイキャンプを通して千葉県の里親子がリラックスできる空間づくりを行った。子どもたちには様々なレクリエーションなどの遊びを、里親の方々には子育てに関する座談会による交流の場を提供した。
参 加 者 数	109名 ※主な内訳は、以下の通り。 【内訳】ゼミ生30名、ボランティア学生26名、里親子50名（里子30名、里親20名）、大学職員など3名
協 力	特定非営利活動法人乳幼児家庭養育の会、千葉県里親会

■ 活動内容（概要）

- 8：00 赤羽台キャンパス、白山キャンパスに集合。バスに乗車。
- 8：10 各キャンパスを出発
- 9：00 ふなばし三番瀬海浜公園着。受付準備や昼食準備に取り掛かった。
- 9：30 里親子の受付。
里親子が到着次第順次受付をした。大学生と子どもの引き合わせを行い、学生と里子さんと遊んだ。
- 10：30 開会式
- 10：40 午前レクリエーション（玉入れ、フラフープリレー）
当日は少し雨が降るなかで、玉入れ、フラフープリレーを行った。
- 11：15 サンドイッチ、おにぎり、飲み物配布
おにぎりはお好みの具のものを選んでもらい、飲み物は里子のみに配布した。
- 12：00 昼食
それぞれが用意したレジャーシートを使い、ペアごとにサンドイッチ、おにぎりデザートのパフェを食べた。デザートのパフェは事前に用意したコーンフレークとホイップクリームの入ったカップに、お好みのフルーツ等の具材を選んでもらう形を取った。
- 13：00 三番瀬環境学習館の見学、座談会
雨天のため、三番瀬環境学習館で三番瀬の魅力や環境について楽しく学んだ。里親の方々とは座談会で交流を図った。
- 13：45 閉会式、片付け

14:45 ふなばし三番瀬海浜公園出発

15:30 各キャンパス到着、解散

里親子デイキャンプは、東洋大学社会貢献センターや里親会の方々のお力添えをいただき、無事に当日を迎えることができた。今年度は初めて雨天での実施となり、予定していたプログラムの変更や場所の移動など、臨機応変な対応が求められた。学生同士で協力しながら状況に応じて判断を行い、大きな混乱なく進行できたことは大きな成果だったと感じている。一方で、雨天時に活動を行ったことで課題も見付き、今後は天候に左右されにくい企画構成や準備体制を整える必要があると感じた。参加した子どもたちや里親の方々には楽しんでいただくことができ、学生にとっても里親家庭について理解を深める貴重な機会となった。来年度は今年度の経験を活かし、より充実した里親子デイキャンプを企画・運営していきたい。

〈学生の感想〉

- 普段子どもたちと関わる機会はないが、たくさん子どもたちと話したり遊んだり貴重な体験ができた。
- 雨で臨機応変さが特に求められる状況だったが、各々が自分のやるべき事を見つけてできていたので良かった。
- 様々な年齢のお子さんと遊ぶことができて楽しかったです！お子さんは初めは慣れない様子でしたが、徐々に距離を縮めることで仲良く慣れたのが嬉しかった！
- 当日は、運営の方々のおかげもあり、大きな混乱もなく、子どもたちと楽しく過ごすことができました。里親さん方が会うなり挨拶を交わしていて、里親同士のつながりがあることに安心した。
- 子どもが快く学生を受け入れてくれて、私が遊んであげたというより、子どもが私を自分の世界に入れてくれたという感じがして、すごく嬉しかった。
- 初めは里親さんにずっとくっついていて里子さんが、デイキャンプが終わった頃にはとても楽しそうに遊べていて私自身もとても嬉しい気持ちになった。

〈里親さんの感想〉

- 雨天だったが、良い場所で親子が伸び伸びできた。
- 学生さん達もとても感じがよく楽しく過ごさせてもらった。
- 子どもをつききりで見ただけありがたい。
- 座談会では、大人が意見交換できる場面があってよかった。勉強になった。
- 座談会では里親のリアルを聞いて貰えてうれしかった。

〈里子さんの感想〉

- 大縄跳びをみんなで出来て楽しかった。
- 玉入れもたくさん入れられて良かった。
- 楽しすぎた。
- もっといっぱい遊びたかった。また行きたい。
- 環境学習館が楽しかった。
- 自分だけのお兄さん、お姉さんがいてよかった。
- とても楽しかった。また来年も同じお姉ちゃんと遊びたい。



51 「首都直下型地震に備える！ 東洋大学宿泊サバイバル体験～もし大地震が発生したとき、白山キャンパスにいたら?～」

企画・運営	東洋大学IVUSA
協力	東洋大学SDGsアンバサダー（防災・まちづくりチーム）
インストラクター	宮崎 賢哉さん (防災教育・災害救援コーディネーター、社会福祉士)
開催期間・日時	2025年11月14日(金) 19:00 ～ 11月15日(土) 12:30 (1泊2日)
会場	メイン会場：東洋大学白山キャンパス1号館1604教室 ※その他、同館1605教室～1607教室を宿泊場所ならびに控室として使用。
目的	1. 参加者の防災・減災のための備えの意識の向上を図ること。 2. 防災・減災のために自発的に行動できる学生リーダーの育成。 3. 参加者が、東洋大学の災害時対策についての理解を深めること。 4. 東洋大学白山キャンパスにおける、大規模地震時の行動についての動きを、実際の場面においてスムーズに行えるようになること。
参加者数	13名

■ 活動内容 (概要)

ボランティア支援室では、首都直下型地震対策の一環として、大学に学生が滞留する必要性が生じた際、どのようなことに留意し対策を行う必要があるのか、そのことのシミュレーションとして、例年「宿泊サバイバル体験」と題し、大学の教室に宿泊した災害時訓練を実施しています。

大規模地震災害の発災後に、大学内で一泊を過ごすことになった際の就寝スペースづくり、簡易トイレの設置（実際には使用せず）、アレルギー等に配慮した食事の準備などを参加者間で話し合いながら進めていきました。

2日目には、火事や意識を失った人への対応の仕方をクイズやシミュレーションなどを取り入れる形で学び、非常持ち出し品を限られたものの中から選択する学生発案のワークショップを行うことにより、実践的・効果的な災害対策について学ぶセッションを実施しました。以下、企画に携わった学生からの報告です。

【1日目】

○タイムテーブル

19:00～19:25 オリエンテーション、趣旨説明

19:25～19:45 アイスブレイキング

19:45～19:55 学生団体活動紹介 (IVUSA、SDGsアンバサダー)

19:55～22:00 宮崎賢哉さんの講義

滞留生活のための作業 (夕食づくり・簡易トイレづくり・就寝スペースづくり)

宮崎さんの講義では、被災した現在地から10kmまでなら帰宅は可能で、それ以上離れると帰れる可能性がどんどん低くなり、20km以上離れると帰るのはほぼ不可能だと学んだ。そこで、私は自分の家と学校の距離を調べて、果たして自分は帰れるのかを検証してみた。普段、学校と家の距離や歩いたら、どの程度の時間を要するのか、通学が徒歩の人でない限り、知っている人はほぼいないと思うので、事前に調べる大切さを知った。

宿泊サバイバル体験プログラムでは班ごとに行う作業を分担した。説明を受ける人（リーダー）を決めて、リーダー中心で班ごとに動くようにした*¹のが実践的で、いかにうまく自分たちで作業するのか試行錯誤した。班ごとに動くものの、食べ物など自分の班員以外の食物アレルギー情報や、宗教関連の事情を確認しておく必要があるとわかった。途中、参加者のスマートフォンが盗難に遭うという「パフォーマンス」があったが、自分やアンバサダーの人は似たようなことが起きる可能性があることを知っていたが、防げなかった。「スマートフォンを隠す」パフォーマンスを通じてインストラクターから、このような災害時に集団生活を行う際、目の前の状況に対応することで精一杯で、自身の貴重品管理が疎かになりがちであることが伝えられた。

「計画停電」*²が起こった際、スマートフォンのライトは意外と暗いと言う声が多く挙がった。その中でもどうしたら明るくできるか、中身の入ったペットボトルを利用して光の反射で広範囲を明るくするなど、参加者みんなで話し合っている場面があり、積極的に持っている知識を共有していてよかった。

講義外で宮崎さんから、段ボールを利用して作るベッドや椅子、テーブルの作り方を教わったが、非常に単純でわかりやすい作りだったため、避難生活時に周りにすぐに伝えられる知識だと思った。こういう知識があると無いとでの利便性が大きく変わってくると思うので、忘れないようにするべきだと思った。

（社会学部社会学科3年、IVUSA 洞 歩未さん）

【2日目】

○タイムテーブル

7:00～7:30 起床、寝具の片付け、朝食準備

7:30～8:30 朝食

8:30～11:00 IVUSA・SDGsアンバサダー ワークショップ

11:00～11:30 まとめ・ふりかえり

起床後は、各自が寝具類を丁寧に片付け、就寝スペースを元の状態に戻す作業から2日目が始まった。慣れない環境での宿泊だったこともあり、少し疲労感をにじませつつも、参加者同士で声を掛け合いながら片付けを進めていました。その後は朝食の準備へと移行し、この日は非常食として配布された乾パンを食べる時間となり、乾パンは災害時の備蓄として広く利用される食品だが、実際に食べてみると水分が少なく、口の中が乾きやすいことから食べにくさがあり、また量も必要最低限のため満腹感は得られにくかったが、こうした体験を通して、災害時に栄養や食べやすさの確保が大きな課題となることを実感した。

朝食を終えた後は、学生主体で進行するワークショップが行われた。最初に取り組んだのは、IVUSAとアンバサダー共同の企画のキャンパス内を散策する活動であった。まず実施されたのは、避難所での協力体制を想定した「黒板リレー」では、限られた時間の中で必要な物資や注意事項を書き出すことで、チームワークと迅速な判断力が求められる体験だった。次に、避難所で流れる指示放送を想定した「防災放送チャレンジ」では、流れてくる音声から配布物の内容や行動指示を正確に聞き取り、状況判断を行う訓練を体験した。また、次の消火器・AEDなどの防災設備の位置を実際に歩き

ながら確認する「校内探検&クイズ」では、普段見慣れたキャンパスの中にも多くの防災設備が設置されていることに気づききっかけとなり、災害時に重要となる設備の位置を把握しておく必要性を再認識する機会となった。そして、簡易トイレの設置方法や使い方、非常食の種類と保存性、災害時の行動に関するクイズを通して、基礎的な防災知識を身につけた。特に実際にスライドを見て自分で考えたことをグループで共有して問いに答える形式によって、知識がただの情報ではなく「自分が行動するための理解」として定着していく感覚が得られた。最後に、「防災ボトル作り体験」では、災害時に必要となる非常用持出品を短時間で選択し、限られたスペースに収めるという実践的な活動を通して、「自分にとって本当に必要なものを普段から考えておく重要性」を学ぶ経験につながられた。

ふりかえりでは、グループで出た意見を全体で発表する場が設けられ、それぞれの気づきや行動宣言が発表された。「自宅の備蓄品を見直したい」「家族で避難場所を話し合いたい」「キャンパス内の防災設備の位置をもう一度確認したい」など、実際の行動につながる前向きな声が多く見られた。こうした共有の時間を通して、参加者全体が防災に対する意識を高め、日常の中での備えの重要性を改めて認識する機会となった。

(国際学部国際地域学科1年 SDGs アンバサダー 工藤 琉さん)

*1: 集団行動をする際、リーダーや管理者一人が直接管理できるメンバーや部下の人数の限界のこと。このことを「span of control」または「管理限界」と呼ぶ。

*2: サバイバル体験中には、インストラクターが「計画停電」と称して教室の電気を消灯する仕掛けを盛り込んだ。東日本大震災時の計画停電のように、実際に停電が起きるかどうかは不確実で、不確実な情報にどう向き合うのかを追体験する意味合いも含んでいた。今回は実際に停電が起き、参加学生はその場で各々対応することが求められた。



52 スポGOMI 東洋大学 in 赤羽台キャンパス

開催期間・日時	2025年12月6日(土) 9:00~12:00
会 場	東洋大学赤羽台キャンパス周辺
目 的	地域の環境保全と景観の向上を図ること。 SDGs 目標11と13の観点から学生が自ら行動する機会を提供すること。 ゲーム性を取り入れて環境活動への参加ハードルを下げ、関心を高めること。 大学と地域社会とのつながりを強め、信頼関係を構築すること。
参 加 者 数	学生27名 教職員2名 スペシャルオリンピックス・アスリート8名
協 力	一般財団法人日本財団スポGOMI連盟、日本財団ボランティアセンター、 東洋大学甫水会、ボランティア支援室

■ 活動内容 (概要)

一般財団法人日本財団スポGOMI連盟のご協力のもと、「スポGOMI 東洋大学 in 赤羽台キャンパス」を実施した。今回は、スペシャルオリンピックス・アスリートの皆さまにもご参加いただき、各チームに1名ずつ加わって、共に競技を行った。

また、赤羽台キャンパス特別ルールとして、3か所に「特別ポイント」を設け、該当箇所で写真を撮影すると10ポイントが加点されるルールを導入した。特別ポイントの存在を知らない赤羽台キャンパスの学生もあり、ゴミ拾いを行いながら赤羽台周辺地域を知る機会にもなった。

競技の結果、優勝チームは5.86kg、全体では29.14kgのゴミを回収することができた。たばこの吸い殻を重点的に集めるチームや、ゴミの種類を問わず幅広く拾うチームなど、各チームが異なる作戦で取り組む様子が見られた。

本活動を通して、ゴミの分別に対する意識や、ポイ捨てに対する問題意識を高めることができた。参加者からは「また参加したい」といった声も多く寄せられ、来年度の実施についても検討していきたい。

【参加者の声】

- ・ゴミが落ちている場所を見ると、「ここに捨ててもいいや」とってしまう人がいることで、ゴミがどんどん増えてしまうのだと感じました。
- ・一見きれいに見えた団地内でも、たばこやペットボトルなどのゴミが多いことに気づきました。
- ・普段は関わることのないスペシャルオリンピックスの選手と交流することができ、良い経験になりました。





53 「2時間の対話で『ことば』にする、あなたのボランティア体験！」

主 催	東洋大学ボランティア支援室
企画・運営	東洋大学ボランティア支援室サポートスタッフ
ファシリテーター	大内田 絢加さん（フリーランス）
開催期間・日時	2026年2月2日（月）17：00～19：00
会 場	東洋大学白山キャンパス 雨水会館301教室
目 的	①「なぜ、ボランティア活動に関わり、それを続けるのか」「自身に関わるボランティア活動の背景にある社会課題は、自身の暮らしや将来、交友関係などどのように関わっているのか」を、他者に伝えることができるようになり、体験したボランティア活動の意義を客観的に捉えられるようになること。 ②「対話」を通じて、自分以外の他者がなぜそのボランティア活動に取り組み、継続するのか?ということに向き合い、自身の状況を対照化させること。 ③ボランティアサークル等に、効果的な「ふりかえり」のノウハウを提供すること。
参加者数	17名
協 力	NOTO×TOYO 青いビブス、TIPS

■ 活動内容（概要）

ボランティア活動や課外活動を通じて得た知識や経験を「やった、楽しかった」というその場限りで終わらせず、今後のキャリアの糧へと昇華するためには、自分自身でふりかえりを行うことが重要です。本企画では、『ことば』にする あなたのボランティア体験！』をテーマに据え、自身の体験を自分自身の言葉で語れるようになること、そして他者との対話を通じて体験の意味を自発的に創造できるようになることの2点を目指して開催されました。前回までは感情から紐解くアプローチを用いていましたが、今回は「自分の言葉で言語化する」ことへ焦点を変えて実施しました。

2026年2月2日に、フリーランスとして多岐にわたる活動を展開されている大内田絢加さんをお招きし、本ワークショップが行われました。

当日はまず、ウォーミングアップとして、既存の物語（映画やドラマ、にっぽん昔話など完結した作品）の続きのあらすじを、400字詰め原稿用紙に書いていただくアクティビティを行いました。これは、あえて自分自身とは関係のない言語化から始めることで、情景描写の必要性に気づくとともに、他者からのジャッジを受けない環境下で、自分自身の純粋な「表現」に触れるための重要なステップとして位置づけられました。続いて、「そもそも言語化ってなんで少し難しく感じるのか?」という問いのもと、言語化のコツについてのインプットが行われました。大内田氏からは、「語彙力」以上に、自身の感じたことの要素を細かく分ける「細分化」の能力が大切であることが語られました。「楽しい」「勉強になった」といったありふれた表現で終わらせるのではなく、「なぜそう感じたのか」を掘り下げて細分化すること

で、自分だけのオリジナルな言葉を見つけることができるという視点が共有されました。このように体験を言語化することは、活動を俯瞰的に見て、自身の経験と社会課題を接続するための大切な営みであることが伝えられました。

インプットを経た後の個人ワークでは、「自分軸」「他者軸」「社会軸」という3つの軸を行き来しながら自身のボランティア体験と向き合いました。他者から評価される言葉を探すのではなく、活動の動機や自身が大切にしたいことを思い出し、情景描写を取り入れながら自分なりに言葉を定義して、体験の種がどこにあるのかを具体的に書き出す作業が進められました。その後のグループワークでは、話し合いのプロセスを通じて一緒に本質を発見していく「対話」が行われました。まとまらない思いや葛藤もそのまま受け止める安心感のある雰囲気の中、参加者同士が互いの言葉に深く耳を傾け、率直な思いを語り合う姿が見られました。一人では書きづらかった部分も、他者からの問いかけによって言葉にしてもらったり、逆に人の話を聞いて自ら言葉を贈ったりする相互作用が見られました。

最後には、個人で受け取ったものを整理する時間を持ち、全体で感想をシェアしました。参加者の感想からは、大きく分けて「言語化（細分化）への深い理解」「他者との共有による視点の広がり」「安心できる場での自己表現」の3つの観点で多くの声が寄せられました。

言語化については、「うまい言語化は持っている語彙力の多さではなく、情報の細分化能力からくるものだ」と新たに学べた」「自分が話したいことを全て伝えようとするのではなく、どの点を強調するかという選択が、具体と抽象の理解に繋がった」といった実践的な気づきが多く見られました。また、「これまで『なぜ自分はやるのか』と問われた時に感覚的な答えしかできずもどかしかったが、ワークシートを通して『自分の本当』を導き出すプロセスを学べた」「以前とは違う語り方ができて面白かった」など、自己理解の深まりを喜ぶ声も挙がりました。さらに、対話を通じた学びとして、「それぞれのボランティア経験や考えを言語化し共有してもらうことで、みんなの多様な向き合い方を知ることができた」「周りとの意見を共有することで今までの考えをより向上させ、多角的な視点で物事を見ることができた」という意見が寄せられました。そして、「いつも言葉が詰まってしまうが、『自分のペースで自由に表現して良い』という言葉もあり、いつもより詳細にのびのびと話し、自分の経験を相手にしっかり伝えられたと実感できた」という感想もあり、正解や評価のない安全な場づくりが、参加者の自己表現を力強く後押しした様子が伺えます。

「体験を自分の言葉で語る力」「体験から社会の課題を見つける力」「体験を学びの意欲へつなげる力」という3つの力を目標とした本企画は、「言葉選びが人生をつくる」という大内田氏の結びの言葉の通り、参加者一人ひとりが将来に向けて自分の軸を明確にし、物事の捉え方を見つめ直す大変有意義な時間になったと総括できます。

以下は、当日の運営メンバーからの感想です。

言語化に対する抵抗感が下がりました。同じ意味を持つ言葉でも言葉の選び方によって違いが生まれ、言語化で重要なのは、語彙力ではなく、スローモーションで話を細分化することだとわかりました。

グループワークでは、他者理解の価値観を広げることができました。ボランティアという共通テーマでも、活動を始めたきっかけやそこで感じたことが全員異なっていたため、対話を通じて意思共有することの意義理解に繋がりました。今まで言語化とは、頭の中の行動分析だと考えていましたが、対話の言語化では、どのような目的意識を持って行動した結果、どのような気持ちになったのかという感情的部分の言語化も大切だと気づく機会になりました。

（経済学部総合政策学科4年 東使 未久）

今回このワークショップに参加して感じたことは、言語化のプロセスにおいて語彙力が全てではないということです。もちろん語彙力も言語化において非常に大切なことですが、世界を「細分化」して見つめなおすことで、自分自身も知らなかった発見を見つけ出すことができると気づくことができました。また、言語化において誰からも否定されないこのワークショップの仕組みは、飾らない言葉をありのままぶつけることができたし、仲間の素敵な部分を多く見つけて相手に「ことば」のプレゼントすることができました。

(文学部東洋思想文化学科2年 青いビブス 山崎 ゆらら)



54 被災地のまちづくりを考え、発信する スタディーツアー(春)

学 生 代 表	峯崎真優 (国際学部国際地域学科1年)
担 当 教 員	子島進先生 (国際学部教授)、浦剣先生 (国際学部准教授)
開催期間・日時	2026年2月14日～16日
会 場	福島県いわき市・浪江町
目 的	本活動は、過去数年にわたり、福島県浜通り(双葉郡、いわき市)の被災地支援を目的に農業・漁業の再生に目を向け活動してきた。今回も、オリーブやコットンの畑での作業体験をメインに、浪江町の請戸小学校(震災遺構)や近くで開催される安波祭を見学する。ゆっくりと再生の道を歩みつつある浜通りであるが、廃炉までの道のりは限りなく長い。学生たちが自分の目で見て体験し、再生に向け変化を続ける同地域の「これから」を考える機会とすることを目指している。
参 加 者 数	20名【内訳】学生18名、教員2名

■ 活動内容 (概要)

初日は、上野駅から、いわき市末続のオリーブ畑に直行し、10年前から板倉キャンパスで育てていたオリーブの植樹を行い、松崎康弘さんからプロジェクトについてお話をうかがった。その後、再び常磐線で湯本にある古滝屋に向かい、大熊未来塾の木村紀夫さんの講演を聞いた。

2日目は大熊の町並みを見た後、浪江町に到着。まず安波祭を見学した。この祭は、津波で壊滅した請戸集落の住民が年に一度集まる機会となっている。その後、震災遺構「請戸小学校」を訪問、さらに道の駅では、地元産品を使用して、調理を行った。松崎さん作成のレシピに従って作ったオリーブとめひかりのピラフがとてもおいしくできた。

3日目は、いわき市四倉のコットン畑で草や枝を取り除く作業を行った。風が強い日であったが、無事予定通りの作業を終えることができた。酒井悠太さんから、「コットンづくり」についての意気込みをうかがった。その後、「天空の里山」で食事をしながら、福島裕さんの里山再生の実践について、じっくりお話をうかがうことができた。

55 NICE 日本国際ワークキャンプセンター プログラム(2025春休み)

開催期間・日時	2026年2月23日(月)～2月25日(水)
会 場	栃木県益子町
目 的	・竹林整備の活動を通して、日本の美しい景観を守るために多くの人と時間が必要であることを理解し、日常生活においても環境に目を向けた行動ができるようになることを目的とする。 ・共同生活や協働作業を通して、相互理解を深め、支え合いながら活動することの重要性を実践的に学ぶ。 ・本企画への参加を通して、自身の経験を主体的に発信し、一人でも多くの人が環境問題や地域課題に関心を持つきっかけを生み出すことを目的とする。
参 加 者 数	学生10名
協 力	NICE 日本国際ワークキャンプセンター、ボランティア支援室

■ 活動内容 (概要)

1日目の午前は、昨年度開拓した丘の上から積んである竹を下に運び、その竹を火の中に入れて燃やす作業を行った。参加メンバーの中には竹に触ることさえ初めての人もおり、わくわくしながらも真剣に作業を行っていた。竹は燃やすたびに中の水分が弾け、爆竹のような音が鳴っていた。

午後は午前の作業と並行して、実際に竹を切る作業も行った。自分の背丈の何倍もある竹を切るため、2人がかりで作業を行った。周りと連携しながら安全に配慮して作業を行っていたため、この活動を通してメンバー間の仲も深まった。

1日目の感想では、最初は初対面のメンバーということもあり不安があったことや、竹を切る経験自体が初めてでやり方が分からず不安だったという声が上がった。しかし、作業を続けるうちに達成感や楽しさを感じられたとの意見もあった。また、今までは第三次産業にしか携わったことがなかったが、第一次産業(天候に左右される等)の大変さやすごさを感じたという声もあった。良い意味でも大変であり、人を選ぶ職業であるという意見もあった。

2日目の午前は、里山庭園が広がる「ベウラの郷」の見学を行った。ベウラの郷は四季折々の植物が植えられており、管理者である椿先生の職場でもある場所である。椿先生は、里山を多くの人に親しんでほしいという願いから、ベウラの郷近くにある空き家をリノベーションし、ゲストハウスのような宿泊施設として活用している。

この日は実際に宿泊施設の裏にある山の土地開拓(竹を切る・木を切る)の作業を行った。将来的には山を瞑想スポットやさまざまなコーナーとして整備したいとのことで、今回はその手伝いを行った。のこぎりや鉈を持って山へ入ると、つるや倒木で荒れた状態になっており、目の前を歩くだけで精一杯な状態であった。椿先生から里山の樹木や花の話を聞きながら作業を行い、倒木のリスクがある木を切ったり、歩くうえで邪魔になる木を伐採したりした。

午後は午前の続きで、山の中でも少し平地になっている場所の開拓作業を行った。落ち葉を熊手で

かき分けたり、木に絡まったつるを4人がかりで引っ張ったりと、さまざまな作業を行いながら切り開いていった。

この日の夜は椿先生が、火打石から炎を起こす方法や羽釜でのご飯の炊き方などを教えてくださった。

2日目の振り返りでは、椿先生の話の中で「里山から今の人は離れすぎている」と聞き、反省したというメンバーや、薪に適した木や住宅に適している木など、身の回りのものと自然を結びつけて考えることができ、とても勉強になったという声が上がった。

3日目は朝から雨が降っていたため作業は行わず、3日間の振り返りを椿先生、トチギ環境未来基地の方、NICEの方、東洋大学の学生で行った。

3日間の活動を通して、初対面から始まったメンバーも共同生活を通して仲が深まっていた。また、自然や環境について改めて注目して生活していく機会になっただけでなく、自身の学んでいる学問と絡めて、第一次産業と移民労働者の問題や環境に配慮した開発についてなど、さらに学びを深めたメンバーもいた。ボランティア初参加のメンバーも、活動の楽しさややりがいを感じることができ、充実した学びと経験を得られた3日間であった。

(福祉社会デザイン学部 社会福祉学科2年 SDGsアンバサダー 佐々木 瑚乃美)



56 2025 × 「里親月間」特別企画

講 師	吉成麻子さん (NPO 法人乳幼児家庭養育の会) 齋藤直巨さん (一般社団法人グローハッピー)
開催期間・日時	2025年10月15日 (水) 2限 10:40~12:10
会 場	東洋大学 赤羽台キャンパス 20301教室
目 的	里親制度について理解を深め、学生だからこそできることを考えること。
参 加 者 数	65名 ※主な内訳は、以下の通り。 【内訳】授業履修者33名 (社会福祉学専門演習Ⅰ・Ⅱ小野ゼミ所属学生) 一般学生32名 (申込者数)
協 力	ボランティア支援室、東京都里親会、千葉県里親会

■ 活動内容 (概要)

10月は里親推進月間であり、10月25日 (土) には、船橋市の三番瀬海浜公園で、里親子デイキャンプを実施予定であることから、ゼミ生およびデイキャンプボランティア学生に里親子支援の現場について知ってもらうこと、また、学内で里親支援について関心のある学生に里親制度について理解を深めてもらうために、本講義を企画した。

講師の吉成さん、齋藤さんからは、里親当事者の声として、里親と暮らす子どもたちの現状や課題をお話いただいた。里親制度だけでなく、一時保護所の現状や児童相談所との連携における課題に対しても理解を深められるお話をしていただいた。吉成さんと齋藤さんのトークセッションの中では、里親として一番心に残った経験についてなど、一般の講演会などでは聞けない生の声をお聞きすることができ、学生たちにも印象に残る講演会となった。

講義の途中では、グループで話し合う時間もとり、「学生だからこそ」、どのように里親制度へアプローチできるのかをグループで話し合い検討することもできた。質疑応答も活発に行われた。

学生たちからは、「実際に児童相談所や一時保護所で抱えている問題について理解することができた」、「里親制度に関する理解が深まり、自分たちに何ができるのかを考えるきっかけになった」、「里親子という存在を周りの人に伝えて、里親制度について理解を広めていきたい」など様々な感想が寄せられた。



57 教育学科の学生と考える“自分らしさ”とは “しょうがい”って他人事？ ちがいはマイナス？ 同じも 苦しい!? 助け合いこそが“自立”の鍵になる!?

講 師	長野 僚さん (「Try chance」代表・講演家・執筆家)
開催期間・日時	2025年10月28日 (火) 16:30~18:00
会 場	東洋大学 白山キャンパス 6311教室
目 的	• 全ての人に包摂的かつ公正で質の高い教育のあり方について、障害当事者の被教育経験を通して考える。 • 障害のある人の自己実現の姿から、青年期の自立と自己実現について、また生涯学習について等の示唆を得る
参 加 者 数	75名 ※主な内訳は、以下の通り。 【内訳】授業履修者68名、授業担当教員5名、一般学生2名※アンケート回答件数)
協 力	教育学科 教育学演習ⅡB・教育学演習ⅢB・教育学卒論演習B

■ 活動内容 (概要)

教育学科2年～4年の「教育学演習Ⅱ」「教育学演習Ⅲ」「教育学卒論演習」の履修学生を対象に「教育学科の学生と考える自分らしさとは」と題した講演を実施した。

講師の長野僚さんは、特別支援学校の高等部を卒業後、大東文化大学の教育学科で小学校教諭免許状を取得し、現在は講演活動を中心に活躍している。脳性麻痺の障害当事者としての自立生活のあり方はもちろんのこと、ご自身の障害受容と自己実現に関する内容を「人生の選択と自分らしさ」という、障害の有無にかかわらない問題として一般化する内容で扱っていただいた。

重度の障害がありながら自立して主体的に生きる長野さんの姿は、学生らの障害理解を深めることになったと考える。

またアンケートによると講演について「理解できた」と回答している学生が97.1%であった。

【アンケートコメント抜粋】

•「今回の本講演ですが、私が今までの中学校や高校で聞いたどの講演よりも1番素晴らしく、心に残るものだったというのが1番の感想です。(中略) 長野さんの語り方も影響していて、これが教師として子どもを導く人の姿なのだと感じておりました。」

•「全体的な印象としてトーク力がとても高いことに驚いた。(中略) 自分を変えるために色々なことに挑戦したり人と関わったりすることで、講演での長野さんが話す言葉の重みが違うと感じた。」「作り話ではなく、実体験を話した方が聞き手はとても楽しくためなものになるとおっしゃっていて、とても納得いたしました。」

•「障害がある方の講演って、自身の障害についてや苦労についてなイメージが多かったのですが、長野さんの講演は言葉の使い方とか、前向きに人生を生きる方法とか、人として大切なものを教えている感じがして、感銘を受けました。人生の先輩として、とても尊敬します。」

- 「長野さんはすごく明るくて素敵な人だなと思った。(中略) お話を聞いていて、『意欲』と『熱意』に溢れた方だと感じました。」「長野さんの生き方が非常に素敵だと感じた。(中略) 多くの困難に直面しても乗り越えて生きようとする力に少し元気を分けてもらえたように感じる。」
- 「自分は1人ではないと気持ちがふわっと軽くなりました。(中略) 今日長野さんと出会い、親しみやすく明るい人柄に惹かれ、とても楽しい時間だったのでまた講演してほしいです！」

東洋大学 SDGs Weeks 2025



教育学演習/教育学卒論演習 公開講座

教育学科の学生と考える“自分らしさ”とは



“しょうがい”って他人事？ ちがいはマイナス？ 同じも苦しい！？
助け合いこそが“自立”の鍵になる！？

日時：10月28日(火)5限 16:30～18:00
講師：長野 僚 様
「Try chance」代表・講演家・執筆家



2011年3月 大東文化大学 文学部教育学科 卒業（小学校教諭一種免許状を取得）
 2011年4月 介護事業所〈障害〉に入社。（在職中に社会福祉士も取得）
 2017年7月 フリーに転身。スローガン「障害を忘れられる瞬間」を届ける！
 2021年8月 2冊目の書籍を出版
 2022年～ 株式会社ePARAの活動に参画（'23からは社員も務めている）
 2024年～ 新たに講演スローガンを掲げ、精力的に活動中
 →「ちがいても同じも真ん中に」「ありのままの姿で、いつもと違う気づきを」

参加方法：対面形式（白山キャンパス 6101教室）
 事前申込制：以下のGoogleFormsから申込
https://docs.google.com/forms/d/1bZFRu13v5pHSUZV3AWaWC4KmB-CK4h5lvPWFzjR_TC4/edit?ts=68ccd454
 申込締切：10月22日 担当教員：永杉理恵（文学部教育学科） ＊使用言語日本語

お問い合わせ先
 東洋大学 ボランティア支援室
 ☎ 03-3945-7927
 ✉ mlvolsup@toyo.jp ＊本学学生はどなたでもご参加いただけます





58 福祉でまちづくりから 福祉はまちづくりへ ～能登半島地震での取り組みの今とこれから～

講 師	村岡 裕さん（社会福祉法人 佛子園 専務理事）
開催期間・日時	2025年10月29日（水）10：40～12：10
会 場	東洋大学 赤羽台キャンパス 20313教室
目 的	地域住民を巻き込む先駆的な福祉実践を展開する社会福祉法人佛子園の取り組みとそれをベースとする創造的復興の狙いや思いを理解し、福祉実践の可能性を考察する。
参 加 者 数	94名 ※主な内訳は、以下の通り。 【内訳】対面84名 Web 27名（授業履修者84名、一般学生27名）
協 力	志村ゼミ、佐藤ゼミ、八木ゼミの4ゼミ合同

■ 活動内容（概要）

村岡氏より70分程度仏子園のこれまでの福祉展開と震災後の復興への取り組みについてご講演頂き、その後小グループで感想や質問を共有（10分）、それをもとに質疑応答（10分）を行った。高齢・障害等の領域別の福祉実践ではなく、地域の方々を巻き込んだ仏子園のまちづくり・ごちゃまぜ福祉の取り組みについて、多数の写真を投影頂き話を伺った。学生からはスタイリッシュでデザイン性が高い「福祉施設」とは思えない仏子園の数々の施設・内装、障害者と地域の方々が自然と会話ができる「仕掛け（温泉）」に多くコメントが寄せられた。特に、災害は予想を超える形で発生するため、平時から年齢や障害の有無にかかわらず顔の見える関係を作っておくことこそが一番の予防であり、福祉が得意とする取り組みであるというメッセージや、全体として福祉の可能性を拡張するポジティブなメッセージとして受けとめる学生が多かった。



【参加学生のコメント】

「自分のなんとなく理想としていた明るい福祉のあり方、つながりの場所の作り方を実現している場所があるんだと本当に感動しました」「福祉のイメージは私たちが作るというメッセージが印象的でした。おしゃれなデザインで誰もが行きたくなるような空間を作ることの大切さを学びました」「まだまだこれからも福祉は新しい形を作っていけると可能性を感じた。若者世代の私たちにもすごく刺さる講

義でした」「事業で得ていたノウハウを災害時に活かしており、普段のつながりが緊急時を乗り越えるカギになるということを改めて考えることができました」「つながり」を作ることによって震災の被害も乗り越えられるほどの力を持っていることを今回の講義で学び、私も「つながり」を大切にしていきたいと思いました」



59 CSR論公開講義「企業と人権」

講 師	秋山映美さん (株式会社クレアン)
開催期間・日時	2025年12月9日 (火) 9:00~10:30
会 場	東洋大学 川越キャンパス 522教室
目 的	SDGs (持続可能な開発目標) を含む「2030アジェンダ」の基礎であるとともに、企業等の組織の社会的責任 (CSR) の原則と中核主題にもなっている人権への取組について、基礎と取組事例を学ぶこと。
参 加 者 数	84名 ※主な内訳は、以下の通り。 【内訳】対面 82名 Web 2名 (授業履修者82名、一般学生2名)

■ 活動内容 (概要)

総合情報学部システム情報コースの専門科目「CSR論」の一環で、秋山映美さんをお招きし、「企業と人権」というテーマでご講義いただいた。

講義内容は、企業活動が社会に及ぼす人権課題について多面的に解説したものである。児童労働や強制労働の定義と国内外の実例、特に外国人技能実習制度をめぐる問題や法改正の動向を紹介し、日本でも身近な現象であることを示した。またジェンダーや人種表現など、広告による人権侵害の近年の事例を挙げ、表現・言語にも配慮が必要であると指摘した。企業は自社の従業員のみならず、取引先、消費者、地域社会も含めたあらゆるステークホルダーの人権を尊重する重要性が増していることを強調した。ESG経営の文脈で、各企業が人権課題に主体的に取り組む必要性を再認識させる内容であった。

受講後に取った受講者へのアンケートでは、受講者の多くが講義を通して新たな視点や気づきを得たと回答している。また、学んだ内容を自分の将来や日常生活に活かしたいとする意見や、具体的な事例を挙げて学びの深さを示す感想が見受けられた。コミュニケーションや多様性の重要性を実感する声も多く、課題発見や自己理解の深化につながったと評価されている。全体として、主体的かつ前向きに学習へ取り組む姿勢が確認できた。



能登半島ボランティア活動記録

2025.04.28-05.02	GW 能登半島ボランティア
2025.08.06-09.14	<2025>夏季能登半島ボランティア
2025.11.02-11.05	<2025>11月能登半島ボランティア (七尾市)
2026.02.13-03.16	<2026>春季能登半島ボランティア

活動概要

能登半島での被災地支援活動に参加することで地域課題を住民の方々と共有し、長期的視点での地域活性化を目指す。

「東京の大学」が支援を続ける意義

能登と東洋大学の現在



学生による現地でのボランティア活動（がれき撤去・清掃など）

2024年3月から、東洋大学の学生や職員あわせて220名が、現地でボランティア活動に参加しました。これらの活動は、地域の団体を通じて寄せられた住民の皆さまの要望に応えるかたちで実施されました。



石川県「関係人口」政策の支援

- ・仮設住宅に住む方との交流会実施
- ・輪島市「祭り」の担い手不足に大学生の力を
- ・学生によるSNS発信で観光客誘致



風化防止・情報発信の拠点

- ・現地では、報道減少により関心が低下していることが問題視
- ・現地活動者を講演会に招き、講座を実施
- ・文京区での報告会実施（青いピブス）



GW 能登半島ボランティア活動

開催期間・日時	2025年4月28日（月）～5月2日（金） 全2クール
場 所	珠洲市内、輪島市重蔵神社近辺
目 的	がれき撤去作業、泥かき作業、仮設住宅支援、その他被災地ボランティアニーズ対応を行う。
参 加 者 数	本学学生8名 教職員3名
協 力	特定非営利活動法人ピースウィンズ・ジャパン 輪島市重蔵神社

【参加者の感想】

・被災者の方々とゲームなどをして、交流する機会を作ることができ、今持たれている不安などを少しでも和らげることができたと思う。

•この活動全体を通して、人の大切さを再認識した日々になりました。実際現地に赴き、話を聞くことで前回見ただけでは知ることができなかった具体的な状況や困っていることがわかりました。今回会ったこともなにかの縁だと思って、被災された方もチームの仲間も関係を大切にしていきたいと思いました。

<2025>夏季能登半島ボランティア

開催期間・日時	2025年8月6日(水)～9月14日(日) 全13クール
場 所	輪島市重蔵神社、仮設住宅他 特定非営利活動法人ピースウィンズ・ジャパン、すずっこ広場、仮設住宅、志賀町・富来町学童、おらっちゃん七尾
目 的	重蔵神社での食料配布活動、輪島市・珠洲市の祭り準備および参加、仮設住宅での交流活動、七尾市での活動、受入団体から依頼されたその他の支援活動等。併せて受け入れ団体へのヒアリング、音楽系サークルによるアカペラ演奏。
参 加 者 数	本学学生83名 教職員28名
協 力	珠洲市ボランティアセンター、ピースウィンズジャパン、志賀町・富来町学童保育、輪島市重蔵神社、七尾市

【参加者の感想】

- 震災から1年半以上が経過した今でも復旧が進んでおらず、地震の時のまま手付かずになっている場所があることを目の当たりにして、人でもお金も十分ではないということを感じた。
- 現地の人々と直接触れ合う中で、復興への強い思いと、日々の生活を再建する大変さを知りました。活動を通して「ありがとう」と感謝の言葉をかけてもらった時には、自分たちの活動がお役に立てたという喜びと達成感、「ありがとう」という言葉の重みを感じました。
- キリコを担ぐ体験を通して、伝統の重みと祭りの楽しさを実感しました。また、少人数でも互いに協力し合うことで、一つの目標を達成する繋がり大切さを学びました。
- 学童等では先生方が感動したと言ってくださったので、音楽で元気を届けることが私たち学生でもできるということを実感できた貴重な経験でした。

<2025>11月能登半島ボランティア(七尾市)

開催期間・日時	2025年11月2日(日)～11月5日(水) 全1クール
場 所	七尾市内各地
目 的	七尾市と地域包括協定を締結し、市内で活動している団体との関係構築や地域の復興過程に学生が主体的に参加することで、大学としての社会貢献活動を推進する。
参 加 者 数	本学学生3名 教職員1名
協 力	七尾市地域おこし協力隊

【参加者の感想】

- 今後の復興において「地域の中に入り込みながら、地域の方々と一緒に復興に取り組む」ことが重要であると感じました。地域の方々と密接に関わり合いながら一緒に復興支援を行っていくことで、心の寂しさや災害でできた心の傷も一緒に支援していくことが可能になります。私たちもそのようなモチーを持ち、能登の各地域に応用していきながら支援を行えたらと感じました。

<2026>春季能登半島ボランティア

開催期間・日時	2026年2月13日(金)～3月16日(月) 全11クール
場 所	珠洲市内各地、輪島市重蔵神社近辺、七尾市内
目 的	従来のがれき撤去や泥かき等の「一時的支援」から、仮設住宅での交流活動や被災地の子ども支援等の「継続的支援」へと重点を移行するとともに、輪島・珠洲地域にて復興支援スタディーツアーに参加し、現地の現状や課題を学ぶ機会を設ける。
参 加 者 数	本学学生44名 教職員14名
協 力	輪島市重蔵神社、輪島復興支援団体「リガーレ」、特定非営利活動法人ピースウィングス・ジャパン、七尾市地域づくり協議会、おらっちゃ七尾

【参加者の感想】

• 今回の活動を通して、改めて「復旧は人の手によって進められている」ということを強く実感しました。機械だけではできない作業があり、最終的には一人ひとりの手と体の力が必要であるということ、実際に作業をしながら感じました。正直に言えば、泥を掘り出す作業は想像以上に大変で、体力も必要でした。しかし、だからこそ、これまで続けてこられた方々の努力の大きさを思いました。一人の力は小さいかもしれませんが、皆が少しずつ力を出し合うことで、ようやく一つの場所が整えられていくのだと知りました。

• 夏の能登ボランティアでも重蔵神社に行って、そこから景色がだいぶ変わっていたので少しずつ着実に進んでるなと思った。今回のスタディーツアーで震災や豪雨の厳しさや避難所生活について沢山聞けて、当時の過酷さがとても伝わってきた。

能登半島地震ボランティア活動の詳細は、以下のサイトよりご確認ください。
<https://sites.google.com/toyo.jp/volunteer/top/noto2024report>

2025年度 能登半島ボランティア活動報告

【夏季 能登半島ボランティアテーマ】

能登半島そして能登の隣人の声を 「五感」で聴こう

東洋大学では、能登半島地震発生後から「そうそう(創造・想像)的復興」を掲げ継続的な復興支援を行っています。継続的な復興支援を行い1年以上経過した今、能登の方々は私たちにとって“被災者”ではなく“隣人”のような近い距離にある存在です。能登で生活する“隣人”の声を聴くことは最も重要な事の1つです。その際、自分自身の「五感」で聴くことで、今の本当の声を聴くことができると思います。この貴重なお話を聴くことで、能登半島が今、私たちに伝えたいことが垣間見えてくるはずです。

【春季 能登半島ボランティアテーマ】

繋続（けいぞく） -つながり続け、新たなつながりを紡ぐ-

今まで能登の皆様との関係人口を非常に大切にし、地震発生当時から継続的な活動を行ってきました。そのことを“繋がる”の「繋」という文字を用いて「繋続（けいぞく）」と読ませることで、「つながり続けること」「新たなつながりを大切に、紡いでいく」という意味を込めました。「支援する側」「される側」という一時的な関係ではなく、共に歩み、共に未来を考える隣人として能登の皆様と関わり続けていくことが大切です。春季能登ボランティアでは「繋がり」を大切に、繋がった皆様と一緒に地域の復興を目指します。

- GW能登半島ボランティア活動
2025年4月28日～5月2日 全2クール
- 夏季能登半島ボランティア活動
2025年8月6日～9月14日 全13クール
- 七尾地域能登半島ボランティア活動
2025年11月2日～5日 全1クール
- 春季能登半島ボランティア活動
2026年2月13日～3月16日 全11クール

2024年1月に発生した能登半島地震および9月に発生した能登半島豪雨の支援活動として、本学では募金活動のほか、現地でのボランティア活動を継続して実施してまいりました。被災された方々からの「能登に心を寄せてほしい」という願いに少しでも寄り添えるよう、今後も支援活動を続けてまいります。

<2025>能登半島地震ボランティア (GW)



輪島・珠洲①

4月28日～5月2日



参加学生：水谷 寛樹（法学部2年） 海野 聖集（経済学部2年） 岡田 心音（国際観光学部2年）
森田 真有（生命科学部2年・青いビブス所属） 引率：楢松 孝行（社会学部教務課・課長補佐）

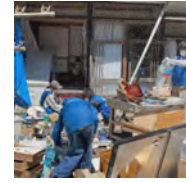
感想
・5日間が本当にあっという間に感じられました。特に1年経った今でも家が潰れ、道路が陥没したりと見る光景全てが本当に残酷で胸が痛みました。
・今回のボランティアを通して、その地の惨状や悲惨さだけでなく、被災者がその災害からどうやって立ち直ったのかや、どうやってこれから前を向いてやっていくかなど心の持ち方や、物の考え方も深く学ぶことができました。
・被災者の方々とゲームなどをして、交流する機会を作ることができ、今持たれている不安などを少しでも和らげることができたと思う。
・この活動を通して、人の大切さを再認識した日々になりました。実際現地に赴き、話を聞くことで前回見ただけでは知ることができなかった具体的な状況や困っていることがわかりました。今回あったこともなにかの縁だと思って、被災された方々もチームの仲間を大切にしていきたいと思いました。
・屋根裏部屋の家財を撤去する際に、みんなで協力して運び出すことができました。屋根裏部屋から家財を運び出す中で、各自が自分の役割を全うし、協力し合うことでチームワークがさらに強固なものとなり、一体感が生まれました。また、西野さん夫妻の震災時の様子や、貴持さん、現在の想い等も聞くことができ、とてもいい経験になりました。
・阿部第一団仮設住宅入居者の方に、子供が東洋出身と声をかけていた。

<2025>能登半島地震ボランティア (GW)



輪島・珠洲②

4月28日～5月2日



参加学生：野表 紀代乃（法学部1年） 陳 帥良（国際学部2年） 田村 優奈（食環境科学部2年）
石田 大河（福祉社会デザイン学部2年・青いビブス所属）
引率：小柳 将文（赤羽事務課・課長） 鈴木 康浩（社会貢献センター事務局・課長）

感想
・今回は、珠洲のお米農家さんの納屋を片付けた。最初はタンクや、腐敗など様々なものが散乱していて中が見えない状況だった。黙々と作業をしているうちに床が見え、綺麗に整理整頓できた。とてもスッキリした気持ちになったのと、誰かのために行動できた満足感が得られた。
・私は外国人なので、おばあさんやおじいさんと交流して日本の地域、文化、風習などいろいろなことを勉強しました。
・今日はあいにくの雨でしたが、東洋大学の学生や金沢大学の学生、スタッフの方々、そして市民の皆さんが協力して助け合いながら乗り越えることができ、本当に感謝しています。
・今日は体力的な疲れが多い1日となりましたが、納屋の関係者の方々が来てくださった時に綺麗になったと喜んでおり、やって良かったなと思いました。
・交流会では、細かな準備不足はあったものの、春季の交流会のフィードバックを活用したおかげで自分が思っていた以上に盛り上がり、来てくださった方々との会話も弾み大成功だった。クイズも能登関連の問題をメインに取り上げたことで皆さんとても楽しそうにクイズを受けていたような感じがした。会話をした中である人が、孫として迎えている気持ちで嬉しいと感じていて若い人との交流も心の癒しであるということに気づいた。

<2025>夏季能登半島地震ボランティア



珠洲・輪島コース

第1クール 8月6日～10日



千葉咲弥（福祉社会デザイン学部・3年） 石田大河（福祉社会デザイン学部2年） 千葉瑠空（生体医工学科1年）
柳沢桂江（福祉社会デザイン学部1年） 引率：青木勇（社会貢献センター事務局・主任）

感想
・未だに復興が進んでいない部分も多くあったため、できるだけ身近に関わらず、根拠強く支援を続けていくことが大切だった。雨が降った時に土砂災害警戒情報が流れるなど、未だに予断を許さない状況であることを知り、私たちの生活の差を知った。
・普通に復興していると思っていたけれど、食料配布に思ったよりも人が来てまだまだ復興の途上なのだと感じた。「災害があってもなくなっただけ、今日の交流会で元気をもらえて、これから頑張っていくと思います。」と言われてすごく嬉しかった。
・子どもの居場所づくりの準備では、メンバーと上手く連携をとれてきたのではないかと感じました。センスが必要な作業が多く、得意不得意分かれたので得意な人はその作業を重点的に、苦手な人は別の作業を行う形で行い、メンバーの得意不得意に合わせて活動が出来たのではないかと感じました。

<2025>夏季能登半島地震ボランティア



珠洲・輪島コース

第2クール 8月17日～21日



橋爪奈月（経営学部・2年） 野田実央（国際学部・2年） 木村咲登（法学部・2年） 富田龍之介（国際学部・1年）
引率：大野俊幸（システム管理課）

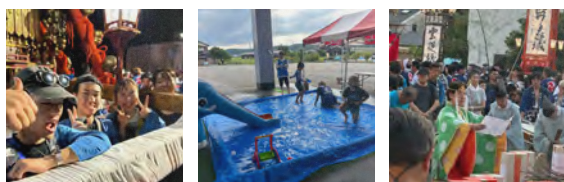
感想
・今日はHumの方々の演奏と私たちのレクで集会所を盛り上げることができました。一緒に歌ってくれる姿や大変な状況の中でも元気に暮らしているみなさんを見て、とても元気と勇気ももらいました。
・地域の人の温かさや人との繋がりを感じた。初めて会ったのにも関わらず、虫除けを貸していただいたり、親しげに話してくださったり、地元の方の優しさに感動した。また、盆踊りで小さな輪が段々と大きな輪に広がっていくことに地域の一員になって団結したように思え、来年もまた参加したいと思った。
・ボランティアでは、単に復興へのサポートをするのではなく、現地の方との交流で不安を抱えている人の心のサポートもできると思う。ボランティアに参加したことで、私の価値観が大きく変わった事。このボランティアの機会をくださった方々に感謝したい。
・仮設住宅では交流会が終わった後におばあさんから「楽しかった、震災で辛いこともあったけどこれでまた明日から頑張る」と言葉を頂き能登に来て良かったと思った。

<2025>夏季能登半島地震ボランティア



珠洲・輪島コース

第3クール 8月23日～27日



小幡子竜（経済学部・4年） 濱田愛実（文学部・3年） 原悠斗（国際観光学部・2年）
上野ひらり（社会福祉デザイン学部・1年） 引率 岡田裕（教務部・部長）

感想

- ・今回のボランティアで、同じ大学だけでなく異なる学年で異なる分野を学ぶ仲間と活動をして、思いを共有して様々な面から災害について考えるきっかけになった。また、実際に現地の人の暮らしぶりを目の当たりにしたり、現地の人とお話しをする中で復興はまだまだであることに改めて感じた。
- ・みんなで声を掛け合って暑い中作業を乗り越えたので、チームの仲が深まったように感じた。
- ・リガーレの方々はどんな時も明るく、活動をする上で、前向きであることがとても大切だと思った。今日お手伝いしたお家が早く住める状態になって欲しい。
- ・今までのボランティアで1番体を使って体力を削った活動でした。休憩の大切さや、内容が大変だからこそ明るく声をかけ合って作業することが大事だと学びました。忍耐力と気合いをさらに強化できたと感じています。
- ・地域の人からの話を通して、祭りへの意気込みや地元愛を感じることができた。被災しても負けないという強い意志を感じた。輪の絆を感じた。

<2025>夏季能登半島地震ボランティア



珠洲・輪島コース

第4クール 8月30日～9月3日



成瀬響之（社会学部・4年） 多田早耶香（福祉社会デザイン学部・2年） 榎本実央（食環境科学部・1年）
高橋虎太郎（福祉社会デザイン学部・1年） 引率 布施賢治（朝霞図書事務課・課長）

感想

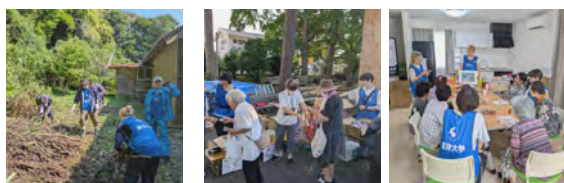
- ・仮設住宅での交流会を通して、改めて交流が持つ力を実感した。限られた時間の中でも、笑顔が生まれ、言葉が交わされ、そこに安心と温もりが生まれていた。交流は決して特別な何かではなく、きっかけであり居場所をつくる手段なのだと思う。被災された方々と向き合う中で、私自身もたくさんの気づきを得ることができた。
- ・お茶会は意外と人数が集まった。垣のメンバーでいろいろと案を出し打ち合わせをしていたが、臨機応変に動くことと決っていたのが成功し盛り上がった。まずお話をし、お祭りのことや郷土料理の話を聞けて勉強になった。
- ・能登の人たちが地盤沈下のことをお話ししてくださり、また撤去作業が進んでいない瓦礫を見たときに本当に大変だったんだなと五感で感じることができた。地震の一刻でこんなに無慈悲な様になってしまうこと、また何となく一刻でも速く復興に向けて動いていることを様々なところで理解することができた。
- ・水道料金が高いこと、海に入らないことなどが合わさって「水遊びができない」状況の子供も多い中で、全力で水遊びできたことが良かった。

<2025>夏季能登半島地震ボランティア



珠洲・輪島コース

第5クール 8月30日～9月3日



狐塚大和（福祉社会デザイン学部・2年） 町田小夏（食環境科学部・1年） 工藤琉（国際学部・1年）
小泉芽生（福祉社会デザイン学部・1年） 引率 玉田誠（国際部・次長）

感想

- ・最後の活動は一番重労働が一番汗をかい。木を運んだりトラックに乗ったり、初めてのとても貴重な経験ができた。これを機に様々な福祉ボランティアにも参加したい。
- ・能登・輪島の被災状況の酷さと、地震から1年半、災害から1年が経過した今もまだ被災した時のままであることが分かった。また、被災した人々の思いや生活について聞くことができて良かった。
- ・ある高齢者から、喜ばせ上手は幸せ上手という言葉も聞きました。それは言葉の通り喜ばせ上手な人々を形成することで、精神面の健康を築くことができるという意味です。僕達ボランティアの活動が被災者たちの生きる活力となり、彼らが充実した生活を送ることに繋がっていることを理解できました。
- ・5日間の活動を通じて、地域の方々や仲間とのつながりの大切さを強く実感しました。草刈りや伐採、神社の清掃、食糧配布などの活動は体力的に大変でしたが、仲間と協力し合うことで達成感を得ることができました。

<2025>夏季能登半島地震ボランティア



珠洲・輪島コース

第6クール 9月5日～9日



矢口葵葉（法学部・3年） 金井祐樹（理工学部・3年） 三木茜璃（福祉社会デザイン学部・1年）
高野可未由（福祉社会デザイン学部・1年） 藤田琉綺（国際観光学部・4年）
引率 植松孝行（社会学部教務課・課長補佐）

感想

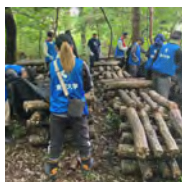
- ・誰がどこでどんな状況かをそれぞれ把握していることに団結力があるなと感じたり、地元愛に溢れる様子を見てこちらまで温かく幸せな気持ちになりました。近いうちに必ずまた訪れたいです。
- ・石川県に来ることも初めての経験だったため、お話を伺う中で知らないことや災害による実際の被害など、現地の方々から詳細に伺うことができたため、テレビやインターネットなどから知り得た情報よりも現実的な声を聞くことができました。
- ・キリコを担ぐ体験を通して、伝統の重みと祭りの楽しさを実感しました。また、少人数でも互いに協力し合うことで、一つの目標を達成する繋がり大切さを学びました。
- ・お祭りで地域の方々とお話をする機会もあり、地域の歴史や行事への思いを直接伺うことができ、とても温かい気持ちになりました。普段触れることの少ない地域の方々と交流を通して、伝統行事の魅力や地域のつながりの大切さを改めて感じました。

<2025>夏季能登半島地震ボランティア



珠洲・輪島コース

第7クール 9月10日～14日



川添雅矢 (国際学部・3年) 内澤みのり (国際学部・2年) 横瀬達哉 (理工学部・1年)
駒井希美 (福祉社会デザイン学部・1年) 引率 蛭田英徳 (情報システム部・次長)

感想

- ・私たちと同じ立場であるボランティアさんと一緒に活動できたり、直接お話を伺ったりすることができたりして非常に良い経験になった。
- ・普段若い人と交流することが少ないということで、思ったよりも参加者の皆さんが喜んでくれて良かった。
- ・被災地の現状について詳しく知れた。地域的に福祉が行き届いていないことを知った。
- ・モルック風ゲームを楽しんでくれて嬉しかったです。参加者は身体を動かすことが好きだと思った。
- ・高血圧で悩まれている方が多く、病院に行くことが困難な人たちが健康診断で薬剤師に相談できる機会があることがいいと思いました。

<2025>夏季能登半島地震ボランティア



珠洲・輪島コース

第8クール 9月10日～14日



関樹貴 (法学部・3年) 上地梨月 (生命科学部・2年) 清水のどか (福祉社会デザイン学部・1年)
藤田灯樹 (理工学部・1年) 引率 ジェイムズ・ニコル・ジョット (法学部・教授) 長沼洋一 (赤羽台事務課・課長)

感想

- ・食糧配布では私は参加者の方とジャンケンをして買った方にブランケットをお渡しする役割でした。みなさん笑顔で参加してくださったので、本当に楽しく、あっという間に時間が過ぎました。
- ・昨日今日のお茶会を通して、このような集まりでたくさんお話しして気分転換をしている人が多いと思ったので、1人でも多くの方が参加して、みんなが楽しめる場になったら素敵だなと思いました。またお話ししてお話したいなと思いました。
- ・食糧配布ではなく皆さんの方が受け取りに来てくださった。「ありがとう」という言葉を多くいただき、疲れはあったがそれを感じないくらい良い気持ちになり、笑顔で対応できた。
- ・自分から何が出来るか、何のためにやるかを考えて先に行動することができた。

<2025>夏季能登半島地震ボランティア



輪島・志賀コース

第1クール 8月6日～10日



星野心咲 (社会学部・4年) 織田健斗 (社会福祉デザイン学部・3年) 鳴海健太郎 (生命科学部・1年)
清水城果 (理工学部・1年) 引率 笠原昌江 (社会貢献センター事務室・室長) 高山泰輔 (社会貢献センター事務室・主任)

感想

- ・震災から1年半以上が経過した今でも復旧が進んでおらず、地震の時のまま手付かずになっている場所があることを目の当たりにして、人でもお金も十分ではないと感じた。墓地での活動では、あれほど多くの方が一度に活動しても直したのとは3基ほどで、コツコツと少しずつやっていくしかない現状にも気付かされた。
- ・現地の人々と直接触れ合う中で、復興への強い思いと、日々の生活を再建する大変さを知りました。活動を通して「ありがとう」と感謝の言葉をかけてもらった時には、自分たちの活動がお役に立てたという喜びと達成感、「ありがとう」という言葉の重みを感じました。
- ・現地の方々が活気に溢れる能登の復興に奮闘している姿に感動を受け、自分も能登に対しさらにできることがないかと考えるようになった。
- ・被災したからといって悲観的ではなく、住民の方全員から「絶対にポジティブに生活を送るんだ」という覚悟を感じた。この覚悟は決して無理しているわけではなく、「輪島が好きだから」「この地域での生活が好きだから」という自然な気持ちでベースとしてあるのだと思った。

<2025>夏季能登半島地震ボランティア



輪島・志賀コース

第2クール 8月17日～21日



佐藤隆斗 (社会学部・4年) 佐々木唯衣 (国際観光学部・3年) 佐々木咲桜 (法学部・2年)
宮下陽大 (経済学部・1年) 引率 柄澤直樹 (管財課・課長補佐)

感想

- ・私たちが行ったことで子供たちの夏休み期間の思い出が少しでも増えていたら良いなと思うし、学童の先生の助けになれたら何よりだと思った。学童対応はとても緊張していたが、2日間通って本当に楽しい時間だったし、自分も小さい時は色んな人から支えられてきていたのだと、先生側の立場になって気づくことも多かった。
- ・想像していた災害ボランティアは、瓦礫の撤去など体力的な支援だけだと思っていたが、今回の活動のように人々の聞き役にあったり、繋がりを持つこと、その小さくても支援者として1歩踏み出すことの勇気が大切であると感じました。そして、今回の活動1回で終わるのではなく継続的に支援していきたいという気持ちが芽生えました。
- ・リーガレの方々も元気でいるのもあって、とても楽しく活動させていただきました。また募集があったらぜひ参加させてください！
- ・富家の学童施設に着いたときから窓から手を振って迎えてくれたのがとても嬉しく感じた。また、少人数の学童であつたので、学童のみんなが家族のような仲の良さでも感じた。

<2025>夏季能登半島地震ボランティア



輪島・志賀コース

第3クール 8月23日～27日



笹島圭介 (法学部・3年) 山崎ゆら (文学部・2年) 田中邦明 (食環境科学部・2年)
佐々木樹乃美 (福祉社会デザイン学部・2年) 引率 黒崎知洋 (図書事務課・課長)

感想

- ・地震や豪雨は本当に辛かったと思うし、悲しかったと思うが、皆自分たちのことよりも他人のことが最優先で、一生懸命お互いがお互いを支え合って復興に力を入れていた。そんな能登の人々の優しさに触れた4日間だった。
- ・私たちは1日だけの作業であったが、未だ泥出しやその他の修繕を必要としている家庭は多く、その都度ニーズに沿って回っている現地ボランティアの方々には本当に凄いなと思った。
- ・初めてのボランティア活動で、震災の被害を直接目にする、直接復興に携わり、プロの方との連携全てが初めての経験で貴重な体験をさせていただきました。
- ・家財出しや子どもたちの交流など、直接的な支援を行う中で「自分の行動が誰かの助けになる」という実感を得られ、ボランティアの意義を深く理解しました。また、仲間と協力しながら作業を進めることで、チームワークの大切さやコミュニケーション力の向上にも繋がりました。

<2025>夏季能登半島地震ボランティア



志賀・珠洲・輪島・Humコース

8月18日～21日



藤来実 (文学部・4年) 見付真紗子 (デザイン学部・4年) 友部寛太 (経営学部・4年)
初谷航 (社会学部・2年) 市村優月 (経済学部・2年) 田窪比那勢 (文学部・2年)
引率 笠原昌江 (社会貢献センター事務局・室長) 小柳将文 (赤羽台事務課・課長)

感想

- ・今回のイベントを通して能登半島地震の悲惨さとそれに対する現地の方々の頑張りに触れることができた。少しでも現地の方々に元気になって貰えるような演奏をできていた嬉しいうす。
- ・子どもたちの有り余るほどのパワーが、私に生命力を与えてくれた。また、子どもたちが元気なことは、復興がある程度進んでいる証の一つであると感じた。
- ・子供たちを元気にするのももちろんだが、先生方にも元氣や力を与えられたことがわかった。先生方たちに、感動したという言葉をもらえてこちら側がとても元氣がもたらえた。
- ・児童等では先生方が感動したと言ってくれたので、音楽で元氣を届けことが私たち学生でもできるということを実感できた貴重な経験でした。
- ・アカペラに限らず東洋大学には多くの披露する系のサークルがあると思うので、そのような人達も誘ってこの輪を広げていただけたらとても素敵だなと思いました。4日間ありがとうございました。

<2025>夏季能登半島地震ボランティア



七尾コース

9月4日～7日



伊東航洋 (文学部・4年) 秋山絃輝 (生命科学部・2年) 加藤凌輝 (法学部・2年) 吉田悠斗 (国際学部・1年)
引率 高山直樹 (福祉社会デザイン学部・教授) 鈴木康浩 (社会貢献センター事務局・課長)

感想

- ・市役所職員さんや前口さんのお話を聞いて、能登の方々がいかにお祭りを大切にしているかということを知ることができました。
- ・やはり活動をして1番得られることは、その土地の「生の声」を聞けることだと思っています。最新の現状や報道とは違うギャップ、地元住民の本音など聞けたことは大きかったと思います。
- ・七尾地区を軸として、子供との触れ合いを目標に継続的な支援活動を行ってほしい。子供たちと夏のキャンプをする等、何かしら形でつながり続けたい。
- ・さきやま地区にある綺麗な海を中心とした自然たちは都会の人からすればきつと貴重な体験であり、もっと多くの人にさきやま地区の自然や人の温かさに触れたいなというきつかけを作りたいと強く感じた。のじまの温泉にも多くの地域住民の方と思われる人がいたため、そういった地域で愛される素敵な場所を魅力発信して伝えていきたいと思った。

<2025>11月能登半島地震ボランティア (七尾市)



11月2日～5日



伊東航洋 (文学部4年) 山崎ゆら (文学部2年) 三木茜瑛 (福祉社会デザイン学部1年)
引率 鈴木康浩 (社会貢献センター事務局・課長)

感想

- ・「うますぎ一本杉」のイベントは、天候は良いとはいきませんが、おそく3,000人以上の来場者がいらっしやうり大盛況でした。その中で朝早くから設営をして、イベント中は運営をして、遅くまで片付けを行いとても充実した活動になりました。このイベントを通じて、いかにこの場所が「食」を通じて地域活性化をしていきたいかを実感することができました。これからも、このイベントに関わっていくような団体運営をしていきたいなと思います。
- ・今回だけでも多くの企業、人々と繋がれて何かしたい時に相談できる場所が増えました。このご縁を大切にしよう活用していくこれからの課題ともなりました。まずはビブスのこと能登、七尾のことを知り幅広い視野を持ち学び、熱い心冷めた頭をもって取り組んでいこうと思います。
- ・今後の復興について「地域の中に入り込みながら、地域の方々と一緒に復興に取り組む」ことが重要であると感じました。地域の方々と密接に関わり合いながら一緒に復興支援を行っていくことで、心の寂しさや災害でできた心の傷も一緒に支援していくことが可能になります。私たちもそのようなモットーを持ち、能登の各地域に応用していきながら支援を行えたらと感じました。

2025年度春季能登半島ボランティア



珠洲・輪島コース

①クール 2月13日～17日



参加学生：鈴木拓海(社会学部2年) 石井樹央(社会学部2年) 駒井希実(福祉社会学部1年) 藤野こころ(福祉社会学部1年)
引率：青木高(社会貢献センター事務局)

- 感想
- ・復興支援には様々な形があることを学んだ。互励舎などの肉体的労働だけでなく、被災者の方と触れ合ったり、人とのつながりを作る手伝いをしたりと、多様な支援方法があることを理解した。短い期間ではあったものの、関わってくれた地域の方々や子どもたちと新しい関係性を持つことができたことは、非常に貴重な機会となった。
 - ・全ての活動を通して、現地の方々とながらを持つことができた。それによって「知らない人たちが被災した」という状況から、「顔を知っている、一緒に遊んだ方々が居る」という状況に変化した。災害マニュアルメントでは、被災した方々とつながることが大切とされている。一人ひとりに寄り添った制度を組み合わせることの重要性、どの様に災害対策をしていけば良いのかを講義やボードゲームを通して学ぶことができた。
 - ・一人ひとりの関わりは大きなもの、支援は誰でもできる、相手の状況や背景を丁寧に聞き取り、その人に合った方法を一緒に考える姿勢が重要だと気づきました。相手に安心してもらうためには、一過性ではなく話を聞く姿勢や関わり続ける根拠強さが必要だと感じました。
 - ・普段の生活では、中々経験することのできない子どもと触れ合いや現地の人の話を聴くなどの貴重な体験は、どれも刺激的なものであった。子どもたちと過ごす時間は、単なるボランティア活動以上のものを私に与えてくれた。彼らの純粋な言葉や無邪気な笑顔に触れたことで、地域貢献の大切さや、未来に向けてどんな支援が必要なのかを考えさせられた。また、現地の人々との会話を通じて、復興活動の進捗や地域の課題について深く理解することができ、今後はこちらも積極的にボランティア活動を行いたいと感じた。

2025年度春季能登半島ボランティア



輪島・珠洲コース

①クール 2月13日～17日



参加学生：飯塚亮(社会学部2年) 堀井瑞希(福祉社会学部2年) 田中真真(理工学部1年) 小沢美紀(福祉社会学部1年)
引率：笠原昌江(社会貢献センター事務局) 斎藤純哉(学生部学生支援課)

- 感想
- ・泥の撤去は過酷化が進んでいる能登ではなかなかできる人が少ないと思うので、私たちのような学生ボランティアの存在はとても大切であると感じました。今回、機材さんにスタディーツアーのようなものをしていただいたので、日本の災害に関する法律や制度がきちんと整ってある。被災者に寄り添った対応はまだまだない部分があるということが分かりました。
 - ・地元では普段の日常では得られない経験がたくさんあった。整備すべきなのは地域の方々の住まいだけではなく、心身共に健康でいられるような環境づくりが必要だと感じた。能登半島ボランティアを通して、仮設住宅に住む人の声を聞くなど貴重な経験ができ、また自分への成長へと繋がった。
 - ・ジャム配市をした際に住民の方が早く家に帰りたいという言葉をとても聞かされた。人と交流することが唯一心の支えだと感じた。活動を通して、珠洲市に来たのは初めてだが、輪島市とは違い、地形が複雑で農業が盛んな場所であるが震災により全て失われた姿が今も残っている復興の姿と進んでいなくて感じた。こうすることを解決するために機材さんがおっしゃった通り、国を変えることからであり、自分自身日本の問題点についてさらに調べたいと考えた。
 - ・被災者としてとくに苦しんでいるのが、地区によって被害の状況が違ったり、人によって家族構成や生活環境が異なるため、一人ひとりのニーズに合わせて支援をしていく必要があると感じた。一方で、1つのジャムを通して輪島の地域の方から様々な話を伺ったり、笑顔でコミュニケーションが取れたことはとてもよかったと感じた。

2025年度春季能登半島ボランティア



珠洲・輪島コース

②クール 2月20日～24日



参加学生：吉野拓人(法学部3年) 齋藤陽菜(理工学部2年) 三次賢人(生命科学部1年) 千田彩音(健康科学部1年)
引率：鎌田陽二(教務部教職支援課)

- 感想
- ・珠洲の現状を把握することができた。自然災害の発生をあまり見たことがなかったため、衝撃を受けた。木が生えているエリアを更地にするという作業は、道具がコッパのみだったこともあり苦戦した。これらの作業を現地の人達だけで行うのは難しく、費用も相当かかるため、ボランティアとして力になっていけると実感した。
 - ・まずここからは活動後、ピースウィンズ珠洲事務局代表の機材さんから、珠洲の状況を案内していただいた。能登半島が西に動いた話、救急車がパンクした話、断水解消報道の裏と表の話、震災証明に関する話など、現場の最前線で何十年も活動されてきたからこそのお話を生で聞くことができた。大変貴重な経験となった。
 - ・活動依頼が別と抽象的だった。再建するのには何をしないといけないのか、みんなで役割分担して必要なことを考えて動くことが出来る。まずここからは活動後、ピースウィンズ珠洲事務局代表の機材さんから、珠洲の状況を案内していただいた。能登半島が西に動いた話、救急車がパンクした話、断水解消報道の裏と表の話、震災証明に関する話など、現場の最前線で何十年も活動されてきたからこそのお話を生で聞くことができた。大変貴重な経験となった。
 - ・まずここからは活動後、ピースウィンズ珠洲事務局代表の機材さんから、珠洲の状況を案内していただいた。能登半島が西に動いた話、救急車がパンクした話、断水解消報道の裏と表の話、震災証明に関する話など、現場の最前線で何十年も活動されてきたからこそのお話を生で聞くことができた。大変貴重な経験となった。

2025年度春季能登半島ボランティア



輪島・珠洲コース

②クール 2月20日～24日



参加学生：葛池雪恵(文学部3年) 高橋虎太郎(福祉社会学部1年) 佐藤大倫(国際学部1年) 清水果果(理工学部1年)
引率：井上武史(経済学部教授)

- 感想
- ・今回の活動を通して、改めて「旧建は人の手によって進められている」ということを強く実感しました。機械だけではできない作業があり、最終的には一人ひとりの手と体の力が必要であるということ、実際に作業をしながら感じました。正直に言えば、泥を掘り出す作業は想像以上に大変で、体力も必要でした。しかし、だからこそ、これまで続けてこられた方々の努力の大きさを思いました。一人の力は小さいかもしれませんが、皆が少しずつ力を出し合えば、ようやく一つの場所を整えられるのではないかと感じました。
 - ・震災発生から2年経つのに未だに完全ではない街を見て本当に大規模な災害だったんだと実感しました。それでもいいところに足場やクレーンが置かれていたし少しづつ復興への道のりを歩んでいることも分かりました。たかが泥出しでしたが、ありがたと言わなくてもうれしかったです。
 - ・復興後、子どもたちの遊び場となっていた校舎は仮設住宅のため土地と利用され、子どもたちが思いっきり体を動かせる場所がなくなっていたので、まずここからは活動後、ピースウィンズ珠洲事務局代表の機材さんから、珠洲の状況を案内していただいた。能登半島が西に動いた話、救急車がパンクした話、断水解消報道の裏と表の話、震災証明に関する話など、現場の最前線で何十年も活動されてきたからこそのお話を生で聞くことができた。大変貴重な経験となった。
 - ・地元の人々との交流が今回あっていない現状を知って、支援をする際には相手が必要としているものを丁寧に把握しようとする必要があると感じた。実際にそこで暮らすのは輪島の人たちだから、その人たちに合ったいい形で進められたいのには、と思う。実際に現地に行くと、言葉が通じないことが多かったりと実感した。ボランティアの側からは、家のなかで机のあった日のまま残っているのに、床が傾いたり玄関床の石が割れていたりして、日常が急に変わってしまったことが感じられた。

※第3クールはお盆時期の為、未実施

2025年度春季能登半島ボランティア



珠洲・輪島コース

③クール 2月27日～3月3日



参加学生：珠洲地区(経営学部2年) 上地梨乃(生命科学部2年) 千原慶乃(福祉社会デザイン学部2年) 青藤深太郎(工学部1年)
引率：黒崎知洋(図書館事務部図書事務課)

感想

- ・夏の能登ボランティアでも重慶神社に行き、そこから景色がたいぶ変わっていたので少しづつ着実に進んでいるなと思った。また小中学生とSSG(災害備えゲーム)を行い、今からできる備えや備えておくべきものについて学ぶことができてとてもいい経験になった。今回のスタディツアーで被災地や避難生活について沢山聞いて、当時の過酷さがとても伝わってきた。
- ・地震から2年以上経っているのに、倒壊した家がそのまま残っていたりしていた。また、被災には時間がかかりそうだった。被災者から話を聞いて、もし自分が災害に直面した時にどうすればいいのかわからないことについて考えることができたのは良かったと思う。被災者は時間短縮が重要で、門前中学校への訪問では、同じラグビーチームの先輩が1年前に違う団体に訪問して、何かを感じた。
- ・被災地のボランティアとは互恵関係や物販配布などを思い浮かべていたけれど、被災した人とコミュニケーションを取る。困る事で被災した人々の心を支えることがとても重要なものになるのだと話を聞いて感じた。被災の被害によって未だに残っている残骸を片付けることで災害の被害を減らすことも重要で、子どもたちとSSGを通して災害に備えることの大切さ、どう備えるべきかを考えさせられた。
- ・現地の状況を知ることがとてもいい機会でした。今までできていなかったことだったので、新しいことを知り自分と成長でき、とても良かったです。また機会があれば積極的に参加したいなと思います。ありがとうございました！

2025年度春季能登半島ボランティア



輪島・珠洲コース

③クール 2月27日～3月3日



参加学生：柳崎泰輔(総合情報学部2年) 加藤向日英(国際学部2年) 石井真愛(福祉社会デザイン学部2年) 溝口雄介(国際観光学部1年)
引率：ジ・エドワード・グレンジャー(法学部教授) 椎名康行(学生部学生支援課)

感想

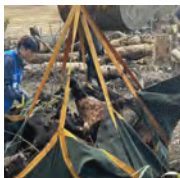
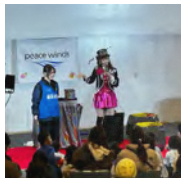
- ・去年もこの時期にお話を聞いたので、1年でのくわい復興が進んでいるのが嬉しかったのですが、自分が予想していたよりも進んでおらず、復興することの難しさを感じました。泥が乾いて大変なことだと思うのですが、みんなで力を合わせることで楽しく行うことができた。目標を定めることややる気や達成感を得ることができました。
- ・私たちが用意したゲームを楽しんでくれた姿がすごく嬉しかった。先が見えない日程でも少しでも光になるような日だったらいいなと思った。また継続してボランティアする事で東洋大学が信頼してもらえる存在になり、人との交流の大切さを再確認できた。
- ・泥は田舎の生活ではほとんど経験しない活動。長時間の作業は体力的にも負担が大きかった。しかし、泥をすべて取り除く、水が流れるようになった瞬間は達成感があり、結果が目に見えて分かることで大きなやりがいを感じた。こういった作業は一人ではできないものではないので、声をかけ合いながら協力して進めることの大切さを感じた。山本さんや瀬川さんから「ここまでやってくれるとは思ってなかった」と言葉をかけていただいて嬉しかった。移動中には、土砂災害によって崩れた家や山の様子を目にした。地震だけでなく、その後の災害によって被害が拡大している現実を改めて実感した。後には時間がかり、今もなお生活再建の途中であることがわかった。
- ・チームでやり遂げたことで、自分たちで仕事ができるようになった達成感があった。この高野の方とお話をしてみて、僕らみたいな若い人もちゃんと楽しくお話をしてくれたり、感動した。

2025年度春季能登半島ボランティア



珠洲・輪島コース

④クール 3月6日～10日



参加学生：佐藤悠(生命科学部2年) 駒部太朗(食環境科学部2年) 川崎愛菜(社会学部2年) 清水のどか(福祉社会デザイン学部1年)
引率：岡田裕(教務部・井上円了哲学センター事務局)

感想

- ・昨年訪れた時よりも復興が目に見えて進んでいた。互恵や倒壊した家屋が無くなり、更地になって寂しさでもあったが、再興のスタートラインに立ったような気がして応援したい気持ちになった。
- ・実際に作業してみると、丸太の木は想像以上に重く、運ぶだけでも体力が必要であり、普段の生活では経験することのない重労働であると感じた。特に、大きな木を持ち上げたり運んだりする際には、周囲の人と声を掛け合いながら協力することが重要であると感じた。また、神社という地域にとって大切な場所の環境整備に関わることができたことも大きな意義を感じた。震災の影響で周辺の景色が変化する中で、地域の人々が大切にしている場所でもきれいにすることを活動に参加できたことは、とても貴重な経験だった。
- ・今回強く感じたこととして、こんなに便利な生活の中なのに、災害が起きたら人間はこんなに無力になるのだということだった。インフラを前提とした生活をしている以上、道路が崩壊して集落が孤立したり、断水で入浴や洗濯ができなくなる状態に陥った場合、最終的に人間を支えるのは社会であるのだと感じた。現代の周知に合った家を提案する方が現実的ではないか、と思ったが、結局人間を支えるのは自分たち自身であることも同時に痛感した。
- ・草むしりをすることや、一輪車を使用することが日常生活でありえないので新鮮だった。少しも役に立っていただければいいなと思います。さすがに広場のスタッフの方が、子供たち自身で遊んでもらうという姿勢を大事にしていて素晴らしいなと思いました。子供たちにたくさん遊んでもらえてよかったのかと思います！

2025年度春季能登半島ボランティア



輪島・珠洲コース

④クール 3月6日～10日



参加学生：塚原千晴(経済学部4年) ZHENG KEQI(理工学部2年) 藤村悠生(生命科学部2年) 矢嶋日英(福祉社会デザイン学部1年)
引率：高橋克也(食環境科学部教授) 大野俊幸(情報システム部管理課)

感想

- ・今回の活動を通して、被災地の復興にとって非常に重要であることを実感した。また、仲間と協力しながら作業を進めることで、問題を一つ一つ解決していくことの大切さを感じた。さらに、留学生交流会では、さまざまな背景を持つ人々と交流すること、新しい視点や考え方に触れることができた。
- ・被災地の中で、被災者やボランティアの両方から、多くの感謝をいただき、重荷ではできないような細かいところの作業には、まだまだ多くの人手が必要であると感じた。また、海外の方の具体的な能登復興支援のアイデアが聞けて面白かった。ポジティブな内容はあまり海外で報道されず、能登に危険なイメージがある人が多い。より多くの人に正しい情報を伝えたいと思った。
- ・「地震」「津波」に加えて「津波」の被害があるという点が輪島の方の被害とは違っていた。珠洲地域の中でも場所によってもそのうち、大きく被害を受けたものが多かった。それによって対応や今後の関係も変わってきて大変だった。また、ニュースや新聞の報道だけでは現地の事情は伝わっていない、ということも今回のスタディツアーを通してあらためて感じた。例えば、新聞では「断水解消」と報じられていても、実際には「本水が通った」というような状況である。
- ・側溝に泥や砂利が溜まりに溜まっていたので、これが原因になっているところが想像できなかったが実際にみんなで手を動かして協力して完成させてグループの一体感がより強まり達成感がとても感じられて良かった。早くこのお祭りの方が終わるようになればいいなと心から思う。

2025年度春季能登半島ボランティア



珠洲・輪島コース

⑤クール 3月12日～16日



参加学生：伊藤楓真(経済学部4年) 木村咲登(法学部2年) 小浜みこ(社会学部2年) 増田遥(福祉社会?イイ学部1年)
引率：高山直樹(社会貢献センター長・福祉社会?イイ学部教授)

感想

- ・震災後の現状は自分にも全く新鮮に感じた。また学生に求めるニーズとして引越しや断捨離などの需要に気づいた。また、子供から仮設住宅の話聞いた中にくすぐくしく感じたが、日常を演じるのは大切と感じ、変わらずに接した。
- ・側溝の泥掻きに関しては、個人的に経験があったため、自ら進んで作業し長時間の力仕事をやり切った。悪天候の中でも、チームメンバーと励まし合い、効率的な方法を探りながら、想定よりも速いペースで作業を進めることができた。最初にお邪魔したお宅で仏壇の移動を手伝った際、短時間かつ自分たちの仕事は僅かだったにも関わらず、丁寧なお礼と沢山の差し入れを頂いた。他の現場でも、こちらが笑顔でしるような感謝の言葉を掛けてもらい、ボランティア活動や自分たちの存在が人にも与える影響について、改めて実感する機会となった。
- ・まず広い現場での活動を振り返ると、子どもと遊ぶときに、子どもと同じ立ち位置で接していくことで、会話がしやすくなったと感じた。また、自分自身と一緒に楽しむこともお互いに関係を築くことができ、距離感の考え方について大切であると感じた。最初は、どのように接していくのかとても不安だったが、活動を通して、感覚をつかめるようになって良かった。
- ・今日の活動の中で仏壇を少し移動する作業でお家に訪問したが作業は10分らずで終わりお茶やお菓子など頂いた。またすごく感謝の言葉をいただき、数分の活動でも住民の方にとっては私達が来た事で少しでも役に立ちたいと感じた。私達の活動がごく僅かなお手伝いや作業でも支援を必要としている人にとってはその活動は大きな存在になっているとわかった。

2025年度春季能登半島ボランティア



七尾コース

①クール 3月2日～6日



参加学生：山崎ちから(文学部2年) 赤田早耶香(福祉社会?イイ学部2年) 宮下陽大(経済学部1年) 吉田悠斗(国際学部1年)
引率：高山直樹(社会貢献センター長・福祉社会?イイ学部教授)

感想

- ・子供の中でも勉強や習い事に熱心なご家庭と、そうではないご家庭があります。そこで子供同士で遊び生まれてしまう現状があるようです。その差を埋めるのがこのような公園や公民館であるべきです。学びたい時に学び合え、大人たちも安心してそこに送り出せる環境がとても大事なのだと気付かされました。
- ・被災地において、居場所を求めているのは子どもだけでなく、高齢者や子育て世代の方にも当てはまる。子ども居場所を作ることで、親がそこに集まるコミュニティが形成される。高齢者は地元のコミュニティがバラバラになり、関わりが薄くなることで認知症のリスクも高まり、孤立に繋がってしまう。どの世代でも集える場所を作りたいと思った。また、七尾市が限られている活動に力をつけていることを学んだ。繋がりを築くものである。
- ・能登震災で多くのものを失った反面、bancoさんが取り組んでいる能登留學のように、現在の能登は事業を始めることに挑戦できる場所であり、他の地域よりも未来の先取りを行える場所だと気づくことができた。また、アイスクリームを販売でいい。七尾の魅力について聞いた際に、生徒同士でも知らない七尾の魅力があったことが一つの気づきとして得られた。また、そこからお互いが新たな魅力を教え合い、今度行ってみたいねのような会話をしている点が非常に良いと感じた。
- ・地域おこし協力隊の皆さんと一緒にする予定のゴミ回収について、アンバサダーとしてはぜひ実施したいと思った。七尾高校の子どもたちは面白いですね。今後もオンラインでもいいので関係継続したいです。

2025年度春季能登半島ボランティア



七尾コース

②クール 3月3日～7日



参加学生：内海健良(健康?イイ学部3年) 田嶋海海(文学部2年) 岡田南大(法学部2年) 上野りら(福祉社会?イイ学部1年)
引率：鈴木康浩(社会貢献センター事務)

感想

- ・テレビや動画で見るよりも身体労働は頭を使うし体も疲れると感じた。それを一人で抱え込んでしまうと精神的に病んでしまうと少し感じた。仲間がいたら成し遂げられた。それは、悩みを抱えている住人も同様だと思う。同士がいることで不安を減らし、心が楽になると思われた。
- ・自分が知らない能登や七尾の文化について知ることができ、美しい自然や食を肌で感じることができ良かった。多くの人が注目されている珠洲などに比べて、七尾は観光地としての認知度が低く、さらに食文化や歴史を掘り下げることもできる。おらっちゃん七尾を設立し、定着を続けている代表はとても素晴らしいと感じた。大きな家や会社などは運動がまだ続いているところがあり、継続した支援が大切だと感じた。
- ・おらっちゃん七尾には全国各地からボランティアをしに集まっていた。七尾に住んでいる方おらっちゃんさんのことを知っていて、聞かされていると感じた。震災直後の能登島の様子を聞いた。能登島にかなり難が地震によって壊れてしまっている。能登半島が孤立している中、さらに孤立しているという。次の日から住民が協力して重機を動かしたという話を聞き、地域の絆を感じた。
- ・特に地域の方との交流会で、七尾について知ることができた。自分自身が経験を持っている業界で働いていた方とお話する機会があり、様々な学びがあった。また、七尾の歴史がとても興味を持ち、特に花嫁のれんについてより詳しく知りたいと感じた。

2025年度 ボランティア支援室 各企画資料

とびこめ ボランティアの森

～ボランティア団体 合同新歓2025 in 白山～

日時
2025年4月7日(月)、8日(火)
10:00～17:00
※5月にも開催予定!

会場
東洋大学白山キャンパス
雨水会館301教室

参加の方法
直接、会場にお越しください。

東洋大学ボランティア支援室に登録している、白山キャンパスの以下のボランティアサークルほか、一部学外で活動する学生団体やボランティア団体、NPOの学生チームなども、今回ブースを出展することになりました!
更にはボランティア相談できるコーナーも設置されます! 奮って足を運んでみてください。

参加予定団体

- 東洋大学ボランティア支援室学生サポートスタッフ ● 学ボラ
- 東洋大学SDGsアンバサダー ● 地域交流団体 紡ぎ ● IVUSA
- 国際ボランティアサークル Salamet ● 手話サークル「つみき」
- NPO法人チャリティータンタ文京支部 ● 学生団体おりのみ
- Toyo-MeWプロジェクト ● NOTOXTOYO 青いビブス
- パリアフリーサークル「歩み」 ● Smile F LAOS ● 学生団体TIPS

※参加費は無料です。参加費を徴収する団体は、別途お知らせいたします。

雨水会館1階には、社会貢献センター/ボランティア支援室があり、たくさんの方のボランティア・NPO等の活動情報を揃えています! ボランティア活動に興味のある方は、ぜひこちらにもお立ち寄りください!

東洋大学ボランティア支援室
社会貢献センター2F302号室
お問い合わせ先: 東洋大学ボランティア支援室 (e-mail: mlvolsup@toyo.jp)

東洋大生がワークショップで考えるSDGs

「身近なものから持続可能な開発について考えてみよう」

4月19日(土) 10:00～12:00
オンライン開催

● 申込方法: Googleフォーム (<https://forms.gle/G3s2aY6Xf1hrxF9U7>)
● 申込期限: 4月15日(火) まで
● 募集人数: 20～25名程度 (お申し込み多数の場合は抽選)
● お問い合わせ: 東洋大学ボランティア支援室
TEL: 03-3945-7927 MAIL: mlvolsup@toyo.jp

SDGs初心者やSDGsアンバサダーを目指す皆さんにはおすすめ!

● **ファシリテーター:**
認定NPO法人開発教育協会(DEAR) 松川 清美 氏
親になり子どもが巣立っていく社会とそれを形作る政治に関心を持ち、こどもみらいlaboという市民グループを設立。その活動をDEARで取材していただいたことをきっかけに2023年にDEAR職員となる。会報誌や教材などの編集、広報、イベント運営などを担当。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

SDGs (持続可能な開発目標)は、持続可能な世界を実現するための17のゴールと169のターゲットで構成されている2030年までの国際目標です。
SDGsは私たちの生活とどのように関わっているのか、そして私たちは日常生活の中でどのような行動をしたら、SDGsの達成につながるのかを一緒に学んで、考えて、話し合ってみましょう!

Smile F LAOS

ラオス産コーヒー販売会

開催日時
4月22・23日(両日開催)
11時～16時

開催場所
1号館1階エレベーター前
6号館学生部前

アラビカ種
ティピカハニー
100g 900円
200g 1500円

※ピーベリー使用の従来品は、数量限定発売

Instagram

Toyo 1day ボランティアプログラム2025

第9回カンボジアフェスティバル

The 9th Cambodia Festival

ថ្ងៃទី៣-៤ ខែឧសភា ឆ្នាំ២០២៥
នៅស្ថានីយ៍ពិធី (Event Plaza) ទីក្រុងតូក្យូ
បណ្តាញ 90:00 - 96:00

2025年5月3日(土)、4日(日)
代々木公園イベント広場(東京都渋谷区)
10:00 - 19:00
Sat 3-Sun 4, May 2025
Yoyogi Park (Event Plaza), Tokyo
10:00 - 19:00

ボランティア活動時間
前半: 7:45～15:00 後半: 12:45～20:00
Volunteer Activity time
1st: 7:45～15:00 2nd: 12:45～20:00

※事前学習会については、決定次第申込者にメールでお知らせします。(対面・オンライン予定)

【お問い合わせ】東洋大学ボランティア支援室
TEL: 03-3945-7927 e-mail: mlvolsup@toyo.jp

ボランティア支援室
各企画資料

東洋大学 学生向け 「カンボジアフェスティバル2025」 当日ボランティア募集案内

【実行委員会からのメッセージ】

カンボジアフェスティバル2025の開催にあたり、2025年5月3日（土）、4日（日）の2日間、イベントをお手伝いいただけるボランティアスタッフを広く募集しております。ボランティアの皆さんと一緒に、来場者やカンボジアの人々と楽しむ時間を作り上げることを大切にしています。多くの文化や人々と交流し、皆で楽しむ瞬間を共有できることを楽しみにしています。少しでもご興味をお持ちいただけましたら、ぜひご応募ください。皆さんと一緒にこの素晴らしいイベントを成功させることを心から楽しみにしております！

【日時・時間】
2025年5月3日（土）
前半 8:00～15:00/後半 13:00～20:00
2025年5月4日（日）
前半 8:00～15:00/後半 13:00～20:00
※いずれも休憩時間あり/時間延長あり。
※前半・後半だけでも参加可能。
※1日通しや2日間連続での参加も可。（大歓迎です）

【募集人数】
各時間帯 30～50 名程度
※上記活動時間以外を希望される場合は、要相談。

【保険について】
実行委員会において、傷害保険に加入いたします。
傷害保険はボランティア参加日のケガ等にのみ適用されます。

【支給品】
スタッフ用 T シャツ（活動中に着用頂きます）

【申込方法】
東洋大学向けボランティア申込フォームより、「同意事項」をご確認の上でお申し込みください。
※東洋大学の学生は、**一般ボランティア申し込みフォームからは、申し込みをしないようにしてください。**
（下記 URL もしくは QR コードからご記入ください）

【申込締切】
2025年4月25日（金）
※先着順のため、応募状況により締切が前後する可能性があります。

【留意事項】
ボランティア活動中の映像・写真の撮影、取材が行われることがありますので予めご了承ください。映像・写真・記事・記録等のテレビ・新聞・雑誌・インターネット等への掲載権等の一切の知的財産権は主催者に譲渡します。

【個人情報の取り扱いについて】
主催者は、個人情報の重要性を認識し、個人情報の保護に関する法律および関連法令等を遵守し、個人情報を取り扱います。

【募集に関するお問い合わせ先】
東洋大学ボランティア支援室（担当：日比野）
E-mail: vol@toyo.ac.jp

【ボランティアの内容】
①会場や駐車場の案内・管理
②ステージの補助
③出店ブースの補助
④来場者の案内・安全・衛生管理
⑤エコステーション運営
⑥準備・後片付け
⑦写真・映像撮影
⑧カンボジアフェスティバルをより盛り上げるための施策
⑨その他実行委員会が必要と認める事項
※ボランティア業務の割り振りは、実行委員で決めさせていただきます。ご希望に添えない場合がありますのでご了承ください。
※基本的に立ちっぱなし、動きっぱなしの活動となります。

【場所】
・活動場所：代々木公園イベント広場（東京都渋谷区代々木公園2-3）
・集合場所は、

【対象者】
本学学生（大学1年生～）
留学生の参加も歓迎です！

昨年活動の様子

とびこめ ボランティアの森 ～ボランティア団体 合同新歓2025 in 白山&赤羽台～

東洋大学ボランティア支援室に登録している、白山・赤羽台キャンパスの以下のボランティアサークルほか、一部学外で活動する学生団体やボランティア団体、NPOの学生チームなども、今回ブースを出展することになりました！
更にはボランティア相談できるコーナーも設置されます！ 奮って足を運んでみてください。

白山

【日時】 5月8日（木）15:00～19:00
9日（金）12:00～15:30

【会場】 東洋大学白山キャンパス
雨水会館301教室

雨水会館1階には、社会貢献センター/ボランティア支援室があり、たくさんのボランティア・NPO等の活動情報を揃えています！
ボランティア活動に興味のある方は、ぜひこちらにも立ち寄りください！

赤羽台

【日時】 5月13日（火）両日ともに
15日（木）12:00～16:00

【会場】 ボランティア支援室赤羽台分室
（WELLB HUB-2 5F）

出展者用フォーム

出展を希望される団体はこちらのフォームにご入力ください！
※ 必読：4月22日（火）23:59まで

運営：東洋大学ボランティア支援室
学生サポートスタッフ
お問い合わせ先：東洋大学ボランティア支援室
（e-mail: mholofuse@toyo.ac.jp）

お申し込みは、**4月22日（火）23:59まで**まで

富士樹海 清掃ボランティア

2025年5月18日（日）

日本一の高さを誇る富士山。2013年に世界文化遺産に登録されました。しかし、富士山周辺への不法投棄は後を絶たず、ごみは増え続け、人の手によって美しさを失いつつあります。2025年5月18日、あなたも富士山を守る活動へと参加してみませんか？

【開催日時】 5/18（日）13:00～
（集合 8:45 白山キャンパス or 朝霞キャンパス）

【申し込み期限】 4/1（火）～15日（火）まで

【参加対象】 学部生

【募集定員】 50名

【参加費】 無料

【事前説明会】 5/8（木）18:00～
※参加決定者には、後日ZoomのURLをお伝えします。

出発地を選択できます！

8:30 朝霞キャンバス出発
9:00 白山キャンバス出発
10:30 昼食（飲み板サービスエリア）
12:00 富士樹海到着/清掃活動
14:30
18:00 白山キャンパス・朝霞キャンバス到着

▼申し込みはこちら！

企画：東洋大学SDGsアンバサダー
協力：東洋大学学生課外活動育成会
環境NPO富士山クラブ

大人の社会科見学 ～環境と向き合う1日～

2025年5月25日（日）

【見学場所】
東京スイソミル、えこっくる江東

【スケジュール】
12:30 東京スイソミル集合
13:00～14:20 東京スイソミル見学
14:40～16:00 えこっくる江東見学
16:15 解散

【申し込みフォーム】

締切：5月18日（日）

【対象者】 東洋大学SDGsアンバサダー
【参加費】 無料
【人数】 先着20名！

参加お待ちしております！

—スペシャルオリンピックスの現場から学ぶ
支援と自己表現のコツ—

「伝える力」を共に学ぶ

日時:5月26日(月)18:30~19:30
場所:東洋大学 WELLB2階 20201教室

スペシャルオリンピックス日本・東京
～アスリートコミュニケーションリーダープロジェクト発足記念～



俳優・ナレーター わたなべ かつみ 講師:渡辺克己氏

株式会社K-works 代表取締役
スペシャルオリンピックス日本・東京ファンドレイジング委員

講師紹介

Mac World EXPO Appleメインステージでは、スティーブ・ジョブズの代わりに、think Different キャンペーンをはじめとする日本語プレゼンを担当
■ナレーションとして
「モンスターズ・インク」以降、「白雪姫」「リトル・マーメイド」「アナと雪の女王」などディズニー映画の
予告25年分のナショナル ジオグラフィック TV ブランドボイス開局以来担当
■トレーナー・アドバイザーとして
セブンアイホールディングス、セブンイレブン・ジャパンをはじめ、ディップ、富士通、ヤフー、国内製薬会社など一流企業のエグゼクティブから新入社員まで、パブリックスピーキングの監修及びトレーニングを担当

詳しくは裏面へ！

主催:認定NPO法人スペシャルオリンピックス日本・東京
共催:東洋大学福祉社会デザイン学部 志村ゼミ
後援:東洋大学社会貢献センター
問い合わせ:スペシャルオリンピックス日本・東京 ACL PJT
担当:稲山 acl@son-tokyo.or.jp



申し込みはこちらから→

どんなことをするの？

スペシャルオリンピックス日本・東京では、知的障がいのあるアスリートの中から選ばれた「アスリート コミュニケーション リーダー (ACL)」が、日ごろ応援してくださっている企業を訪問し、感謝の気持ちや社会に対する思いを伝える活動を行っています。この活動をサポートしているのが、「アスリート コミュニケーション サポーター」です。

今回、ACLの皆さんが企業訪問に向けた「練習会」を志村ゼミがサポートして行うことになりました。

イベントでは、ACLの皆さんが「練習会」で頑張る姿を紹介しながら、自己紹介を通して「伝える力」について一緒に考えていきます。

また、特別ゲストとして、俳優・ナレーターとして活躍されている渡辺克己さんをお招きし、「障がいの有無に関わらず大切な自己紹介のコツ」についてお話しいただきます。スポーツに興味がある方、障がいのある方への支援活動に初めて関わってみたいという方も大歓迎！

学年や経験は問いません。お一人での参加ももちろんOKです。ぜひ気軽にご参加ください！

大学生活ではどう役立つ？

「自己紹介」を通じた自己表現の方法や、障がいのある方へ支援する際に心がけているコミュニケーションのコツは、授業でのグループワークやプレゼン、就職活動における自己PR等にも大いに役立ちます。人と人をつなぐ「ことば」の力に関心のある方、支援や教育に携わる方はもちろん、これから社会に出ていく学生の皆さんにもぜひ聞いていただきたい内容です。

スペシャルオリンピックスとは？

スペシャルオリンピックスとは、知的障がいのある人たちに様々なスポーツトレーニングとその成果の発表の場である競技会を提供している国際的なスポーツ組織です。今回のイベントに参加すると、スペシャルオリンピックスの活動を知ることでもできます！

スペシャルオリンピックス日本について詳しくはこちらから→



主催:認定NPO法人スペシャルオリンピックス日本・東京
共催:東洋大学福祉社会デザイン学部 志村ゼミ
後援:東洋大学社会貢献センター
問い合わせ:スペシャルオリンピックス日本・東京 ACL PJT
担当:稲山 acl@son-tokyo.or.jp



申し込みはこちらから→

朝霞キャンパスSDGsアンバサダー

スポGOMI
とは？

従来型のごみ拾いに、「スポーツ」のエッセンスを加え、今までの社会奉仕活動を「競技」へと変換させた日本発祥の新しいスポーツです！

ゴミ拾いはスポーツだ！



第1回 スポGOMI in朝霞キャンパス

開催日:2025年6月1日(日)9:00~13:00

雨天時 2025年6月8日(日)9:00~13:00

東洋大学朝霞キャンパス5105教室 集合

スケジュール

9:00 受付開始
9:30 説明開始・PV動画視聴
10:00 アイスブレイク・作戦会議
10:30 ゴミ拾い開始
12:00 ゴミ拾い終了
12:30 集計/計量・結果発表
13:00 解散 多少時間が前後する可能性があります

あらかじめ定められたエリアで、制限時間内に、チームワークでゴミを拾い、ごみの量と質でポイントを競い合います！！

※参加費無料



持ち物

動きやすい服装・運動靴でお越しください！

応募はこちらから→
<申し込み期限>
5/18まで延長！

協力:一般社団法人ソーシヤルスポーツニシアチブ
東洋大学ボランティア支援室

b-lab 見学ツアー

無料
6/7
開催



中高生の
居場所

グループワーク
館内見学

b-lab
とは？

2015年4月にオープンした教育センター(複合施設)の中にある区画の中高生向け施設です。b-labは、いつでも、なんでも挑戦できる中高生の秘密基地です。リビングのようにつくったり、みんなでわいわい勉強したり、新しい友だちと出合ったり、バンド活動やダンス、バスケができたり、やりたいことに思いっきり打ち込んだり・・・そんな施設を見学しながら

スケジュール

●館内見学
●質疑応答
b-labやユースワークに関すること
●ディスカッション
●フミコム見学
※希望者のみ
※昼食後13時~見学開始
※現地集合、現地解散
※交通費は自己負担
※ボランティア支援室の職員が同行します

募集要項

●日時
6/7(土)10:00~11:30
●募集期間
5/7(水)~5/25(日)
●定員
20名(応募者多数の場合抽選)
●場所
文京区湯島 文京区青少年プラザ b-lab (ビーズバ)
●応募方法 QRコードから申込

中高生の居場所について
皆さんで考えてみませんか？

【お問い合わせ】
東洋大学ボランティア支援室
mivolsup@toyo.jp



2025年 6月 7日 土

場所 東洋大学 白山キャンパス
4号館 地下1階 アリーナ

三田線 白山駅 南北線 本駒込駅
A3出口から徒歩5分 1番出口から徒歩6分

時間 14:15-15:45
受付開始 14:00から

GOALBALL EVENT

ゴールボール体験会2025年度

東洋大学




静けさの中に
燃える熱戦

一音で戦う、
音でつながる。

ゴールボール
世界大会で活躍している
選手4名が参加します！

こんな方におすすめ！

- ・現役パラスリートのゴールボールのプレーを間近で体感してみたい方
- ・ゴールボールを体験してみたい方
- ・パラスポーツに興味がある方
- ・視覚障害について深く学びたい方

運動があまり得意でない方も大歓迎！
アイマスクをつけて、音をたよりにプレーするゴールボールの世界をぜひ一緒に体験してみませんか？

お申込み・イベントの内容はこちらのQRコードから！



申し込み締め切り

5月23日(金)まで

主催：東洋大学CSR推進委員会
協力：二階社福祉人学生センター 国際交流推進委員会
お問い合わせ：mlvolsup@toyo.jp

あじさいまつり

ボランティアスタッフ募集！

白山キャンパス隣にある「白山神社」にて「あじさいまつり」が開かれます。昨年度に引き続き、今年も多くの方の来場者を予想しており、実行委員会よりボランティアの募集がありました。ボランティア参加を通して、近隣にお住いの実行委員及び来場者の皆さんとお話ができるイベントです。多くの皆さんの申込をお待ちしております。

会場 白山神社（白山キャンパス 4号館裏）

日時 2025年 6月

7日(土) 10:00-17:00 (ボランティア活動時間 8:00-16:00or9:30-17:30)

8日(日) 10:00-16:00 (ボランティア活動時間 9:00-17:00)

14日(土) 10:00-17:00 (ボランティア活動時間 8:00-16:00or9:30-17:30)

15日(日) 10:00-16:00 (ボランティア活動時間 9:00-17:00)

ボランティアができる日を申込フォームで選んでください。

募集人数 各日 10-15名程度 ★応募者多数の場合は抽選です

募集対象 ボランティアに興味・関心のある学生

事前説明会 5月30日(金) 昼休み 12:20~12:50
白山キャンパス雨水会館3階又はWeb（ハイフレックス）
当日着用のTシャツを配布予定

※参加必須（都合が悪い方はオンデマンドで受講してもらいます）

申込締切 5月25日(日) まで

申込方法 下記 URL または QRコードより申込みください。
<https://forms.gle/VBaRYEWxZJrQQLZx7>








ボランティアの活動内容 ①～④のいずれか2つ

- ① 町会・商店会・観光協会等の販売・企画フェースの手伝い
- ② 子ども向け企画（ゲームコーナーや写生大会等）の手伝い
- ③ 白山神社社務所のお守り販売等の手伝い
- ④ 受付、コンサート会場整理、会場管理、見回り等、全体運営の手伝い

★ 実行委員会にて皆さんの配置を決定します。

★ 海外からのあじさいまつりご参加の方もたくさんいらっしゃいます。英語などを活用して日本の文化を伝えたい学生さんの参加も大歓迎！

企画を行うにあたり、実施する「実行委員会」の方と一緒に活動を行う先生など、多くの方に事前の調整を含めてご協力いただいております。

最近、「安易なキャンセル」を行う学生さんが多くあり、「フェースの運営が困難」になるなど、先方に多大な迷惑をおかけしております。

東洋大学生の「質」も問われることにもなりますので、一人一人が自覚して申込をしてください。

昨年度の様子はこちら▶



公式 Instagram▶



公式 LINE▶



問合せ先：ボランティア支援室

メール： mlvolsup@toyo.jp

SPRING WATER 近日開催

ウォーターサーバーぐるぐるスタンプラリー

～ウォーターサーバーの設置場所知ってる？～

2025. 6/16(月) ▶ 6/27(金)

白山キャンパスに設置されているウォーターサーバー5か所を巡り、スタンプを集めよう！

スマホで簡単！ 5か所すべて集めた方には
選べる豪華(?)景品をプレゼント★



このマークが目印だよ!!



昨年でも大人気！
先着250人限定！

公式 Instagramはこちら▶ [@TOYO_SPRING](#)

【お問い合わせ】東洋大学ボランティア支援室
Email: mlvolsup@toyo.jp



盲ろう者理解 ワークショップ

盲ろうについての概説 (30分)
盲ろう者の障がい状況、生活実態、コミュニケーション方法、支援方法、福祉制度などについて解説。

盲ろう当事者の講演 (30分)
盲ろう当事者の方から、自分自身の成育歴や障がいを負った経緯、心理状態の変遷、日常生活における困難、必要としている支援等について講話。

盲ろう疑似体験 (60分)
盲ろうの状態、心理面の共感的理解を図ることを目的に、視覚と聴覚の両方を遮断して行う。

お申し込みはこちらのQRコードから→
<https://forms.gle/rv9ZAEro38jUHAX88>

定員 30名
2025 年 6月21日 (土) 14:00~16:00

東洋大学赤羽台キャンパス ボランティア支援室
主催：東洋大学SDGsアンバサダー ダイバーシティチーム
共催：認定NPO法人 東京盲ろう者友の会
お問い合わせ：東洋大学ボランティア支援室
mlvolsup@toyo.jp

盲ろう者とは

「目（視覚）と耳（聴覚）の両方に障害を併せ持つ人」のことをいいます。日本には約1万4000人いるといわれています。障がいの状態や程度はそれぞれ異なるため、独自性に応じた支援が必要とされています。

目的

皆さんは、「表層的ダイバーシティ」という言葉を知っていますか？「表層的ダイバーシティ」とは、人種・国籍・年齢・性別・障がいなど、自分の意思で変えることが困難なものを意味します。

東洋大学SDGsアンバサダー ダイバーシティチームは、「表層的ダイバーシティ」の理解を深めることを目標に活動しています。このワークショップでSDGsや多様性について学び、活動へのスタートを切りましょう！

**認定NPO法人
東京盲ろう者友の会 公式HP**

10 社会福祉 障がい者
11 住生活 都市・農村

赤羽台の ヒト・モノ コトさがしの まちあるき

6/24 (火) 2ラウンド制で実施
集合場所：どちらも東洋大学赤羽台キャンパス WELLB HUB-2 1階ロビー
第1ラウンド：8:40~10:30
第2ラウンド：10:45~12:30
※どちらか1ラウンドのみの参加もできます

第1ラウンド：桐ヶ丘「朝活」参加～スワンペカリー赤羽店
第2ラウンド：北区ふるさと農家体験館～Hintmation (ヌーベル赤羽台団地)

企画内容の詳細は、東洋大学ボランティア支援室
学内情報サイトをご覧ください。(右下黒QRコード参照)

東洋大学ボランティア支援室
(白山) 03-3945-7927 (受付時間10:00-18:00)
(赤羽台分室) 03-5924-2184 (受付時間 火・木10:00-18:00)
mlvolsup@toyo.jp
<https://sites.google.com/toyo.jp/volunteer/top>

企画詳細 申込フォーム

主催：東洋大学ボランティア支援室 企画運営：赤羽台キャンパスSDGsアンバサダー

マイボトルを持参しよう！ ドリンク 割引 キャンペーン

ドリンク注文の際に
持参したマイボトルに飲み物を入れてもらうと…
次回使用できる**10円引きクーポン**がもらえる！

【配布期間】2025年7月1日 (～10月31日)
【引換期間】2026年1月30日まで ※延長の可能性あり
【対象店舗】4号館1階ステラ

※キャンペーン割引をご利用される方は、注文する際に店員に「マイボトルに入れてください！」とお伝えください。

マイボトルに入れてください！

東洋大学SDGsアンバサダー
問い合わせ先：mlvolsup@toyo.jp
東洋大学 ボランティア支援室

東洋大学SDGs特設サイト
www.toyo.ac.jp/sdgs/
東洋大学ボランティア支援室
sites.google.com/toyo.jp/volunteer/top/

12 つくる責任
つかう責任

GOAL 12 つくる責任 つかう責任
廃棄物の削減
限られた資源の有効活用 → 循環型社会の実現へ

なぜマイボトル??

マイボトルを使うことで、提供時に使用される使い捨て紙コップやプラスチックコップの廃棄量を減らすことができます。
→その結果、環境負荷の削減に繋がります。
(例) ごみの廃棄時に発生する二酸化炭素排出量を減らすことができる。

他にもメリットは盛り沢山！

長時間保温・保冷できる
持ち歩きやすい
飲み残しを減らせる

Cool

気楽に・おいしく・簡単に 環境問題対策に貢献しよう!!

東洋大学SDGsアンバサダー
▶学生主体でSDGsの推進啓発活動中！
活動の様子を【SDGs】チャンネルで発信しています。

東洋大学SPRING
ウォーターセーバープロジェクト
▶東洋大学SDGsアンバサダーによる家庭
向け節水プロジェクトです。
ウォーターセーバーやマイボトルの利用
促進、ペットボトルゴミの削減・正しい
分別の啓発を行っています。

ボランティア入門講座 IN 赤羽台

ボランティアについて、参加者同士交流しつつクイズを交えながら
楽しく学ぶオンラインセミナーです。
ボランティアが「何かちょっと気になってる」というくらいの感覚で
参加していただいて構いません。気軽な気持ちで参加してみてくださいね。

講師紹介

日比野 勲
(Hibino Isao)
東洋大学ボランティア支援室
ボランティアコーディネーター
多摩大学学生社会ボランティアコー
ボランティアクーディネーター

成瀬 響之
(Naruse Kyono)
東洋大学 社会学部社会学専攻4年
東洋大学ボランティア支援室サポートスタッフ
東洋大学SDGsアンバサダー
バリアフリーサークル 代表
さりがく東洋大学支部 会計担当

加藤 美咲
(Kato Misaki)
東洋大学 文学部教育学科2年
東洋大学ボランティア支援室学生サポートスタッフ
NPO法人国際ボランティア学生協会 (IVUSA)
東京白山クラブ

日時：2025年7月3日（木）18:15-19:45
※終了後21:00頃まで、参加者間の交流を目的に、自由参加の交流会を実施予定です。
会場：東洋大学ボランティア支援室赤羽台分室（WELLB HUB-2 5F）
参加申込：下のQRコードより、申し込みフォームに必要事項をご記入ください。

お問合せ先: 東洋大学ボランティア支援室（東洋大学社会貢献センター）
(TEL) 03-5924-2184：赤羽台（火・木） 03-3945-7927：白山
(e-mail) mivolsup@toyo.jp

配食料
配布

エコバックを持参してください
食品ロスをなくそう！

GET

文京区および京北中学・高等学校からの
寄附食料品配布会を実施します

7/3 木
12:10~13:30
17:00~18:00

1号館1階エレベーターホール&6号館学生部前
イブニング生はこちら
雨水会館1階ボランティア支援室

リユース品を回収します！
食料品受け取りの際にリユース品を持参された方に先着で
TOYOオリジナルサコッシュ or ハリボー プレゼント
<リユース回収対象品>
衣類（肌着は不可）・靴・文房具・事務用品・本（ISBNのあるもの）
新品または未使用に近く再利用できるもの。
※食料品は不可

お問い合せ先 ボランティア支援室 03-3945-7927 mivolsup@toyo.jp

第18回東京メガシティ
七夕祭 プログラム

開催日：2025年7月5日（土）
開催時間：15:00~18:00
開催場所：東京メガシティ内 中庭/エントランスホール

【プログラム】
♪オープニング 15:00~ 中庭ステージ
★開会あいさつ
★子どもによる 大太鼓/桐ヶ丘児童館
リズムクラフ/わくわく遊ひろば
《雨天の場合は中止》
♪イベント 懐かしの千灯籠屋がやってくる
16:00~ 中庭ステージ《雨天の場合はエントランスホール》
★とざいと〜ざい！チンドンうぐいす宣伝社です。
鐘と太鼓の楽しいリズムで昭和歌謡から令和のヒット曲まで
お届け！南東玉すだれの演奏もあります。ぜひご覧ください。
♪ミニコンサート 16:45~ エントランスホール
★子どもによるピアノ/演奏
♪クロージング 18:00~ 中庭ステージ
★閉会あいさつ

176



子どもアトラクション(自治会運営) 15:00~18:00



ワッパンボール	体育館 50円
スーパーボールすくい	体育館 50円
パターゴルフ	体育館 50円

ボールを入れてお菓子を取ろう

たくさん取れても3ヶまで/とれなくても1ヶプレゼント

お菓子をゲットしよう/大人でも参加OK

屋 台(自治会運営) 15:00~18:00

生ビール	300円	冷えて参す
ワイン	200円	赤ワイン 白ワイン
ラムネ	100円	みんな大好き
フランクフルト	100円	毎年大好評
かき氷	50円	イチゴ、ハワイアンフルー等 お好きなシロップでどうぞ
ポップコーン	50円	選べるブルーバー付
わたあめ	50円	青、赤、黄 (味はどれも同じです)




屋 台 15:00~18:00

お肉すき	本郷来店
バーベキュー	バーベキューボウル
おつまみ・お酒	ウキ長屋
焼きそば	KIRISATOおやじ倶楽部
焼き魚屋	朝ヶ丘ママルシェ




※各屋台の場所は、当日に各棟エントランス周辺に掲載します。
 ※お席で購入された食べ物も、当日中にお直し上がりください。
 ※商品が売り切れる時は、早めに終了の場合があります。

【現金販売のおしらせ】

★全ての商品が現金購入とさせていただきます。
 両替は致しかねますので、出来る限り1万円以下の硬貨のようにお願いいたします。
 皆さまのご理解、ご協力をお願いいたします。



主催：東京メガシティ自治会 後援：東京メガシティ管理組合
 協力：〈公財〉北区文化振興財団 北区庶友アーティストバンク

just5motto@gmail.com



2025 新・ヴェル
赤羽台団地まつり

ボランティアスタッフ募集

7/26
16:00
21:00

7/27
12:00
21:00

地域のお祭りの成功に向けて
楽しみながらボランティアしませんか？





輪投げ



一出店



ヨーヨー



かき氷



イベント手伝い



会場内誘導

●会場：赤羽台団地いちょう通り周辺

●活動内容：

①出店ブースの設営・撤収補助 ②輪投げ、ヨーヨー等運営補助

③飲食ブースでの手伝い（かき氷等） ④その他、イベントの運営補助

●活動時間：（準備・片付けの時間が前後にある可能性あり）

2025年7月26日（土）16:00～21:00

2025年7月27日（日）12:00～21:00

（12:00～16:30 16:30～21:00分割も可能）

●申込方法： <https://forms.gle/HwgAz9XEUdku6Zi28>

（定員：各日10名程度 合計20名程度 半日希望が多い場合はもう少し増えます）

参加者説明会がある場合は、参加者の皆さんに後日お知らせいたします。

●申込×切：2025年7月10日13:00まで

●そのほか：

①交通費を支給します（上限がある可能性あり）

②軽食（お弁当）が支給されます

●問い合わせ先：

ボランティア支援室：mlvolsup@toyo.jp





ご自宅に眠っている使わなくなったものと交換!

わらしべ長者プロジェクト

7/29. 30
11:30~13:00

📍 6号館1階学生部前

リユース品を1点でも寄付いただくと必要なものと交換することができます

手帳やファイル、食器等!

わらしべプロジェクトとは?

まだ利用できる製品を再利用することでゴミを削減し、持続可能な社会に繋げるプロジェクト

回収・配布対象品

- 衣類(肌着不可)・カバン・文房具
- 事務用品・本(ISBN入り)・食器等

※汚れ・古く使えないものは不可

洋服も多数

主催：東洋大学社会貢献センター

東洋大学

文京区 クールアースフェア 2025

8月2日、文京シビックセンター(文京区)で開催された「クールアースフェア2025」に東洋大学SDGsアンバサダーが出演しました。

クールアースフェアは、地球環境保全の取組の一つである「地球温暖化対策」の啓発を目的として、文京区にて行う「文京版クールアース・デー」の啓発イベントです。文京区内の大学や企業、行政やNPO団体などが日々行っている地球温暖化対策の取り組みを紹介する機会となっています。

東洋大学SDGsアンバサダーは今年度、東京大学GX学生ネットワーク、お茶の水女子大学SDGs推進研究所OCHA-SDGs学生委員会と連携し、ウォーターサーバーをテーマにした大学間合同クイズラリーを実施しました。各大学のキャラクターカードを用い、日頃から楽しくカーボンニュートラル実現への行動選択をしてもらう「きっかけ」創出を狙いました。

また、東洋大学SDGsアンバサダーもコンテンツを自主開発しました。名付けて「ゴミ分別！ストロークアウト！」文京区のゴミ分別のルールを正しく理解するだけでなく、正し的に投げ入れなければならないという、やりごたえのある内容で、老若男女、幅広くお褒めの言葉をいただきました。

東洋大学SDGsアンバサダー

群馬県
甘楽町

インターン参加者募集

新たな土地で暮らしに紡いで 濃厚な2週間

甘楽町 一名勝山園

地域おこし協力隊って？

一定期間地域に居住して、地域ブランドや地場産品の開発・販売・PR等の地域おこしの支援や、農林水産業への従事、住民の生活支援などの「地域協力活動」を行う取組です。今回、甘楽町より特別に「東洋大生」枠が用意されました。町長名による委嘱状が交付され、履歴書に記載可能な職歴となります。

ここで得た経験を **ガクチカ** としてアピール！

どんな人が向いてる？

- ・甘楽町に興味がある
- ・教育、農業、地場産業振興に携わりたい
- ・知らない土地で暮らしてみたい
- ・体を動かしたい
- ・地域の方と交流したい
- ・就活でアピールポイントにしたい

インターン期間は？

夏季休暇中 3名募集
期間 8月7日(木)～8月21日(木)の2週間
※希望者は3週間の活動ができます。

お問い合せ ボランティア支援室 mlvolsup@toyo.jp 03-3945-7605

詳細はこちら

群馬県甘楽町地域おこし協力隊 インターン企画 概要

「地域おこし協力隊インターン生」として町長から委嘱を受け、2週間（実働10日間）の期間、業務に従事すること。希望者は3週間（実働15日間）の活動とする。

(1) 活動期間
夏季休暇中 下記の日程で3名募集
第1クール 8月7日(木)～8月21日(木)
※希望者は、3週間 8月28日(木)まで活動することが可能です。(申込時に希望期間を選択)

(2) 募集学生
①三大都市圏をはじめとする都市地域等在住の方で甘楽町に滞在できる学生
②地域住民や地域団体とコミュニケーションを図りつつ、地域の活性化に意欲をもって活動できる学生
③地方関心、SDGs、まちおこしに関心のある学生
募集人数：3名

(3) 滞在期間業務内容
①学童保育体験
②農業体験
③地場産物体験
④夏祭り等地域行事への参加
⑤その他、「こんなことにチャレンジしたい。」という希望があれば応相談。

(4) 活動形態
インターンシップ：原則週5日勤務（実質8時間程度）
報酬等：生活費等の活動支援金として、1日12,000円の支給（支給総額から源泉徴収及び宿泊施設使用料3,000円/泊が差し引かれます）
休日休暇を除く活動日のみ（実働10日分、3週間を希望の方は15日分）支給となります。
※現地までの交通費及び食費は自費となります。
※「地域経済を活性化させる」ために現地の飲食・買い物積極的に行ってください。
勤務時間：8:30～17:15（休憩時間 12:00～13:00）

(5) 住居
町が管理するシェアハウスにて生活（家賃・水道光熱費・Wifi利用料金等は無料となります。）

(6) 休日休暇
週休2日制(土日、祝日)※業務の都合により休日を他の日程と振り替える場合があります。

(7) 費用
自宅から現地間の往復交通費、食費は自費となります。

(8) 申込方法
QRコードのサイトからお申し込みください。
申込期間：2025年7月1日（火）～7月11日（金）
参加希望者は、7月8日（火）12:15～オンラインによる説明会を行います。
具体的な活動など、過去の参加者より説明しますのであわせて参加ください。
学内選考：1次 学内教員面接（7月18、22を予定）2次 甘楽町職員による面接（7月中を予定）

TOYO IDAY 蓬菜町盆踊り

あなたは伝統を
守れるか？

文京区向丘二丁目にある良き古き町 蓬菜町会
蓬菜町会が開催する盆踊り大会と一緒にもりあげませんか

募集概要

事前説明会について
7月30日(水)12:10～14:30
オンライン開催(参加は任意)
当日の不安を解消しましょう！

ボランティア内容
A ゲーム・屋台スタッフ
B 盆踊りの踊り手
C 太鼓の叩き手
B,Cは、レッスンに参加して
もらえば誰でもできる！！
(未経験者大歓迎)

※途中休憩アリ
※シフト制

スケジュール

事前説明会
7月30日(水)
12:10～14:30
応募締め切り
7月31日(金)
23:59
本番
8月22日(金)
集合 12:00
解散 20:30
8月23日(土)
集合 14:00
解散 20:30
上
踊り送り会
未定

本駒込 アクセス

集合場所
(常盤寺会館)
兆徳

問い合わせ先
mlvolsup@toyo.jp

共催：東洋大学ボランティア支援室
東洋大学学博
祭礼主催団体：文京区蓬菜町会

↑申し込みはこちらから↑
↑学内情報サイト↑

一生涯のパートナー

第一生命保険株式会社

首都圏コンサルティング営業室(ライフプロフェッショナル職)

CSRスタディツアー

Let's
meet up!



9.4 木
10:00-12:00

訪問先 第一生命保険株式会社(東京ガーデンテラス紀尾井町)
<https://www.dai-ichi-life.co.jp/dsr/index.html>

※集合場所などの詳細は後日メールにてお知らせします。

参加費 無料

募集 30名

内容
・第一生命保険株式会社が取り組むCSR活動について
～ライフサイクルゲームを体験しよう！～
・質疑応答・意見交換
・オフィス見学

社員(東洋大の卒業生も多く就職しています)の方から直接、
社会貢献の取り組みをお話いただく貴重な機会です。
みなさんの申込をお待ちしております！

お申込みは
こちらから



締切 7.31

お問い合わせ

ボランティア支援室 mlvolsup@toyo.jp



2025 富士樹海 清掃ボランティア(夏)

日本一の高さを誇る富士山。2013年に世界文化遺産に登録されました。しかし、富士山周辺の不法投棄は後を絶たず、ゴミは増え続け、人の手によって美しさを失いつつあります。2025年9月、あなたも富士山を守る活動へと参加してみませんか？

開催日時: 9/9(火)12:00~

申込期間: 7/4(金)~7/19(土)

※申込状況によって、出発地を減らす場合があります。

参加対象: 学部生 募集定員: 50名

参加費: 無料

※申込者多数の場合は抽選となります場合があります。

また、過去、同企画に参加したことがある方はご遠慮いただく場合があります。

事前説明会: 8/1(金) 18:00~(オンライン開催)

申込フォームURL <https://forms.gle/KZGExA4AIBzwhlw?>

<スケジュール> 予定

8:30 赤羽台キャンパス出発

(集合: 8時15分 赤羽台キャンパス発)

9:00 川越駅到着

(集合: 8時45分 川越駅発)

10:30 昼食(新倉駅サービスエリア)

12:00~14:30 富士樹海到着 / 清掃活動

17:30 川越駅到着

18:00 赤羽台キャンパス到着

(交通状況により前後する可能性があります。)

◆企画 ◆ SDGs アンパサダー
◆協力 ◆ 環境 NPO 富士山クラブ



申込フォームはこちら

ボランティア支援室
各企画資料



※交通費・嗜好品代は各自負担となります

プログラム
参加費 ※
無料

2025夏休み

ワークキャンプ プログラム

豊かな自然の中で 地域とかかわる旅に出ませんか？

田人コース / 福島県いわき市

主催 東洋大学ボランティア支援室

ワークキャンプ プログラム



豊かな自然の中で
地域とかかわる旅に出ませんか？

田人
コース

期間 2025年9月12日~14日

場所 福島県いわき市

※現地集合・解散

宿泊地 田人ワークキャンプ

食事 現地で自炊

活動内容 環境整備

ワークキャンプ等

募集人数 10名

参加費 ¥18,000→ ¥0 大学負担

※現地までの交通費・嗜好品代は自己負担

★参加者決定後の「キャンセル」はできません。

活動先にも迷惑がかかるため、自身のスケジュールをしっかりと確認の上、申込をしてください

こんなヒート
オスス!

ボランティア初心者
旅好き
自然好き
アウトドア派
地域の人と関わりたい

※学部生対象
※事前説明会あり(8月下旬)

プログラム提供 特定非営利活動法人NICE

お問い合わせ

東洋大学ボランティア支援室(主催)
03-3945-7636 mlvolsup@toyo.jp

申込締切 7/27(日)

※応募者多数の場合は抽選となります
※締切日を早める場合がございます

プログラム詳細
および申込はこちら



無料

もしもの備えに 2025

災害救援ボランティア講座

9/17(水) 18(木) 2日連続開催 両日参加必須となります

セーフティリーダー(SL)認定証が 災害救援ボランティア推進委員会より交付されます

災害発生時に

学生ボランティアリーダー

として
大学や地域との救援活動に協力しよう！

首都直下型地震は、今後30年以内に70%の以上の確率で発生するといわれています。また、近年は豪雨や台風などの風水被害もたびたび発生しており、災害への備えが急務となっています。

そこで、東洋大学の学生が災害発生時に「学生ボランティアリーダー」として活躍できるよう、災害救援ボランティア講座を開講します。

本講座では、2日間にわたり、災害時に救援ボランティアとして地域に貢献したい方を対象に、様々な実践的取り組みを通して地域防災について学びます。

災害時に何が起る？

自分にはなにができる？

行政が間に合わない...どうする？

大切な人と生き残りたい！

是非お申し込みください！

参加費

通常、学生10,000円のところ、
すべての講座を受講した本学学生に限り0円にて受講いただけます。
(東洋大学助成による)

場所

※詳細は参加決定書にお知らせします。
東洋大学白山キャンパスおよび池袋防災館(9/18)

定員

学生 25名

日時

9/17 9:00～17:00
9/18 9:10～17:00 予定

申し込み

以下URLよりお申込みください
<https://forms.gle/EpHsoC6HjUdXFAV56>
※お申し込み多数の場合は選考を行います
締切 **7/31(木)まで**



主催：東洋大学社会貢献センター（ボランティア支援室）
お問い合わせ：mlvolsup@toyo.jp 03-3945-7605

スケジュールは変更になる場合があります。



1日目

09:00～09:20 09:20～10:50 10:50～11:00 11:00～11:30 11:30～12:00 12:00～13:00 13:00～13:30 13:30～15:30 15:30～15:40 15:40～16:00 16:00～16:30 16:30～17:00	オリエンテーション（社会貢献センター）、東洋大学IVUSA 紹介（IVUSA白山クラブ） 災害救援ボランティアの基本（災害救援ボランティア推進委員会） 休憩 災害ボランティアセンター設置について（文京区社会福祉協議会） 防災対策の基本(文京区の取組) 文京区防災課 昼食・休憩 東洋大学の防災体制について（東洋大学社会貢献センター） 災害時のチーム・ビルディング（宮崎 賢哉氏/災害救援ボランティア推進委員会 防災教育部長、(公社)東京社会福祉士会 災害支援活動協力員） （途中休憩舎）帰宅・滞留行動シミュレーション（グループワーク） 休憩 出火防止と初期消火（小石川消防署） 警察による災害支援・防災活動（警視庁 富坂警察署） 事務連絡
--	--



2日目

09:20～11:00 11:00～13:00 13:00～14:30 14:30～14:40 14:40～16:50 16:50～17:00	災害模擬体験と実技（池袋防災館） 移動・昼食・休憩 「災害ボランティアの安全衛生と、被災された方との接し方」（宮崎 賢哉氏/災害救援ボランティア推進委員会 防災教育部長、(公社)東京社会福祉士会 災害支援活動協力員） 災害ボランティア活動ケースワーク（グループワーク） 休憩 都市型水害支援総合演習（グループワーク） まとめ・認定証授与
--	---

ゲスト（予定）

宮崎 賢哉 氏（災害救援ボランティア推進委員会 防災教育部長、(公社)東京社会福祉士会 災害支援活動協力員）

文京区社会福祉協議会（災害ボランティア関連のご担当者）

小石川消防署

富坂警察署

文京区役所 危機管理室防災課

NPO法人国際ボランティア学生協会（IVUSA）白山クラブ

ご応募お待ち



しております

海でくらすイルカ・クジラといった生きものたち・・・
海がキレイだと、私たちも、生きものたちもハッピーになれる！



多摩大学ボランティア体験プログラム
Toyo 1day ボランティアプログラム

ビーチクリーンアップ

in Yuigahama Beach

～SDGs 14「海の豊かさを守ろう」～





- ・実施日時：2025年10月12日（日）10:00～12:30
- ・場所：由比ガ浜海岸（由比ガ浜海水浴場南100年碑付近）
- ・集合場所：9:30に江ノ島電鉄（江ノ電）由比ヶ浜駅改札口集合、または9:45に由比ガ浜海水浴場開場100年碑付近集合
- ※遅れる場合や場所がわからない場合は、080-2050-9742（日比野）までご連絡ください。
- ・参加の方法：このチラシの右下にあるQRコードを読み取って、申し込みフォームに記入してください。
- ・服装および持ち物：動きやすい服装、歩きやすい靴（サンダル不可）、飲み物、帽子
- ※海岸には日をよけられる場所がないため、各自熱中症対策に留意をお願いします。
- ・天候について：小雨決行（雨具の用意をお願いします）、荒天中止
- ※中止の場合、当日朝7時までに、申し込み時に入力いただいたメールにご連絡します。
- その他、当日までにメールで案内が届くことがありますので、メールをなるべくこまめに確認いただくよう、お願いします。

【お問い合わせ先】

多摩大学学生社会ボランティアコーディネーター（多摩大学学生官庁連携センター事務局）

(e-mail) tcolla-jm@gr.tama.ac.jp (TEL) 042-337-7583

東洋大学ボランティア支援室（東洋大学エグゼクティブ棟 社会貢献センター内）

(e-mail) mlvolsup@toyo.jp (TEL) 03-3945-7297

・主催：多摩大学学生社会ボランティアコーディネーター 東洋大学ボランティア支援室

・協力：一般社団法人I.C.E.R.C Japan（国際イカ・クジラ教育リサーチセンター）

・企画運営：多摩大学学生有志、東洋大学SDGsアンバサダー



申し込みは
こちらから！

東洋大学 SDGs Weeks 2025



授業を通して知る、 里親制度や子どもたちのこと

「約4万2千人」という数字。この数字は日本において、様々な事情で親と離れて暮らす子どもたちの数値です。親の予期せぬ病気や虐待を受けて家庭に戻れないなど、実の親による子どもの養育が難しい場面が発生しています。そのため、実の親に代わって、温かい家庭環境の中で子どもを健やかに育てるために里親制度が存在します。10月は里親推進月間であり、こども家庭庁や自治体でも里親制度の推進を図るイベントを行っています。私たち大学生も本講演を通して、里親のもとで暮らす子どもたちの状況について学び、私たち学生にだからこそできることを考えてみませんか？

日時：10月15日(水) 2限 10:40～12:10

講師：吉成 麻子 様

養育里親。NPO法人乳幼児家庭養育の会、理事。
2004年の里親登録以来、実子と里子あわせて20人あまりを養育（現在は小6から4歳の里子4人を養育中）。
すべての赤ちゃんが家庭で暮らせることを願っています。

講師：齋藤 直巨 様

養育里親。一般社団法人グロウハッピー代表理事。
NPO法人東京養育家庭の会、理事。
2008年に里親登録し、ショートステイ、レスパイト、一時保護、長期の子ども12人の養育を経験。現在は、実子2人と里子2人を育てています。

担当教員：小野 道子 准教授

参加方法：対面形式（20301教室）・オンライン・オンデマンド

事前申込制：以下のGoogleFormsから申込
<https://forms.gle/oayht5RYH3EvySP9>

申込締切：10月13日(月)

※ 使用言語日本語



お問い合わせ先
東洋大学 ボランティア支援室
03-3945-7927
mlvolsup@toyo.jp





場所
千葉県
ふなばし三番瀬海浜公園

日時
10/25
9時30分～15時

子ども
あそぼう！

里親子 デイキャンプ

里親子支援ボランティア
様々な事情があって、里親家庭で暮らしている子どもたちがいます。里親家庭で暮らす子どもたちと一緒に、公園でレクリエーションや外遊びをしませんか？

▶ 日時 2025年10月25日(土) 9時30分～15時 (小雨決行)

▶ 場所 千葉県ふなばし三番瀬海浜公園 (千葉県船橋市潮見町40番)

▶ 集合場所 東洋大学 赤羽台キャンパス又は白山キャンパス (現地まではバスで向かいます。)

▶ 集合時間 8時00分頃の予定

▶ 参加費 無料 (昼食をご用意しております。)

▶ 参加者 千葉県里親会・東京都里親会と関係者

▶ 運営 社会福祉学科・小野ゼミの3・4年生

▶ 募集対象 東洋大学学生

▶ 申し込み ポスター2枚目のQRコードよりお申し込みください。

▶ 締め切り 9月23日(火)

▶ 定員 約35名 (定員を超過した場合、選考あり)

この活動は子ども福祉を学んでいる学生たちを中心に10年余り続けられてきたものです。2018年度より育成会の支援を得て、一般学生も参加が可能となりました。そのため、参加を希望する一般学生は、里親がおかれている状況を理解するための**事前学習への受講が必須となります。**

事前学習会に関しては、ポスター2枚目をご確認ください。

【事前学習会】
2025年10月22日(水) 16時30分～17時10分
対面またはオンラインでの参加が必須となります。
(ご都合の合わない方は個別でご対応いたします。応募フォームにご記入ください。)

【事前交流会】
2025年10月22日(水) 17時15分～18時00分

【昨年度の様子】
玉入れや借り物競争等のレクリエーションや自由時間を通し、子どもたちとたくさん遊び、仲を深めることができました。





普段できない貴重な体験ができます！

いっぱい遊べて楽しかったです！

昨年度の参加学生の声です。ボランティアの経験がなくとも安心して参加できる環境作りを目指しています。ご応募お待ちしております！

注意事項

参加するには「**行事保険**」に加入していただきます。(※費用は大学負担)
参加するには別紙「**承諾書**」が必要です。

【承諾事項/以下に同意の上、お申し込みください】

- ▶ 保証人 (大学に届出された保護者等) に企画参加の承諾を得ること。
- ▶ バスに乗り遅れた場合、集合場所までの交通費を本学は補償しません。

問い合わせ: 東洋大学 ボランティア支援室
〒113-0021 東京都文京区本駒込1-10-2 清水会館1F
電話: 03-3945-7927 メールアドレス: mlvol@toyo.jp
主催: 東洋大学社会学部社会福祉学科3-4年次小野ゼミ、東洋大学ボランティア支援室



参加申し込みQRコード

東洋大学 SDGs Weeks 2025



教育学演習/教育学卒論演習 公開講座

教育学の学生と考える“自分らしさ”とは



“しょうがい”って他人事？ ちがいはマイナス？ 同じも苦しい！？
助け合いこそが“自立”の鍵になる！？

日時: **10月28日(火) 5限 16:30～18:00**
講師: **長野 僚 様**
「Try chance」代表・講演家・執筆家

2011年3月 大東文化大学 文学部教育学科 卒業 (小学校教諭一種免許状を取得)

2011年4月 介護事業所「障害」に入社。(在職中に社会福祉士も取得)

2017年7月 フリーに転身。スローガン「障害を忘れられる瞬間」を掲げる！

2021年8月 2冊目の書籍を出版

2022年～ 株式会社ePARAの活動に参画('23からは社員も務めている)

2024年～ 新たに講演スローガンを掲げ、積極的に活動中
→「ちがいが同じも真ん中に」「ありのままの姿で、いつもと違う気づき」。



参加方法: 対面形式 (白山キャンパス 6101教室)
事前申込制: 以下のGoogleFormsから申込
https://docs.google.com/forms/d/1bZFRu13y5pHSUZV3AWaWC4KmB-CK4h5ivPWfzjR_TC4/edit?ts=68cc454
申込締切: 10月22日 担当教員: 永杉理恵 (文学部教育学科) *使用言語日本語

お問い合わせ先
東洋大学 ボランティア支援室
☎ 03-3945-7927
✉ mlvol@toyo.jp *本学学生はどなたでもご参加いただけます

東洋大学 SDGs Weeks 2025



社会福祉学専門演習ⅡB/社会福祉学専門演習Ⅳ 公開講座

福祉でまちづくりから 福祉はまちづくりへ ー能登半島地震での取り組みの今とこれからー

社会福祉法人佛子園 (石川県) は、「ごちゃまぜ」をテーマに、子どもから高齢者、障害や疾病の有無、国籍等にかかわらず、誰もが一緒に暮らせる「ごちゃまぜ」のまちづくりに取り組んでいます。2024年1月の能登半島地震からの「創造的復興」に向けて輪島KABULETの就労事業として「NOTO, NOT ALONE研究所」を立ち上げ、就労スタッフがTシャツを1枚1枚ハンドメイドしています。また、災害見守り拠点と福祉施設が合体した、日本初の「コミセン(コミュニティセンター)」を仮設住宅地に4か所設置。住民の困りごとにワンストップで対応しています。

本講義では、そのような「ごちゃまぜ」福祉の狙いや能登半島地震からの創造的復興に向けた佛子園の取り組み、地域を巻き込みながら展開する福祉実践について、また私たち学生ができる支援についてお話をいただきます。

本学学生であれば特別にどなたでもご参加いただけます。是非ご応募ください。



日時: **10月29日(水) 2限 10:40～12:10**
講師: **村岡 裕 様** (社会福祉法人佛子園 専務理事)

担当教員: 川原恵子
参加方法: 対面形式 (20313教室)・Web形式
事前申込制: 以下のGoogleFormsから申込
イベント前日までに当日参加URLをお送りします。
<https://forms.gle/owTVGWrTZJnuoeNx9>
申込締切: 10月27日(月)
*使用言語日本語

お問い合わせ先
東洋大学 ボランティア支援室
☎ 03-3945-7927
✉ mlvol@toyo.jp




首都直下型地震に備える！ 2025年度東洋大学宿泊サバイバル体験 ～もし、大地震が発生した時、白山キャンパスにいたら・・・？～

およそ100年周期でマグニチュード7クラスの地震が首都圏で発生すると言われているいわゆる「首都直下型地震」は、今後30年以内に70%以上の確率で発生すると懸念されています。その時、あなたがもし大学のキャンパスにいたら、どうしますか？

今回の体験型プログラムは、実際に大規模地震が発生し、交通機関が突然ストップしたという状況を想定して、実際の現場でどのように行動するか、その時に向けてどのような備えをするべきかということについて、体験しながら学ぶプログラムです。
(本プログラムは、白山キャンパスで発生したという想定のもと、実施する企画です)

11/14 (金) 1日目
19:00～

19:00-19:45 オリエンテーション
学生団体活動紹介
体験プログラム
※夕食づくり(防災食の準備) 簡易トイレづくり他

11/15 (土) 2日目
～12:30

7:30-9:00 体験プログラム
※朝食づくり、撤収
9:00-11:00 学生団体によるワークショップ
11:15-12:30 ふりかえりとわからあい

会場
白山キャンパス
1号館1604教室
(メイン会場)

参加費
無料

定員
20名
定員を超えた場合抽選

**対象：本学学生
(大学院生含む)**

申込方法

申込方法：右のQRコードより申込フォームに入力してください。
申込期間：2025年10月22日(火)～11月3日(月)
※定員を超える申し込みがあった場合、参加者の抽選を行う場合があります。

お問い合わせはこちら
東洋大学ボランティア支援室
TEL：03-3945-7927
E-mail：mlvol@toyo.jp

東洋生の知らない世界 ～完全攻略脱炭素化社会～

社会に出てから知らなかったじゃ済まされない。
「脱炭素」は、社会全体の課題として必須の常識に！？「水素」を見れば「未来」が見える！？
そんな学生の知らない世界に切り込んでいく必見の講座が開講。
文系学生にご存知してほしい「脱炭素」と「水素」の結びつきについてご案内します！

第1回 11月21日(金) 17:00～19:00 東洋大学白山キャンパスA304教室

さあ、「脱炭素」を学んでいこう。
産業、経済、そして生活。そんな社会にまたがる「エネルギー」は一見複雑そう。
でも、「水素」を力にするとだんだんとわかってきて…
講義形式で学ぶ「脱炭素」。この講義だけで基礎はバッチリ！

第2回 12月20日(土) 13:00～15:00 東洋大学白山キャンパス1608教室

東洋生の知らない「燃料電池自動車の世界」へご案内します。
今回のナビゲーターは自動車業界のあの企業！？
水素の普及がもたらす世界を学んでみよう！
当日は燃料電池自動車による水素発電デモンストラレーションを見学できます。
Hondaを迎えての特別講演。奮ってご参加ください！

申し込みはコチラから▶

締切：11月14日(金) 23:59

【お問い合わせ先】
東洋大学ボランティア支援室 mlvol@toyo.jp
・主催：東洋大学SDGsアンバサダー 増嶋チーム
・協力：オフィスH2エリエン
本田技研工業株式会社
・後援：東洋大学ボランティア支援室

東洋大学SDGs特設サイト
www.toyo.ac.jp/sdgs
東洋大学ボランティア支援室
mlvol@toyo.jp

使わないものを、使いたい人へ。 「もったいない」をつなぐ。 新品も、リユース品も。

「わらしべ長者プロジェクト」頒布会 in 赤羽台キャンパス

地域の方々、本学教職員、卒業生から寄せられた
雑貨、日用品(食器類)、衣類などを学生みなさんに頒布します！

日時・場所
11/25(火)、11/27(木)12:10～13:00
東洋大学赤羽台キャンパス WELLB-HELPO
3階渡り廊下

使わなくなったものの回収しています！
衣類(肌着は不可)、かばん、文房具、事務用品
本(ISBN入り)、食器等
※再利用可能なもの
未使用品のみ▶タンブラー・水筒、タオル等

※持ってきていない人も1人2点までお持ち帰りいただけます。

わらしべ長者プロジェクトとは？

「わらしべ長者プロジェクト」は、循環型社会に向けた実践的な取り組みを早くから実施しサステナブルシティとして国内外より注目される米国ポートランド州立大学(PSU)の取組をモデルケースとして、今回新たにリユースプロジェクトとして立ち上げたプロジェクトです！

主催・お問い合わせ先: 東洋大学社会貢献センター/ボランティア支援室(白山キャンパス雨水会館1階)
e-mail: mlvol@toyo.jp (TEL) 03-3945-7927

使わなくなったもの 捨てる前に 誰かに届けて みませんか？

回収対象
衣類(肌着は不可)、かばん、文房具、事務用品、本(ISBN入り)
食器等
※再利用可能なもの
未使用品のみ▶タンブラー・水筒、タオル等

回収不可
家具家電類、肌着下着類、古くて使用できないもの

主催・お問い合わせ先: 東洋大学社会貢献センター/ボランティア支援室(白山キャンパス雨水会館1階)
e-mail: mlvol@toyo.jp (TEL) 03-3945-7927

東洋大学×山古志×能登

地域共創シンポジウム

被災からの復興と
持続可能なコミュニティを考える

【山古志 20年の軌跡】

山古志住民会議 代表 竹内春華
学ボラ 前総代表/ディレクター 伊藤楓真

【学びと対話のセッション】

金沢大学 准教授 川澄厚志 学ボラ 前総代表/ディレクター 伊藤楓真
山古志住民会議代表 竹内春華 能登復興支援 いびす代表 伊東航洋
東洋大学 社会貢献センター長 高山直樹 (Moderator)

2026年1月31日(土) 14:00~16:30
東洋大学 白山キャンパス 井上円了ホール

共催：東洋大学社会貢献センター
東洋大学公認サークル/学ボラ(旧学生ボランティアセンター)
後援：能登復興支援 いびす/山古志住民会議
お問い合わせ先：gakubola20.symposium@gmail.com

詳細はこちら

プログラム参加費 ※
無料

学部生対象

※ただし交通費・嗜好品代は各自負担となります

2026 ワークキャンプ プログラム

豊かな自然の中で 地域とかかわる 旅 に出ませんか？

栃木県益子町

主催 東洋大学ボランティア支援室

ワークキャンプ プログラム

豊かな自然の中で
地域とかかわる旅に出ませんか？

栃木コース

期間	2026年2月23日~25日
場所	栃木県益子町を拠点 ※現地集合・解散
宿泊地	確認中(決まり次第お知らせ)
食事	現地で自炊
活動内容	竹林整備、竹デッキ作りなど
募集人数	10名
参加費	¥18,000→ ¥0 大学負担

※現地までの交通費・嗜好品代は自己負担
★参加者決定後の「キャンセル」はできません
活動先にも迷惑がかかるので、自身のスケジュールをしっかりと確認の上、申込してください

ボランティア初心者
旅好き
自然好き
アウトドア派
地域の人と関わりたい

※学部生対象
※事前説明会あり(1月中旬)

プログラム提供 特定非営利活動法人NICE

お問い合わせ
東洋大学ボランティア支援室(主催)
03-3945-7636 mlvolup@toyo.jp

申込締切 1/5

※応募者多数の場合は抽選となります
※締切日を早める場合がございます

プログラム詳細
および申込はこちら

東日本大震災から15年

入場無料

「生きる」

大川小学校 津波裁判を闘った人たち

2023年第78回毎日映画コンクールドキュメンタリー映画賞受賞 監督：寺田 和弘

上映会

小さいのちが違った
仮えなくてはならないこと
忘れてはいけないこと
「なぜわが子が学校で最期を迎えたのか」
10年間にわたり、その答えを求めて撮影し続けてきた親たちの記録

2月28日(土) 上映時間122分
10:00~12:30

上映後に寺田和弘監督がオンライン出演有り
会場：東洋大学白山キャンパス 125周年記念ホール

定員：100名 申込締切：2/25(水) 先着順！

お申込みはこちら

主催：東洋大学ボランティア支援室

体験会!!

GOAL BALL

2026
3/1 SUN



音でつながるバラスポーツのゴールボール。その体験を東洋大学で！

こんな方におすすめ！

- ・現役パラアスリートのゴールボールのプレーを間近で体験してみたい方
- ・他校陣がいて楽しく学びたい方
- ・スポーツを楽しみたい方
- ・新しい交流を求めている方
- ・共生社会や多様性について考えたい方
- ・等々

スペシャルゲスト 場所 東洋大学 赤羽台キャンパス HELSPO HUB-3 多目的室1

山口凌河 時間 14:15 ~ 16:00 (受付開始 13:45)

選手
社会学部
社会福祉学科卒



お申し込みイベント内訳は
こちらのQRコードから！
申し込み締め切り
2/6(金)まで

主催：東洋大学SDGsアンバサダー
お問い合わせ：mlvolsup@toyo.jp

IKEA横浜

CSRスタディーツアー

**IKEA横浜を見学して
IKEA横浜の店長にお話を伺います！**

募集人数 20名

開催日時 3/9（月）10:00~12:00
希望者は12:00~スウェーデンレストランでランチ
※ランチは自己負担となります。

開催場所 IKEA横浜
<https://www.ikea.com/jp/ja/stores/yokohama/>
集合場所などの詳細は後日メールにてお知らせします。



サステナブルな暮らしとは？
イケアの地域活動とは？
環境への取組みとは？
様々な社会貢献活動の取組みを学びます。

2/25締切

↓お問い合わせ先
ボランティア支援室
mlvolsup@toyo.jp

申込はこちら



ボ。

一年間、ボランティアをして来た貴方へ

ボランティアってなに？

プログラム

- ・あなたの経験、聞かせてください
～ボランティアバスケット～
- ・大喜利で紐解くボランティア...？

会場

東洋大学白山キャンパス
甫水会館 3階 301教室

3.19

14:00 ~ 15:30

主催 東洋大学ボランティア支援室
学生サポートスタッフ
toyo.vc.staff@gmail.com

お問い合わせ 東洋大学ボランティア支援室
(担当：日比野)
学生サポートスタッフ
toyo.vc.sstaff@gmail.com

申し込みはこちら



2025年度 社会貢献活動助成 表彰式・報告会

東洋大学 社会貢献センター

東洋大学学生団体による社会貢献活動等奨励プロジェクトに対する助成
及び社会貢献活動に対する表彰の概要（抜粋）

●目的

本事業は、東洋大学の学生ボランティア活動等社会貢献活動の充実に寄与するために、学生団体へのプロジェクトに対して助成を行うとともに、本学学生の社会貢献活動に対して表彰を行うことにより、その努力に報いその活動成果を今後の学習活動に活かすことを奨励し、社会に貢献する人材の育成を支援するものである。

◆学生団体による社会貢献活動等奨励プロジェクト助成

●助成対象となるプロジェクト活動

(1)新規活動助成

- ア 初めの一步を踏み出そうとする、又は踏み出しつつある学生団体であること。
- イ 応募年度が初めての活動になること。

(2)継続的活動助成

- ア 自らの団体の持ち合わせている技術力や特技を最大限に生かしたボランティア活動を行っている学生団体であること。
- イ 団体として最低1年以上の活動実績があること。

●助成内容

(1)新規活動助成

- ア 助成金額は、年間1件当たり、1万円～10万円以内（1万円単位）とする。
- イ 採択件数は、年間5件程度を目安とする。

(2)継続的活動助成

- ア 助成金額は、年間1件当たり、1万円～20万円以内（1万円単位）とする。
- イ 採択件数は、年間5件程度を目安とする。

2025年度実績	応募団体数 8団体	採択団体数 8団体
----------	-----------	-----------

◆社会貢献活動による表彰

●表彰の対象

- (1)本助成金を受けて活動した団体（以下「助成団体」という。）
- (2)本助成金を受けないで活動した団体（選考漏れの団体を含む。）及び個人又は学外の団体に所属して活動した個人（以下「助成を受けない団体及び個人」という。）
- (3)前号の団体及び個人については、別に定める活動実施結果報告書を提出のうえ、本助成による「活動報告会」に参加し、その活動が表彰に値すると評価された場合に限る。また、同一内容の活動の表彰に対しては在学期間中1回限りとし、継続しての表彰はしない。

●表彰内容

- (1)助成団体 表彰状と記念の盾を授与する。
- (2)助成を受けない団体及び個人 表彰状と表彰金（1件3万円を上限）を授与する。

2025年度実績	応募件数 2件（個人2名／0団体）	受賞数 1件（個人1名／0団体）
----------	-------------------	------------------

◆社会貢献活動による表彰 受賞者活動紹介◆

受賞者：本嶋 向日葵さん「冷蔵庫プロジェクト」

【活動概要】

育児により外に働きに出ることができないフィリピンの貧困女性に対し、冷蔵庫の貸与と資金援助を行い、自宅の玄関先での店舗開業を支援することで、世帯収入の倍増と生活の向上を図ります。一時的な支援に留まらず、自ら稼ぐ力を身につけてもらうことで、持続可能な将来を獲得していただくプロジェクトとなっております。



◆学生団体による社会貢献活動等奨励プロジェクト助成 採択団体活動紹介◆

団体名：学ボラ（山古志）

【活動概要】

当団体は、2004 年の新潟県中越地震を契機に設立され、山古志地域を中心に復興支援や地域活性化に取り組んでいます。コロナ禍の影響で一時活動が制限されましたが、2023 年度より「夏祭り」や「中越地震追悼式」の運営支援を再開し、地域住民との交流を深めながら地域文化の継承に努めています。さらに今年度は1月に「地域共創シンポジウム」を開催し、これまで活動に関わっていた方々と 20 年間の活動を振り返ることができました。



団体名：ボードゲーム地域交流団体 ぼどのわ

【活動概要】

学生メンバーと地域の参加者がボードゲームを通して交流する会（ぼどの会）を開催しています。

活動目的は、ボードゲームをツールとした地域の居場所づくりです。

2025年度は、ヌーヴェル赤羽台集会室を中心に月1回の開催をしました。

また、地域で活動している他団体に出張し、ボードゲームを用いて交流する機会を作りました。



団体名：学生 NPO FLY

【活動概要】

FLY は、貧困、居場所、若年犯罪などの社会問題の解決に向けて活動している学生 NPO です。貧困に関しては、生活保護制度をよりアクセスしやすくするために福祉事務所前でアウトリーチを行いました。居場所に関しては、白山キャンパスの教室を用いた居場所づくりを行い、子どもたちとの交流を深めました。若年犯罪に関しては、若者が犯罪をすることを防ぐために、柏駅前を中心に未然防止のためのアウトリーチ活動を実施しました。



団体名：きりがく

【活動概要】

本活動は、地域の集会所を活用し、子どもが安心して過ごすことのできる居場所づくりを目指して活動しています。カードゲームや風船といった遊び道具を沢山用意し子どもが自由に過ごせるように工夫したり、お菓子作りや手芸体験などの子どもがわくわくするような企画にも挑戦したりしています。



団体名：RISE - 難民・移民と手をつなぐ

【活動概要】

RISE は、難民・移民への理解を深め、支援につなげることを目的に活動する東洋大学のサークルです。教育支援、他団体との協働、イベントや発信を通じて、国内外の難民・移民が直面する課題を学び、社会とつながる実践的な活動を行っています！



団体名：Smile F LAOS

【活動概要】

年間を通じてラオスのコーヒー豆をフェアトレードで仕入れ、大学内外で販売し、その収益をラオスの小学校への教育支援に充てています。年末にはメンバー自らラオスを訪れ、コーヒー生産者への聞き取りや家計調査を実施。渡航で得た学びを活動に還元し、学生主体の循環型活動を行っています。



団体名：こもれび

【活動概要】

こもれびは「相手が本当に求めている支援を、自分たちで考えて実行したい」と常に考えて活動しております。

具体的には、能登半島での観光アプリ「めぐり」の開発、児童養護施設のイベントお手伝い、北区での防災アプリの開発を行っています。主軸としている、能登観光アプリ「めぐり」の開発では、企画・調査から開発、運用までを一貫して行っております。



団体名：点字体験・点字しおりの販売（東洋大学点訳サークル）

【活動概要】

当団体は、若い世代の点訳ボランティアを増やすこと、点字・点訳をより多くの方に知っていただくことを目的に活動しています。その一環として、2025 年度白山祭において出展企画をしました。来場された方に点字で名前を書く体験をしていただいたり、メンバーが作成した点字しおりを販売したりしました。小学 1 年生から親世代まで



◆旧課外活動育成会 活動紹介◆

企画名：里親子デイキャンプ

【活動概要】

里親子デイキャンプは、里親子との交流を通して、学生が里親制度の現状を理解することを目的とした取り組みです。学生が主体となって企画・運営を行い、子どもたちと一緒に昼食をとったり、レクリエーションを行ったすることで交流を深めます。また、里親さんとの座談会を実施し、里親同士の交流を促すとともに、里親制度への理解をさらに深める機会としています。



企画名:2025 年度春季 被災地のまちづくりを考え、発信するスタディツアー

【活動概要】

震災 15 年の浜通りを巡り、復興の「今」を発信する。本プログラムでは、オリーブ植樹や、コットン栽培、浪江の安波祭、震災遺構の見学など様々な現地での体験を通して、復興に向けて変化を続ける地域の「これから」について深く考察。現地の方々の志に触れ、未来の担い手としての自覚と、発信者としての視点を養った。



◆旧課外活動育成会（国際ボランティア） 活動紹介◆

団体名：国際ボランティアサークル Salamat

【活動概要】

私たちは「Save Smile」を合言葉に、支援先と対等に助け合う関係を目指している。今回の渡航では、SelmaCrusherでの行政認定に向けた環境整備と、Lumbaniでの修繕および住民による管理体制づくりを行う。深い信頼関係を基盤に、子どもたちの教育環境と笑顔を持続的に守り、次世代の活動へと繋げることを目標としている。



団体名：ISR-ConnAction

【活動概要】

国内では文京区の NPO 法人の方々と連携させてもらい、年 4 回子ども向けの季節毎イベントの企画・運営をしています。

海外では夏休みと春休みの長期休みを活用し、フィリピンのセブに渡航し活動しています。活動の企画から実行まで全てを学生が主体となって作り上げるのが ISR の特徴です。セブでは古着配布や図書室支援を通して現地の方々との繋がりを築く活動を行っています。



◆社会貢献センター支援団体 活動紹介◆

団体名：東洋大学 SDGs アンバサダー

【活動概要】

東洋大学 SDGs アンバサダーは、「学校法人東洋大学 SDGs 行動憲章」の制定を受けて発足した制度です。SDGs の実践や啓発に意欲的な学生・団体に対し、学長より称号付与という形で認定され、SDGs に関わる活動を幅広く行っています。認定者は全キャンパスに在籍し、今年度は学祭をはじめエコプロやクールアースフェアなど、学内外の様々な場で活動したほか、2025 年大阪・関西万博のプログラムにも参加しました。



企画名：富士樹海清掃ボランティア（SDGs アンバサダー運営）

【活動概要】

山梨県富士河口湖町 青木ヶ原樹海にて認定特定非営利活動法人 富士山クラブの協力のもと富士樹海清掃ボランティアを行いました。国道沿いの歩道および樹海内でのゴミ拾いを実施し、ゴミの総量は 70 キロとなりました。活動を通じて環境保全の重要性について、理解を深めるきっかけとなりました。



企画名：宿泊サバイバル体験

【活動概要】

2024 年 11 月 14 日（金）～11 月 15（土）にかけて東洋大学白山キャンパスにて宮崎賢哉氏協力のもと主催 東洋大学 IVUSA（東京白山クラブ）、企画協力 東洋大学 SDGs アンバサダー（防災まちづくりチーム）で宿泊サバイバル体験を行った。宮崎賢哉氏の講義をはじめとし、大規模災害の発生を想定した簡易トイレ作りや非常食体験を 1 日目に行い 2 日目は企画運営に携わる両団体よりワークショップを行った。

本活動を通じて参加者の防災意識を高め、日常の中の備えの重要性を改めて感じる機会となった。



企画名：NICE ワークキャンププログラム 田人コース

【活動概要】

2025年9月12日（金）～14（日）にかけて福島県いわき市田人町にて東洋大学ボランティア支援室 NPO 法人 NICE 田人里山再生委員会協力のもとワークキャンプを実施しました。本ワークキャンプは「地域の中の人と外の人とで作るまちにしたい」というコンセプトのもと地元の子どもたち向けに行われる自然体験教室やいちご農家さんの苗植えボランティアを通じて地域性や自然との共存について学びました。



企画名：スポ GOMI（SDGs アンバサダー運営）

【活動概要】

一般財団法人日本財団スポ GOMI 連盟のご協力のもと、「スポ GOMI 東洋大学」を実施しました。ゴミ拾いをスポーツという形にすることで、自発的で楽しい活動に転換でき、たばこの吸い殻を重点的に集めるチームや、ゴミの種類を問わず幅広く拾うチームなど、各チームが異なる作戦で取り組みました。本活動を通して、ゴミの分別に対する意識や、ポイ捨てに対する問題意識を高めることができました。

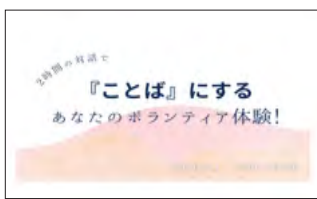
本活動を通して、ゴミの分別に対する意識や、ポイ捨てに対する問題意識を高めることができた。



企画名：「2 時間の対話で『ことば』にする、あなたのボランティア体験」

【活動概要】

ボランティア活動体験の「言語化」に焦点を当てた「ふりかえり」の大切さを、参加者間で共有するワークショップ。「言語化」の重要性は認識しているけれど、苦手意識を感じている人に対し、「言語化において大切なことは『語彙力』ではなく、感じたことを『細分化』して伝えること」であること、「ありきたりな表現（クリシェ）」に頼らずに言葉にすることを学び合った上で、個々の参加者が 1 年間の活動を「自分」「他者」「社会」の 3 つの軸に沿って内省した上で、他の参加者にその体験を伝え、対話を進めていきました。



団体名：NOTO × TOYO 青いビブス

【活動概要】

当団体は、令和 6 年能登半島地震を契機に設立され、「東洋から能登へ復興の輪を上げよう」というコンセプトの下、「そうぞう（想像・創造）的復興」を目指していく団体です。主に輪島市・珠洲市・志賀町・七尾市で復興支援活動を行っており、最近では東洋大学と包括連携協定を結んだ七尾市にて、地域の町おこしについても関わらせていただいております。また、東京からできる支援として現地に行けなくても「関係人口」として関わり続けられる仕組みづくりを進めています。



2025年度 ボランティア支援室 資料・記録

ボランティア支援室 ガイダンスの実施

ボランティア支援室では、学生のボランティア意識向上を図るため、授業単位でボランティア支援室のコーディネーターによるガイダンスを実施した。

概要は以下のとおり。

1. 実施コース

- A. 概要説明・ワーク (注)・白山キャンパスボランティア支援室見学 90分コース
 - B. 概要説明・ワーク (注) 60～90分コース
 - C-1. 概要説明 30分コース
 - C-2. 概要説明 ※映像によるガイダンス 30分コース
 - D. Web紹介動画の利用 (YouTube 動画でのご案内) 30分程度
- (注) ワークはディスカッション等を行います

2. 実施日時

授業期間に授業単位での実施

3. 申込方法

- ① ボランティア支援室サイト内のお申し込みフォームにご入力
 - ② 別紙の「ボランティア支援室ガイダンス申込書」に必要事項をご記入の上、ボランティア支援室 (白山キャンパス・甬水会館1階) に電子メールまたは直接提出
- ① ② のいずれかの方法でお申込ください。

4. 実施実績 (2025年度)

9件

5. 受講者の感想 (抜粋)

ボランティアコーディネーターの日比野さんの話を聞き、ボランティアは行う人だけでなく、それを支える人がいて成り立っている事を学ぶ事が出来ました。例えば、やりがい搾取や自発性パラドックスなどの問題を解決するためには、ボランティアコーディネーターのような支える人が大切な存在であると思いました。

ボランティアは主体性・自発的に行動するものだとならためて考えることができました。社会問題を考えた時に少子高齢化が進んでいるが、今後さまざまボランティアを支えていくにあたって高齢化は大きな課題になると考えました。

実際にボランティア活動を主体的に取り組んでいる大学生から話を聞いて、よりボランティアに対する興味、関心が湧いた。自分の目標や将来について考える良い機会になった。

東洋大学ボランティア支援室要項

(設置)

第 1 条 この要項は、東洋大学社会貢献センター規程第 4 条第 4 項に基づき、社会貢献センターに「東洋大学ボランティア支援室」(以下「ボランティア支援室」という。)を置く。

(目的)

第 2 条 ボランティア支援室は、本学で実施する学生及び教職員によるボランティア活動に関する支援策の策定、情報収集、発信及び提供することを通じて、本学の社会貢献活動の発展に寄与することを目的とする。

(機能)

第 3 条 ボランティア支援室は、学生支援課をはじめ各部署が所管するボランティア活動と相俟って相互に連携及び協力するとともに、全学的な統括部署としての機能を有する。

(業務)

第 4 条 ボランティア支援室は、第 2 条の目的を達成するため、次の各号に掲げる業務を行う。

- (1) ボランティア支援室の方針及び計画の策定に関する事項
- (2) ボランティア活動の開拓及び実施に関する事項
- (3) ボランティア活動に関する情報の収集、管理及び提供に関する事項
- (4) ボランティアに係る相談、助言及び支援策に関する事項
- (5) 学外ボランティア関係機関等からの紹介及び連絡調整に関する事項
- (6) その他ボランティア支援室の目的達成に必要な業務

(室長)

第 5 条 ボランティア支援室に、室長を置く。

2 室長は、社会貢献センター長とし、ボランティア支援室の業務を統括し、ボランティア支援室を代表する。

(副室長)

第 6 条 ボランティア支援室に、副室長を置くことができる。

2 副室長は、本学の専任教員のうちから、室長及び学長の推薦により、理事長が任命する。

3 副室長は、室長を補佐するとともに、室長に事故があるとき又は室長が欠けたときは、室長の職務を代理し、又は代行する。

4 副室長の任期は 2 年以内とし、室長の任期満了とともに終了する。ただし、再任を妨げない。

(専門スタッフ)

第 7 条 ボランティア支援室に、ボランティア支援活動に従事する者として、専門スタッフを配置する。

2 前項のスタッフの任用及び職務等については、別に定める。

(運営委員会)

第 8 条 ボランティア支援室に、運営委員会を置く。

(運営委員会の組織)

第 9 条 運営委員会は、次の各号に掲げる委員で組織する。

- (1) 室長及び副室長
- (2) 社会貢献センター運営委員会委員(通信教育部長を除く。)から互選した者 若干名
- (3) 室長が推薦する者 若干名
- (4) 学生部長
- (5) 教務部長

(委員の任期)

第 10 条 前条第 2 号及び第 3 号に掲げる委員の任期は、2 年とする。ただし、任期の途中で委員となった者の任期は、前任者の残任期間とする。

2 委員は、再任することができる。

(審議事項)

第 11 条 運営委員会は、次の各号に掲げる事項を審議する。

- (1) ボランティア支援室の基本方針
- (2) ボランティア支援室の業務計画に関する事項
- (3) 学長から諮問された事項
- (4) その他ボランティア支援室に関する重要事項

(議長)

第 12 条 運営委員会は、室長が招集し、その議長となる。

(委員以外の出席)

第 13 条 議長は、必要に応じ、委員以外の者を運営委員会に出席させ、その意見を聴くことができる。

(専門部会)

第 14 条 運営委員会は、専門的な事項について調査審議するほか、ボランティア支援室業務に係る企画立案等の作業を支援するため、専門部会を置く。

2 専門部会について必要な事項は、運営委員会の意見を聴いて室長が定める。

(業務計画)

第 15 条 室長は、当該年度の 10 月末日までに次年度の業務計画を定め、学長の承認を受けなければならない。

2 室長は、各年度の業務の実施結果について、当該年度終了後 1 カ月以内に、学長に報告しなければならない。

3 業務計画を変更する場合は、学長の承認を受けなければならない。

(評価委員会)

第 16 条 ボランティア支援室が実施したボランティア活動等業務内容を評価し、その活動内容について室長に適切な助言をするために、評価委員会を置く。

2 評価委員会の運営及び評価方法に関する必要事項は、別に定める。

(事務)

第 17 条 ボランティア支援室の事務は、学生支援課その他関係部署と連携協力のうえ、社会貢献センター事務室が行う。

(細則)

第 18 条 この要項の実施について必要な事項は、運営委員会の意見を聴いて室長が定める。

(改正)

第 19 条 この要項の改正は、学長が室長の意見を聴いて行う。

附 則

この要項は、平成 29 年 4 月 1 日から施行する。

附 則 (令和 7 年 4 月 1 日要項第 133 号)

この要項は、2025 年 4 月 1 日から施行する。

組 織 図



ボランティア支援室運営委員会委員名簿

所 属	氏 名
室 長	高 山 直 樹

東洋大学ボランティア支援室要項第5条による
(任期：2025年4月1日～2026年3月31日)

所 属	氏 名
文 学 部	堀 本 麻 由 子
総 合 情 報 学 部	小 瀬 博 之

東洋大学ボランティア支援室要項第9条2号による
(任期：2025年4月1日～2027年3月31日)

所 属	氏 名
室 長 推 薦 (文学部)	高 野 聡 子
室 長 推 薦 (法学部)	谷 釜 尋 徳
室 長 推 薦 (国際学部)	子 島 進
室 長 推 薦 (福祉社会デザイン学部)	内 田 塔 子
室 長 推 薦 (福祉社会デザイン学部)	林 大 介

東洋大学ボランティア支援室要項第9条3号による
(任期：2025年4月1日～2027年3月31日)

専門部会委員名簿

所 属	氏 名
文 学 部	高 野 聡 子
法 学 部	谷 釜 尋 徳
国 際 学 部	子 島 進
総 合 情 報 学 部	小 瀬 博 之
福 祉 社 会 デ ザ イ ン 学 部	内 田 塔 子
福 祉 社 会 デ ザ イ ン 学 部	林 大 介

東洋大学ボランティア支援室要項第14条および事務取扱要領第3条1号(1)による
(任期：2025年4月1日～2027年3月31日)

(参考) 東洋大学 4キャンパスの学部配置

キャンパス	特 徴
白山 (東京都)	文系7学部(文、経済、経営、法、社会、国際、国際観光) 特に社会学部や国際学部、国際観光学部でボランティア活動が盛んにおこなわれている。 また、ボランティアサークルも多数存在。
川越 (埼玉県)	理系2学部(理工、総合情報) キャンパスと地元(鶴ヶ島市、川越市)との連携して正課内外で多くの活動が行われている。
朝霞 (埼玉県)	理系2学部(食環境科、生命科) 学部の特色を活かした地域への貢献活動を中心に展開されている。
赤羽台 (東京都)	情報連携学部、社会福祉デザイン学部、健康スポーツ科学部 情報連携学部：2017年に新設された新しい学部 福祉社会デザイン学部：2023年度開設 健康スポーツ科学部：2023年度開設 社会福祉、子ども支援、健康スポーツ等学科の学びは広く、それぞれにボランティア活動も行われている。

2025年度 ボランティア支援室運営委員会・専門部会活動記録

第1回：2025年4月28日（木）【書面会議】（運営委員会及び専門部会）

審議依頼事項

1. 東洋大学SDGsアンバサダー募集について
2. 2025年度国際ボランティア活動支援事業募集要項変更について

報告事項

3. 「令和6年能登半島地震」被災地支援ボランティア活動助成事業2025募集について
4. 東洋大学学生団体による社会貢献活動プロジェクトに対する助成事業選考【追加】について
5. ボランティア支援室企画について
 - ・カンボジアフェスティバル
 - ・とびこめ! ボランティアの森「ボランティア合同新歓2025」in 白山 2025.5.89 in 赤羽台 2025.5.13・15
 - ・富士樹海清掃ボランティア
 - ・第1回スポGOMI in 朝霞キャンパス

第2回：2025年6月21日（土）【書面会議】（専門部会）

審議依頼事項

1. 2025年度ボランティア支援室企画について
2. 2025年度学生課外活動育成会企画の取り扱いについて
3. ボランティア支援室企画について
 - ・防災備蓄品食糧配布会
 - ・東洋大学ウォーターサーバープロジェクト「ぐるぐるスタンプラリー」
 - ・盲・ろう者理解ワークショップ
 - ・赤羽台のヒト・モノ・コトさがしのまちあるき
 - ・スペシャルオリンピックスの現場から学ぶ支援と自己表現のコツ
 - ・赤羽台団地祭り
 - ・わらしべ長者プロジェクト
4. 社会教育実習生受け入れについて

報告事項

1. ボランティア支援室利用状況報告（2025年5月まで）（授業内ボランティア支援室ガイダンス申込状況）
2. SDGsアンバサダー募集について（結果報告）
3. 2025年度授業支援について
4. ボランティア支援室企画活動報告
 - ・SmileFLaos コーヒー学内販売会（4/22-23）
 - ・TOYO1Day ボランティアプログラム「カンボジアフェスティバル2025」運営ボランティア（5/3-4）
 - ・「とびこめ!ボランティアの森～ボランティア団体合同新歓2025in 白山&赤羽台～（5月）」（5/8-9）
 - ・富士樹海清掃ボランティア活動（5/18）
 - ・ごみ拾いはスポーツだ! スポGOMI（6/1）
 - ・blab見学ツアー（6/7）
 - ・東洋大生がワークショップで考えるSDGs（4/19）
 - ・大人の社会科見学（5/25）
 - ・東洋大学パラスポーツ体験会（6/7）

第3回：2025年10月11日（土）【書面会議】（専門部会）

審議事項

1. 2026年度予算要求について
2. 2025年度「能登半島ボランティア」（11月）実施について
3. 2025年度SDGs Weeksについて
4. ボランティア支援室企画について
5. 全学総合科目SDGs実践講座について

報告事項

1. ボランティア支援室利用状況報告（2025年9月まで）（授業内ボランティア支援室ガイダンス申込状況）
2. ボランティア支援室企画報告

- ・2025年日本国際博覧会における環境教育・ESDプログラム「SDGs Students Dialogue Expo 2025」参加について
- ・文京区クールアースフェアについて
- ・わらしべ長者プロジェクトについて
- ・能登半島ボランティア活動について
- ・富士樹海清掃ボランティア活動について
- ・第一生命保険株式会社CSRスタディーツアーについて

第4回：2025年12月22日（月）【書面会議】（専門部会）

審議依頼事項

1. 2025年度「能登半島ボランティア」（春季）実施について
2. 東洋大学学生団体による社会貢献活動等奨励プロジェクトに対する助成及び社会貢献活動に対する表彰の募集要項の変更について
3. 社会貢献活動表彰制度募集について
4. 社会貢献活動助成事業および地域活性化活動支援事業の報告会、社会貢献活動に対する表彰について
5. ボランティア支援室外部評価について
6. ボランティア支援室企画について
 - ・被災地のまちづくりを考え、発信するスタディーツアー
 - ・NICEワークキャンププログラム（春休み）
 - ・被災からの復興と持続可能なコミュニティを考える～東洋大学の支援と山古志村の挑戦～＜学ボラ発足 20周年記念講演＞について
 - ・映画『「生きる」大川小学校 津波裁判を闘った人たち』（2023年第78回毎日映画コンクール ドキュメンタリー映画賞他）上映会について

報告事項

1. ボランティア支援室利用状況報告（2025年11月まで）（授業内ボランティア支援室ガイダンス申込状況）
2. ボランティア支援室活動報告
 - ・SDGs Week EXPO エコプロ2025出展について
 - ・「東洋生の知らない世界」～完全攻略脱炭素社会～
 - ・フェアトレードの普及促進を目的としたラオス産オリジナルコーヒーの販売会（2025年10月2日～6日）
 - ・Toyo 1day ボランティアプログラム「ビーチクリーンアップ in YUIGAHAMA Beach～SDGs14『海の豊かさを守ろう』～」（2025年10月12日）
 - ・東洋大学SDGs Weeks 2025×「里親月間」特別企画（SDGs Weeks 公開授業）（2025年10月15日）
 - ・「里親子デイキャンプ」（2025年10月25日）
 - ・八丈島支援募金活動（2025年10月25日）
 - ・教育学科の学生と考える“自分らしさ”とは（SDGs Weeks 公開授業）（2025年10月28日）
 - ・福祉でまちづくりから 福祉はまちづくりへ（SDGs Weeks 公開授業）（2025年10月29日）
 - ・第4回文京区内大学サステナビリティ関連取組紹介のための交流・意見交換会（2025年10月31日）
 - ・大学祭報告【白山・川越・赤羽台・朝霞】（2025年11月2日～3日）
 - ・能登半島ボランティア（七尾）（2025年11月2日～5日）
 - ・青いビブス防災講座（2025年11月6日）
 - ・東洋大学学生課外活動育成会支援事業「首都直下型地震に備える!東洋大学宿泊サバイバル体験（2025年11月14日～15日）
 - ・スポGOMI東洋大学in赤羽台キャンパス（2025年12月6日）
 - ・CSR論公開講義「企業と人権」（SDGs Weeks 公開授業）（2025年12月9日）

第5回：2026年2月17日（火）【書面会議】（専門部会）

審議依頼事項

1. 2025年度 東洋大学社会貢献活動表彰の採択結果および表彰に対する助成金について
2. 東洋大学学生団体による社会貢献活動等奨励プロジェクトに対する助成及び社会貢献活動に対する表彰の募集要項の変更について【再修正】
3. 社会貢献活動助成事業および地域活性化活動支援事業の報告会、社会貢献活動に対する表彰について
4. ボランティア支援室企画について
 - ・文京区社会福祉協議会（フミコム）主催の「文京区にふみこむフェスタ2025」への学生団体出展について
 - ・IKEA 横浜店 CSR ツアーについて
 - ・【令和7年度】 学生による地域活動報告会 in 文京区への学生団体出展について
 - ・群馬県甘楽町 地域おこし協力隊インターンについて

報告事項

1. ボランティア支援室利用状況報告（2026年1月まで）（授業内ボランティア支援室ガイダンス申込状況）
2. 2026年度東洋大学学生団体による社会貢献活動等奨励プロジェクトに対する助成の募集について
3. ボランティア支援室活動報告
 - ・SDGs公開授業「生徒指導論公開講座『誰一人取り残さない学級づくり ―いじめについて考える～いじめ予防授業を中心に～』」（内田先生）
 - ・学ボラ設立20周年記念シンポジウム「山古志から能登へ ―20年の想いを、未来へつなぐ。」

第6回：2026年3月17日（火）（専門部会）

審議依頼事項

1. 2025年度 国際ボランティア助成執行報告
2. 2025年度能登半島ボランティア助成（個人）執行報告
3. 2025年度「社会貢献活動等奨励プロジェクト助成制度」執行報告
4. 2025年度外部評価について
5. 各種活動企画
 - ・能登半島地震ボランティア（春休み）
 - ・ボランティア支援室企画について

報告事項

1. ボランティア支援室利用状況報告
2. 2025年度「社会貢献活動等奨励プロジェクト表彰制度」について
3. 2026年度「社会貢献活動等奨励プロジェクト助成制度」について
4. 2026年度「SDGsアンバサダー」承認について
5. ボランティア支援室企画活動報告
 - ・「【東洋大学×山古志×能登】被災からの復興と持続可能なコミュニティを考える＝地域共創」
 - ・令和 7 年学生ボランティア団体助成事業「学生ボランティア団体活動レポート募集」表彰式
 - ・「被災地のまちづくりを考え、発信するスタディーツアー」
 - ・「『生きる 大川小学校 津波裁判を闘った人たち』上映会」
 - ・「第27回アースデイ川越 in 昭和の街 2026」
 - ・「能登半島ボランティア（春季）実施 状況（抜粋）」
 - ・「NICEワークキャンププログラム」（益子）
 - ・「ゴールボール体験会2026」
 - ・「IKEA（株）CSRスタディーツアー」
 - ・「学生による地域活動報告会 in 文京区」

2025年度東洋大学ボランティア支援室に対する外部評価結果

(所属：神奈川大学 氏名：齊藤ゆか)

I 判定 (S～C)：

- S：ボランティア支援室の目的、全学的な方針に基づいた活動が行われ、目的・目標の達成が極めて高いことが、根拠資料で証明されている。
- A：おおむね、ボランティア支援室の目的、全学的な方針に基づいた活動が行われ、目的・目標がほぼ達成されている。
- B：ボランティア支援室の目的、全学的な方針に基づいた活動や目的・目標の達成がやや不十分であり、改善すべき点がある。
- C：ボランティア支援室の目的、全学的な方針に基づいた活動や目的・目標の達成が不十分であり、改善すべき点が多く、抜本的な改善が求められる。

II 総評 A

御校の理念及び社会貢献センターの規定に基づき、ボランティア支援室の目的・目標がほぼ達成しているものと考えられる。

2019年から始動したボランティア支援室は、ボランティア活動の「理解を深める」「参加促進の環境整備」「ネットワーク」「活動推進」等のいずれの面においても、発展・拡張期といえる。

学生のボランティア活動を支える教員と職員で構成される運営委員会の組織体制、ボランティア支援室の事務局体制（職員、ボランティアコーディネーター、アルバイト等）、学生の活動団体（東洋大学SDGsアンバサダー、青いビブス、その他各種ボランティアサークル）など、個人・組織による社会貢献力が東洋大学の未来を押し上げる底力になっている。

III 概評及び提言

1 理念・目的

<概評>

1 ボランティア支援室の目的を適切に設定しているか。

「東洋大学社会貢献センター規定」第1条の趣旨に照らし、「ボランティア支援室」の目的を適切に設定している。

2 ボランティア支援室の目的を明示し、社会や学内と共有しているか

社会貢献センター運営委員会に位置づく「ボランティア支援室運営委員会」（実働の「専門部会」）において、全学部から選べた教員と事務局で構成する運営委員会が実施されている。学内においてはメール会議及び教授会等で情報共有され、社会においては活動報告を丁寧に行い、HP等で情報発信している。学生に対しては、学内アプリやインスタグラム等で告知を行い、情報共有をしている。

3 ボランティア支援室の目的等を実現していくため、大学として将来を見据えた中・長期の計画その他の諸施策を設定しているか。

大学の将来を見据えた中長期的な計画は、大学の教育理念を貫いている点にある。一方、SDGs推進センターと連動させた事業運営を行うことで、大学の貢献度を高めているものと思われる。特に大学とつながりの深い地域に対して、学生の活動が活発になり得る資金（交通費や宿泊費）や助言等のサポー

トを行い、教員と職員（コーディネーターを含む）と一丸となって、グローバルな課題解決の施策を講じる努力をしている。

<提言>

長所

- 学生目線・学生主体を重視している点にある。社会課題に真摯に向き合い、SDGsの目的達成に沿った学びと活動と報告等、事業運営のサイクルが循環している。年度を増して事業内容が深まり、自治体や企業等、ネットワークも構築している。学生自身のやりがいを引き出している。
- センター長の学生に対するあたたかい眼差しや助言、ボランティアコーディネーターによる活動の伴走支援、事務局による法人との調整や記録の作成等、学生たちの活動の自由度と達成感を高める努力を惜しまない様子が垣間みえた。
- 能登半島地震や豪雨被害に対する復興支援に特化した「青いビブス」は、高く評価できる。遠路の能登であっても学生のボランティア活動を応援する体制（資金提供、現地活動、交流活動）は「チーム東洋」として、学部学科を越えた学生と教職員と地域との深い絆になるものと考えられる。それはいずれ。被災当事者としても、地域貢献の主体者になり得る可能性が高い。
- 学生の活動記録の収集と蓄積はかなりの時間を要していると思われる。しかし、これらの資料等を丁寧に整理し、冊子を発行し、HP等で内外に情報発信を行っている点には、ステークホルダーに対する信頼となる。
- 上記、学生のボランティア活動全般に対する法人及び教学（とりわけ学長）の深い理解が、支援体制をより盤石なものとしている。

改善課題

- 学生や教職員の規模が大きい故、4キャンパスや全学部学科にて、「ボランティア支援」に対する共通理解は大変難しいものと思われる。しかし、現在、その目的・目標達成に向けて、既に動き出している。
- 立ち上げ期の学生たちはエネルギーが張り、大人からの期待に応えようと多くの力を発揮する。しかしながら、年度ごとに新規活動が多い故に、学生間の意見調整に時間を要する。また、学生主体による創発的な活動は、周りの大人や地域人が振り回されやすいものである。大学として、新たに入学生たちが、どう活動を継承・発展させていくか、活動の量と質の見通しが必要となる。

[コメント]

東洋大学SDGsアンバサダー（学生2名）から話を伺い、学生の主体的な活動に楽しみと誇りとやりがいを見出していたのが印象的である。また、彼らを支える先生方や事務職員の後押し支援は、学生の成長支援に結びつくものと考えられる。

今後、ボランティア活動が、一人ひとりの学生にとってどのような力量に繋がったか、どのようなキャリアに結びついてくるのか。学生サークル等の活動が、地域や社会の発展にどう寄与しているのか、それはどこまで達成できたのか等、見えない力量・見えない貢献度を、どう見える化するか、今後の「チーム東洋」の発展に期待したい。

以上

2025年度版
東洋大学 ボランティア支援室年報

発行 2026年7月1日

東洋大学 ボランティア支援室

〒113-0021 東京都文京区本駒込1-10-2 甫水会館1階

TEL: 03-3945-7927 FAX: 03-3945-7601

